

# 山形大学人文学部

# 研究年報

第 9 号

## 目 次

### 論 文

ナスカ台地におけるラインセンターの配置

—モンテカルロ・シミュレーションによる検討—……………本多 薫, 門間政亮…………… 1

画人伝記と『癡癖』

—明末清初の画家・陳洪綬の画家像を中心に……………西 上 勝…………… 11

身体なき声, 声なき身体, あるいは近代フランス文学における

音声装置 (フォノグラフ, 電話) の表象

—ヴィリエ・ド・リラダンからコクトーまで……………阿 部 宏 慈…………… 31

むだ時間システム表現を用いた

サプライチェーンシステムの—解析……………西 平 直 史…………… 69

ソークラテースのアイロニー…………… グレゴリー・ヴラストス 古川英明訳…………… 75

中世叡尊教団の薩摩国・日向国・大隅国への展開

—薩摩国泰平寺・日向国宝満寺・大隅国正国寺に注目して—

……………松 尾 剛 次…………… 113

像の媒体性と想像表象

—フッサールの1904/05年講義を手がかりに— ……………小 熊 正 久…………… 135

変件事象における非選択目的語の意味解釈のしくみ

—世界知識と文脈情報の関与……………鈴 木 亨…………… 153

固定される聴取者, 明かされない過去

—ジークフリート・レンツのラジオドラマ「迷宮」……………渡 辺 将 尚…………… 171

平成22年度研究・教育活動報告 …………… 185

投稿規程 …………… 247

平成 24 年 2 月

山形大学人文学部

# ナスカ台地におけるラインセンターの配置 ーモンテカルロ・シミュレーションによる検討ー

本 多 薫\*  
門 間 政 亮\*\*

## 1. はじめに

南米のペルー共和国の南海岸から、約50km内陸にあるナスカ台地には、動物、植物や幾何学図形などで有名なナスカの地上絵がある。ナスカ台地には、1000個以上の地上絵があるが、動物、植物の地上絵は少数で、750個以上は直線（ライン）である。また、複数の直線が集まる（又はラインが放射される）“ラインセンター”と呼ばれているものがある（図1）。Aveni<sup>1)</sup>は、ナスカ台地における62箇所のラインセンターを取り上げ、ラインセンターの配置、直線の伸びる方角、ラインセンターとラインセンターのコネクト関係を調査している。しかし、ナスカ台地全体を調査しておらず、不明な部分が多い。実際に高分解能人工衛星画像を分析すると、Aveniが取り上げたラインセンター以外にも、複数のラインセンターを見つけることができる。これまでにナスカ台地のラインセンターの制作目的や配置の規則性について十分なデータにもとづいた説得力のある議論は存在しない。限られたデータにもとづく仮説として、ラインセンターは、儀式のために配置された<sup>2)</sup>、水が出現する地点と水の流れる方向を示す<sup>3)</sup>などの説がある。また、ラインセンターには、山、丘、マウンド、石積みなどの種類がある（図2）。自然の山や丘を利用したものがあるが、人工的に制作されたと思われるマウンドや石積みもある。特に人工的に制作されたものは、何らかの理由で、その場所に置かれたのではないのか。すなわち、ラインセンターは無秩序（ランダム）に配置されたのではなく、何らかの意図でナスカ台地上に配置されたと思われる。

粒子の性質と配置<sup>4)</sup>や工場の最適配置<sup>5)</sup>などの問題に関してコンピュータを用いてシミュレーションすることがあるが、その代表的な手法に、モンテカルロ法によるコンピュータ・シミュレーションがある。このモンテカルロ法は、乱数を取り扱う技法の総称であり<sup>6)</sup>、決定論的および確率論的問題の処理に、無作為抽出を利用することを意味している<sup>7)</sup>。すなわち、乱数を用いて、無作為的に実験を繰り返し行い、近似的に解や法則などを求めることのできる技

\* 人文学部人間文化学科

\*\* 山形厚生看護学校非常勤講師



図1 ラインセンター（マウンド）と放射されるライン（直線）



(1) 山



(2) 丘



(3) マウンド



(4) 石積み

図2 ラインセンターの種類

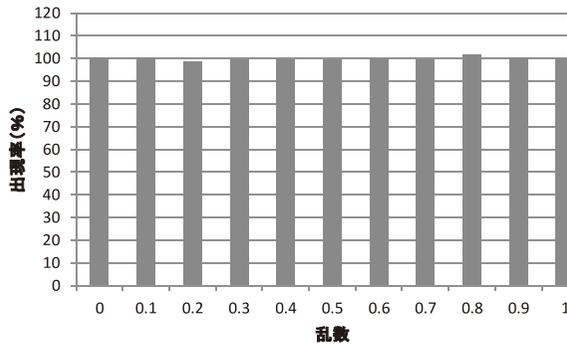


図3 疑似乱数の出現率 (393000回)

法である。

本稿では、ナスカ台地のラインセンターの位置情報（緯度・経度）を用いて、モンテカルロ法によるコンピュータ・シミュレーションを実施し、ナスカ台地のラインセンターが無秩序（ランダム）に配置されているのかを検討する。

## 2. モンテカルロ法と疑似乱数

モンテカルロ法によるコンピュータ・シミュレーションでは、一様乱数を用いる。一様乱数とは、ある区間内において数値が同じ確率で現れるような乱数のことである。しかし、コンピュータでは、“一様性”が満たされている完全な乱数を生成することができないため、コンピュータで生成した乱数を“疑似乱数”という。この疑似乱数の質が良くないと信頼できる解、または法則を求めることができない。質の良い疑似乱数の条件は、乱数列の発生する周期が十分に長いものであり、統計的性質を持たなければならない<sup>6)</sup>。もしも乱数列の発生する周期が短いと統計的に偏った一様分布になり、コンピュータ・シミュレーションには使用できない。

本稿のモンテカルロ法によるシミュレーション・システムは、プログラミング言語Java (JDK) で開発した。このJava言語には、乱数を発生させる関数が準備されており、容易に乱数列を生成することができる。本稿のシミュレーションで使用した疑似乱数の質を確認するために、0から1の区間において393000個の疑似乱数を発生させ<sup>注1)</sup>、その出現率を算出した。その結果を図3に示す。区間内では、ほぼ100%で乱数が生成していることが確認できる。なお、区間内での出現の誤差を算出したところ、0.0173以下であった。

## 3. ナスカ台地のラインセンターの抽出と位置情報の計測

Aveni (1990) の調査<sup>1)</sup>により、ナスカ台地には62箇所のラインセンターがあることがわかってきた。しかし、アメリカの商用衛星QuickBird (2001年打ち上げ) で撮影された高分解能人

工衛星が撮影した画像を分析すると、62箇所以外にもラインセンターらしきものが確認できる。ラインセンターの配置などの規則性を分析するためには、まだ発見されていないラインセンターを含めて、ナスカ台地の全域のラインセンターを抽出する必要がある。そのために、①衛星画像を詳細に分析し、ラインセンターを抽出する分析調査、②Aveniの著書<sup>1)</sup>による資料調査、③共同研究者<sup>注2)</sup>である坂井正人氏（人文学部教授）らによる現地調査<sup>注3)</sup>、の3通りの調査を行った。①の分析調査で用いた人工衛星画像<sup>注4)</sup>は、軌道高度450kmで地球を周回している衛星より撮影されたものであり、地上分解能は最大で0.61mである。しかし、地上分解能の高い人工衛星画像であっても不鮮明な部分や構造物が確認できないものがあり、人工衛星画像のみの分析では、本当にラインセンターであるのかを判断することには限界がある。そのため、現地調査による構造物等を確認する作業が必要となる。

上記の3通りの調査から抽出したラインセンターについて、坂井氏らによる現地調査（ナスカ台地）において、GPS（Global Positioning System）受信機による位置情報（緯度・経度）の計測、どのような構造物（マウンド、石積みなど）がラインセンターとして置かれているのかなどの確認作業を行った。その結果、138箇所<sup>8)注5)</sup>のラインセンターの位置が明らかとなった。なお、今回のコンピュータ・シミュレーションでは、分析時点で位置が確定していた131箇所を計算の対象とした。

## 4. ラインセンターの配置におけるシミュレーション

### 4.1 シミュレーションの計算条件

ラインセンターがナスカ台地に無秩序(ランダム)に配置されているのかを検討するために、モンテカルロ法によるコンピュータ・シミュレーションを実施するものである。すなわち、ラインセンター131箇所に対して、コンピュータが打点した（ラインセンターをランダムに配置した）ものとの一致率を計算する。しかし、ナスカ台地は、南北15km、東西20kmほどの面積があり、ラインセンターの位置とコンピュータの打点が完全に一致することは確率的に低い。そのため、以下の計算条件でシミュレーションを行うことにした。

- 1) ナスカ台地に500m×500mもしくは、1000m×1000mの枠（メッシュ）を作り、枠内にラインセンターとコンピュータの打点が入った場合に、一致したと判定する。
- 2) 縦と横の枠（メッシュ）数を同じとした正方形として計算し、ナスカ台地の外に打点された場合には、打点を無効として再び打点して、ナスカ台地内に131打点した時点で、1回の計算を終了する。これを3000回繰り返して計算し、一致率を算出する。
- 3) 仮に同じ枠（メッシュ）内にラインセンターが複数ある場合には、1打点で1ラインセンターについて、一致したと判定する。

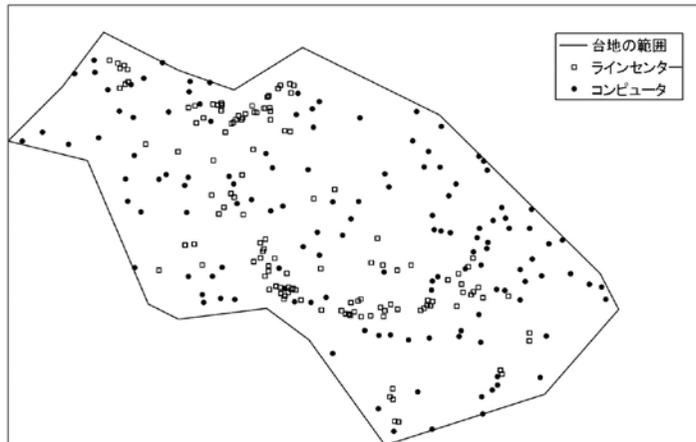


図4 ラインセンターとランダム打点の一例 (1 試行の結果)

#### 4.2 シミュレーションの結果および考察

実際のラインセンター 131箇所の配置に対して、コンピュータが打点した（ラインセンターをランダムに配置した）結果の一例を図4に示す。このように、コンピュータがナスカ台地上にラインセンターをランダムに配置する試行実験を3000回繰り返して実施した。

ナスカ台地のラインセンターの配置におけるモンテカルロ法によるコンピュータ・シミュレーションの結果を図5, 図6に示す。図5は, 500m×500mの枠（メッシュ）のシミュレーションの結果である。計算を繰り返してゆくと, 100回程度計算したところで, 一致率が3.5%を超え, 上下しながら1500回程度で一致率が3.6%前後に収束している。なお, 3000回計算した時点の一致率は, 3.6112%であった。次に図6は, 1000m×1000mの枠（メッシュ）のシミュレーションの結果である。計算を繰り返してゆくと一致率が低下するが, 100回程度計算したところで, 一致率が増加し, 1000回程度で一致率が10%未満に収束している。なお, 3000回計算した時点の一致率は, 9.9746%であった。

500m×500mの枠よりも1000m×1000mの枠の方が, 一致率が高くなるのは当然の結果である。今回のシミュレーションの計算条件では, 500m×500mの枠の場合には, ラインセンターの位置とコンピュータの打点との距離が707m離れている場合でも, 一致したと判定している。また, 1000m×1000mの枠の場合には, ラインセンターの位置とコンピュータの打点との距離が1414m離れている場合でも, 一致したと判定している。それでありながら, 一致率は9.98%以下との結果であった。この数値から判断しても, ラインセンターの配置は, 無秩序（ランダム）である可能性は低いと思われる。

先に述べたが, これまでに, ナスカ台地には62箇所のラインセンターがあることが報告されていたが, 資料<sup>1)</sup>には地図で大まかな場所は示されてはいるが, 正確な位置情報（緯度・経度）

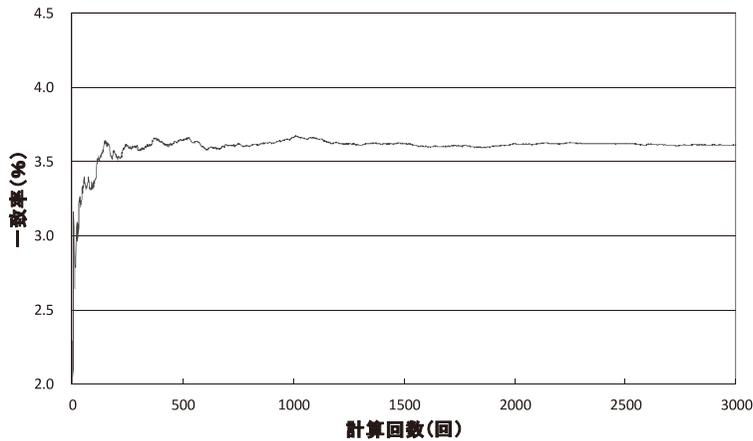


図5 モンテカルロ法によるシミュレーションの結果 (500 m × 500 m)

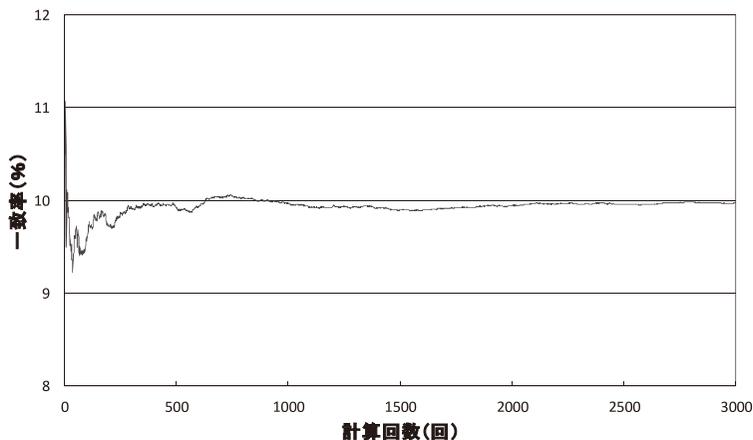


図6 モンテカルロ法によるシミュレーションの結果 (1000 m × 1000 m)

は記載されていない。そのため、調査から抽出した全ラインセンターの位置情報（緯度・経度）をGPS受信機で計測した。その結果、ナスカ台地のラインセンターの分布が明らかになり、コンピュータ・シミュレーションを実施することができた。今回のシミュレーションの結果より、「ラインセンターの配置は、無秩序（ランダム）ではない」とした場合、その配置には何らかの規則性があることになる。渡邊<sup>9)</sup>は、ラインセンターは、広大な大地を移動または把握する上の参照点（ランドマーク）として機能したと述べており、遠方からの視認性が高いものをラインセンターとして置いたと考えれば、まったくの無秩序な配置ではないと思われる。視認性が高い場所には石積み（図2-(4)）、低い場所には大きなマウンド（図2-(3)）というように

ラインセンターを置いた可能性もある。このことから、ラインセンターの種類別や地形を分類して、コンピュータ・シミュレーションを実施することなども考えられるが、今後の課題としたい。

## 5. む す び

本稿では、ナスカ台地のラインセンターの位置に関して、モンテカルロ法によるコンピュータ・シミュレーションを実施した。その結果、ナスカ台地のラインセンターが無秩序(ランダム)に配置されたのではない可能性を明らかにした。しかし、コンピュータ・シミュレーションは、確率論的(統計学的)に数値計算したにすぎない。ラインセンターの配置の規則性を明らかにするためには、ラインセンターの種類、地形との関係、人間の行動(移動や把握)、遺跡との関係、制作時期などを調査検討する必要があると考えている。

本研究の一部は、文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」研究項目A03「アンデス文明の盛衰と環境に関する学際的研究」(課題番号21101004)の助成を受けて行われた。

## 注

- 1) 本稿のモンテカルロ法によるコンピュータ・シミュレーションでは、393000個(131打点×3000回)の乱数を使用している。
- 2) 平成16年10月より、山形大学人文学部では「ナスカの地上絵プロジェクト」を開始しており、文化人類学、地理学、心理学、情報科学の研究者による学際的研究を行っている。
- 3) 現地調査は、ペルー文化庁の調査許可を得て実施している。
- 4) 分析に使用した人工衛星QuickBird画像は、DigitalGlobe社ならびに日立ソフト社との使用契約により、本稿には掲載できない。
- 5) ラインセンターの数は、2011年度の調査結果にもとづくもので、今後の分析や現地調査等の結果で修正されるため、確定数ではない。

## 文 献

- 1) Aveni, F. Anthony, (ed.): The Lines of Nazca, The American Philosophical Society, Philadelphia, 1990.
- 2) Reinhard, Johan: The Nazca Line, A new Perspective on their Origin and Meaning, Editorial Los Pinos E.I.R.L., Lima, 1986.
- 3) Aveni, F. Anthony: Nasca, Eighth Wonder of The World?, British Museum Press, London,

1988.

- 4) 岡田勲, 大澤映二: 分子シミュレーション入門, 海文堂, 東京, 1989.
- 5) 宮武修, 脇本和昌: 乱数とモンテカルロ法 (数学ライブラリー 47), 森北出版, 東京, 1978.
- 6) 津田孝夫: モンテカルロ法とシミュレーション (改訂版), 培風館, 東京, 1977.
- 7) 宮武修, 中山隆: モンテカルロ法 (増訂版), 日刊工業新聞社, 東京, 1960.
- 8) Sakai, Masato y Jorge Olano: Informe Final del Proyecto de Investigación Arqueológica de las Líneas y Geoglifos de la Pampa de Nasca (Segunda Temporada), Ministerio de Cultura del Perú, 55-59, 2011.
- 9) 渡邊洋一: ナスカ台地の空間認知, 山形大学大学院社会文化システム研究科紀要, 第4号, 151-163, 2007.

**Position of the line centers in the Nasca upland:  
A study by Monte Carlo simulation**

HONDA Kaoru, MONMA Tadasuke

There are geoglyphs of animals, plants, straight lines and other geometric graphics in the Nasca upland of Peru, South America. There are also many so called "line centers" that consist of straight lines (or radial lines). In this paper, we have conducted computer simulations by Monte Carlo method to examine whether the line centers in Nasca upland are positioned chaotically (randomly) using the line location information (latitude and longitude). The simulation result suggests that the line centers located in the Nasca upland are not positioned chaotically.



## 画人伝記と「癡癖」

### —— 明末清初の画家・陳洪綬の画家像を中心に

西 上 勝

「癡癖」という語は、例えば南宋の詩人・范浚(1102-1150)の七言詩「姪の伯通、端杲ともと  
同に盧全の体に效う」の劈頭に、「一春 癡癖にして門長つねとに肩とざし、両耳ていけいに聞かず 鸚鵡(ホト  
トギス)の声」と見える。「癡」と「癖」はどちらも常識から偏向した奇行を意味する文字で  
はあるが、この詩で言われる「癡癖」とは、世の習いにあえて従わない風変わり、あるいはエ  
クセントリックな性癖を意味するであろう。「癡」なり「癖」なりといったこれらの文字は、  
画家の自号としてのみならず、歴史記述に用いられた例がある。その最もよく知られ、中国  
において後世への影響でも顕著だったものは、中国古代を代表する画家の一人である顧愷之の伝  
記である。

七世紀に編纂された『晉書』は、「好んであやまり詭譎の碎事を採り、以て異聞を広く」して史伝に  
組み入れていることは、趙翼(1727-1814)『廿二史劄記』が指摘するように、現在では広く知  
られている事実だが、『晉書』卷九十二文苑に排列された顧愷之(346-407)の本伝も『世説新語』  
を主な出処とする説話を綴り合わせて構成された文章である。自作の箏の賦の出来栄を誇っ  
た『世説新語』文学篇に記録される説話が冒頭に配置されるように、『晉書』編纂者は顧愷之  
が文章と画作の才に恵まれていたことを中心に据えながら叙述を進める。そして末尾に、顧愷  
之の「三絶」、すなわち才絶、画絶と癡絶に言及する逸話を引き全体を締め括っている。顧愷  
之の三絶に関する言及は、伝記の冒頭に置かれた『世説新語』文学篇第九十八条の説話に付さ  
れた劉孝標の注に引かれる宋の明帝の『文章志』に見えるものであって、『世説新語』の本文  
ではないのだが、『晉書』編纂者はこの記述が顧愷之の人となりをも最も端的に表現するもの  
として注目し、ここに配置したにちがいない。劉孝標は『世説新語』のこの条については『文章  
志』のほかにも『中興書』と『続晉陽秋』という二つの史書から引用した文章をさらに注とし  
て引用する。『続晉陽秋』の「愷之の矜伐は実を過ぐ。諸年少 相い稱誉に困りて以て戲弄を為す」  
という文章からも推測できることだが、劉孝標がこの引用を行うのは、顧愷之に対する諷刺、  
からかいの風潮が当時広くあったことを読者に認識させる意図から出るものだ。才絶、画絶、  
癡絶と列挙される三種の超絶技巧も、桓温が顧愷之の体内では「癡」と「黠(賢さ)」とが半

ばしていると評したことに由来する言葉であると『文章志』が記すように、『晉書』編纂者たちは顧愷之が備えていた言語の運用能力に対しては価値を認めつつも、桓玄に簡単に誑かされてしまった愚かさを「癡」と見なすとともに、「才」と「癡」を顧愷之の内部において仲介する役割を、「画」すなわち絵画制作の技量に担わせようと意図しているのではないだろうか。肖像画制作に典型的に現れた顧愷之の常人離れた技量が、世の習いからみれば極めてエクセントリックな言動を裏付けるものなのだ。画才と癡癖の二つが必然的な関連を有するものであると『晉書』編纂に携わった七世紀の知識人たちには受け止められていたと考えられるのである。

顧愷之の場合のように画作と奇矯な言動とを関連づける言説は洋の東西を問わず広く見られるものではないかと思われる<sup>1</sup>が、中国では画家の人となりと言い及ぶ際にこの顧愷之に由来する三絶が、繰り返し想起され因習を帯びた言辞になっていったようである。それは例えば、清代の画論家である張庚（1685-1760）の『国朝画徵録』三卷『統録』二卷は、清初から乾隆年間初期に至る期間の画家について簡略な伝記を併せ載せる画史の一種であるが、『国朝画徵録』卷上に排される清初の画家・戴思望の伝記には、彼が詩詞や書法に優れたばかりでなく、元代の画家を手本としながら独自の画芸を達成し得たことを自ら誇りとしていたと記された後、その人となりと言い及ぶ箇所にも見られる。戴思望の性格は狷介しかも潔癖症を併せ持ち、妻を亡くした後も後添えを取ろうとせず悠々自適の流浪の旅に出、名のある画家がいると聞くと必ず尋ねるものの、決して軽々しくは良しとしなかったことなどが述べられる。そして続いて次のように記してこの小伝は締め括られている。「能く琴を鼓し、善く諧笑するも、或いは時に旬日も語らざる有りて、人は癡絶 虎頭（張彦遠『歴代名画記』によれば虎頭は顧愷之の小字、つまり幼少期のあざな、ここでは顧愷之を指す）に類すと謂う。卒に風疾に<sup>あ</sup>違いて歿せり。」戴思望は快活に談笑し音楽を楽しんでいるかと思えば、何日にもわたって黙り込んでいたりする、その常人には窺い得ない感情の起伏を、人々は顧愷之の「癡絶」になぞらえたというのである。戴思望の性癖もまた顧愷之と同様に、世人からは理解しがたいものと見なされた。張庚は戴思望の「癡癖」が画作に由来するものであることを進んで表現しようとしていると言える。さらに張庚は、その贊語で戴思望が王維をはじめとする前代の画家の作品をあまねく臨摹しつつ必ず余白に自らの評語を書き加えていることに着目し、「即ちこれを以てその好学を見るに足り、また以てその癡癖<sup>うかが</sup>を覘うに足る」と書き加えている。『晉書』顧愷之の伝においては、顧愷之の画作と彼の癡との関連づけはあいまいな状態に止まっていたのだが、張庚は戴思望の絵画創作行為そのものに癡の具体的過程を見て取っているのである。

画作がエクセントリックな営みと見なされたのは、絵画制作などをも含む表現行為に熱中することなど捨て置き、何よりも先ず統治イデオロギーの獲得と充実を目指さなければならないとする伝統的な思考機制、すなわち「士は器識を先として文芸を後とす」が底流として存在したからにはかならない。早く、唐の裴行儉（619-682）は、後に初唐四傑と称される王勃らの

文才が当世において称えられているのに対し、こう反論していたと伝えられる。「士の遠きを致すは、器識を先にし、文芸を後にすればなり。勃らの如きは、才有りと雖も、浮躁街露にして、あに爵祿を享くる者ならんや。」<sup>2</sup>ここで言われるような表現行為それ自体に耽溺する態度に対する非難は、後の宋学でいうところの「玩物喪志」と同根であり、人が積極的に感情を吐露した表現を推奨する立場を取ったと中国文学史上で言われる明末のいわゆる公安派の文人グループ、そのグループの一員に数えられる袁宗道(1560-1600)でさえ、公的文書においてはあはれども「君子なる者は、口に文芸を言わずして、先ずその本を植え」る、という言葉を書いている。これも中国の文学評論史上で有名な言説である<sup>3</sup>。つまり中国の知識人にとって、統治イデオロギーに関与する言語表現以外の表現行為にかかずらうことを退ける考え方は極めて根深い。言い換えれば表現行為をイデオロギーに従属させるこのような風潮は、時を超え二十世紀においても社会主義リアリズムとして顕著に現れたことがあったことから、中国の文化においてなお頑強に存在する底流と見なしうるだろう。まして、詩書画三絶とはいうものの、「三者がいつも同等の地位にたつて並称されたのではなかった」<sup>4</sup>のであり、とかく画作は小技末芸として知識人からは職人芸に見下される傾向があったとすれば、画作に没頭するような営みは直ちに「癡癖」と見なされるとしても何ら不思議ではないのだ。

しかしながら絵画表現に、客観的写像という価値だけでなく、画家自身の内的精神性の反映という意義が、新たな知識のあり方を獲得した宋代の文人たちによって見出されると、いくつかの留保を伴うとはいえ、画家にふさわしい伝記はどのように書かれるべきかが試みられるようになる。例えば、以前の拙稿でも論及した<sup>5</sup>が、宋代の皇室所蔵絵画コレクションの目録というべき『宣和画譜』には、そうした試みの結果としての代表的な文章を見いだすことができる。なかでも、北宋の新しい山水画様式の確立に力あった李成(?-967)の伝記などはその典型的なものの一つと言いうる。

李成は子の覚、孫の宥がともに科挙を突破して官位を昇ったために、『宋史』では覚の本伝(巻四三一儒林一)に「性は曠蕩にして、酒を嗜み、詩を吟じるを好み、琴奕に善く、山水を画いて尤も工なり」と記され、宥の本伝(巻三〇一)にも「詩酒を以て公卿の間に遊び、善く山水を摸写す。人の求めんと欲する者は、先ずために酒を置き、酒酣なれば落筆す」と付記され得た。だがこれらの付記が伝えるところ、要は開けっ広げな性格でいささかの文筆を嗜み、酒好きで、山水を専らの画題とした画家であったということになり、李成の内面には立ち入らず外的行為のみが簡略に記されているに過ぎない。これに対し『宋史』が編纂されるに先だって成立した『宣和画譜』では、文人画家としての李成像の構築に力が注がれている。唐王室の血を引く高貴な家柄でありながら、唐末五代の混乱期に巡り合わせてしまった不運にもかかわらず父祖伝来の儒学を自らの教養基盤としたこと、士大夫として出世できなかったために詩酒に意を割き、かつは彼の営みが画業にも及んだこと、こうしたことがらが冒頭記される。李成が画作に関わりを持ったのは、あくまでも胸中の思いを吐き出し、自らの楽しみとするだけであっ

て、世の評判を得て利を求めることを目指したのではないことが強調される。李成自身に「吾本と儒生にして、芸事に心を遊ばすと雖も、然して意に<sup>かな</sup>適うのみ」という言葉まで吐かせている。高貴に取り入って営利を専らにする「画史冗人」、つまり職業画家とは一線を画す文人的放縱の現れとして画作を位置づけるとともに、社会に対しては非営利を貫き、権力に媚びない孤高を貫く人物、『宣和画譜』編纂者たちが李成にあてがった画家像は、「煙雲雪霧の状、一に皆その胸中より吐き、これを筆下に写す」と、内的精神性の現れとしての絵画、すなわち重視されるべきは主観的写意の過程であるとみなすものであった。このような画家像は以後、文人画家のために用意される伝記の定型として後世に引き継がれていく。だが『宣和画譜』李成伝においては、李成の画作への没頭がいかに人並み外れたものであったのかや、画作に関連する彼の言動がいかに奇矯なものだったのか、といった具体的位相にまで表現が及ぶことはない。つまり「癡癖」は表現されていないのである。李成よりも遅れて世に出た、『宣和画譜』の編纂期を代表する書画家にして鑑定家として名のあった米芾（1051-1107）・米友仁（1074-1153）父子は、「米点山水」と後に呼ばれる特徴ある山水画技法をあみ出し、また米芾には潔癖症や奇怪な形状の岩石収集癖に関わる逸話が多く伝わるとはいえ、米友仁が自らの画作を「墨戯」と自嘲的に韜晦して言及するように、宋代においては、士大夫文人画家が画作態度や制作の過程について具体的に言及することはなお躊躇されていたと推測するしかない。

『宣和画譜』の編纂後、南宋の鄧椿によって編まれた『画繼』十巻は、張彦遠（815?-875?）の『歴代名画記』、北宋の郭若虚『图画見聞志』を継ぐ画史として、蘇軾(1036-1101)や黄庭堅（1045-1105）の題画詩や題跋を主な典拠として活用しつつ編纂された書物であるが、ここには反俗を貫いた画家の伝記をいくつか見ることができる。例えば、関右の人、甘風子の伝記はその典型的な一例である。甘風子は細筆を用いた白描人物画に優れていたが、佯狂垢汚し、酒を恃みて罵るを好み、<sup>まちやすし おちぶれ</sup>塵市間に落泊していた。ただ、酒がまわると、大声で紙を求め、細筆で人物の頭や顔を、何十枚も一気に書き、そのあと草書の書法を用いて、人物の全身をまたたく間に書き上げ、その妙は自然そのままに見える画風であった、と伝えられる。貴戚富裕から制作を求められても、甘風子は李成と同じように相手を罵倒するばかりで、一旦制作した自作もみずから破棄することが多かった上、何年にもわたって筆を取らないことがあるほど寡作であった。鄧椿が形作る甘風子像は、甘風子の絵画制作に関わる具体相に多少言葉を費やしているとはいえ、自適に出て利を求めず、富貴者に媚びず孤高を貫くという像は、『宣和画譜』編纂者たちが李成にあてがったものほとんど変わるところがない。確かに、甘風子が狂気をよそおい、身なりに顧慮せず、酒の勢いを借りて画作に没頭すると述べるくだりは、世の人の習いから外れた奇矯な振る舞いを表現していると思えることができるけれども、それはあくまで甘風子の社会的逸脱を指示するに止まっており、彼の画作に結びつく個性的性癖を言表することを意図したものと読むにはなお十分な厚みを持つには至っていないと言うべきである。社会の偽善と俗物性とに反抗を試みる画家の言動をめぐる内容豊かにかつ巧みな言説が流布するには、

世の人々が先を読むことができない不安のうちに日々を過ごすしかなかったような、大きな社会的変動を伴う時代の到来を待たねばならなかったようである。十七世紀のいわゆる明末清初の時代は、そうした大きな変動を伴った時代の一つであり、多くの個性的な画家が登場したことで知られる<sup>6</sup>。世が変動に揺れ、人々が不安のうちに過ごすほかなかった時代に現れた画家の姿に関心を向けた言説とはどのようなものだったか、またそこにはどのような新たな様相を読み取ることができるだろうか。以下、本稿ではこのような問題意識の下に考察を進めてみることにしたい。

## 二

明末清初の中国は社会のあり方に大きな変動が生じ、世界が「生身の個人を起点として眺められるようになった」時代であるといわれる<sup>7</sup>。それは既成の規範に束縛されることのない、人間個々人の自ずからなる心情の発露が尊ばれる時代の到来を指して述べられたのであるが、反面から言えば社会のかつてない変動の大ききゆえに、多くの知識人が不安を覚えざるをえなかったということでもある。こうした時代に、特異な性癖の出現に注目が集まり、特色ある個性的資質つまり「癖」や「疵」を備え、そうした個性的資質から生み出された表現に、「性霊」の発露を見出して高く評価しようとする、前節でも言及した公安派のような文学的主張が現れるのも理解しやすいことであるように思われる。

公安派を代表する文人である袁宏道 (1568-1610) は、自らの生き方をとりわけ深く模索していた前半生において、そうした主張を鮮明に述べていることで知られる。萬曆二十四年 (1596)、呉県知県在任中、弟の中道の詩集につけた序文「叙小修詩」(『錦帆集』)では、「たとい疵ある処もまた本色独造の語あり、余はその疵ある処を極めて喜ぶ」と述べ、萬曆二十八年 (1600) 都で官についていた頃の華道書「瓶史」の第十章「好事」篇にも、嵇康の鍛冶癖、王済の馬癖、陸羽の喫茶癖、米芾の奇石収集癖、倪瓚の潔癖症など、古来の癖者を列挙した後続けて、「余世上の語言無味にして面目の憎むべき人を観るに、みな癖無き人なるのみ」と述べる。ここに顕著なのは、「この時期の全般に見られる特徴的な風気である」ところの「個性尊重の意識」から発した考え方であるという指摘がつとになされている<sup>8</sup>。

袁宏道よりも一世代遅れて生まれ、官途に就くこともなく江南の紹興、杭州という都市に生きた市隱・張岱 (1597-1684) も、そうした風気のただ中にあり、世俗の習いに抗し、自らの嗜好を貫く享樂的生き方を称揚した文人である。友人の祁彊佳 (1594-1684) には、書画癖、蹴鞠癖、鼓鑊癖、鬼戲癖、梨園癖など数多くの癖があることを称える文章(『陶庵夢憶』卷四「祁止祥癖」)の冒頭には、有名な「人に癖無くんばともに交わるべからず、その深情無きを以てなり。人に疵無くんばともに交わるべからず、その真氣無きを以てなり」という言葉が記される。ただ、ここで注意されなくてはならないように思われるのは、張岱の主張は単に祁彊佳個人に向けられたものと見なすべきではなく、それまで世俗一般では価値が十分に認められてい

なかった技芸全般を際だった人間的営みとして評価しようという意図に裏付けられていることである。知識人からは「賤工」と見下されるのが普通だった、竹、漆、銅を材料とする職人や陶工の営みを、「天下の何物か以て人を貴しとするに足らざらんや、特だ人自らこれを賤しとするのみ」（天下のすべての物が人を貴くすることができる、人の方がみずからそれを卑しめているだけのことなのだ）と述べ、職人の技芸の価値を主張する（『陶庵夢憶』巻五「諸工」）。また自らが行った夜芝居や登山を「癡絶」と記し（『陶庵夢憶』巻一「金山夜戯」及び巻五「爐峯月」）、俗人を吃驚させたことを得意げに記す。これらはどちらも世の常識を覆す快感と誇りが表現の源泉となっているのである。

その張岱が後半生のライフワークとしたのは、洪武から天啓にいたる明朝一代の紀伝体歴史書『石匱書』を完成させることであった。崇禎元年（1628）に筆を起し、「十有七年にして<sup>じわ</sup>遽かに国変に遭い、その副本を携え、深山に跡を<sup>かく</sup>屏し、また研究すること十年にして、<sup>はじめ</sup>甫て帙を成せり」とその著作過程が記される（「石匱書自序」（『瑯嬛文集』巻一）この書は、『石匱書』二百二十卷『石匱書後集』六十三卷の大部分が抄本で今日に伝わる。この書は明末清初の生々しい歴史資料を多く含む点で貴重視されてきたが、そればかりではなく、儒林、文苑、方術、列女など、従来編纂された紀伝体正史に通常見られた合伝に加えて、妙芸という新たな分類が設けられていることにも特色がある。『石匱書』巻二百五及び『石匱書後集』巻六十に配される妙芸列伝には、前者には元末明初の画家として名高い倪瓚から文徵明、沈周、祝允明、唐寅といった明代中期を代表する人々を含む二十一人の書画家、後者には関思、張爾葆、李流芳（1575-1629）、陳洪綬（1599-1652）、姚允在という張岱と生きた時代を同じくする五人の画家の小伝が記載されている。後に編纂された『明史』（乾隆四年（1737）刊行）にもこれらの人々の伝記が収載されてはいるが、そこでは伝統的な分類に従って、文苑あるいは隱逸に排列されている。また二十世紀になってから脱稿を見た『清史稿』では、陳洪綬らの伝記は芸術に分類配置されるものの、その伝序に「司馬遷の扁鵲、倉公及び日者、龜策を伝して自り、史家これに因り、或いは曰く方技、或いは曰く芸術と。大抵 収める所は多く、医、卜、陰陽、術数の流にして、問々工巧に及ぶ。夫れ芸の<sup>そな</sup>賅わる所、博く<sup>おお</sup>衆く、古は礼楽射御書数を以て六芸と為す。士の常に肆くす所にして、百工の執る所、みな芸事なり。近代の方志は、書画、技撃、工巧に於いても並びにこの類に入れるは、実に古義に合するところ有り」と記されるように、書家、画家は伝統的な方術者の一として、医師、天文家、武道家などと合わせて排列されているのである。張岱が考案した妙芸伝は、彼自身の文学的意図から出た新機軸として設けられた分類と見ることができる。妙芸伝に付された伝序の冒頭には『論語』の「道に志し、徳に拠り、仁に依り、芸に遊ぶ」という言葉を引いた後、続けてこう記されている。

私は妙なる芸をもつ諸君子を觀て、聖人の立言の主旨を知ったのだった。世の人の一技一芸には、どれにも窮極に到達するための道理が有る。人は必ず全力を傾注するが、その

神秘に到達し新奇に転じる段階では、どうしても天の巧みを待たねばならず、もはや人力だけに頼ることはできない。それは人が力を尽くしても得られず、力を尽くさなくても得られない。従い習うにつれて、自ずから獲得する、だから「游」というのだ。

妙なる芸をもつ諸君子は、みな書画で名声を得、その造詣を極めたが、それは決して浅薄弱質な人間のほとんどよく及ぶところではないのだ。ここから芸と道とが合すれば、人は天に通ずることが分かる。諸君子は技芸ではあるが実は芸の内に励み務めているのである。妙芸列伝を作る。

余観妙芸諸君子、而知聖人立言之旨矣。世人一技一芸、皆有登峰造極之理。至人必以全力注之、及其通神入化、必待天工、又不全藉人力。蓋使人着力不得、不着力不得。服之習之、使自得之、故曰游也。

若夫妙芸諸君子、皆以書画得名、極其造詣、斷斷非淺薄質之人所能幾及。於是知芸與道合、人與天通。諸君子雖芸乎而實進於芸矣。作妙芸列伝。

恐らく張岱のこの感慨は、実際に交流もあったであろう同時代明末清初の画家たちから得られた実感に基づくものであっただろう。ことにこの時代を代表する画家の一人、陳洪綬に対しては、陳洪綬が自らの縁戚筋に繋がるということ<sup>9</sup>もあり、ここに述べられたような思いを一層強くしたのではないかと想像される。ところが、この妙芸伝への意気込みとは裏腹に陳洪綬の伝記は意外なほど簡略な文章に終わっている。

陳洪綬、字は章侯、諸暨の人。諸生となった。魯監国は翰林待詔を授けた。絵筆を執れば、奇崛遒勁、古人の手法を継承し、木石や丘壑といった画題では、李成・范寛にならい、花卉や鳥獸は、黄筌・崔順にならい、仙仏や鬼怪は、石恪・龍眠(李公麟)を手本とした。彼の絵画は卑近なものではあったが、早くから高い評価を受けた。しかしながら、彼の性格は軽佻浮薄で、生計を重視しなかったから、死んだときにも遺体を納めるものすらなかった。自画像に『あたら虚しい名声を得ただけで、貧乏神に追い詰められた。国が滅んでしまったのに死なないでいたのは、不忠にして不孝であった』と自ら題した。

陳洪綬、字章侯、諸暨人。為諸生。魯監国授翰林待詔。筆下、奇崛遒勁、直追古人。木石丘壑、則李成范寛。花卉翎毛、則黄筌崔順。仙仏鬼怪、則石恪龍眠。画雖近人、已享重價。然其為人佻儻、不事生産、死無以殮。自題其像曰、浪得虚名、窮鬼見誚。国亡不死、不忠不孝。<sup>10</sup>

この小伝では、陳洪綬の性格を軽佻浮薄「<sup>ちようとう</sup>佻儻」と記すに止まり、画業との関連づけはなされないまま終わっている。陳洪綬の伝記資料としてつとに紹介解説のある三種の伝記資料<sup>11</sup>、すなわち同郷人・孟遠の手になる「陳洪綬伝」、毛奇齡(1623-1716)『西河集』巻

七十九に収める「陳老蓮別伝」、朱彝尊（1629-1709）『曝書亭集』卷六十四に載せる同時期の画家・崔子忠と併せ記した「崔子忠陳洪綬合伝」、これら三種の伝記が画家・陳洪綬の特徴ある振る舞いを、それぞれの立場から描出しようと試みているのとは対照的なのである。

陳洪綬が若年の時、郷里でも、後に都に出た崇禎末年でも、人々が重んじて名声を獲得したのは、彼自身は「緒餘」に過ぎないと見なした書画によるものに過ぎなかった、と孟遠が記するのは、文人画家の伝統的表象に準拠した内容に止まるけれども、後に全祖望（1705-1755）が「画を以て名あり、且つは酒色を以て自ら晦くすれども、その中に卓然伝うべき者有り」（『鮎埼亭集』卷二十四「子劉子祠堂配享碑」）とか、また「老蓮は好色の徒なれども、然してその実は大節有り」（『鮎埼亭詩集』卷三「明陳待詔老蓮画」序）と記したように、陳洪綬の奇矯な一面は、「酒色」にのめり込むことにあると見られていた。その点から言えば、毛奇齡「陳老蓮別伝」が「蓮は酒に遊び、人の致せし所の金銭は、手に随いて尽く。尤も窶儒（貧乏儒者）の為に画くを喜び、窶儒 蓮の画に藉りて空に給す。豪家これを千緡に索むれども、得ざる也。嘗て諸生たりしとき、督学これを索めしむも、また得ず。顧だ生平 婦人を好み、婦人の坐に在らざれば飲まず、夕寝るも、婦人にあらざれば寐るを得ず。婦人を携えて画を乞う有らば、すなわち応じ去る」と書き、朱彝尊の「合伝」にも「客に画を求むる者有るも、磬折し恭を至すと雖も、与えず。酒間に妓を召すに至れば、すなわち自ら筆墨を索め、小夫稚子にも応ぜざるは無し」と述べるのは、彼の酒色に対する嗜好と画作との関連づけを積極的に試みたものとして評価することができる。妙芸伝の記述が平板を免れなかったのは、史書の伝記における叙述の前提が、伸びやかな筆使いを抑制してしまったためかもしれない。だが、毛奇齡や朱彝尊が試みた伝記でさえも、J. ケーヒルが明代中期の「逸格画家」、例えば唐寅（1470-1523）に代表されるような一旦は官途をみざしながらも何らかの事由でそれを断念せざるを得なかった「教養をそなえた職業画家」たち、彼らを記述する際に共通して書かれる特徴、すなわち「中流あるいは下流の社会階層出身、あるいは貧困家庭出身である。幼い頃から絵画の才能に恵まれ、科挙に向けた教育を受けながら、中途挫折する。振る舞いは放縦、異常を衒ったり精神異常に陥る。画号に「仙」、「狂」や「癡」などの文字を用い、通俗的な芸能、例えば民間戯曲、端唄などにも通じている。優雅な都市生活を好み、酒色に耽る。富裕で権勢のある人物との交わりを求めながらも、媚びを売るまでには至らない<sup>12</sup>という都市の文華を享受する生き方を志向した画家像として構成される諸特徴に包含されるものに過ぎない、とも言うことができるだろう。

『石匱書』の文章に比べれば、叙述様式から制約を受けず、自在な筆使いのまま書かれた文章が集められていることで前世紀以来文学的な定評のある張岱の随筆集『陶庵夢憶』中には、そのタイトルもずばりと「陳章侯」と題される文章がある（卷三）。この文章では、崇禎十二年（1639）の八月十三日に、張岱が目撃した陳洪綬の奇異な言動を生き生きと浮かび上がらせている。

杭州西湖畔で張岱に「此く如き好き月に、被を擁して臥さんとするや」と不平を漏らした陳

洪綬は、張岱に新たに小舟を用意し取り寄せた酒を積んで湖に漕ぎ出させる。その時偶然乗り合わせるようになった若い女に、すっかり酔っ払っていた陳洪綬は早速「挑<sup>さそ</sup>」いをかける。「女郎 俠なること張一妹の如くんば、能く虬髯客と飲むやいなや」と、唐代伝奇小説に見える登場人物の名を持ちだし、彼女を強引に酒盛りに引き込む。しかし酒盛りが果てると、陳洪綬の執拗な誘いかけも空しく、女は「住處」も告げず彼の追及を振り切り行方をくらましてしまう。

ある日の月夜に起こった出来事のたったこれだけの内容を伝える文章でありながら、ここには酒色にだらしない陳洪綬の一面が見事に造形されている。史伝とは異なる散文の様式を活用することによって、市中に隠れて日を過ごす自由な立場を確保していた張岱の筆は、画家としてすでに名を世に知られていたであろう友人の特異な一面を、言葉を使って形づくることに成功しているのだ。人間の特異な側面に関心を払うことが重大視されていた風潮の中で、これまでにはない画家の「癡癖」のありさまが表現されたのである。

### 三

陳洪綬の「癡癖」を伝えたもう一つの文章として、周亮工(1612-1672)がその著『読画録』に記した文章があることもすでに知られる。周亮工は陳洪綬のどのような人間的側面をとらえようとしていたか、次にそれを考察してみることにしよう。

子息の周在浚「行述」には『読画樓画人伝』四巻と記される『読画録』は、明代晩期に生きた李日華(1565-1635)をはじめとして、間接あるいは直接に交流のあった七十余名の同時代画家の思い出を、周亮工自身の記憶や伝聞のほか、他者の詩文などを織り込みながら綴った文章を集めた思い出の記というべき書である。清末の画論家・余紹宋(1883-1949)が、「専ら絵事を言うも、兼ねて交情に及び、これを読めば人をして倦むを忘れしめ、而して遺事軼聞も、また頼りて以て墜ちず。まことに画史の最高の資料なり」(『書画書録解題』巻一)と評するように、ここには同時代の画家の営みに対する深い理解と共感に満ちた文章が集められている。

周亮工には「画癖」と「印癖」があると世間から評され、周自身もその評を肯っていた、と周在浚「行述」は記す<sup>13</sup>が、その副産物として残されたのが『読画録』四巻と『印人伝』四巻であった。この両書はどちらも周亮工の死後、息子たちの手によって康熙十二年(1673)に編集出版されるが、その成立の経緯は在浚らが『印人伝』の跋に、「生平の著作一切を挙げて焚棄せし後に至りては、人に文字を以て属するを請う者有れども、先大夫多くこれに応ぜず、ただ図章を愛玩するは少も異ならず。因りて更に前の集めし所を取り、人に依りて類を為しこれを鱗次し、各々その概ねを首に識すは、一に読画録のその人の家世、里第、自ら交わりを訂むる所と、かの染翰の時、地などを伝うる者の如し。ただ録は未だ焚書せざる前に成り、伝は既に焚書せし後に成るのみ。然して一は人の未だ全からざるを以てその書を全くするを得、一は書の全くするを得て以て未だその人を全くせざるは、正にまた相等し」と記すように、その成立過程にはやや違いがある。「一は人の未だ全からざるを以てその書を全くするを得、一は書の全

くするを得て以て未だその人を全くせず」というのは、『読画録』は周亮工自身が生前にほぼ完成させていたものであるのに対し、『印人伝』の方はもっぱら子どもたちによって、編集出版が行われた未完の書という意味であろう。ただここに記される「焚書」とは、一体何を意味する言葉なのか。

そもそも、張岱は一生を科挙とは関わることのない市井の隠者・市隠として過ごし、陳洪綬は科挙突破を目指し、いわゆる挙子業に励みながらも、その目的を達することができずに終わり、新しい清王朝の下では官に就くことを断念して、いわゆる遺民として終わった人物である。彼らの人生に比べると、周亮工は甚だ波瀾の多い一生をおくったといえる。明朝治下で科挙に及第、官職に就いた後に明朝滅亡に遭遇、清の軍隊が南京を占領すると同時に清朝の官を受ける。こうした履歴によって、後に編まれた『清史列伝』では、周亮工の伝記は錢謙益らと並んで「貳臣」に分類排列される。また、彼は八年及ぶ閩（福建）の統治に実績を上げ、中央政府入りを果たし高位に昇る。しかし、あるいは昇ったためというべきか、順治十二年（1655）以降、自身をめぐる疑獄事件に長くかかずらう羽目になる。順治十七年（1660）に編まれた自身の詩集『頼古堂詩集』の序文（『頼古堂集』巻十三）では、周亮工自身が「公は明白<sup>はげしい</sup>忼爽にして、世に合わず、また詩文を以て当世に<sup>つみえ</sup>戻を獲、卒に讒言に中り、案<sup>まつた</sup>験すること六年」と記す。まさしく錢陸燦の手になる墓誌銘が「閩は公を以て<sup>まつた</sup>全けれども、公は閩を以て敗る」と述べる通り、政界での軋轢を身をもって味わったのであった。

死の二年前に当たる康熙九年（1670）の二月、五十九才の時、彼はそれまで蓄積していた著作を自らの手で尽く焼却する。それが上の『印人伝』跋に見えた「焚書」の意味するところである。この事件に関して周在浚「行述」では、「生平の著作は甚だ富む、一夕慨然として曰く、一生 虚名の誤るところとなる。老期に道を聞くも、何ぞなおこれを留めんや、と。命じて尽くこれを火す」と、その焼却の理由は曖昧なままにされているが、姜宸英（1628-1699）の手になる墓碣銘の方では、「庚戌（康熙九年）、再び論を被る。忽として夜起き彷徨し、火を取りその生平纂述するところの百余巻を尽く焼いて、曰く、吾をして終身顛踏して不偶ならしむる者は、この物なり、と」と記され、「焚書」が来し方において味わった様々な苦難を想起することから発せられた行為であったことを明示している。周亮工の文集『頼古堂集』二十四巻は、周在浚「行述」では『頼古堂焚餘詩文集』二十四巻と著録されるが、彼にとって文章創作は、鼎革従逆以降の苦い思いと不可分なものであったと推察できる。

それでは、彼が画家や篆刻家の思い出の文章に込めた意図は一体何だったか。周在浚は、父には画癖、印癖の世評ありと記すに先立ってこう述べていた。

父上は人材の奨励を急務とされた。一技一芸ある人物が、世に埋もれたまま後世に伝えられないことを危惧された。絵画を好まれ、どんな山の中、岸のはて、貧しい街路、物寂しい寺院であっても、絵画で名のある者がいれば、顔見知りであろうとなかろうと、作品

を購入し、良し悪しの鑑定をされないものは無かった。水陸の移動にも、欠かさず携帯された。来客があるときは、取り出して誇らしげに示された。天候悪しき日は、鬱鬱として楽しまれなかったが、ひとたび箱を開き紐解かれると、喜び楽しんで満足された。

晩年、読画楼を建設してそこに所蔵されたが、当時名のある人々がその事を歌に詠まれた。また六書の学にも精通されて、古文字が埋もれてからは、文字を知る手がかりは、印章だけだとされた。それで、印章類については、特に精密な鑑識眼をもっておられた。客に印章を贈られる人が有ると、父上は比較検討をされ、文字の点画や繁簡曲直を訂正できるものに行き当たると、驚いて茫然自失されない時はなかった。

先大夫以奨励人材為急，即一技一芸之士，惟恐其淹沒不伝。喜絵事，凡山巔水涯，窮巷蕭寺中，有以絵事名家者，識与不識，無不購致，品第論定。鶴尾駝頭，嘗載以自隨。客至，出而誇示。或風雨晦明，鬱鬱多所不楽，則一展函繙睇，怡然自得也。

晩年擬構読画楼藏之，一時名人皆歌詠，紀其事。精六書之学，古文埋没，謂可藉以識字者，惟印章耳。故于印章一道，尤精鑑別。客有以印章贈者，先大夫為之商較，属易置其点画，繁簡曲直，無不慄然自失。<sup>14</sup>

父の絵画や印章を見る目の確かさを息子が誇るこの文章には、もう一つ見落としてはならないところがある。それは周亮工もまた、明末以来の個性尊重の時代的風気の中に生きていたこと、それからまた個性的才能を持ちながらややもすれば世から忘れ去られがちな画家や篆刻家の運命に、自らの来し方を重ね合わせつつ周亮工は共感を禁じ得なかったために、「焚書」の後も残されたのではないか、ということである。実際、『読画録』と『印人伝』を通覧してみると、周亮工が同時代の画家・篆刻家に注ぐ強い関心は、従来型画史に往々見られた制作者の単なる履歴記録のみには終わらず、また張岱の『石匱書』のように史書の叙述様式にとられることもなく、個々の絵画及び印章制作者の生き様に対して彼の思いが率直に述べられているような印象を受ける。書き手のそうした関心があったことによって、現代の我々も余紹宋と同じように、「倦むことを忘れて」これらの文章を読むことができるのであろう。『読画録』中の一編である「陳章侯」も、そうした文章の典型的なものに数えることができる。周亮工は陳洪綬とは早く十三歳の時に知遇を得、進士及第の後、崇禎十四年(1641)には都で友人たちと結成した詩社の活動を通じて「莫逆」の交わりを成したと記すように、この文章は長い直接の交流をもとに、『読画録』に集録された七十余人の画家をめぐる文章の中でもとりわけ多くの文字数が費やされ、書き手の力がこもった文章の一つになっている。

この文章で、周亮工は陳洪綬の「誕僻」、すなわち得手勝手な言動の風変わり加減を好感を込めつつ次のように書き留めている。

章侯はその性が誕僻で、酒に遊ぶのを好み、人が贈った金銭は、右から左に使い尽くし

た。貧乏で志を得ない人のために絵を画きその窮乏を救済することを特に喜んだ。それで生計を立てた貧士は数百にのぼった。富豪の権力者からの求めは、たとえ大金を積まれても筆を執らなかつた。ある浅ましい有力者が、乗船を勧めて、「宋元の人筆蹟を鑑定してもらいたい」と言った。舟を出てから、絹布を出して、画くことを強要した。章侯は頭巾を脱ぎ丸裸になって、罵倒し続けたが、有力者は聴かない。そこで自ら水中に飛び込んだ。有力者は思い通りにならず、やむなく先に行ってしまう、代わりの者を立てて要求したが、とうとう一筆も画かなかつた。この事があってから、しばしば人から悪く言われた。

章侯性誕僻，好遊于酒，人所致金錢，隨手尽，尤喜為貧不得志人作画，周其乏。凡貧士藉其生者，数十百家。若豪貴有勢力者索之，雖千金，不為搦筆也。一齷齪頭者，誘之入舟云，將鑑定宋元人筆墨。舟既發，乃出絹素，強之画。章侯科頭裸体，漫罵不絕。頭者不聽，遂欲自沈於水。頭者拂然，乃自先去。洵他人代求之。終一筆不施也。以此多為人詬厲。<sup>15</sup>

陳洪綬が損得を度外視し、自らの志向だけによりながら、画作に取り組む行為に周亮工は着目しているのだが、それと同時に陳洪綬の画作行為に伴う習癖、風変わりぶりに共感を重ねている点に注目すべきであろう。画作行為をめぐる習癖に着目し逸事を記す態度は、『読画録』全体を貫いて見られるばかりでなく、『印人伝』でも共通するものである。例えば明末の遺民画家・張風（『読画録』巻三）について、周亮工は「性は幽僻」と記し、「多く僧寮道院に寓し、一もその家を省みず。為す所の詩は詞の若くして、みな秀警にして誦すべきも、人と処るも、渾渾として圭角を露わにせず。画尾には真香佛空四海或いは昇州道士と署す」という逸事を記録する。『印人伝』（巻二）にはさらにそれを増補して、「予既にその行誼を載せて読画録に入る。またその一二の逸事をここに録す」と記し、張風が三十年に亘って菜食を続けていたにもかかわらず、ある日ある人が松江の鱸魚を料理しているのを見て、とたんに肉食を始めたこと、腰に瓢箪を下げて剣を撫でる人物の画に張風が自題した「刀は利ならずと雖も、また鈍ならず。暗地に摩挲するは、極恨有るを知れり」という文に感じ入った事を述べる。また例えば、朽民、垢道人、江南布衣などと号した明末清初の詩人・程邃（1605-1691）には、『読画録』（巻三）では「道人 詩字図章、頭頭第一なれども、ひとり画に於いては深く自ら斂晦し、ただ予のみ能くその妙を知れり。道人もまた自ら予のために作すを喜び、嘗てその画に題して云えり『余は生平 媿癖有り、方今 海内に宗工は林林たり。敢えてその幟を仰視せず。（中略）周夫子は瓦礫を珠璣の側に納む。これがために汗下りて已まず』と」、とこのように程邃の謙遜癖に言い及ぶ一方、『印人伝』には「印章の道」<sup>お</sup>にかける程邃の誇り高い自負を「穆倩（程邃のあざな）のこの道に予けるや、実に苦心を具え、また高く自ら矜許して、軽々しくは人のために作らず。人その一印を索むるや、月を<sup>もと</sup>経て始めて得、或いは歳を<sup>もと</sup>経て始めて得、或いは竟に得ず。ここを以て頗る知らざる者の詬厲を為す。然れども穆倩は方にその詩文を抱きて、一世に傲昵し、意と為さざるなり」と述べる。程邃の印章制作は甚だしい狷介さを伴うものであつ

たと記録するのである。

『読画録』のように逸事を収集する目的にそった叙述様式から離れ気に入りの書画にまつわる率直な思いが執筆の動機になっている場合には、周亮工の筆はさらに伸びやかに動いているように見える。陳洪綬が自分のために画冊をわざわざ画き下ろしてくれたことは、『読画録』の文章にも記されていた思い出だが、順治十三年(1656)に自らの疑獄事件への対処繁忙ゆえに、その陳洪綬の画冊の保管をやむなく友人に依頼するに当たり、画冊に自ら題した次の文章では、陳洪綬との交流と彼の画作態度がずっと生き生きと具体的に述べられている。

章侯と私の交わりは二十年になるが、十五年前に、都にいた時、私のために帰去図一幅を画いてくれただけで、それからもう二度と、口頭や文書でいくら頼んでも、応じてくれなかった。庚寅の歳(順治七年)北上して、この人と西湖畔で会ったが、その頑なに筆を下ろそうとしないのは昔と同じだった。翌年私がまた福建に入るとき、杭州の定香橋で再会した。彼は喜んで、「いまこそ私が君のために絵を画く時だ」といい、急いで絹布を用意させた。黄葉菜をつまみながら、紹興の深黒の酒を飲み、侍女<sup>16</sup>に欄干にもたれさせて歌を歌わせたりしていたが、いくらしないうちに止めさせると、片方の手で頭のふけを搔きむしったり、二本の指で足の爪を触ったり、目をむき出して黙りこんだり、筆を手にとって、子供の相手をしたり、ほとんどしばらくも落ち着いていなかった。定香橋から我が宿舎に移動し、我が宿舎から湖畔に移り、道観に行き、船に移って、昭慶寺に行き、そうして津亭で私の送別の宴をした。ただ筆墨だけを携帯し、のべ十一日間に、私のために大小の横書き縦書き四十二幅を制作してくれた。そんなに大急ぎで私のために筆を動かした意図を、来客も不思議に思い、私もまたいぶかしく思った。あに図らんや私が福建入りした後、彼は故人となった。私は彼の気持ちに感じ入って、得たものは夥しかったとはいえ、その内の一幅たりとも他人に譲る気にはなれなかったのである。

章侯与予交二十年，十五年前，只在都門，為予作歸去圖一幅。再索之，舌敝顛禿，弗應也。庚寅北上，与此君晤于湖上，其堅不落筆如昔。明年予復入閩，再晤于定香橋。君欣然曰，此予為子作画時矣。急命絹素，或拈黃葉菜，佐紹興深黑釀，或令蕭數青倚檻歌，然不數聲輒令止。或以一手爬頭垢，或以双指搔腳爪，或瞪目不語，或手持不聿，口戲頑童，率無半刻定靜。自定香橋移予寓，自予寓移湖上，移道觀，移舫，移昭慶，迨祖予津亭。獨携筆墨，凡十又一日，計為予作大小橫直幅四十有二。其急急為予落筆之意，客疑之，予亦疑之。豈意予入閩後，君遂作古人哉。予感君之意，即所得夥，未敢以一幅貽人。<sup>17</sup>

陳洪綬は順治九年(1652)、周亮工が福建在任の地方官として各地の治安保全に精力を注いでいた年に亡くなる。死の前年、陳洪綬が時間を割いて画冊を制作したことに、周亮工は運命的なものを感じたに違いない。晩年、陳洪綬は恐らく郷里に近い紹興付近に住まいしていたの

であろうが、ここには紹興近在とおぼしき場所を転々としながら、陳洪綬が作画に集中するために見せた「誕僻」な振る舞いが克明に描き出されている。周亮工自身、陳洪綬が最晩年に見せたこの行為が強く記憶に残ったものと見え、この画冊とおぼしき作を、黄仲霖という友人に見せた時、その思い出を語って聞かせたのだろう、黄仲霖が残した次のような言葉を周亮工は『読画録』の陳洪綬の条に書き留めている。「櫟園（周亮工の号）画冊四部を出して余に示す。余 章侯の画を見ること益々夥しく、章侯の蓬首赤体にして、右手に酒杯を持ち、左手は頭足の垢を<sup>つま</sup>抓み、<sup>とがら</sup>口を<sup>とがら</sup>擽せ目を張り、天下古今の事を談ずるを見るが如し。かくして龍雷の収撰するに遭わざるは、まさに神気元命のこれを護持する有るべし。」

周亮工の見るところ、陳洪綬の「誕僻」と画作とは一続きのものであり、異様な行為の発現そのものが新たな表現領域を開拓していくために不可欠な原動力と見なされていたのである。周亮工には、張岱のように陳洪綬が示した他者の目を顧みることのない振る舞いを頼もしく見るだけの余裕はなかったように見受けられるけれども、様々な不如意に遭遇してきた自らが身に付けてきた冷徹な観察眼を使って、絵画や印章といったこれまでの知識人の常識では余戯とみられてきた表現に打ち込みながら、世に埋もれたまま終わることが多かった者たちの姿を、意図した通りに後世に伝えることができた。だが周亮工にとって絵画や印章の制作者に注目することは、単に有り様を描写することだけに終わるものではなくて、それらの営みを価値のある人間的営みとして、周亮工自身がこれまで背負ってきた言語世界の中にしっかりと位置づけることも同時に意図されていたに違いない。その一端を最後に見ておくことにしたい。

#### 四

周亮工は張岱と同じように自分自身が画家として後に名を残すことはなかったが、絵画制作を通じて生きる喜びを得ていた友人たちとの交わりから、新しい人間的営みの領域を言語で表象する意欲を得た。そして彼らの言説逸事を記録することを介して、後世の絵画制作が踏まえるべき新たな創作技法のあり方を指し示そうとしたようである。そのあり方とは、絵画の創作もまた文章創作と同様に、絶えざる継承と変革の過程を進んでいくのだというものであった。『読画録』「陳章侯」に、次のような陳洪綬の若年の修業をめぐる次のような逸事が記録されているのが注目される。ここからは、陳洪綬の修業のさまを描き出すことによって周亮工自身が懐抱する絵画創作進展のあり方が主張されていると読むことができるのである。

章侯は子供の時に絵を学び、その時からもうおとなしく手本通りにするというようなことはなかった。（郷里の諸暨から）川を渡って杭州の府学にある龍眠（宋の画家、李公麟の号）の七十二賢の石刻を拓本に取り、家に閉じこもること十日、ことごとく摸写した。出て人に示して、「どうでしょう」と聞いて、「似ている」と答えられると、喜んだ。また十日摸写をして、出て人に示して、「どうでしょう」と聞くと、「似ていない」という返事

に、一層喜んだ。恐らく摸写を重ねているうちにその技法を変化させ、円を角に取り替え、整っていたものを散じたものに取り替えたのだが、人にはそれが見分けられなかったのだ。

章侯児時学画，便不規規形似。渡江揚杭州府学龍眠七十二賢石刻，閉戸摹十日，尽得之。出示人曰，何若。曰，似矣，則喜。又摹十日，出示人曰，何若。曰，勿似也。則更喜。蓋数摹而變其法，易圓以方，易整以散，人勿得辨也<sup>18</sup>。

このくだりに関してはつとに「古法を学びつつ個性を出そうと努めた」陳洪綬の学修法の眼目がここに示されている、と解説されたことがあった<sup>19</sup>。これは、陳洪綬の画作が絵画の伝統を継承しつつ絶えざる変革を加えながら進められたものだったこと、これを明敏に読み取ってなされた指摘であるということが出来る。ただ、「この古法を变じた処に彼の性格の『誕僻』が発露し」たと見なすのは適切とは言い難い。むしろ、伝統的な技法を超克する過程と陳洪綬の個性的な言動の発露は一体として観察者によってとらえられていたと見るべきだ。『読画録』に引かれる第三者の批評のうち、曹秋岳(曹溶1613-1685)が「老蓮は道友にして、布墨に法有り。世人は往往これを怪むも、彼はまさに古人に坐臥す。豈に余子の好悪を顧みんや」と記し、程翼蒼が「老蓮の人物、深く古法を得。おもわざりき山水亭榭は、蒼老潤潔にして、また古人に譲らず」と言い、さらにまた方與三が「北宋の閻次平、南宋の張淳礼、徐改之、専ら荆(浩)関(仝)を借りて入り、自ら北僮の躁気から脱せり。然れども設境未だ能く老蓮の高曠に如かず」と評するように、陳洪綬は一生をかけて古代の画法と対峙したのであるが、李公麟の線刻画を摸擬した若年の逸事は周亮工によってその出発点として位置づけられていた、と考えるほかあるまい。

陳洪綬自身もまた、庚寅の年すなわち順治七年(1650)と紀年する、五十二歳の時の作「王叔明画記」(『宝綸堂集』卷二<sup>20</sup>)は、元末の画家・王叔明(王蒙1308-1385)の作を目睹したことをきっかけに書かれた文章であるが、その冒頭「老蓮 幸いにして世俗の富貴の福を享けず。画家と遊び、古人の文を見、古人の品を発し、筆楮の間に示現せし者の、その意思を師とし、自ら乾坤を辟かんことを庶幾えり。諸公は多くその謬りに感じ、余の能く貧なるを愛して、すなわち喜びて余に示し、叙を題するを属せしむ。余は半生貧賤の福を享くるがために、以て彼の富貴の人に傲るを得たり」と述べるのは、貧窮に苦しみながらも古人の作に惹かれ続けてきたことを回顧するものであるし、五十四歳と記されているところから最晩年の作とされる「画論」(『宝綸堂集』卷二)と題する文章においても、「今人は古人を師とせず、…(中略)…果して深くこの道を心とし、その正脈を得れば、諸大家をもってこの筆は某人より出、この意は某人より出づと辨ずれば、高曾(高祖と曾祖の法度、伝統的画法)は乱れず、曾串(重なり貫くこと、系譜)は列の如くして、然る後筆を落さば、すなわち能く天下に横行す」という言葉が見える。古人に学ぶとともに古人を超越する必要性を陳洪綬は終生痛感していたと推測することができるだろう。

こう述べてくると、若年の逸事として周亮工が記録するのは、陳洪綬の絵画制作が「性から得たもの、積習の能く致す所に非」ざるものであったこと、言いかえれば陳洪綬が生まれながらにして絵画史上の変革者と運命づけられていたことを証立てる意図から出るものであったと言えよう。周亮工自身は明記しないが、こうした変革者としての位置づけは、ちょうど八百年余り以前に韓愈（768-824）が自らの新しい文章創作のあり方を模索していた時に同志後進に宛てた手紙の中で述べた言葉とはるかに呼応するものであることが想起される。かつて韓愈は、自ら志向する文章創作と世人の評価とが齟齬する様を、「それ人に観するや、これを笑うときはすなわち以て喜びと為し、これを誉むるときはすなわち以て憂いと為す」（『答李翊書』『韓昌黎集』卷十六）や「僕 文を為ること久し。つねに自らは則ち意中に以て好しと為すを、則ち人は必ず以て悪と為す。小しく意に称うを、人はまた小しくこれを怪しむ。大いに意に称えば、即ち人は必ず大いにこれを怪しむ。時時、事に応じて、俗下の文字を作れば、筆を下すに人をして慙じしむ。人に示すに及んでは、則ち人は以て好しと為す。小しく慙ずる者は、またこれを小しく好しと謂わる。大いに慙ずる者は、即ち必ず以て大いに好しと為す。知らず古文、直に今の世に於いて何んの用かあらん。然して以て知る者の知るを羨つのみ」などと述べていた。世人からの評価に逆らいつつ、自らの志向を貫かざるを得ない環境であったことがこのように表現されていた。陳洪綬の旺盛な絵画創作は、明代末期からすでに着色あるいは水墨による絵画のみならず、挿絵版画や酒牌制作などさらに商業的色彩の濃いものにも制作の手が及んでいたことが知られる<sup>21</sup>。従来の文人画家が心得ていた創作の領域を超え出たところに自らの表現のあり方を模索していた陳洪綬にとって、周亮工が若年の逸事として記録するところから読み取ることのできる創作態度は、まさしく陳洪綬の志向の核心を突いていたと言えることができるだろう。その意味において、周亮工『読画録』は伝統的な言語を継承しながら時代を画そうとする画家の姿を新たに表現することに成功していると言えるのではないだろうか。

## 注

- 1 重野安繹「葛飾北斎伝叙」に、「何ぞ画工の畸人多きや」と記される。また、幕末・明治初期の日本画家、狩野芳崖（1828-1888）にも奇矯な性僻を物語る逸話が多く残されていることが知られる。佐藤道信「狩野芳崖 近代日本画の革命児」（1992年、辻惟雄編『幕末・明治の画家たち』、ペリカン社、所収）を参照。
- 2 『新唐書』卷一〇八、裴行儉伝。ただし、『舊唐書』本伝にはこの言葉は見えない。
- 3 袁宗道「士先器識而後文藝」、『白蘇齋類集』卷七 館閣文類。
- 4 島田修二郎「詩書画三絶」（1956年、『書道全集』第17巻、平凡社、所収）の言述。
- 5 拙稿『『宣和画譜』小考』、2010年、『山形大学紀要（人文科学）』第17巻第1号。

6 ジェームス・ケーヒル「中国絵画における奇想と幻想」(もと1967年, *Fantastics and Eccentrics in Chinese Painting*, 新藤武弘訳, 1975年, 『国華』第978, 979, 980号)は, 明末清初の中国絵画について欧米の美術愛好者を対象として解説するものであるが, この時代の画家と絵画を概説するものとしても読むことができる。

7 岸本美緒『明清交替と江南社会』(1999年, 東京大学出版会)第三章「明末社会と陽明学」一 「赤子」と個人, 七六頁。

8 入矢義高「真詩」(『吉川博士退休記念中国文学論集』, 1968, 筑摩書房, 所収)で述べられた指摘。この袁宏道の説に続けて, 入矢氏は張岱(1597-1684)「五異人伝」に言及する。任訪秋『袁中郎研究』(1983年, 上海古籍出版社)は, 袁宏道が李贄から受けた思想的影響の一つとして, 人には人間的感情の源としての嗜好があると見なす点が挙げられるとして, 李贄「答周友山書」(『焚書』卷一)の「各人には各自活を過ごす物件有り」と述べるくぐりど, 袁宏道の「人情には必ず寄せる所有り, 然る後能く楽しむ」(『與李子髯書』)や「世人にただ殊癖有りて, 終身易えざれば, すなわち是名士なり」(『與潘景升書』)といった言説との類縁性を指摘している。「中郎与李贄」三八頁。

また, 林宜蓉「理想的頓挫与現世的抉択 —陳洪綬“狂士画家”生命形態之開展」(2008年, 『陳洪綬研究(朶雲第六十八集)』, 上海書画出版社, 所収)は, 明末の文芸思潮を「社会の底辺の庶民文化を源とする『尊芸』の思潮が, 長期にわたって封建体制下にあった『道を重んじ芸を軽んずる』観念と, 正面から衝突し, 新旧が混じり合う激しい動きが新しい文芸形態を生み出した」と概観した上で, 陳洪綬の画家としての履歴を再検討している。

9 『石匱書後集』卷六十に載せる, 画芸の嗜みがあった叔父の張聯芳, 字は爾葆(『瑯嬛文集』卷四「家伝」「附伝」に見える。『石匱書後集』では, 「張爾葆, 字葆生」とする)の小伝に, 「壻陳洪綬, 自幼及門, 頗得其画法」と記す。

10 『続修四庫全書』所収抄本『石匱書後集』卷六十一。

11 青木正兒『中華文人画談』「読画叢談」下 明代の諸家(ヌ)陳老蓮(もと1949年, 弘文堂, のち『青木正兒全集』第六卷, 1969年, 春秋社, 所収)及び古原宏伸「陳洪綬試論(上)」(『美術史』62号, 1966年)を参照。

12 高居翰(James Cahill)著 夏春梅ほか訳『江岸送別 明代初期與中期絵画(1978, “Parting at the Shore: Chinese Painting of the Early and Middle Ming dynasty, 1368-1580”)』(2009, 北京, 生活・讀書・新知三聯書店)の第四章「南京及其他地区的逸格画家」第四節「画家的生活形態與画風傾向」で, 「教養有る職業画家」の社会存在形態上の特徴について, 「明代這類画家の特徴如下(当然并非全部皆如此): 中下階層出身, 或是家境貧困; 幼時即天資聰穎; 所受教育以入仕為目的, 但却中途受挫; 行為放誕, 有時佯狂或甚至到真瘋的地步; 其別号或齋名冠上如“仙”, “狂”及“痴”等字; 参与通俗文化, 如雜戲, 詞曲等; 愛好優雅都会生活, 縱情酒色; 願与富裕和有權勢的人結交, 但却不至于諂媚。雖然也許出身地方, 這類藝術家却活躍于大都

市（如南京和蘇州）中。關於其社会地位与芸術成就，我們可稱之為“有教養的職業画家”，因為他們既非文人業余画家，也非教育程度較低的“画匠”と説明されている。一七六頁。

- 13 周在浚「行述」，『周亮工全集』（2008年，南京，鳳凰出版社）所収康熙十四年（1675）周在浚刻本に「人皆謂先大夫有画癖，有印癖，先大夫領之而已」とある。第二冊，一〇一一頁。
- 14 『頼古堂集』附録「行述」，『周亮工全集』第二冊，一〇一〇頁。
- 15 『讀画録』卷之一，『周亮工全集』所収康熙十二年（1673）周氏煙雲過眼堂刻本，一四頁b。
- 16 原文「蕭数青」の意味は明らかにし難い。前掲青木論文は、「歌妓の名か」と注している。
- 17 『頼古堂集』卷二十二「題陳章侯画寄林鐵崖」，『周亮工全集』所収康熙十四年（1675）周在浚刻本，第二冊，八二四頁。
- 18 『讀画録』卷之一，一四頁a。
- 19 前掲青木論文。全集の一六四頁。
- 20 呉敢 点校『陳洪綬集』（1994年，浙江古籍出版社）による。
- 21 陳洪綬の挿絵版画については，小林宏光「陳洪綬の版画活動」（1983年，『国華』第1061及び1062号）に詳しい。

（附記）本稿は，平成23年度に交付を受けた科学研究費補助金（基盤研究C）「宋人題跋の文学的研究」課題番号：20520315）による研究成果の一部である。

## 画人传与“痴癖”——以明末清初画家陈洪绶的文学形象为主

### 西 上 胜

本文论析中国画人传之中的“痴癖”因素，特别是以荡出新生文艺思潮之下出现的晚明画家陈洪绶为主要对象进行考察。

《晋书》顾恺之传尾有顾恺之三绝的记载。他有“才绝、画绝、痴绝”。画家有痴绝，这一条句子成为了常用表现，沿袭到清代。绘画理论家、张庚的《国朝画征录》里有“人谓痴绝类虎头”这一句（卷上、戴思望传）。

明末清初这段时期荡出了个性尊重、尊重技艺的思潮。陈洪绶是这个时期最有名的文人画家之一。张岱和周亮工都是生活在跟陈洪绶同一时代的文人。他们都从直接交流中写下了几篇以陈洪绶的逸事为内容的小品文。本文以张岱的《陶庵梦忆》、周亮工的《读画录》和其他史传、题跋等小品文为主要对象进行具体考察画人传之中的“痴癖”这新出现的因素。



# 身体なき声，声なき身体，あるいは近代フランス文学に おける音声装置（フォノグラフ，電話）の表象

——ヴィリエ・ド・リラダンからコクトーまで——

阿 部 宏 慈

(フランス文化論)

## はじめに

二十世紀は、映画をはじめとする視覚的な記録再生装置の時代であると同時に、レコードプレイヤーやテープレコーダーといった音声の記録再生装置の発展と普及の時代でもあった。記録再生という機能はまた、伝達媒介の手段でもある。時間的にも空間的にも。過去の視覚的音声的情報の現在への伝達媒介ということであるならば、それはたちまち痕跡としての書字の問題に結合するだろう。碑文や壁画、そして郵便。メッセージの発信と受信の間に生じる差延。空間的伝達媒介が問題になるならば、それはむしろ波動とエーテル的なものの問題に結合するだろう。周波数、電気的信号、それらを運ぶ媒体としての空気と線。過去から甦り来る声。彼方へと運ばれ反響する声。

神話のはかつて餌を擬人化した。森の精エコ。本来自分の言葉をもたなかったエコ。それがユノの怒りを買ったせいで、ただ他人の言葉を、それも相手の言った言葉の最後の短い部分を繰り返すことしかできなくなった。そのエコが恋に落ちる。おのれ自身をしか愛することのできないナルキッススに。ナルキッススの冷淡に絶望したエコは身体を失い、ただ声だけの存在となって森にさまよう。一方のナルキッススは、水面に写しだされる自らの姿への恋着のあまりに溺れ死ぬ。音声的再生装置と自己愛的映像の装置の死を介した交錯。オウイディウスの『転身物語』は、ナルキッススの最期を、それとは知らずおのれ自身へと別れを告げる彼の言葉を反復するエコの言葉によって描き出す<sup>1</sup>。

木霊返しの「弱々しい力」へと限定されてしまったエコの言語能力。ジャック・デリダに依拠しつつ、次のように書いているのは、シェンディとオデッロである。「ユノによって下された懲罰は、デリダが『自らが話す声を聞きたいという絶対的な欲求 [le vouloir-s'entendre-parler absolu]』であるところの形而上学の歴史全体を条件づけたものに似ている<sup>2</sup>。（『グラマトロジー

1 オウイディウス、田中秀央・前田敬作訳『転身物語』巻三の五、人文書院、1966年、pp. 97-105.

2 Jacques Derrida, *La Voix et le Phénomène*, Paris, Presses Universitaires de France, 1967, p. 115.

について』のなかで、経験の普遍的な構造として定義されているところの<sup>3)</sup> 音声的な自己=愛 [l'auto-affection vocale], 声を通して『自らが話すのを聴く』ということは、音声言語中心主義的な形而上学の結節点それ自体をなしているのである。声は特殊な記号表現である。外部でもなく、経験的でもなく、精神的な素材からなっており、消え去ることによって理念的な記号内容の純粋性を聞かせる。声は私が話す瞬間にぼやけ、それによってそれを聞き取ることを可能にする。外界を経由することなく、外部世界に落ちることなく、それは自己=愛の内部性にとどまる<sup>4)</sup>。」

遅延なき声。ナルキッスがエコを退けるのは、エコが彼の言葉を外在化し、つねに一定の遅延を伴いつつ反復するからだ。あわれなエコは、純粋な声のみの存在になる。声と骨だけ。骨は岩と化し、声はそれ自体で反響する。「声は、人が自ら話すのを聴かせる声は、意識に到達する。つまり、おのれ自身に、つねに自己の自己への回帰として、反復、衍として返ってくる。声とはこの隔たりそのものである。残響の効果、自己の反響、余波、電話、グラモフォニーである。」

そして再びデリダ。「『自らの話すのを聴くことは、自分自身へと閉ざされた内部の内部性ではない<sup>5)</sup>。』」反響は、内部と外部をかき乱す。声なしに、自らが話すのを聴くことを望む哲学的なナルシズムによって否認されたエコは、おのれを消し去ることで舞台から去り、洞窟の中に避難する (*Solis ex illo vivit in antris*)。ここにおいて彼女の声は、その断片的な反響は、ますます死の影を帯び、地下墓所的なものにさえなる。地下墓所は欲望の墓である<sup>6)</sup>。」

身体なき声は、死の影を帯びる。不吉な運命の凶兆を告げる声、電話、あるいはレコードの中に残された声の事例は、数多くある。たとえば内田百閒『サラサーテの盤』。あるいは、不吉な映像の呪いと同様に、殺人や死の予告電話を小道具とする数多くの映画。

それでは、電話やグラモフォンあるいはラジオといった近代的な発明の驚異に接した、そういった事物を驚異として受容することがまだ可能であった時代の作家や詩人たちは、それをどのように描いたのか。

本論は、フォノグラフや電話を作品の中心的なしかけとして用いた文学作品の系譜の一端をたどりつつ、声と身体、そしてそれを描き出す劇的テキストとの関係という問題を考察するものである<sup>7)</sup>。

3 Jacques Derrida, *De la grammatologie*, Paris, Minuit, 1967, p. 33 et pass.

4 Peter Szendy et Laura Odello, "Antriloquies. Voix déviées dans la caverne", in *Revue des Sciences Humaines*, No.288, 4/2007, p. 16.

5 Jacques Derrida, *La Voix et le Phénomène*, op. cit., p. 124.

6 Peter Szendy et Laura Odello, op. cit., p. 18.

7 本論は、科学研究費補助金基盤研究(C)「近代以降のヨーロッパにおける声とテキスト」(代表: 相沢直樹) 課題番号 21520311 の助成を受けておこなわれた研究の成果である。

## 1 電話と自動人形

ユージン・ウェーバーは、『世紀末：19世紀末のフランス』において、次のように述べている。

「1878年の万国博覧会電気部門審査委員会がグラハム・ベルの発明を、ぺてんあるいは玩具とみなして、危うく拒絶しそうになったとすると、同年にはもう、ジュール・フェリーがこの新しい驚異の進歩を彼の弟に誇らしげに語った。これより少し後、1881年の電気博覧会を訪れた音楽愛好家たちは、そこから1キロの距離にあるオペラ座から中継されてくるコンサートを全曲聴くことができた。演劇作品であれ、リサイタルであれ、国会の議論であれ聴く事のできるこの“テアトロフォン”は、それを聴くだけの財力のある人たちの間で、たちまち大成功を博した。その出現が、ただちに電話の契約者を倍増させた（その数は2442にまで達した）。そして、1930年代にラジオに取って代わられるまで、音楽通を魅了し続けた（プルーストはテアトロフォンのおかげで、『ペレアスとメリザンド』を発見した）。もっと散文的な領域では、電話はまずは犯罪と闘うために、警察署に出現した。ただし、見たところでは、犯罪者が電話を利用する方が早かったようであるが<sup>8</sup>。」

1878年には、デュ・モンセル公爵による『電話、マイクロフォン、蓄音機<sup>9</sup>』が出版された。この著作自体が、「驚異叢書 [Bibliothèque des Merveilles]」と名付けられているのは示唆的であるが、デュ・モンセルはそこで、グラハム・ベルの発明が、フィラデルフィアの博覧会に出品された1876年の時点で、W・トンプソン卿によって「驚異の中の驚異」と呼ばれたこと、たちまちそれが世間の耳目を集め、物見高い人々が殺到したにもかかわらず、はじめは何か怪しげなものではないかと疑いをいだく人があったことを述べている<sup>10</sup>。さらに、磁石を用いた電信の技術の研究を通じて培われた技術を、いかにして音声の波動を鉄線を経由して伝達することができる技術として確立するかを語ったベル自身の文章を引用する。そこでベルは、最初の電話の実験について語る。自分の側の機械（送話器）を手に、「私の言うことがわかるか？」と問いかけたベルの言葉に助手は、「完全にわかります」と答えた、という<sup>11</sup>。あらゆる新技術がそうであるように、電話もまた、懐疑と驚嘆の入り交じったまなざしによって迎えられたのだ。もともと音声の遠距離伝達の技術である電話については、アイデアは太古から存在していた、とデュ・モンセルはこの本の冒頭で述べている。ただ、多くの人がそれに対する懐疑

8 Eugen Weber, *Fin de siècle : la France à la fin du XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Fayard, 1986, p. 97.

9 Le comte Th. Du Moncel, *Le Téléphone, le microphone et le phonographe*, Librairie Hachette, 1878.

10 *Ibid.*, p. 32.

11 *Ibid.*, p. 46.

の態度を解かないのは、それがしばしば異教の技術であったからだ、と言う。「ギリシャ人は、これを実現することの可能な手段をすでに用いていたが、この手法は時には異教の神託に貢献したであろうことは疑い得ない<sup>12</sup>。」さらに時代が下れば、たちまち声の反響が消えてしまう空気ではなく、より堅牢な物体を媒体とする音声伝達の可能性が様々な形でさぐられることになるが、その事例としてデュ・モンセルが挙げるのは、ひとつは1819年に公開されたウィートストーン「魔法の堅琴」であり、そこでは樅の木を伝わって運ばれた音楽が、反響箱のなかで拡大されて、誰もいないところから音楽が鳴ったような錯覚を与えたと述べている。あるいは、金属線を用いた会話の原型は、一種の糸電話に求められるとして、スペインではそれが愛の会話のやりとりのために用いられていた、と述べる。今では子供の玩具に墮した糸電話であるが、科学的に見たその重要性は否定し難いとデュ・モンセルは語る<sup>13</sup>。

驚異は、たちまち神話に結びつく。それは時には神的な何者かの声を伝える（ただしペテンとして）、あるいは離れた恋人たちの対話を可能にする（ただし糸の届く範囲で）。龍人デルピュネエーは洞窟の番人、デルポイの神託所を守る番人ではなかったか。洞窟の中に響く声。1876年におこなわれたグラハム・ベルの電話のデモンストレーションでは、受話器の向こうから響いて来た声は「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」と眩き、さらに行き当たりばったりにニューヨークの新聞記事の抜粋を読み上げた、とトムソンは報告していた<sup>14</sup>。プロスペローの洞窟を出たミランダは、人間の美しさに感嘆の声をもらすだろうが、近代の共和国の住人は、プラトンの洞窟の中の奇妙な囚人たちに向かって不思議な影絵芝居を見せる者たちよろしく（そこには声や音も欠けていなかった）ハムレットの台詞を断片的に反復するか、あるいは現代の神託とも言うべき新聞記事を読み上げるかしかない。

他方、ウェーバーが電話の普及にあたって大きな貢献をしたとするテアトロフォンは、デュ・モンセルの語っていた「魔法の堅琴」の延長線上にあるようにも見える。オルペウスにふさわしい道具。近代的なテクノロジーの私生活的空間への侵入に対して警戒を緩めない人々を、技術の魔力へと誘い込んで行くのは言葉ではなく、音楽である。ウェーバーは、犯罪者と異なり、良き市民の側は電話を取り入れるに慎重だったと述べ、その例として大統領のグレヴィは、大統領府に電話を設置するまでかなりためらったことを挙げている。その上で、社交界の花形でもあったグレフェル公爵夫人が、電話のもたらす「超自然的な魔法の生活」を評価していたことを紹介する。「一人の女性にとって、ベッドにいながら、おそらくは同じ状態にある男性と話すことができるというのは、面白い [singulier] ことです」と彼女は述べたというのだ。その上で、「夫が来たら、電話機をベッドの下に投げこめば良いのですから」と<sup>15</sup>。

『失われた時を求めて』のゲルマント公爵夫人のモデルの一人としても知られるグレフェル

12 *Ibid.*, p. 1.

13 *Ibid.*, pp. 2-3.

14 *Ibid.*, p. 32.

15 Eugen Weber, *op.cit.*, p. 97.

公爵夫人のこの才気あふれる電話談義は、電話という新規な発明に対する人々の疑念をむしろ裏書きする。それは、本来結ばれる筈のない二つの親密な空間を、密かに、隠された形で結びつける。尤も、デュ・モンセルの記述にあったように、糸電話がスペインにおいては恋人同士の会話の道具として用いられていたという（どこまでが真実であるか、それがどのようなものであったかの記述はない、これもまたある種の技術をめぐる神話であろうが）くだりを想起するなら、距離を超える私的で秘密の会話が、たちどころに裏切りや姦通といった主題に結びつくのに驚く必要はない。しかも、痕跡を遺すことのない交信は、「電話機をベッドの下に投げこめば」、たとえどんな疑念を抱かれようとも決して証拠を捉えさせないという利点を持つ。そういう意味では、電話は、「[つかの間 [l'éphémère]]の文明」に最も良く適応した技術である。言葉は、記憶との対応を失い、容易に否認されうるものとなった（「私はそんなことを言った覚えはない」<sup>16</sup>）。一方で、音声を（言葉だけでなく声の肌理まで）記録し再現する機械であるフォノグラフ（蓄音機）の出現は、発話の一回性を宙づりにする。それは、複製の技術である以上に、再現、反復の技術である。言葉は、記憶ではなく、非言語的な媒体の中に閉じ込められ、保存される。録音された自分の声を、ひとは否認することが出来るであろうか。またしてもデュ・モンセルに拠るならば、最初期の音声記録再生装置は、特にその再生の機能において、人間の発声器官を模倣する機械の発明に多くのエネルギーを費やした。そのために作り上げられた機械は複雑を極め、エディソンの発明の大いなる驚異は、それが実現した音声の再現それ自体もさることながら、その機械の極度の単純さであった、という<sup>17</sup>。声の振動の細やかな襲の再現を技術的に可能にしうるか否か、という問題はすでに電話によって解決済みであった。あとは、それを媒体上に痕跡として記録し、それを記録とは逆の回路によって再現する技術が発明されさえすれば良かった。発明に付けられたエディソンの覚え書きは、この記録が容易に複製しうるものであることを、可能性の問題としてではあるが述べている<sup>18</sup>。それゆえ、エディソンによれば、「フォノグラフは、音楽にも十分な利点をもって適用可能であるということのをわれわれは疑わない。なぜなら、私の信ずるところによれば、この機械の動作によって、歌を大きく明瞭な音で再現することができるようになるからである。友人が、朝の挨拶とともに、一曲の歌を届けてくれて、それが夕べの集いに大いなる幸福をもたらすことも可能だろう<sup>19</sup>。」

さらに、エディソンは、これに続いて、遺言を記録したフォノグラフは、言葉の写真とも言うべきものとして機能するであろうから、家族のすべての構成員がこれを手にするならば、全

16 Gérard Vincent, "Une Histoire du secret?", in Philippe Ariès et Georges Duby (sous la direction de), *Histoire de la vie privée*, tome 5, De la Première Guerre mondiale à nos jours, Seuil, 1987, p. 186.

17 Du Moncel, *op.cit.*, p. 273.

18 *Ibid.*, p. 296.

19 *Ibid.*, p. 302.

員がともに死者の遺志を共有することができることも述べる<sup>20</sup>。

音楽と遺言。結局のところ、音声的再現機械の行き着く先は、魔法の豎琴の魅惑と死者の言葉の再現であるとも言えるかのように。ジャック・オッフエンバックが猥雑で崇高なグロテスクさで描き出した自動人形コッペリア（『ホフマン物語』（1881）のアントニア）の不気味さ。生命なき人形が歌うアリアに魅了される詩人。フロイトが『砂男』をめぐる論考「不気味なもの」（1919）を発表するまでには、まだしばらく間があるだろう。

尤も、フロイトを待つまでもなく、オーギュスト・ヴィリエ・ド・リラダンならば、砂男コッペリウスとフォノグラフの父エディソンを結びつけるのにためらいなどまるでなかった。女性版フランケンシュタインとも言える人造人間ハダリーを発明するエディソン（『未来のイヴ』（1886））は、近代的な発明家としてのエディソンというよりは明らかにホフマンの恐怖小説に登場するスパンツァーニ博士の系譜に属する登場人物である。現に、『未来のイヴ』のエディソンの登場を告げる第二の場面「フォノグラフのパパ」では、ホフマンの『砂男』からの一節（「あいつだ！私は、暗闇の中で／大きく目を見開きながら言いました。砂男だ！」）がエピソードに引用されている<sup>21</sup>。

さらに、第三節（III Lamentation d'Edison）では、エディソンがおのれの発明になるフォノグラフに対して、もしそんなことが可能だったらの話だとして、不平を述べるというくだりがある。

「だから、たとえば、私は、フォノグラフに対して、それが、これも音であるのに、音を、ローマ帝国の崩れざる音を、流布する噂の音を、雄弁なる沈黙を再現できないことを、そして、声 [Voix] ということで言えば、良心の声も、血の声も、偉大な人のものとされるあれらのすばらしい言葉を、白鳥の歌も、言外に聞こえる意味も、天の川 [la Voie lactée] も、捉えることができないことを責めるだろうか。いやいや、これは言い過ぎた。」

「音 [bruits]」と「噂 [bruits]」をつなぎ、さらには、「声 [la Voix]」から、「天の川 [la Voie lactée]」を連想するという、さらにはひょっとすると「白鳥 [Cygne]」に記号 [signe] をも重ねているかもしれない、地口すれすれの言葉遊びに飾られた独白は、実業家にして発明家エディソンのイメージからは少々遠い。作中のエディソン博士はともかく実在のエディソンが、このヴィリエ・ド・リラダン風の諧謔にふさわしい人物であったかどうかは、疑問が残る。たとえばデュ・モンセルの書籍に引用されたエディソンの文章のトーンはユーモアとは程遠い。それでも、フォノグラフの発明が持つ歴史的・神話的意味を適確に表現しているという点

<sup>20</sup> *Ibid.*, p. 303.

<sup>21</sup> Villiers de l'Isle-Adam, *L'Ève future*, Jean-Jacques Pauvert, 1960, p. 14.

では、エディソンの口を借りて語らせるにふさわしい独白ではある。むしろ、発明家エディソンが、ここではファウスト博士的な探究者として造形されていると言うべきか。その上で、エディソンは、彼の最初のフォノグラフの音が、「[マリオネットの] ポリシネル人形の笛で語る良心の声のようであった」ことは認めなければならない、と言う<sup>22</sup>。

そのような独り言を言い続けるエディソンの耳元で、まるで、彼の「声」についての半ば自嘲的な反省を止めるかのように、突然、もうひとつの音が響く。しかも、姿なき声。それは、エディソンの謎の助手、アンダーソン嬢の声であり、しかも、彼女は声だけの存在として出現する。

「しかし、ひとつの影さえもそこにはなかった。

彼は身震いした。

——あなたかね、ソワナ？と彼は大きな声で訊ねた。

——はい。——今夜は私は良い眠りに飢えていましたの。それで、指輪をとって、指にはめましたの。いつもの声をそんなにはりあげなくともよくってよ。私はあなたのおそばに居て、——それで、先刻から、あなたがまるで子供みたいに言葉遊びに耽っておられるのを聞いておりましたよ。

——で、物理的には、あなたはどこだ？

——地下室の中で、鳥たちの茂みのかげ、毛皮の上に横になっていてよ。ハダリーは眠っているよう。彼女には、飴ときれいな水をあげましてよ。彼女が、すっかり……生気をとりもどすように。

電気技師 [エディソン] がソワナと呼んだところのその不可視の存在の声は——この最後の言葉のところで、ちょっと含み笑いをするようだったが——紫がかったカーテン留め [une patère des rideaux violacés] の中で、ひそやかに、低く、響いていた。このカーテン掛けは、音響盤を形成していて、電気によって運ばれて来る遠い囁きに震えていた。

——教えてくれ、アンダーソンさん、しばしの夢想ののち、エディソンが続けた——この瞬間に、誰か別の人が私にここで何か言ったら、それをあなたは聞くことが出来るかとしかにそう思われますか？

——それはもう、あなたがそれをご自分で、唇の間で、ひとつひとつ、とても低い声で繰り返してくだされば。あなたのお答えの中の抑揚のちがいで、私には対話が理解できるでしょう。——お分かりですか？私はいくらかはまるであの『千夜一夜物語』のなかの指輪の精のひとりみみたいなものなんです。

22 Ibid., p. 14.

——だとすると、もしも私があなたに、今あなたが私に話をしているこの電話線を、われらが若い友人たる女性自身に結びつけたならば、私たちが話題にした奇跡が生じると？

——もちろんですとも<sup>23</sup>。」

地下室から響いて来る謎めいた声。電話は、ここでは、地下室にある人造人間ハダリーをいわば仲介にして、ほとんど超自然的とも言える装置である指輪によって伝えられて来る声を伝達する。しかも、この声の主は、眠る女性であり、ソワナとは眠りにある時の彼女の自分自身を呼ぶ名であるという。それは亡霊的存在「ひとりの女性の分身と化した亡霊<sup>24</sup>」である。しかも、こうしてほとんど霊的な存在と化したソワナは、人造人間に合体し、「その《超自然的な》状態によってそれに生気を<sup>25</sup>」与えようとさえする。

エディソンの一種誇大妄想的とも言える独白は、まさに声と書字との二項対立を基盤としてなされる。書字による記録としての聖なる言葉さえも、もしもエディソンがそれ以前に存在していたならば、聖なる声の「振動 [Vibrations Sacrées]」となっていたかもしれない、とエディソンは言う<sup>26</sup>。神的な存在からの命令は、どのみち言葉によって、声によって伝えられるのであるからには、本来それを聖なる書字によって記録し伝達しなければならないというのは、奇妙な倒錯であったろう。声は声によって記録され、声として再現されなければならない。遅れて来た天才（「私は何と遅れて人類にもたらされることか！ [Comme j'arrive tard à l'Humanité]」と彼は嘆いてみせる<sup>27</sup>）としてのエディソン。しかし、そうしてなしとげられた声の再現、神託を告げるべきフォノグラフは、もはや何一つ記録再現に値するような声がなくなってしまった時代に発明される運命であった。しかも、そこで再現される声は、自動人形ならぬ操り人形の機械的な声音を帯びたものでしかない。

エディソンの屋敷の地下室におけるハダリーとエワルド卿との出会いの場面でエワルド卿を驚かすのは、「二週間前に死んだ」ナイチンゲールの美しい歌声である。しかも、このナイチンゲールの末期の歌を「再現するのは、実際にはこの場所から二十五里も離れたところにあるフォノグラフなのです」とエディソンは言う。「それは、ニューヨークはブロードウェイの私の家の寝室に置いてあるのです。そこに私は電話機を設置し、その電話線は上の私の実験室につながっているのです<sup>28</sup>。」

人造人間と鳥の声、その結び付きはオッフェンバック『ホフマン物語』のオランピアのアリ

23 *Ibid.*, p. 20.

24 *Ibid.*, p. 360.

25 *Ibid.*

26 *Ibid.*, p. 23.

27 *Ibid.*, p. 15.

28 *Ibid.*, p. 167.

ア「生け垣で小鳥たちが」を想起させずにはおかない。その意味では、『未来のイヴ』の人造人間は明らかに自動人形オランピアの系譜にある。しかも、自動人形が歌った生け垣の小鳥たちは生きた本物の小鳥たちを想定していたとすると、ここで登場する小鳥は、すでに生命なき、これもまた声だけの存在と化している。

魔法と驚異の機械は、それが人間的な機能の（形而上学的な）本質に迫れば迫るほど、魅惑と恐怖をかき立てる両義的な存在と化す。あらゆる近代的なテクノロジーに対する恐怖は、十九世紀の文化人たちを深く痕跡づける志向性であるが、そのことは、電話やフォノグラフといった声をめぐる機械に関しても同じである。

現実世界における理想的な女性像の実現不可能性から人造人間に夢の女性像を託そうとする世紀末的な色彩に彩られたピュグマリオン幻想は、それ自体では科学技術の意匠をまとった反現実主義的耽美的な空想の産物であるにとどまる。その意味では、電話のような機械であっても、人間的な機能を模倣するための人工的な声の代用にすぎない。「地下室に花咲く一千もの光と影なす葉叢の陰に横たわり、ソワナはあらゆる器官の重さから解放され、ハダリーの体内に、液状化したヴィジョンとして取り込まれていたのだ」とエディソンは言う<sup>29</sup>。その「ヒステリー的な超感覚的状态 [l'état de sursensibilité hystérique]」において実現された声の体内化が、本来物質的な人造人間の器官に生命にも似たものを生じさせることになるのだ<sup>30</sup>。なぜなら、器官的な停止状態にあるヒステリー的な身体を支配する神経的電流は、機械的な身体の器官を制禦する電流と大きな親和性を有するからだ。こうして、器官なき身体としてのアンダーソン夫人は、夢遊病的なヒステリー的な身体と化し、その眠れる身体のうちにある神経電気によって制禦される声のみが、自らをソワナと命名しながら、人造人間ハダリーに合体していく、というのだ。

声の記録再現のもたらすべき神学的形而上学的とも言える転回の可能性が、ただただ理想的な女性像としての人造人間へと集約して行くところに、この科学的寓話の世紀末的な特質を見ることは容易だ。その上で、むしろ機械的身体と心霊的な声という図式に注目するなら、そこに見えてくるのは、制禦不能のヒステリー的な身体と化した現代的な身体と他者の声としてしか自らの声を響かせることのできないエコ的存在としての身体なき声の分裂である。しかも、この身体なき声は、それ自体で自律的に存在しうる訳ではない。物語の終幕が示すように、人造人間に声を与えたソワナは、この「超=人類的 [outré-Humanité] <sup>31</sup>」な存在とともに去り、声を失った身体は冷たい骸と化す。

ヴィリエ・ド・リラダンは電話とフォノグラフという二つの発明を、まさにその声と身体と

29 *Ibid.*, pp. 360-61.

30 *Ibid.*, p. 364.

31 *Ibid.*, p. 369.

の関係において結びつけた。空間と時間を超える声は、それ自体が一種の生氣論的な意味でのエネルギーとなって、これもまた一個の機械に他ならない身体を血の通った生きた存在にすることができる。それはひどく倒錯した視点であるように見えるが、現実の存在の不完全や美的な完全性の欠如は、必然的に、完璧な身体を備えた声を理念として追求することになるだろう。その時、声はほとんど魂というのと同値であり、電話あるいはフォノグラフといった機械は、身体性を削ぎ落とされた純粋な魂としての声を電氣的な手段で運ぶ装置としてイメージされるのだ。

しかし、ヴィリエ・ド・リラダンの想像力がいかに美しくそれを描きだすとしても、この機械的身体と声の融合は、コッペリア＝オランピア的な不気味さから遠ざかることはできない。そのことはとりもなおさず、電話やフォノグラフといった機械の不気味さへの恐怖を示しているだろう。声という身体の内奥にあるべきものに直接接触し、それを運び、それを保持する機械という観念は、『未来のイヴ』の中に描かれた事物でいえば、黒檀の机の上に、豪華なケースに入れられて保存されている美しい女性の腕、それは実は人工の肉で形成された腕なのだが、しかし、ほとんど本物と見まがうばかりの美しい腕に近い。切断され、しかも生気を失わずに、じっと横たわる腕<sup>32</sup>。この「夢の物体」の不気味さこそが、身体なき声の機械的再現のもたらす不気味さのすぐれて世紀末的な形象化となっている。

ポール・ヴァレリーは言う。「思考の内部そして背後には、思考は存在しない。電話線の中に声が存在しないのと同じように。」「しかし、外部装置に到達するや再び思考へと変わる変化がある」と<sup>33</sup>。(Cahiers, 1922-1923, IX, 124)

## 2 ダナエとフリアイ

しかし、世紀末のフランスにおいて、すべての文化人がヴィリエ・ド・リラダンのように、審美的観念との類比によって電話を見ていたわけではない。むしろ、多くの人にとって、電話は近代生活の中に突然闖入してきた不格好で始末の悪い道具に他ならなかった。

先に引用したウェーバーは、エドゥワール・ドガが画家のジャン＝ルイ・フォランに言ったという言葉を紹介している。それはフォラン家の夕食に招待されたドガが、電話が鳴ったとたんに電話を受けに行ったフォランに述べた言葉である。「ああ、それが電話なんですね。だれかがあなたを呼び鈴で呼んで、そしてあなたはいなくなってしまう」<sup>34</sup>。もともとは、これは良く知られるように、ポール・ヴァレリーの『ドガ、ダンス、デッサン』中に紹介されている逸話である。ヴァレリーによれば、フォランは新築の自宅に設置させた電話を自慢したくてドガを招待し、わざわざ夕食の最中に電話をかけさせたのだという<sup>35</sup>。ヴァレリーはそれをドガの

32 *Ibid.*, pp. 30-33.

33 Paul Valéry, *Cahiers*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1973, tome 1, p. 976.

34 Peter Weber, *op.cit.*, p. 97.

35 Paul Valéry, “Degas, danse, dessin” in *Œuvres*, II, «Bibliothèque de la Pléiade», 1960, p.1217.

寸鉄人をさすような警句の一つとして紹介しているのだが、フォランの俗物性に対するドガの揶揄は、根底において近代的テクノロジーへの警戒を匂わせている。親密な対面の場であるべき家庭での夕食に闖入する傍若無人な招かれざる客としての電話。ブルジョワ的な家庭の規範にも反する（無作法この上ない）電話のあり方が、そのまま進歩の戯画となるところにドガの警句の反=近代主義的なニュアンスを読み取ることが出来る。

その一方で、電話は、二十世紀の住居におけるコミュニケーション空間の統合にかかわるひとつのモデルを提示したと見る歴史家もいる。

ミシェル・ペロは「[十九世紀から二十世紀へという]世紀の転換点にあつて、家による世界の併合 [intégration] そして支配 [domination] への度外れな欲求が現われる」と述べている。イギリス的な家庭モデルから第二帝政期におけるブルジョワ市民的な家庭モデルを経てフランスにおいても一般化していった「家」という場所に対する強い執着は、世界全体を「家」によって支配しようとする意志に結びつく。「技術的發展—電話、電気—は、もろもろのコミュニケーションをとらえこむことを、さらに言えば、あらゆる人にとって、仕事を住居へと取り込むことを可能にする。父親の見守る中で、家族全員が仕事に従事する家庭的企業は、広く共有されるあこがれの的となり、ユートピアの主題としてたえず生み出される<sup>36</sup>。」

たとえばテアトロフォンを、オペラ座という空間への、空間的な移動不要で入り込み、自由にその音楽を聴取することを可能にする機械であると捉えるなら、それは遠方の恋人との会話を可能にする電話と同様に、いながらにして世界の至る所に存在することのできる遍在的な欲望を実現するものであると考えることができる。その一方で、支配的な力（たとえば父性）によって、至る所に張り巡らされた声の装置は、声なき身体としての、神なき神託としての権力支配の道具と化す。ペロはそれをしかし、政治的な権力装置と見るのではなく、むしろ家庭を規範とするブルジョワ的な体制の支配装置、家内工業的な制度の拡張の道具として見る。そのような声の支配的な力は、常に肯定的に受け止められる訳ではない。

トゥーシャトゥー [Touchatout] の筆名で活躍したジャーナリストのレオン=シャルル・ビヤンヴェニュ (Léon-Charles Bienvenu [1835-1911]) は、エミール・ゾラの『パリ』をパロディー化した「電話小説」『忙しい人のためのエミール・ゾラの『パリ』<sup>37</sup>』を書いた。その冒頭で、語り手たる「私」は、すべての電話契約者に向かって通話が確保されていることを確認し、これからゾラ氏の大作『パリ』を電話でお話ししよう、と述べる。引用部分は、声にギユメを付けることができないので、鼻声で読み上げる（実際のテキストではもちろん引用符であるギユメに囲まれている上にイタリックに直されており、その上、[ママSIC.]の文字が（時に必ずしも原文通りでないにもかかわらず）引用であることを示しているのだが）と言う。ゾラの長大

36 Michelle Perrot, "Manières d'habiter", in Philippe Ariès et Georges Duby (sous la direction de), *Histoire de la vie privée*, tome 4, De la Révolution à la Grande Guerre, Seuil, 1987, pp.309-10.

37 Touchatout, *Paris d'Emile Zola raconté par Touchatout, le roman téléphoné aux gens pressés*, Tintamarre, 1898.

な作品を、数分の一に縮小した上で、時に滑稽な注釈を加えながら進行するこのパロディー小説は、最後には、置き去りにされたままの爆弾の行方について、ほとんど挑発的とも言える悪ふざけを発して終る。それだけではない、「さらにもっと忙しい人のために」と称して、ゾラの大作を二頁に要約してみせる。第二帝政に対する風刺をこととしたジャーナリスト、トゥーシャトゥー<sup>38</sup>にとって、ゾラの『パリ』が映し出した貧困と騒擾のパリ像は、必ずしも否定すべき対象ではなかったにしても、信仰に疑いを抱く神父と化学者の兄という図式的な対立や苦悩は、十分に揶揄の対象となるべきものであったと言えるかもしれない。

いずれにしても、「電話小説」という奇妙な形式を装うこの作品は、実際には今日のラジオ小説のようなもので、電話的な双方向性はごくわずか、冒頭のおそらくは電話交換手と目される受け手とのやりとりを除けば、ほんの少ししか確保されていない。トゥーシャトゥーがここで電話という新しいメディアによってイメージしたものは、むしろミシェル・ペロが述べていた声による支配に近い。それは恐らくジャーナリストという職業柄でもあったろう。

電話の使用が、ヴィリエ・ド・リラダンの描いたような何か秘法的なテクノロジーというよりは、時間に追われ、エミール・ゾラの長大な作品をじっくりと腰を据えて読むことなどできない人びとにふさわしいというのが、トゥーシャトゥーの皮肉な観察であったろう。一方では、そのような現代生活の余裕のなさを批判し、他方では、そのような時代に信仰上の懐疑にとりつかれている神父を主人公としてパリに解き放つゾラをも批判の射程に入れる。その点では、この風刺新聞ジャーナリストもまたひとりの反=近代主義者である。

電話という道具は、人間生活への機械的なものの浸食の代名詞ともなりうる。ウェーバーによれば、フランスにおける電話網整備の相対的な遅れは、同時に相手の名前への代りに電話番号を言うという新しいシステムの導入が、「非人格化し、貶める」ものとして受け取られたためであったとも述べている<sup>39</sup>。

初期の電話が、しばしばさまざまな家庭内のトラブルを引き起こし、あるいは電話がなかったならば起きなかったと思われるような思いがけない事件を起こしたという事例は、キャロリン・マーヴィンの『古いメディアが新しかった時：19世紀末社会とテクノロジー<sup>40</sup>』などにも報告されている。すでに電話の最初期においてそれは、私的な領域を浸食する新たな危険として認識されていた。「家庭内の私的な秘めごとをさらけ出す潜在的な力という点でとりわけ恐れられていたのは、電話であった。一八七七年、ニューヨーク・タイムズ紙はロードアイランド州プロヴィデンスで行なわれた電話実験で四マイル四方にわたって電話機が敷設されたとき

38 19世紀ラルース事典は、彼の『タンタマル風ナポレオン三世の歴史』について「情け容赦ないパンフレット、笑いながら歯を見せる、しかもその歯で噛みくだく審判官の作品」と評している。Pierre Larousse, *Grand Dictionnaire Universel du XIX<sup>e</sup> siècle*, tome 15, p. 331.

39 Peter Weber, *op.cit.*, p. 98.

40 キャロリン・マーヴィン著、吉見俊哉・水越伸・伊藤昌亮訳『古いメディアが新しかった時：19世紀末社会と電気テクノロジー』新曜社、2003年

の様子を報じ、そのなかで電話の『悪辣な性質』について論じている。その記事では笑うに笑えないユーモアとともに、電話局の担当者は、牧師の雄弁な説教やら、誰かの美しい歌声やら、真夜中の猫の鳴き声やら、さらには『何百組の夫婦の秘密の会話』にいたるまで、『人びとがあえて公けに再現しようとは思わないさまざまなこと』を耳にしたと報じている<sup>41</sup>。

機械を前にした時の、反=近代主義的反応には常にある種の二面性がある。一方には原理主義的な批判、あるいはほとんど名状し得ない恐怖に根ざす拒絶反応がある。他方には、実際に生じる様々な予測不能の危険に対する恐怖と、実際に近代的な機械が生み出す時には滑稽な混乱や悲劇がある。

このような機械批判的な言説は、機械の進歩や新しい発明の出現と生活の中への侵入の度に、はてしなく繰り返されることになる。我々が問題にしている時代から、さらにはるかに下った1950年代には、電話はアメリカ型の生活モデルのフランスへの導入といった問題系と結びつくことになった。電話やテレックス、いずれはパーソナル・コンピューターの導入が、時間の節約と生活の合理化を進めることになり、それが引いては余暇を生み出すことになるという生活モデルである。このような「技術に対する偶像崇拜」をフランソワ・モーリアックは、『エクスプレス』誌上の記事で批判したという<sup>42</sup>。

電話の混線や、交換手による電話の盗み聞きについては、ブルーストも語っている。『ゲルマントの方』の中の、有名な祖母との電話のくだりで、そこでは、「私たちが、誰も私たちの言うことを聴いてはいないだろうと期待しながら、恋人にむかって打ち上げ話を囁くその瞬間に、残酷にも、私たちに向かって『聞いていますよ』と叫ぶ皮肉なフリアイたち」と、電話交換手たちのことが語られている<sup>43</sup>。ギリシャ神話の復讐の女神であるフリアイや、「たえることなく、音の壺を空けては満たし、手渡し続ける不可視のダナエの娘たち」に喩えられる電話交換手たちはまた、「電話のお嬢さんたち！」と感嘆符を付けて表現されてもいる。

電話そのものの魔術的な魅惑は、もちろん、おとぎ話の比喩を用いて語られる。電話をかけることで、私たちは、たちまちおとぎ話の登場人物と化して、魔法使いの女が、その登場人物の願いに応えるべく見せてくれる愛する者の姿を目にすることが出来るというのだ。「超自然的な明るさの中に、祖母や恋人が、本の頁を繰ったり、涙を流したり、花を摘んだりしている姿を、見る者のすぐ傍らに出現させる」という<sup>44</sup>。

「そして、私たちの呼び出し音が、私たちの耳だけがそれに向かって開かれているさまざま  
な幻影で満たされた夜の中に鳴る。軽い騒音——抽象的な音——消え去った距離の音

41 *Ibid.*, p.139.

42 Kristina Orfati, “Des modèles étrangers?”, *Histoire de la vie privée, op.cit.*, tome 4, p. 555.

43 Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu, Le Côté de Guermantes*, édition établie par Jean-Yves Tadié, 1988, Gallimard «Bibliothèque de la Pléiade», tome II, p. 432.

44 *Ibid.*, p. 431.

が鳴り、愛しい人の声が私たちへと向ってくる<sup>45</sup>。」

「消え去った距離のざわめき」は、『失われた時を求めて』のいたるところに張り巡らされた距離のダイナミズムを思わせずにはいないが、興味深いのは、音声的な装置である電話を語りながら、あくまでも視覚的なイメージリーに引きずられがちなプルーストの比喩のありかたで、夜の中に満ち満ちているさまざまな通話者はほとんど亡霊的な存在として想像されているとはいえ、「幻影 [apparitions]」すなわち出現あるいは現示というニュアンスをともなって描かれている。だからこそ、電話に出た愛する人の声を耳にする喜びを語りながら、ただちにプルーストの語り手は、「何とその声は遠いことだろう！」と述べ、「見ることの不可能性」のなかで、「外見的には最も甘美な接近」の様相を呈しながら、手を伸べあっても互いに抱擁することのできない状態の「不安」を語らずにはいられない。「これほどまで近い声の現実的な現前性——実際には、離ればなれの状態であるのに！」と述べずにはいられない<sup>46</sup>。

しかも、この挿話で語られる祖母との対話は、最初、混線によってかき乱されることで一層不安をかき立てるものとなっている。その晩、電話ボックスに着いた時に語り手が耳にするのは、誰とも知れない他人の声であり、その相手もまた、おそらくは、そこに彼に対して返事をする者が誰もいないことにはまるで気づかずに話し続けているという状態なのだ。そして、「私が、受話器を私の耳元に持って行くと、この木片は、まるでポリシネルのように話し始めた。私はそれをギニョル劇でそうするように、元の場所に戻すことで黙らせたが、それをまた私の耳のところに持ってくると、それはまたお喋り始めるのだった<sup>47</sup>。」

またしてもマリオネットの腹話術的操り人形である。ヴィリエ・ド・リラダンの人造人間の系譜はここにもつながっている。『未来のイヴ』のソワナの声が、地下室から響いてきたことを、ほとんど地下納骨堂を思わせる深みから響いてきたことを思い出そう。プルーストにおいても、電話の声は、「深きから」響き渡ることになる。しかも、受話器のこちら側にいる「私」は、勝手に喋り続けるポリシネルのおしゃべりを止めることさえできない。

ドンシエールでのこの電話のエピソードの中心的な主題は、むしろ、このように切り離された声が、直接的に対面していた時には気づくことのなかった、祖母の心の苦しみや不安をあらわにすることだ。そして何よりも、この声だけの存在としての祖母は、その亡霊的な性格（«cette voix, fantôme aussi impalpable que celui qui reviendrait peut-être me visiter quand ma grand-mère serait morte»）ゆえに、いずれ訪れるべき祖母の死を予感させずにはおかない<sup>48</sup>。

よく知られるように、この挿話は、1896年の10月に、フォンテーヌブローのホテルでの滞在中に起きた出来事に起源を有する。実際の電話での対話相手は母親のプルースト夫人であ

45 *Ibid.*, p. 432.

46 *Ibid.*

47 *Ibid.*, pp. 432-33.

48 *Ibid.*, p.434.

り、そこでブルーストが強い印象を受けたのは、母親の声の中からにじみ出てきた苦痛の表現、「ひび割れと亀裂に満ちた」(アントワヌ・ビバスコ宛の手紙) 声の感触だったのである<sup>49</sup>。ジャン・サントウイユに書き留められ、「読書の日々 [Journées de lecture<sup>50</sup>]」を経て『失われた時を求めて』の問題の箇所にも再度おさめられることになるこの電話の声に関する挿話は、最終的には、祖母/母への愛情あふれる配慮と、いくらかのユーモアをとまなう混乱の描写によって弱められてしまうが、仔細に見るならば、電話によって伝達される声の、声だけとして切り離されてあるというそのことがもたらす発見、あるいは他の仮装を伴わない声の裏切りを伝えるべきものであるのだ。いずれ、ドンシエールからパリに戻った主人公は、彼の帰宅をまだ知らされずに無防備な状態にいる祖母の姿を、まるで写真にでも撮るかのように目にすることになる。機械の目(「純粋に物質的な対物レンズ」)によって写し取られた祖母の姿は、迫りつつある死の予感を漂わせるものとなる<sup>51</sup>。

写真は、その機械的性格と非人間性によって、電話やフォノグラフ以上に死を表出する媒体となりうる。というよりも、機械の目は、対象を凍り付かせ、ある意味では殺すことによってしか、とらえることができない。ドゥルーズ的な言い方をすれば、それは静止した裁断、型取りである<sup>52</sup>。それは、生氣あるイメージの運動を写し取ることはできない。それに対して、運動をそのままに映像の中に写し取って行くのは映画であるが、ブルーストは映画を直接目にすることはなかった。電話やフォノグラフは、声を伝える装置であり、伝えられる声は、決して静止しない。それゆえ、そこには擬似的な運動が生じる。擬似的な生命と言い換えても良い。

なるほど、ブルーストにとっての電話は、単に不気味な死のメッセンジャーでばかりあったはずはない。それが母の声に秘められた苦痛や悲しみをあらわにするとすれば、その意味では、電話もまたひとつの発見を促す装置、隠された真実をあらわにする装置だとする見方もある。「存在の真実」を告げ知らせるという意味では、真実の探求の物語としての『失われた時を求めて』全体を貫く探究への意志の、電話もまた格好の隠喩的装置となりうるかもしれない<sup>53</sup>。

フランシスコ・ゴンサレス・フェルナンデスはこの点に就いて興味深い指摘を行っている。『失われた時を求めて』の中で、隠された真実をあらわにする声、特にその声の質について語り手が大きな関心を寄せる声は、もっぱら女性の声であるという。なるほど、男性が電話の向こうに登場することもないではない。しかし、それらの話し手からは、聞き手は、メッセージの中身しか受け取らない。話し手が女性である時に限って、語り手はその声の「彼方にある真

49 Jean-Yves Tadié, *Marcel Proust*, Gallimard, 1996, p. 329.

50 Marcel Proust, *Contre Sainte-Beuve*, précédé de *Pastiches et mélanges* et suivi de *Nouveaux Mélanges*, éd. de P. Clarac et A. Ferré, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1954, pp. 528-31.

51 Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, *op.cit.*, tome II, pp. 438-39.

52 Gilles Deleuze, *Cinéma I, L'Image-mouvement*, Les Editions de Minuit, 1983, p. 39.

53 Francisco González Fernández, "Les Voix de la mémoire : Proust et le téléphone" *Estudion de la Lengua y Literatura Francesas*, No 12, 1998-99 (pp. 71-85), p.74.

実を明らかにする」抑揚に耳を傾ける、というのである<sup>54</sup>。

フェルナンデスが引いているのは、『囚われの女』の中の一節で、アルベルティーンがヴェルデュラン家に行くことを止めようとする主人公がアンドレに電話をするくだりである。「私」がアンドレを呼び出そうとすると、無慈悲なる電話の女神である交換手は、冷たく「お話中です」と告げる。アンドレの回線が空くのを待つ間、「私」は、こういう電話待ちの場面こそ、十八世紀であればブーシェやフラゴナールが描いたであろう風俗の一場面となり得たろうという空想に耽る。ようやく回線がつながっても、さまざまな連想に身を任せている「私」が黙っていると、電話交換手なる女神は、いらだった声で、「ちょっと、もう空いていますよ。つながってからしばらくになりますから、切ってしまいますよ」と言うのだ。ようやくアンドレと会話することに成功した主人公は、「あなたとお話できて、とても嬉しかったわ」という電話の普及以来一般的となった美しい決まり文句を残して消えたアンドレの声に思いを馳せる。

「私こそ、そう言うべきだったろう。それも、アンドレ以上に私の方が真情をこめて言えたらう。というのも、私はそれまで彼女が他の女たちとこんなにも違った声をしているということに気づいていなかったのだから、彼女の声にとっても感じるところがあったからだ。そこで私は、他の声、特に女性たちの声を思い出してみた。ひとつひとつを、ゆっくりと、心の中で吟味しながら、注意深く、それが語ることからの思いのたけのあふれる力のせいで途切れがちな声であれ、他の言葉のささやきを思い出した。私はバルベックで知り合った若い娘たちの声を一人一人思い出し、それからジルベルトの声、祖母の声、さらにゲルマント夫人の声を思い出し、それらが、どれもそれぞれに違って、それぞれの人に特有の言語の鑄型によって作られ、どれも別の楽器を奏でていることに気づいた。そして、心の中で、古い画家たちの絵のように、三四人の奏楽の天使が奏でるだけでは、天国のコンサートは随分貧相なものになるだろうなとひとりごちずにはいらなかった。それに対して、私は、何十、何百、何千という、すべての声のハーモニーと多彩な響きに満ちた祝詞が神の方へと昇って行くのを見ていたのだ。私は、音の速度を支配する彼女に対して、私のつまらない言葉のために、それらを雷よりも百倍も速く力をふるうという大いなる恵みを垂れたもうたことに、贖罪と感謝の言葉を述べることなしには、電話を切ることができなかった。けれども、私のこの罪の許しを乞うふるまいに対して、返ってきた返事は、ただ電話を切る音だけだった<sup>55</sup>。」

ブルースト一流のユーモラスな記述は、ちょうど、先の祖母との電話のくだりと対を成すべきものでもある。

54 *Ibid.*, p. 75.

55 Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, tome III, p. 609.

フェルナンデスは、祖母との電話の場面は、まさにそれが死者の領域への扉を開くという意味で、プルーストにとっての電話はオルフェの竖琴のような役目を果たしている、と言う。その意味では、死者を蘇らせ、過去の記憶を再生するという点で、電話はコミュニケーションの道具であると同時に記憶の技術でもあると述べている<sup>56</sup>。プルースト的な世界で言えば、それは、プティット・マドレーヌを浸す紅茶のような役割を果たすというのだ。

その点で、われわれ同様、フェルナンデスもまた、電話の機能にフォノグラフ的な側面を見る。そして、いずれ偉人の姿をわれわれは絵画などで見るのではなく、その声をフォノグラフで聴くようになるだろうと予言した、ゴンクール日記の一節を引用している。ゴンクールはそこで、「死者の声そのもので語られる有名な言葉を考えてみたことがあるだろうか？しかも、改善を重ねれば、それはもはやポリシネルの鼻にかかったような声ではもはやなくなるだろうか」と述べていると言う<sup>57</sup>。またしても（これで三人目だ！）ポリシネル！

残念ながらプルーストはフォノグラフそのものに、死者の再生の可能性を見ることはなかった。それは、ある意味では当然であって、写真の展覧会や映画のようなものに過去のヴィジョンの再生を期待することはできないのは、プルースト的な芸術論の根幹をなすからだ。同じことが、電話とフォノグラフを分ける。電話は、あくまでもつかの間のコミュニケーションの装置であり、しかも、語の通常の意味でのコミュニケーションそれ自体以上に、無数の声のざわめきの中にコミュニケーションを解放する役割を持っているからだ。それに対して、グラモフォンは、芸術のみが、ひとり芸術のみが可能な過去の再生を前に、過去を、死者の魂を甦らせることに失敗する道具でなければならないだろう。

フェルナンデスは、しかし、あくまでもこの電話＝フォノグラフの記憶再生機能に注目し、最終的には、スワンという「声」のみの存在（「声でスワンだとわかった」）によって開始される『失われた時を求めて』は声を見失い、失われた声を再び見出す（そしてそれは明らかに母の声でなければならないのだが）物語として構造化されていると示唆して論を閉じる<sup>58</sup>。

フェルナンデスの議論が、はじめから声の表す「本質」に係っていたことを思えば、この結論はおそらく当然の到達点であると言える。結局のところ、声の肌理の生み出す差異は、すべてが、母の声の再生（コンプレの夕べ、スワンの登場によって妨げられた母の接吻、そしてジョルジュ・サンドの小説を読み上げる母の声）へと収斂することによって、言わば完璧に閉じた環をつくるだろう。

その議論それ自体は全く正しいのだが、それでは、身体なき声として現れたスワンは、物語の最後に再び記憶の再生の契機を与える声として出現し、それによって再び身体なき声としての自動人形的生を果てしなく生きることになるのだろうか？白鳥の歌、とフェルナンデスは、

56 Fernández, *op.cit.*, p. 79.

57 *Ibid.*, p. 80.

58 *Ibid.*, pp. 84-85.

『未来のイヴ』のエディソンを思わせるような地口を操る。たしかに、スワンの名には、白鳥が、レダの神話が、さらには記号が隠されているかもしれない。しかし、アンドレの電話での声のくだりを想起したい。そこで問題になっていたのは、あれこれの声の本質ではなかった。たしかに、「私」はさまざまな女性たちの声を思い出し、記憶の中でたどりつづけたが、それは「失われた声を求めて」なされる探究であるというよりは、むしろ電話という装置によって解放された複声の多声的な空間、同時に交換手にも対話の相手にも語りかけ、混線する声の交錯の中から、無数の異なる声が響いてくるといふ、そのような状況の歓喜を述べているととるべきではないのか。無数の身体なき声にあふれた空間、天上的な騒音にみだされた空間。そして、それらは調和しつつ、しかも差異を保ち続けると言う点で、大いなる声の専制に抵抗するだろう。

このような電話的=混線の空間とでも呼べる状況は、身体なき声の自動人形的ポリシネルの不気味さと表裏一体である。対話というようなコミュニケーションのユートピアとは根本的に異なる雑音と騒音に満ちた現代的な音響空間にこそ、ブルーストの電話はつながると考えた方がよい。

それをユートピアと考えるか、あるいは限りなく分裂する心的な危機の表象と捉えるかは読者にゆだねられる。少なくとも、ブルーストの時代には、このような多声的な声の差異を響き渡らせることを可能にするような文学空間があった。フェルナンデスが描いてみせたような、一見すると声の音声中心的ロゴス中心的構造ともとれる構造である。

それに対して、電話ももはやことさらに珍しい道具ではなくなる、両大戦間といった時代になると、電話はその神話的な神秘性も失い、しかし他方で、致命的なディスコミュニケーションの象徴とも化して行く。次節では、ジャン・コクトーの、象徴的にも『[人間の]声』と題された作品を見る。

コクトーもまた、ブルースト同様に声に対する強い執着を抱く作家であった。ブルーストの死後、1923年に刊行された『N. R. F.』誌の「ブルースト特集」において、作家の思い出を求められたコクトーは、「マルセル・ブルーストの声」という一文を寄せてこれに応えた。

「ブルーストの声は忘れがたい。

私には、彼の声を聞かずに、彼の作品を読むのは、困難だ。

大抵いつも彼の声が立ちほだかり、私は彼の言葉を彼の声を透してみるのだ。

散文は、何よりも思考の表現法である。それ以外の部分は、装飾的な文体だ。ブルーストの思想を賞讃しながらその文体を非難するのは馬鹿げている。この世界に、彼ほど書字を自らにしたがわせた者はない。この世界に、彼ほど声を自らにしたがわせた者はない。書字と声とは、適確に彼の精神を結合した<sup>59</sup>。」

その上で、コクトーは、この（『失われた時を求めて』のあらゆる人物の声の向こう側から聞こえてくる）プルーストの声は、「中心から」響く声であり、「聞いたこともないほどの遠さ [un lointain inouï]」を持っていた、と述べている。そして「腹話術師の声が胸部から出るように、彼の声は魂から立ち上って来るのだ、とひとは感じるのだった」と付け加えている。<sup>60</sup>

その遠さにおいて、プルーストの人物の声は、コクトー的な声の美学と接しつつ離れるだろう。それは、何よりも遠くにある声、さまざまな多声的な声の彼方にあつて、すべてを支配しながら、あらゆる声の前に立ちはだかる声であるからだ。

### 3 絞め殺される声

『声』は、ジャン・コクトーが1930年に発表、2月17日、コメディイ・フランセーズ座において、ベルト・ボヴィを主演に上演された戯曲作品である。のちにシモーヌ・シニョレもこれを演じ、録音を残した。後で触れるように、フランシス・プーランクによって音楽が付けられ、女声（ソプラノ）とオーケストラによる声楽作品となっており、劇的演出以外にも独唱作品としてしばしば上演されている。

登場人物は一人。ひとりの女というだけで名前はわからない。一幕。終始同じ舞台装置。以下にコクトー自身の序文を引用する。

「筆者は実験好きだ。そして、自分がやったことを見た後で、一体何をしようとしていたのかと自問するのがならわしになっているのだから、おそらくはあらかじめ、情報を与えておくほうが、ことは単純だろう。

この芝居を書くように筆者を促した動機はいくつかある。

一、詩人のなかの深い怠惰が書くことを拒絶するにもかかわらず、彼に対して書くことを促す神秘的な要因、おそらくは、電話で盗み聞かれた会話の記憶、声音の重々しい不思議と沈黙の永遠性。

二、筆者は、機械で行動すると批判される。劇作品をあまりにも機械化し、過度に演出に頼りすぎると。したがって、ここでは単純の極みまで行くことが重要だった。一幕もの、舞台は一つの部屋で、登場人物は一人、恋愛ものであること、そしてありきたりな現代的な部屋という舞台装置、電話<sup>61</sup>。」（「序文」）

単純と言えば、これ以上はないほどに単純な構成だ。一人の登場人物に、単一の舞台、一幕の恋愛劇。モノローグ劇。単純さの原因をコクトーは、外的な要因（他者の批判）に帰してい

59 Jean Cocteau, "La voix de Marcel Proust", in *Hommage à Marcel Proust*, Les Cahiers Marcel Proust (ancienne série), No. 1, N.R.F. Gallimard, 1927, p. 77.

60 *Ibid.*

61 Jean Cocteau, *La Voix humaine*, Stock, (1930) 1994, pp.7-8.

る。機械仕掛け、大道具や舞台装置は、『エッフェル塔の花嫁花婿』あるいはそれ以前の『パレード』や『屋根の上の雄牛』でも際立っており、劇的作品とは、「視覚的な驚き」と分ち難く結びついていた<sup>62</sup>。実際に、『エッフェル塔の花嫁花婿』の幕が上がるや登場するのは、二人(?)のフォノ(グラフ)であり、というよりも、台詞を口にするのは、この二人の登場人物あるいは機械だけである。人物たちの台詞は、すべてがこれらの機械の口を通して告げられる。声だけの機械としてのフォノグラフと、パントマイム状態で踊り芝居する役者そして踊り手たちがこの舞台を構成している。人間が機械の口を借りてしか語らない芝居、それが『エッフェル塔の花嫁花婿』であった。

機械という言葉は、もちろん、演劇用語では二重三重の意味を持つ。機械仕掛け (*la machinerie*) といえ、大道具から仕掛けのことを言うのであって、道具方は機械操作手とでも訳せるか《*le machiniste*》と呼ばれるだろう。もちろん、すべての込みあった筋書きに唐突に大団円をもたらす神 (*deus ex machina*) もあろう。それを敢えて字義通りに機械でできた登場人物として出現させるところに、コクトーの創意があると言え言える。比喩的形象を字義通りに受け取ることで現実にはありえない事態を引き起こしてしまうというのは、比喩の内実(意味内容)の伝達をいたずらに遅延するだけでなく、混乱を生じさせるばかりであろう。『エッフェル塔の花嫁花婿』の写真機は、「さあ、小鳥が飛び出しますよ!」という言葉とともに、トゥルーヴィルの浴女に扮した水着姿の踊り子を飛び出させる<sup>63</sup>。写真を撮るためにカメラを構えながら「チーズ」と言い「茄子」と言ったからといってチーズや茄子が出てくる訳ではないのだが、同じことが、フランスの写真屋の「小鳥が飛び出しますよ!」についても言えるので、「小鳥が飛び出す」と言ったから本当に小鳥が飛び出すだけでもすでに混乱を生じる(比喩的な記号表現が実体化してしまう)のに、それどころか、小鳥ならぬダチョウが飛び出したり(しかもダチョウもまた常套句の好材料であることを思えばなおさら)トゥルーヴィルの水着姿の海水浴客が飛び出したりしたのでは、つまりは、劇的なプロットをぬかりなく伝える筈の道具が、自らしゃしゃり出て来てちゃんと主役の位置に坐ってしまう、もっと平たい言い方をすれば記号表現が記号内容そっちのけで自己増殖しつづけることによって意味作用が無限に攪乱されて行くのである。それによってもたらされるのは、もちろんびっくり箱的な驚きであり、そのような「視覚的な驚き」の効果は、機械仕掛けとともに、『パレード』の市の見せ物的な世界を作り出している。「私を驚かせてごらん」と言ったディアギレフの言葉に答えるべく、サティやピカソといった、ひとを驚かせることでは人後に落ちない面々を集めたコクトーにふさわしい世界でもある。

しかし、演劇的世界を支配する神は、ひとり機械仕掛けの神だけではない。同じ『エッフェ

62 Jean Cocteau, postface à *Antigone*, in *Antigone suivi de Les mariés de la Tour Eiffel*, Gallimard, «FOLIO», 1948, pp. 59-60.

63 *Ibid.*, pp. 85-86.

『パリュード』の序文を引用しつつ、すべての「詩的な秩序に属する作品」は、「神の持ち分」とでも呼ぶべきものを持っていると述べる。それは、詩人自身にも予測がつかない。だから、それは作者である詩人にとっても「驚き」の種である。絵画におけるヴォリュームと同じで、そこには何か「隠された意味」があるのだが、その解釈は見る人それぞれにゆだねられるし、第一「真の象徴は決して予見不可能」であるのだ。それは、「計算外の奇妙な、非現実的なものがほんのわずかでも入って来るなら、自ずから湧き出て来る」ものである。しかし、「妖精の出そうな場所には、妖精は現われない。そこでは、妖精たちは不可視のままにさまよっている」とコクトーは言う。そのような妖精たちを見ることが出来るのは、「単純な精神の持ち主」であるような人々である。「私は、照明主任技師こそが、さまざまな思いつき [réflexions] で、しばしば私の劇に光を当ててくれた、と言うことが出来るだろう」とコクトーは言う<sup>64</sup>。

照明技師が私の劇に光を当てた、すぐれた思いつきという表現は、半分は洒落で、「思いつき」と訳したréflexionsは、熟慮黙考反省することでもあるが、光の反射をも意味するのはフランス語でも同じで、「光を当てた」はもちろん物理的に「照らした」という意味でもある。

「神の持ち分」に戻ろう。『エッフェル塔の花嫁花婿』においては、この「神の持ち分」、「神の役割」は大きい、とコクトーは言う。それを担うのは二台の「人間フォノグラフ」である。それは、「古代の合唱隊のように、代父と代母 [comme le compère et la commère 「客引き」と「レビューの世話役」とも読める] のように、舞台の上手と下手にいて、一切の文学性なしに、中央で繰り広げられ、踊られ、マイムされる滑稽な場面を語る」というのだ<sup>65</sup>。

機械によって告げられる神的なるものの声。電話やフォノグラフの神話的な機能と言え言えるが、しかし、これらの神はまた見世物小屋の客引きであり、さくらでもある。身をやつし、地上に降りた神々は、音声機械の中に隠れるとでも言うかのように。そこで語られる物語は、ギリシャ悲劇の崇高からは遠いように見える。しかし、他方で、コクトーは、ギリシャ悲劇のおなじみの人物たち（アンティゴース、オイディプス）を主人公に、彼らの物語を再話するだろう。そこでは、フォノグラフならぬコロスが、神の持ち分を演じることになる。

しかし、そのような「機械」的なるものへの愛好を、コクトー自身は、手放しで肯定していた訳ではない。

「コクトーは、キュビズム（特にドラランを通して）とその主題の単純さを想起し（『聖家族は必ずしも聖家族である必要はない。それはまたパイプ一本、一リットル瓶、ランプひとつと揃い、タバコ一箱でもある』[『雄鶏とアルルカン』]), アメリカから到来したネオ＝モダニズムと機械の詩情に一定の共感を示す。『機械、摩天楼、商船、黒人たちは、た

64 *Ibid.*, p. 63.

65 *Ibid.*, p. 64.

しかに新しい方向性、素晴らしい方向性の起源となった。彼らは、カプアの町を、象の一隊を引き連れて闊歩した。』ただし、注意しよう。『ジャズ・バンドの響きが私たちの目を覚まさせるのは、私たち自身が私たちの響きを作るため』なのであって、特にしてはいけないのは、アメリカの猿真似をすることだ。『われらが女優たちは金髪のカツラをかぶり、犬にキスをする。それは実に良くない。猿真似はよそう。われわれの領域でできる同じぐらいすぐれたことを探そう。』[『白紙』『さらばニューヨーク!』と散文(『雄鶏』誌で)とジョルジュ・オーリックの音楽[ジョルジュ・オーリックは『雄鶏』誌第一号に“パリよ、今日は”を書く]で叫ぶ。『私は機械崇拝者ではない。「近代的」という言葉は私にはいつも素朴に聞こえた。まるで電話機を前に平伏している黒人を思わせる。』とコクトーは述べている。[『白紙』<sup>66</sup>]

プーランクやオーリックとともに、ジャズを発見しながら、同時にフランス的なものを探し求めるためには、単にアメリカの機械文明を模倣するだけではいけない、というコクトーが、無知な「野蛮人」を平伏させる機械の象徴として選んだのが電話であるのは、偶然ではないだろう。実際には、「野蛮人」の住むような電話線の通らない土地に電話を運ぶことは困難であろうから、ドキュメンタリー映画の始祖ロバート・フラハティは、フォノグラフを見せることで、イヌイットの偉大な狩人ナヌークを驚かしてみせる。それもまた1922年のことだ。ナヌークは、フォノグラフの箱のなかをのぞき込み、その中にいるべき「小人」を探す。コクトーの劇では、フォノグラフの舞台衣裳をまとった人物たちが、コロスの役割を果たす。機械のもたらす魔術的な力に対する驚異の念は、『エッフェル塔の花嫁花婿』は当たりませんわ、と訳知り顔に批判してみせる「エリート」観客ではなく、ナヌークのような「単純な精神」によって共有されるべきものだ。実際にコクトーの舞台を見に足を運ぶのは、エリートであり、社交界の花形たちであるとしても。

アメリカ的な機械文明を音楽の面で代表するのがジャズであった。のちにコクトーとの共同作業によって声楽曲版の『声』を作り上げるプーランクは、すでに1918年に『トリアドール』によって、コクトーのテキストをもとにした楽曲を製作する経験をしている。「スペイン=イタリア的シャンソン」と副題を付けられた『トリアドール』はコクトーが1917年に書いたテキストをもとにした「音楽的冗談 [plaisanterie musicale]」であった、とプーランクは書いている<sup>67</sup>。

「コクトーのテキストは1917年に書かれたものだ。ピエール・ベルタンは、この時期、

66 André Fermigier “Jean Cocteau et Paris 1920”, in *Annales, Economies, Sciences, Civilisations*, 1967, volume 22, No. 3, pp. 504-505.

67 Francis Poulenc, *Journal de mes mélodies*, Grasset, 1964, p. 48.

何人かの音楽家、作家そして画家のグループ（サティ、オーリック、オネゲル、私自身、コクトー、マックス・ジャコブ、サンドラール、ラ・フレネー、キスリング、ドラン、フォーコネ）の助けを得て、ヴィュー・コロンビエ座で、ボビノ・シュペリユール風のスタイルによるスペクタクル=コンサート・ソワレを開催したいと望んでいた<sup>68</sup>。」

エリック・サティを中心に、いわゆる「六人組」のメンバーのうち三人が参加しただけでなく、モンパルナスの芸術集団の中でも特にコクトーに近かった詩人のジャコブや、アポリネールと並んである意味では「新精神」の一翼を担っていたブレース・サンドラールが加わり、さらにどちらかという少々気のいいキスリングなども加えた『トリアドール』は、白状すべきだろうが、このごった煮のスタイルに属していた」とプーランクは回想する。さらに彼は、『トリアドール』について「ミュージック・ホールのシャンソンのカリカチュアであって、一握りのエリートにしか向けられていない作品」だった、と述べている<sup>69</sup>。

一方の『エッフェル塔の花嫁花婿』は、どれほど多くのひとを魅了したことだろう。のちに、廉価版の叢書として知られた「ウーヴル・リーブル」版でこれを読んだジャン・アヌイは、「私は意気揚々としてこの読書を終えた。まるで、雲間から太陽が出たようだった」とその喜びを語っている。「彼は私に贅沢で軽薄な贈り物をしてくれたのだ。彼は私に演劇の詩を贈ってくれたのだ」とも<sup>70</sup>。

『エッフェル塔の花嫁花婿』から九年が経過した時点で、コクトーが企てたのは、逆にひとりの女性の身体を、その声とともに舞台上にさらす、しかも、フォノグラフィ的な無感動無感覚とは対極をなす、身も世もなくおのれの感情に身を委ねる女性の独白劇である。1930年は、『阿片』の年でもある。レイモン・ラディゲの死以来、阿片の中に逃避し続けていたコクトーが、『恐るべき子供たち』と『阿片』によって、長い喪の仕事にひとつの区切りを付けようとした時期でもある。ココ・シャネルの紹介で阿片中毒の治療を受けていた治療院からコクトーが退院したのが1929年の春である。

「治療院からの退院の約一週間後、彼はコメディイ・フランセーズ座で、一幕ものの戯曲の朗読をおこなうことになった。正確には、1915年以来エミール・ファーブルを理事長とするメゾン・ド・モリエールの理事会の記録によれば、1929年3月29日のことである。それは、ベルト・ボヴィが1930年の月に、コクトーの演出で上演することになる『声』である。

コクトーは最初それを、おそらくは治療院に入る前にリュドミラ・ピトエフに約束し

68 *Ibid.*, pp. 48-49.

69 *Ibid.*, p. 49.

70 Jean Anouilh, "Cadeau de Jean Cocteau", in *En Marge du théâtre*, La Table Ronde, 2000, p. 101.

ていたらしい。[中略]

執筆はいつ頃からか？ミイのアーカイヴに残るメモには、シャブリで執筆と書かれている。おそらくは、1927年のクリスマスの滞在期間中であろう。少なくとも、彼が他の時期にもそこに滞在したのでなければ。

マックス・ジャコブ宛の書簡によれば（日付はないが、遅くとも1928年頃のものである。なぜなら、マックスはこの年にサン＝ブノワを離れるからだ）コクトーは彼に、『声』のアイデアを与えてくれたと思われる場面を語っている。『私はここでリアヌとジョルジュと電話でのやりとりを目撃した。彼らは失神し、電話を切り、またかけ直した。「もしもし、もしもし」と言いながらジョルジュは生命を失った受話器の前で震えていたのさ。』

それに、彼〔コクトー〕は、すでに『ポトマック』の中で、電話の劇的な残酷さをメモしていた。

切られた

電話は

情事を壊れたままに放置する。

作品は、満場一致で承認された。コクトーは、クリスチャン・ベラルーに舞台装置を設計するように依頼した。ベラルーは、テアトル・フランセの舞台をごく省略したものにする。白い小さな箱、寝乱れたままのベッド、ランプがひとつ。<sup>71</sup>]

電話という道具についてコクトーはジャン＝マリ・マニャン宛の手紙の中で「悪魔的な装置 [Appareil diabolique]」と述べたという<sup>72</sup>。電話の残酷性。一方的に切断されうる対話の残酷さは、それが、機械的な操作によって、対話の相手の存在そのものとして声を切断したり再出現させたりすることができる場所にあるだろう。電話が切られれば、たちまち情事は破壊される。

しかしながら『声』の執筆動機は、ただ、知り合いのジョルジュとリアヌのギカ大公夫妻の愛情のもつれ、行き違いについての観察だけではない。そこには、当時、ラディゲに代わってコクトーの関心の中心にあったジャン・デボルドとの関係がある。

「私たちの本当の出会いは1926年のクリスマスのことである。彼はバリの海軍省で兵役についていた。彼は、だから、世界一魅力的な制服を着ていたが、この魅力の用い方については言わぬが花だろう。なぜなら、我らが水兵は、一度も海に出たことはなかったからだ。[中略]」<sup>73</sup>

71 Jean-Jacques Kihm et Elizabeth Sprigge, Henri C. Béhat, *Jean Cocteau : L'homme et les miroirs*, LaTable Ronde, 1968, pp. 198-199.

72 Lettre à Jean-Marie Magnan, citée dans Hugues de La Touche, *L'esprit de Jean Cocteau*, Lumière du Sud, 2005, p.106.

73 Jean Cocteau, "Préface" à *J'adore* de Jacques Desbordes, Grasset, 1928, p. 7.

コクトーはのちに「眠れる男の25のデッサン」としてデボルドの肖像デッサンを発表するが、そこでもデボルドは海兵の制服をまとっている。いずれにせよ、こうして出会ったデボルドは彼自身、作家志望の若者であった。

「彼は草稿を、まとまりのない叫びをタイプで打った原稿の一束を私のところに持って来た。突然、彼は眠り込み、別世界について語り、飛行し、水の上を歩いていた<sup>74</sup>。」

こうして持ち込まれた原稿を一読したコクトーは、そこに、レイモン・ラディゲ以来の新たな才能の現出を見る。1927年9月、モーリス・マルタン・デュガールは、コクトーのデボルド讃を書き留めている。

「9月30日：偶然サン＝ディディエのガレージでジャン・コクトーに会う。彼はシトロエンのカプリオレを注文しているが、その日のうちに納車されないというので嘆いている。

—— [ジャック・] マリタンが、クローデルから手紙を受け取って、と彼は私に言う、その中でクローデルが僕のことをとても良く言ってくれているらしいのだが、ただ、それに加えて“彼が『黄金の葦』誌 [マリタンが責任編集している叢書] をあのシュルレアリストの馬鹿どもの侵略のままに任しているのは残念なことだ”と言っているというんだ。僕のことを何も知らないね！シュルレアリストたちだって！あいつらは、僕を殺したがっている、僕を忌み嫌っているんだ。クローデルは今の文学について何も知らないからな。僕は最近、若い男を発見したんだが、レイモン [・ラディゲ] のような才能はないのは確かなんだけど、しかし、天分に恵まれているんだ。この冬には、みんなそれがわかるだろう<sup>75</sup>。」

こうしてコクトーの肝いりで刊行されたのが、詩的エッセー集『熱愛 [J'adore]』であり、そこには、コクトーの序文を別にしても「ジャン・コクトー」「『オルフェ』の楽屋」「『アンティゴヌ』の楽屋」など、コクトーの影が色濃く落ちたエッセーが並ぶ。ジャン・デボルドはそこで、衞いもためらいの影も感じさせない口調で「『詐欺師トマ』と『大股びらき』この二冊の書物が、僕の孤独な田舎暮らしを変容させていた。詩に触れられたこの新しい人生を僕は愛しはじめていた」と述べる<sup>76</sup>。「詩が触れた [la poésie touchait]」と言うとき、その「詩」

74 Ibid.

75 Maurice Martin Du Gard, *Les Mémorables* (1918-1945), Gallimard, 1957, pp. 581-82.

76 Jean Desbordes, *J'adore*, op.cit., p. 107.

はそのままコクトーという存在であろう。『熱愛』のさまざまな断片を通して読んでみると、そこに見えてくるのは、たしかにラディゲを思わせるような早熟な才能と挑発的な肉感の融合である。「僕の心は愛に満ちている。僕の四肢は精気にあふれている。そして永遠に春を生きている。僕は至るところで、庭で、僕の身体の上で、快樂を味わう。それは肉体的な祈りだ」というような、ラディゲにも通じる若者特有の自己愛的な独白が、その特質をなしている。コクトーの弟子という意味でならば、むしろ次の『悲劇役者 [Les tragédiens]』(1931)の方がふさわしいかもしれない。母親との緊張関係、父母の間の葛藤と、悲劇的な事件ののちの父の失踪、そして戦争中の父の死など、田舎のブルジョワ家庭を舞台にしたオイディプス的な心理ドラマが、ラディゲを思わせるような「奇妙な戦争」や休戦協定といった時代背景の上に展開するという点で、コクトー的世界に接している。

しかしながら、『声』との関係でいえば、重要なのはやはり『熱愛 [僕は大好きだ J'adore]』が引き起こしたスキャンダルの方で、それはさらにコクトー自身が自分の同性愛的傾向を自ら名乗ることはしなかったとはいえ詩的な文体で告白した『白書』の刊行によってさらに深刻な事態へと展開していく。

「まるで、マリタンから決定的に自由になろうとでもするかのように、コクトーは今や著者名も、出版社名もなしで豪華限定21部の『白書』を刊行する。彼は母親を苦しめなくなかったのだ、と述べている（彼女はすでに、その息子の性的傾向について十分に情報を提供するシュルレアリストたちからの匿名の罵倒の電話をいくつも受けていた）が、しかし、文壇では、誰もこの本の著者を知らぬ者はなかった。匿名の出版者は、モース・ザックスである<sup>77</sup>。」

シュルレアリストたちの悪意ある電話攻撃によって母親にまで暴露されたコクトーとデボルドとのスキャンダルが、『白書』の刊行によって鎮静するとは想像し難い。他方ではカトリックの哲学者マリタンやクロードルとも決別して、新たな道をさぐろうとするコクトーの孤立状態の中で生まれて来たのが、『恐るべき子供たち』と『声』であると考えべきであろう。

その意味では、この単純さ、ほとんどいかなる「視覚的驚き」とも無縁の『声』の簡素さは、シュルレアリストたちの仲間と誤解されがちなコクトーの「前衛」的身振り（むしろ彼のいわゆる「近代的」な外見、それは、ランボー的な意味での「絶対に近代的であらねばならない」という攻撃性とはいささか異なるものであるが）との決定的な決別の意志を告げるものであったともとれる。コクトーは、『声』の序文で、あえてそれをコメディイ・フランセーズに託した理由を、「公式的な舞台に対して若い演劇が抱く、最悪の偏見」と決別するためである

77 Jean-Jacques Kihm, *et alii.*, *op.cit.*, p. 192.

と述べている。「大通り [ブルヴァール] が映画に地位を譲り、前衛と呼ばれる舞台が、次第次第に大通りの地位を奪うようになった今、公的な枠組み、金の額縁だけが、新しさばかりを売り物にしない作品を際立たせることの出来る舞台となったのだ」と述べている。「新たな大通り劇場の観客たちはあらゆることを待ち構えている。彼らはセンセーションに飢えていて、何ひとつ敬意をもって見ようとし<sup>78</sup>。」かつて、その新奇な装いによってひとを「驚かし」、クローデルなどから見ればシュルレアリストのひとりと見なされることもあったコクトー的な新しさへの意志は、ここにおいてはもはや影を潜める。そこから、クリスチャン・ベラルールの極度に切り詰められたセットも生まれて来た。

「それは、彼の最初の舞台装置だった。コクトーは、それを犯罪の部屋と呼んだ。遠く距離を隔てて犯される犯罪。血が噴き出すわけではないが、涙と叫びには事欠かない。舞台にはただ一人の人物、ベルト・ボヴィ、そして電話。[中略] 一時間以上の間、すさんだ表情の一人の女が、助けを求め続ける。彼女の恋人が、別れの電話をかけて来たのだ<sup>79</sup>。」

ここでは、電話は距離を隔てた犯罪の道具として、セットの中に置かれる。電話に殺されようとしている女が、電話に向かって救いを求める物語。独白劇というのは、正確ではない。全編がひとりの女性の台詞によって成り立っているというのは事実だが、独白劇と名付けるにふさわしいような、観客に向かっての語りかけもなければ、自分自身への独語もない。彼女の言葉は、すべて電話の向こう側に居る者に向かって発せられる。観客はただ、彼女の声によって、対話の相手が欠落した対話に立ち会うのである。盗み聞きでもするように。

「プロンプター口の前には、一脚の低い椅子と小さなテーブル。電話、何冊かの本、残酷な光を放つランプ。

幕が上がると、殺人の部屋が見えて来る。ベッドの前、床の上に、一人の長い寝間着を着た女が横たわっている。まるで殺されたように。沈黙。女は身を起こし、別のポーズをとり、またしてもじっと動かない。ついに彼女は意を決して、立ち上がり、ベッドの上の外套を手に取り、ドアの方に歩いて行く。その間に、一度、電話の前で立ち止まる。彼女がドアに手を触れたところで電話のベルが鳴る。彼女は外套を脱ぎ捨て、飛びつく。外套が邪魔になり、彼女はそれを足で蹴る。彼女は電話の受話器をはずす。

この瞬間から、彼女は立って、坐って、後ろ向きに、正面を向いて、横向きに、長椅子の背もたれのうしろに膝まずいて、頭を背もたれの向こうに隠して、背もたれに

78 Jean Cocteau, *La voix humaine*, *op.cit.*, pp. 10-11.

79 Maurice Martin Du Gard, *op.cit.*, p. 720.

乗せて、電話線を引きずりながら部屋の中を歩き回り、話し続ける。最後に、腹ばいに、ベッドの上に倒れるまで。そのとき彼女の頭は首つり状態になり、まるで石のように彼女の手は受話器を離す<sup>80</sup>。』

電話は、物語の語りの枠組みであり（電話機が鳴り、電話に答えるところから芝居は始まり、人物が死んで、電話が落ちるところで芝居が終わる）、同時にこの死に彩られた空間の全体の枠組みでもある。それは電話線にしたがって、部屋中を移動し、どこまでも人物を追まわす。それだけではない、最後にはまるで意志あるもののように、彼女の首に巻き付き、悲嘆にくれる女を生之苦痛から解放するだろう。尤も、それを心理的な解決と思ってもらっては困る、とコクトーは念を押す。それは演劇的な解決に過ぎないのだ。

作者の指示は続く。

「登場人物は、頭先からつま先まで恋する凡庸な犠牲者である。彼女はただ一つの策略しか試みない。男が嘘を告白できるように、彼がその卑劣な思い出だけを残さないようにと助け舟を出すこと。著者はこの女優が血を流すような、血を失い、びっこをひく獣のように、血で満たされた部屋で息絶えるような印象を与えることを望む。

テキストを尊重すること。そこに現われるフランス語の誤りも、繰り返しも、文学的な表現も、平板さも、みな注意深く配分した結果なのだから<sup>81</sup>。」

「テキストを尊重すること」。奇妙な、自明の指示。それは、この作品のテキストが、まるで即興で生み出されているような、混乱した言葉の連続になっているからだ。しかし、この混乱は計算された混乱である。俳優にとっては、大きな試練であるかもしれないが、それは、計算済みのことだろう。ひたすら語りかける声と、沈黙によってしか観客には伝えられないもうひとつの声。電話の向こう側にいる相手を、抱擁しようとしても、引き止めようとしても、どんなに説得しようとしても、それは不可能である。昔なら、直接対面して口説き、嘆願し、すがりつくことも可能であったろうが、電話とともに、終わったことはもはや取り返しもなく終わったことになってしまう。

劇のはじめから、電話は混線している。外套を落として電話にとびついたあとの最初の台詞は「もしもし、もしもし、いいえ、奥さま、私たちは何人もが同じ線につながっていますわ。どうかお切りになって。」(VH., 19<sup>82</sup>)である。しかも、電話のこちら側にいる女も、向こうに

80 Jean Cocteau, *La voix humaine*, op.cit., p. 14.

81 *Ibid.*, p. 16.

82 Jean Cocteau, *La voix humaine*, op.cit., p. 19. 以下『声』の台詞への参照は、VH.の略号と頁数のみで記す。

いる男も、互いに嘘をつく。男は家からかけていると言いながら、実は外出先からかけているし、使用人には、今夜はもう家には帰らないと言っているらしい (VH., 37)。それでいて、彼女に向かっては、部屋着で (VH., 32)、袖まくりをして (VH., 34)、まもなく寝る支度をしているが、それでも仕事だと言っているらしい (VH., 32)。女の方もそうだ。ずっと電話のかかってくるのを待っていたことを隠し、真っ先に「十分前に帰って来たところ」 (VH., 21) と告げる。外出して、マルトのところで食事をしてきたと嘘をつく (VH., 21)。帰って来たばかりで、ピンクのワンピースを着て、毛皮のコートをまとっている、さらにはまだ帽子を頭にのせているとまで言う (VH., 22)。

対話の連続の中で次第に理解されるのは、男が電話をして来たひとつの目的が、彼女に送った手紙の束や、彼女のところに置いて来てしまったのではないかと思っている品物の返却であるということだ。しかし、男から運転用の手袋を見なかったかと聞かれた女は、見なかったわと答えながら、いとおしげにその手袋に頬ずりする。「椅子の上も、筆筒の中も」探したけれど見つからなかったわ、と (VH., 30)。嘘の応酬。しかし、相手に嘘を告白させたい一心で、今度は嘘を告白してしまう。「十五分ぐらい前から、私はあなたに嘘を言っていたわ」 (VH., 39)。やがて、彼女が前日の晩に、自殺をはかり、マルトに電話して、医者をつれて来てもらったことを告白する (VH., 41-42)。それとても、夢と混乱しており、どこまでが真実であるかは判然しない。

会話、この一方的な沈黙と嘆願からなる欠落した会話 (テキストではそれは、空白、句点の並ぶ空白によって表されているのだが) は、観客が期待するような何か謎めいた筋書きの進展や、あるいは悲劇的な出来事を伝えることはない。最初から最後まで、ただただ、ありきたりと言えあまりにありふれた、恋人に去られようとしている女の嘆きを伝えるだけである。

それも、きわめて不完全なカタチで。二人の会話はしばしば他の声によって遮られ、時には、人の関心を惹こうとして電話で痴話喧嘩をしているという非難を受ける (VH., 55)。彼らの会話に耳を傾けているのは、観客だけではないのだ。電話の声が、複数の聴き手に向かって開かれているという可能性は、この時代でもまだ残っていたのだろう。プルーストが電話の彼方に空想したような声のみの存在の空間。しかし、その一方で、電話は、プルーストの時代以上に明白な道具としての存在感を増している。時にはそれは、ベッドの中に持ち込むことさえ可能な道具になる (VH., 47)。切り取られた身体の一部でもあるかのように。

「……一昨日の晩？ 眠ったわ。私、電話と一緒に寝たのよ……。いいえ、いいえ。ベッドで……そう。わかってるわ。私、滑稽だね、でも、私、電話をベッドに持ち込んだの、だって、何はともあれ、私たちを結んでいるのは電話なんですもの。電話はあなたの家に行けるし、それにあなたは私に電話してくれるって約束したから。それで、考えてみて、私、変な短い夢をいっぱい見たの。その電話をかけてくれるってことが、私には本当に弾丸のように私

にぶつかってきて、私は倒れたの。あるいは、その電話をかけるってのが、首にかけるって、だれかが私の首をしめるってことになって、さもなきゃ、私はオートウイユのアパルトマンにそっくりの海の底にいて、で私は、潜水夫の空気の管であなたにつながっていて、管を切らないでってあなたにお願いしているところなの」(VH., 47-48)

「電話をかける」の意味を表す« donner un coup de téléphone »が、銃などで撃つ一撃を与える« donner un coup »の連想を呼び、さらに、「一撃 un coup」と「首 un cou」が同音であるために、首に巻き付く電話線と、首をしめる腕の連想を生み出し、さらに、息のできなくなる苦しさが海底を歩く潜水夫のイメージにつながるこのくだりは、ほとんど『エッフェル塔の花嫁花婿』の記号表現の連鎖を思わせる。ただ、ここでは、銃声も響かなければ、潜水夫が突然出現することもない。視覚的な驚きは、すべて声の中に消え去ってしまう。

とはいえ、電話と銃の連想は、あながち罪なき夢のたわむれにとどまらない。なぜなら、「あなたがもしも私を愛していなくて、それでももしもあなたが狡い方だったら、電話は、怖い武器になる」からだ。「痕跡も残さず、音も立てない武器」に (VH., 36)。実際、彼女は次第に首に、電話線をぐるぐると巻き付けて行く (VH., 61)。潜水夫にとっての空気の管と同じように、電話線だけが、今や彼女と恋人を結びつける唯一の命綱となっているからだ。しかし、彼女の恋人は、もはや彼女を愛してもいないし、そしてまた、十分に狡猾で嘘つきであるのだから、電話は今や彼女の命を奪うべき最良の武器となる。「私は、首の周りに線を巻き付けているわ。私はあなたの声を首に巻いているの」(VH., 61)「電話局が、私たちの電話を偶然に切ってしまうべきかもしれないわ」と彼女は言う (VH., 62)。そうでもしなければ、どうなるのか。彼女がどこまでも巻き付けて行く電話線によって命を落とすのか。幕切れでは、女は相変わらずコードを首に巻いたまま電話機をだきしめて、「切って [Coupe !]」、「早く切って [Coupe vite!]」と相手に懇願しながら、息を引き取る (VH., 63)。

電話機を、殺人の道具とするというハリウッド映画でもおなじみの道具立て（ヒッチコックの『ダイヤルMを回せ』やアナトール・リトヴァクの『私は殺される』を想起しよう）のひとつの淵源をここに見ることも出来るが、むしろスリラー映画という夢的構造物の中に取り込まれて行く電話の不気味な恐怖を、一層露骨な欲望のドラマの中にあらわに描き出したのがコクトーである方の方が良いだろう。『声』のスキャンダラスな性格はそこに由来すると考えるべきだ。

コメディエール・フランセーズの理事会をすすり泣かせた [«Le Comité sanglotait»] とモーリス・マルタン・デュ・ガールが伝えるコクトー自身による朗読ののち、10月に当初予定されていた（これも同じマルタン・デュ・ガールによれば）『声』の初演は翌年の2月に行われることに

なった<sup>83</sup>。

初演に先立つ総リハーサルのために、コクトーは、二千人にのぼる招待状を友人たちのために用意したとされる。事件はその総リハーサルの時に起きた。

「ボヴィは、髪の毛を振り乱して、まるでコクトーその人のように額の上に突っ立てて、時折、コクトー自身かと思われるイントネーションだった——コクトーが自分で口移しで教えたのではないかとさえ疑われた！彼にとっては、何という苦しみだったろう！彼には！彼女はもはやいっばいっばいだった。『わいせつだ！』誰かがバルコン席から叫んだ。ボヴィには聞こえなかった。数分後、同じところから声がかかった。『たくさんだ！たくさんだ！わいせつだ！あんたはデボルドに電話してるのか？』一階の前方席の方が波だつ。観客たちが振り返って、上で騒ぎを起こしている者を探す。シュルレアリストか？アンドレ・ブルトンだろうか？『ブルトンだ！』と誰かが言った。いや、それはブルトンではない。声はもっと柔らかで、ブルトンの憎らしい声ではない。私の目に入ったのは、灰色の上着を着て、帽子を頭にのせて、そこに立っているポール・エリュアールの姿だった<sup>84</sup>。」

会場は騒然となり、コクトーは静かにするように叫び、エリュアールと一緒にそこに来ていたロシアの映画作家エイゼンシュテインは、紙つぶてを受けた。一方、コクトーの仲間が、エリュアールの帽子をたたき落とし、別の男が彼の首筋をタバコで焦がした。彼らはさらに喧嘩の態勢だったが、コクトーが割って入って、次第に騒ぎは収まる。再び照明が戻り、喝采を受けながら、ボヴィは劇を最後まで演じきるだろう。マルタン・デュ・ガールは、「何にせよ、美しいドラマ、それも愛のドラマだ」と締めくくっている<sup>85</sup>。

『パレード』の引き起こした大ブーイングに比べれば、この騒ぎは何ほどでもないし、結局エリュアールとコクトーが、その後も友達付き合いをする妨げになることもない。第一、騒ぎの標的はコクトーとデボルドの個人的な関係であって、『パレード』の時のように作品そのものを問題にすることはなかったからだ<sup>86</sup>。

しかし、エリュアールの反応はむしろある種の正当性を持っていたとも言える。たしかに、表面的な猥雑さや奇異な表現（それこそシュルレアリストたちにとっては十八番であったような）とは別の次元において、自分自身の性的なアヴァンチュールの細部を、そのまま舞台上に裸体でさらけ出すようなコクトーのこの劇作品は、一見そう見える以上に猥雑であり、不気味な生々しさを漂わせる。ミュージック・ホールや大通りの劇場の前衛劇の猥雑さとは異質の、

83 Maurice Martin Du Gard, «Visite de Jean Cocteau», *op.cit.*, p. 656.

84 Maurice Martin Du Gard, *op.cit.*, p. 720.

85 *Ibid.*, p. 721.

86 Jean-Jacques Kihm, *et alii.*, *op.cit.*, p. 203.

ブルジョワ家庭の内部に直接入り込み、男と女の嘘まみれの会話を盗み聞くような、『恐るべき子供たち』の子供たちが傷として心にかかえるような秘密を盗み聴くという意味での猥雑さである。ジャン・デボルドは『悲劇役者』において悲劇について語り、「燃え上がることを知らない魂にとって、悲劇は滑稽だ。しかし、悲劇のひとつもない、喪の、破滅の存在しない家庭など、存在するだろうか？」と問いかける。「そして子供時代は、その上に接合されるのだ」とも<sup>87</sup>。

その意味では、『声』は、たしかに、ひとつの悲劇を生み出すことに成功したし、何よりもそのいかにも陳腐な物語の単純さ故に、いかにも表層的な筋立てと技法ゆえに、両大戦間にふさわしい悲劇の様相を呈したとも言える。

最後に、『声』の音楽版にも触れておく必要があるだろう。

ソプラノとオーケストラのための『声』（音楽版、これはしばしば「人間の声」の題で演奏される）は、フランシス・プーランクの音楽(1958年の二月から六月の間に作曲)、コクトーの演出と舞台装置、ジョルジュ・プレートルの指揮により、1959年二月六日にパリのオペラ＝コミック座で初演された。主演はドニーズ・デュヴァルがつとめた<sup>88</sup>。初演は成功を収めた。コクトーの表現によれば、「奇跡は、ドビュッシーが、まるで愛の行為の最中に雄を食べるカマキリのように、メーテルリンクを食べてしまったとすると、プーランクは、私を食い尽くすどころか、私の筋立てを超越し、それを中国あるいはギリシャの儀礼にも似たものへと高めたことだ。ただ、舞台上では、アントワヌ [・ヴィテ] のリアリズムがそれを殺してしまったのだが<sup>89</sup>。」

コクトーとプーランクの関係については、多言を要しない。早く1916年前後からプーランクとコクトーの周辺はサティを中心にある種の芸術運動体をなしていた。プーランクもその一人とされる「六人組」は、彼に言わせれば、共通の音楽美学的理念があった訳ではなく、「スローガンに困ったある批評家」（コクトーのこと）が彼のもとに集まった若い作曲家をそう命名したにすぎない。サティを中心に、というのも必ずしも正確ではない。プーランクは、「私たちの音楽は、互いにまるで似ていなかった」と断言している。「私たちの間では、好き嫌いが逆転していた。たとえばオネゲルは、一度たりともサティの音楽を好きになったことはなかったし、彼が大好きだったシュミットについて、ミヨーと私は当時怖気をふるっていた。コクトーは、ある人々がそう言いたがるように、理論家だったわけではなく、私たちの友人であり、よき代弁者だったのだ<sup>90</sup>。」

こうして、1921年にはコクトーの詩に曲をつけたプーランクの歌曲集『コカルド [リボン飾

87 Jean Desbordes, *Les Tragédiens*, Grasset, 1931, p. 7.

88 Marc Honegger et Paul Prevost, *Dictionnaire des Œuvres de l'Art vocal.*, Bordas, 1992, tome 3, p. 2204.

89 Jean Cocteau, *Le Passé défini, tome VI, 1958-59, op.cit.*, p. 456.

90 このくだりは、以下による。Francis Steegmuller, *Jean Cocteau*, Buchet / Chastel, (1973), 2003, pp. 176-77.

り]]が発表される。1921年は、『雄鷄』<sup>ル・コック</sup> 刊行の年である。ピカソやヴァランティエヌ・ユゴー、マリ・ローランサンといった画家や、ミヨー、プーランクといった作曲家との夕食会から出発したこの小冊子の第一号には、ラディゲが「フランス人に知性的であると要求する」大革命以来の伝統に抗議の声をあげる文章が掲載され、さらに、ストラヴィンスキーに対する批判的な立場を明確にすべく、「アルノルト・シェーンベルク、六人の音楽家は、汝に敬意を表する！」という宣言が載せられた<sup>91</sup>。コクトーとラディゲの出会いをいわば記念するこの雑誌はまた、ラディゲとプーランクの出会いの場でもあった。1920年12月9日の、『雄鷄』最終号記念のソワレには、トリスタン・ツァラや、いずれ激しくコクトーのグループを批判するブルトンさえもが招かれたが、その席上で、ジョルジュ・オーリックとプーランク、それにコクトーの三人を加えたジャズ・トリオが、「私の男 [Mon homme]」「さらばニューヨーク [Adieu New York]」と、ダリウス・ミヨーの『屋根の上の牡牛』からのナンバーを演奏したという<sup>92</sup>。

このように見て行くなれば、コクトーとプーランクのコラボレーションは、ごく自然なことのようにも見えるが、先に挙げた『コカルド』は例外であって、これと他にもう一集「破棄された歌曲集を例外として、この作曲家 [プーランク] は、完全な成熟の年齢に達するまでコクトーの作品に挑戦しなかった」と音楽学者マルク・オネゲルの『音楽事典』は『声』の項目で指摘している<sup>93</sup>。若年の交流（六人組の結成にあたってコクトーが果たした役割を考えるなら、単なる詩人と作曲家の交流という程度のものに留まらないだろうと想像される関係）は、ただちにふたりの芸術家の共同作業を生み出すきっかけとはならなかったのかもしれない。もうひとつの例外が、ラディゲを介しての共同制作である。

1921年、プーランク、コクトーとラディゲは、マラルメのパロディー「理解されない憲兵」を上演した。また、プーランクが1934年に書いたピアノ作品「バディナージュ」はラディゲの詩の一節を銘に引用している<sup>94</sup>。しかし、ラディゲ、コクトー、プーランクというコラボレーションは、ラディゲの早すぎる死（1923）によって途絶してしまう。

一方、『声』の初演の年、1930年はまたコクトーにとって、新たな芸術活動の領域への進出の年でもある。ジャン・デボルドも俳優として参加することになる映画『詩人の血』の製作である。音楽を担当したのは、こののちコクトーの長編映画すべての音楽を担当することになるジョルジュ・オーリックである。

「あの頃は、正直に言って、ジャン・コクトーは映画の仕事については何も知らなかったね。彼はカメラがいかなるものかも見たことがなかったし、どうやって映画をモニタージュしたら良いかも知らなかった。そして、私はといえば、映画の楽譜の中に、ど

91 Francis Steegmuller, *op.cit.*, pp. 183-84.

92 *Ibid.*, p.194.

93 Marc Honegger et Paul Prevost, *Ibid.*

94 *Musique française du XX<sup>e</sup> siècle pour piano*, Editions Salabert, volume 1, s.d., p.72.

うすればオーケストラの録音を楽にやっつけてのけさせるか、あるいは逆に邪魔することができるかといったことさえ、まるで何も思いつかなかったんだ<sup>95</sup>。」

オーリックは、コクトーが、すでに『詩人の血』の製作段階から、彼の音楽に対して全幅の信頼を寄せたと述べている。映画という新しい映像と声と音楽の融合する領域に挑戦するにあたり、六人組の作曲家の中でコクトーが白羽の矢を立てたのは、プーランクではなくオーリックだった。その点について考えるならば、また新たな論点が生じるだろうが、ここでは措く。それよりもむしろプーランクの独唱オペラに至る道筋を考える。

モノログ劇という『声』の実験は、シャンソン歌手のエディット・ピアフのためのモノログ劇（ただし、電話によるモノログではなく、舞台上ずっと相手の言葉を黙殺し続ける男優相手のモノログ）『冷淡な美男子 *Le Bel Indifférent*』（1937）に引き継がれる。高橋洋一はこの劇について「劇作のタイプとしては、かつて女優ベルト・ボヴィが演じた実験的な一幕のモノログ劇『声』（1930）に、〈女優のための独唱曲〉という性格づけをしたのと似ている。〈歌手が話す劇〉『冷淡な美男子』が、『声』の変奏曲的作品とされるゆえんである」と述べている<sup>96</sup>。

『冷淡な美男子』は、その後も多くの人を魅了し、1957年には、ジャック・ドゥミによって映画化されている。赤い壁紙と黒い衣装のコントラストが美しい（ひとつの部屋、そして電話という小道具もまた『声』と共通する）この短篇映画を、しかし、コクトー自身は、あまり気に入らなかったと見えて、ロッセリーニがマニャーニを主演に据えて『声』の映画化作品である『愛』を撮影したのと同じフォレストスタジオで、映画『冷淡な美男子』を「何とか救おうと試みた」と記している<sup>97</sup>。同じ年には、オペラ座のフォワイエで、同作のパレエ版が演じられ<sup>98</sup>、さらに翌1958年の3月には、ロンドンのテレビで大成功を博したと、コクトーはクロード・ベッシーの言葉を書き留めている<sup>99</sup>。

これら一連のコクトーの前衛的な試みを、映画や舞踊、さらにはオペラへと展開しようとする動きの延長線上に現われるのがプーランクによる『声』のオペラ化である。1958年、プーランクはすでに『カルメル会修道女の対話』で彼の作品を歌った歌手のドニーズ・デュヴァルのために、コクトーのテキストを40分の独唱作品として書き上げる。

『人間の声』が完成した。コクトーは大喜びしているし、女たちは泣いている。この悪

95 Georges Auric, Témoignages, enregistrés au magnétophone en 1976-77, *Cahiers Jean Cocteau* 5, «Jean Cocteau et son théâtre», Gallimard, 1975, p. 68.

96 高橋洋一『ジャン・コクトー』平凡社、平凡社ライブラリー、2003、p. 150.

97 Jean Cocteau, *Le Passé défini, tome V, 1957*, Gallimard, 2006, p. 754.

98 Jean Cocteau, *Ibid.*, p. 745.

99 Jean Cocteau, *Le Passé défini, tome VI, 1958-1959*, Gallimard, 2011, p. 79.

夢から解放されるべく、私はさっさとオーケストラ編曲をしよう。というのも、この作品は、私が、本物のトランス状態で書いた作品だからだ。『カルメル会修道女の対話』のあとで、もう私は残忍なジャンルはたくさんだ<sup>100</sup>。」

コクトー自身は、コメディイ・フランセーズでジャック・シャロン演出、ルイズ・コント主演で上演されていた『人間の声』について「嫌悪で泣き出してしまいそうだ」とまで怒っているのに対して、プーランクの作品には積極的に参加し、リハーサルでは、ドニーズ・デュヴァルに対して演技指導までおこなっていたという<sup>101</sup>。声楽曲『人間の声』は、『冷淡な美男子』の成功と失敗した映画化を経て、再びかつての盟友との協力関係のもとに、40分を越える独唱作品という新たな実験的作品としてよみがえったのである。

冒頭、急迫し不安をかき立てるような弦楽の短い響きののち、シロフォンが電話のベル音を模倣し、「もしもし、もしもし」という歌声から始まるこの曲は、はじめのうち、女主人公の声と音楽が応答するような形式で進むが、やがて主人公の心情吐露に寄り添うようにメロディアスな高まりを見せることになる。それは一見するとオペラの登場人物が心に秘めた思いを切々と歌う独唱曲の拡大されたもののようにも、あるいは日本の能楽、特に夢幻能における独白のようにも見える。だが、演劇版の『声』以上に、この声楽版の『人間の声』は、その感情が激しければ激しいほど、観客ではない別の聴き手（姿も見せず声も発することのない男）を意識させる、言い換えれば、観客とは別の存在へと差し向けられる声となる。主人公が哀訴すれば哀訴するほど、彼女の存在は遠ざかる。それは、すでに自らの死を意識しつつ『オルフェの遺言』を製作しはじめていたコクトーにふさわしく、遠い過去に葬り去られてしまった恋人たちへの悼みの声とならざるを得なかったろう。

電話を作品の重要な登場人物のように中心化し、鳴り響き、沈黙し、裏切り、じらし、部屋中に這い回り、やがては女主人公の身体に巻き付き、首を締めて彼女を死に至らしめる、命なき登場人物としたという点で、『人間の声』は、電話と文学作品を考える上で、今もって重要な作品であり続けている。たしかに、『エッフェル塔の花嫁花婿』においても声の機械である具等もフォンは重要な役割を果たした。さらにはダチョウを追いかけていた狩人が、誤って撃ち落としてしまう青い電報もまた忘れるべきではないだろう。しかも、電報は「もう死んでいるので」読むことが出来る、という設定は、なかなか示唆的である。『声』では、まるで生き物のように存在感をたたえた電話機が、ついには恋する女の共犯者として彼女を絞め殺し、その声を消し去る。プーランクが、それを「残忍な」と形容したのも、無理はない。『人間の声』

100 Francis Poulenc, *Moi et Mes Amis*, entretiens avec Stéphane Audel, tenus pour la radio Suisse-Romande, La Palatine, 1963, p. 14.

101 Jean-Jacques Kihm, *et alii.*, *op.cit.*, pp. 371-72.

は舞台上で絞め殺される声を主人公とする声楽曲だからだ。かつては、コクトーとともにデボルドとの友情を分かったこともあるプーランクが、あらためてコクトーとともに作り上げようとしたこの作品は、だからこそ、ヒステリー的な「トランス」の状態で、書き上げられなければなかった。

## おわりに

『恐るべき子供たち』『声』（演劇版）そして『詩人の血』というコクトーのこの時期の軌跡は、文学、演劇、バレエから映画へと進んでいくコクトーのいわば「前衛」時代の終わりを告げると言える。『詩人の血』は、かつては、しばしば、シュルレアリスムとの関係で語られたが、今日それをたとえばブニュエルの『アンダルシアの犬』と比較してみればシュルレアリスム的な前衛性とは何のかかわりもない作品であることは一目瞭然である。そのことは、だからといって映画作家としてのコクトーの価値を貶めるものではない。重要なのは、コクトーの映画作家としての出発が、映画における音声の獲得と軌を一にすることだろう。フィルムの上に刻まれたジャン・デボルドの身体と、ジャン・コクトーの声。声なき身体と身体なき声のつかの間の融合。

一方、電話という神話的な道具は、かつて頻繁に起きた混線のもたらした空間的な広がりを見失い、ほとんど機械的な連結による単一線上のやりとりとして確立されるにしたがって、その機能を別の道具、たとえばラジオに譲っていくように見える。たとえば、コクトーが『オルフェ』において、詩的メッセージとしての靈感の源泉として視覚化するのはラジオである。鏡を抜け、冥界を旅し、おのれを写す水鏡の上に目覚める、詩人オルフェはナルキッスを思わせるし、見ることを禁じられたその妻は、ある意味では、エコ的な声の存在に変わるだろう。しかし、そこではもはや電話の介入する余地はない。最終的におのれの存在を消し去るのは、死神の方である。

本論では、19世紀末から両大戦間のフランスを中心に、電話という声のテクノロジーが生み出した新たな文学的表象の問題を、特に、ヴィリエ・ド・リラダン、マルセル・ブルースト、ジャン・コクトーという三人の作家の作品を取り上げながら論じた。

電話は、本来であるならば、純粋な声のテクノロジーとして、特権化されても不思議はなかったろうに、実際には、まさにその身体性と機械性の融合ゆえにフロイト的な意味での「不気味さ」を体現するテクノロジーのひとつとなった。ヴィリエ・ド・リラダンの『未来のイヴ』が描き出すのは、人造人間主題に直接接合された電話およびフォノグラフという二つのテクノロジーの形象であった。それらは、確かにしばしば極めて形而上学的神学的な問題系とのかかわりにおいて論じられた。『未来のイヴ』が皮肉を込めて描き出すのは、そのような神的な何者かや、記録にとどむべき偉大な事件が、もはや少しも存在しないような、卑俗で地上的

で物質的な文明こそが、それらを記録しえたであろうテクノロジーを生み出したというパラドックスである。複製技術時代の「声」。「ひとはもはや複製作品しか愛さなくなっている」とコクトーは書いた。そのような時代には「声はもはや声ではない」。「彫像は彫像ではない」とも。「写真と [アンドレ・] マルローの勝利。オリジナルの作品を後光のように包んでいた神秘はもはや重要ではない」<sup>102</sup>。そのような「声」ならざる「声」の時代に、にもかかわらず肉声を、それも当の肉体の不在の相のもとに伝えるかにみえる電話。

ブルーストの時代は、すでに機械的な技術の進歩が明白な形をとって日常生活全体を支配するようになった時期にさしかかっている。電話の女神たちは、ことさらに神秘的で不気味な存在ではもはやない。それ以上に、電話線の彼方から伝えられて来る声、身体なき声もまた、神託めいた神秘性や自動人形的な不気味さとは無縁である。それでいながら、声はむしろそれぞれの差異を保ちつつ、本質の方にむかって収斂するのではなく、騒音に満たされた世界の空間へと解き放たれる。声だけの存在と化したエコのように、記憶の森のいたるところに反響し、拡散していく。

コクトーが『声』で描き出したのは、こうしてわれわれの日常生活の中に、まるで同作の中で話題にのぼる犬のように、すっかり腰を据えた電話という〈生き物〉である。それは、時には思いがけない証人を呼び出し、あるいは電話交換手を召喚し、沈黙のうちに、女主人公を追いつめて行くだらう。電話が私たちを呼び出し、電話が私たちをなぐさめ、電話が私たちを裏切り、電話が私たちを殺す。絞め殺される「人間の声」。それはしかし、非人間的な機械の声に対する恐怖や嫌悪の表現ではない。電話の声は、すでに私たちのメディア的な、メディア化された存在の中心にあって、私たちの声を奪いつつあるのだ。

『声』が発表された1930年時点に戻ろう。映画は声を獲得し、ラジオ放送も拡大の一途をたどる。無線電信も発達する。ジャン・デボルドはそのややバーレスクな劇作品において、勝手に喋りはじめる無線電話（ここではほとんどラジオと同義であるが）と格闘する母と娘を登場させている<sup>103</sup>。さらに、ほとんど推理小説的な結構を持つ『ロワイヤル街の犯罪』では、愛国心故にスパイ行為に走る電信技師の物語を描いてみせる<sup>104</sup>。デボルド自身も、ドイツ占領下においてレジスタンスに参加し、ゲシュタポに捕らえられ虐殺される。

しかし、すでに時代は、大陸をこえて声の飛び交う時代に入っていた。自由フランスの声もBBCによるイギリスの声も、もちろんヴィシーの声も、飛び交う声の交錯の中で、ひとは新たな音風景を生きることになる。そのような空中を飛び交う聞こえない声のサウンドスケープと文学の問題、ラジオの時代の文学については、また稿を改めて考えるべきだろう。

102 Jean Cocteau, *Le Passé défini, tome VI, 1958-59, op.cit.*, p. 19.

103 Jean Desbordes, *La Mue*, Stock, 1936, p. 27.

104 Jean Desbordes, *Le Crime de la rue Royale*, Gallimard, 1940.

**La Voix sans corps, le corps sans voix ou la représentation  
de l'appareil sonore dans la littérature française:  
de Villiers de l'Isle-Adam à Cocteau.**

Koji ABE

(Culture Française)

Cet essai analyse le rôle de l'image des appareils de transmission-reproduction sonores dans la littérature française de la fin du XIX<sup>e</sup> siècle à l'époque de l'Entre-Deux-Guerres.

Auguste Villiers de l'Isle-Adam a réussi à fixer l'image ambiguë et ambivalente du progrès technique de la transmission et de la reproduction de la voix humaine dans *L'Eve future* (1886).

Marcel Proust a souligné, dans *A la recherche du temps perdu* (1913-1927), le côté mythologique de ces inventions. Les demoiselles du téléphone y sont décrites comme des personnages de mythologie grecques. Cependant, l'auteur était aussi sensible à l'aspect inquiétant apporté par ce progrès technologique dont la voix transmise par cet appareil rappelle souvent celle caverneuse des défunts.

Jean Cocteau renouvellera l'image des machines sonores et auditives. Dans *Les Mariés de la tour Eiffel* (1921), il confie ses personnages à deux gramophones humaines. Dans *La Voix humaine* (1930), abandonnant l'effet de surprise visuelle qu'apporteraient les nouvelles machines, il confie la scène à une femme parlant au téléphone pour supplier son amant, qui reste invisible et sans voix, de ne pas l'abandonner. Pour ce personnage, le téléphone est à la fois un appareil de secours et une arme qu'il retourne contre lui pour s'étrangler avec le fil.

De l'image fantasmagorique de la voix sans corps (*L'Eve future*) à la femme qui perd sa voix étant étranglée par le fil du téléphone (*La Voix humaine*) et en passant par l'image mythique de l'espace médiatique plein de voix multi-phoniques, la littérature française est marquée par cette imagerie autour de la technologie de la voix.

# むだ時間システム表現を用いた サプライチェーンシステムの一解析

－サブシステムが2つの場合－\*

西 平 直 史

## 1 はじめに

これまで、サプライチェーンにおいて、Bullwhip 効果 [1] を抑制するための手法が研究されてきた。参考文献 [2, 3, 4, 5] では、サプライチェーンをむだ時間をもつ動的システムとして定式化し、そのシステム表現を用いて解析を行っている。これらの研究では、Bullwhip 効果を動的システムの内部安定性と関連付けている。しかし、これまでの研究は”サプライチェーン”と言いながら、単一のシステムの性質を調べたものに過ぎなかった。Bullwhip 効果は、サプライチェーンの中で複数のサブシステムがかかわるときの”情報の劣化”が一因であり、そのような場合を対象として取り扱う必要がある。

そこで、本稿では2つのサブシステムをもつサプライチェーンシステムを対象として、その性質を解析する。筆者のこれまでの研究 [3, 4, 5] と同様にサプライチェーンのサブシステムを動的システムとして定式化し、そのサブシステム間にリードタイムすなわちむだ時間がない場合をまず考える。また、サブシステム間にリードタイムすなわちむだ時間がある場合を考え、両者の内部安定性を比較することで、サプライチェーンにおけるリードタイムが Bullwhip 効果に与える影響を解析することを目的とする。

## 2 問題の定式化

本稿では、参考文献 [3, 4, 5] と同じサブシステムをもつ以下のシステムを考える。

$$x_1(k+1) = x_1(k) + u_1(k) - y_1(k) \quad (1)$$

$$x_2(k+1) = x_2(k) + u_2(k) - y_2(k) \quad (2)$$

ただし、 $x_1(k)$ ,  $x_2(k)$  は時刻  $k$  におけるサブシステム  $S_1$  と  $S_2$  それぞれの在庫量、 $u_1(k)$ ,  $u_2(k)$  は時刻  $k$  におけるサブシステム  $S_1$  と  $S_2$  それぞれの入庫量、 $y_1(k)$ ,  $y_2(k)$  は時刻  $k$  におけるサブシステム  $S_1$  と  $S_2$  それぞれの出庫量である。

---

\* 2011 年 11 月 30 日受理

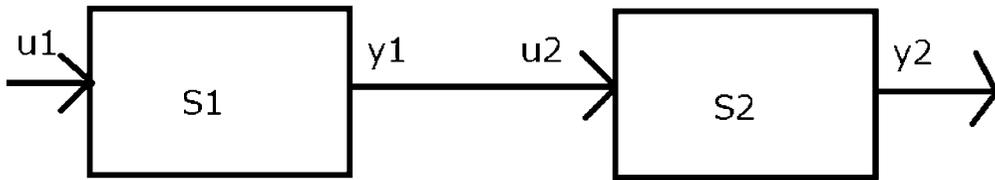


図1 対象システムのブロック図

以下では、サブシステム  $S_1$  と  $S_2$  が図1のように直列につながっているサプライチェーンを考える。まず、サブシステム間にリードタイムがない場合を考え、その後、サブシステム間にリードタイムがある場合を考え、両者を比較する。

### 3 リードタイムが存在しない場合の解析

サブシステム  $S_1$  と  $S_2$  間にリードタイムがない場合、その関係は

$$u_2(k) = y_1(k) \quad (3)$$

で表される。(3)式に(2)式を代入すると

$$\begin{aligned} y_1(k) &= u_2(k) \\ &= x_2(k+1) - x_2(k) + y_2(k) \end{aligned}$$

が得られる。これを(1)式に代入すると

$$x_1(k+1) = x_1(k) + u_1(k) - x_2(k+1) + x_2(k) - y_2(k)$$

が得られる。上式を整理すると、

$$x_1(k+1) + x_2(k+1) = x_1(k) + x_2(k) + u_1(k) - y_2(k)$$

が得られる。ここで、 $x(k) = x_1(k) + x_2(k)$  とおくと、上式は

$$x(k+1) = x(k) + u_1(k) - y_2(k) \quad (4)$$

となる。(4)式は、文献 [3, 4, 5] の単一のシステム表現と同じであり、かつリードタイムがないために取り扱いが容易である。上記のシステム表現を用いると、例えば文献 [7] の結果を用いるとただちにつきの結果が得られる。

**条件1** システム(4)は安定であるが、漸近安定ではない。システム(4)に対して、 $1+K$ の絶対値が1未満となるような  $K$  を用いて  $u_1(k) = Kx(k)$  なるフィードバック制御器を構成すれば、閉ループ系は漸近安定となる。

条件1で考えたフィードバック制御器について考察してみよう。文献 [3] で示したように、(1)式と(2)式は偏差系を考えることによって一般性を失わずに原点を平衡点とできるから、 $x(k)$  すなわち  $x_1(k) + x_2(k)$  は、サプライチェーン全体の理想在庫数との偏差を表すことになる。これに対して  $u_1(k) = Kx(k)$  なるフィードバック制御器を構成するわけであるが、 $K = -1$  は、条件1を満足する制御器の1つである。この場合は、偏差からのずれが発注数にな

っており、いわゆる“プル型”の発注方式に相当する。条件1は  $K = -1$  以外でも成り立つので、“プル型”の発注方式を一般的に含んだより広い条件となっていることがわかる。

#### 4 リードタイムが存在する場合の解析

本節では、 $S_1$ と $S_2$ の間にリードタイム $L$ が存在する場合を考えてみよう。文献 [3, 4, 5]と同様にリードタイムをむだ時間として考えれば、

$$u_2(k) = y_1(k - L) \tag{5}$$

として表現できる。(5)式と(1)式を用いると

$$\begin{aligned} u_2(k) &= y_1(k - L) \\ &= x_1(k - L) + u_1(k - L) - x_1(k - L + 1) \end{aligned}$$

となるので、これを(2)式に代入すると

$$x_2(k+1) = x_2(k) + x_1(k - L) + u_1(k - L) - x_1(k - L + 1) - y_2(k)$$

が得られる。上式を整理すると

$$x_1(k - L + 1) + x_2(k+1) = x_1(k - L) + x_2(k) + u_1(k - L) - y_2(k)$$

が得られる。 $x(k) = x_1(k - L) + x_2(k)$  とすれば、

$$x(k+1) = x(k) + u_1(k - L) - y_2(k) \tag{6}$$

が得られる。

さて、システム(6)に  $u(k) = Kx(k)$  なるフィードバック制御器を構成することを考えてみよう。このとき(6)式は

$$x(k+1) = x(k) + Kx(k - L) - y_2(k) \tag{7}$$

となるので、文献 [3] の結果を用いるとつぎの条件が得られる。

#### 条件2 行列

$$\begin{bmatrix} 1 & 0 & \cdots & 0 & K \\ 1 & 0 & \cdots & 0 & 0 \\ \vdots & \ddots & \ddots & \vdots & \vdots \\ 0 & \cdots & \ddots & \ddots & 0 \\ 0 & \cdots & \cdots & 1 & 0 \end{bmatrix}$$

の固有値が単位円内に存在するとき、システム(7)は漸近安定である。

さて、システム(7)および条件2について考察してみよう。リードタイムが存在しない場合の議論と同様に、 $S_1$ と $S_2$ は一般性を失わずに偏差系を考慮していると解釈することができる。リードタイムが存在する場合、 $u(k) = Kx(k)$  なるフィードバック制御器は時刻 $k$ での $S_2$ の在庫量と時刻 $k - L$ での $S_1$ の在庫量の偏差の合計を用いて構成される。リードタイムが存在しない場合、 $K = -1$ が“プル型”の発注方式に相当したが、リードタイムが存在する場合には、 $K = -1$ としても、厳密な意味での“プル型”とはならない。これは、 $S_1$ の在庫量に関しては、リードタイムだけ前の時刻の値を用いることになるからである。リードタイムが大きい場合、

制御器に過去の情報を用いることになり、これが情報の劣化を意味していると解釈できる。

さらに、(7)式の右辺第2項を考えると、この制御器が実装されると

$$Kx(k-L) = Kx_1(k-2L) + Kx_2(k-L)$$

となることより、 $S_1$ は $2L$ だけ過去の偏差量を、 $S_2$ は $L$ だけ過去の偏差量を用いることになる。ここでも情報の劣化が生じており、これらがサプライチェーンシステム全体の制御を難しくしている要因であると考えられる。

## 5 おわりに

本稿では、2つのサブシステムから構成されるサプライチェーン・システムを対象として、動的システムとして定式化し、それに対してフィードバック制御器を構成した。とくに、リードタイムが存在しない場合と存在する場合の条件をそれぞれ導出し、それらを比較することでリードタイムが存在する場合には、情報の劣化が存在し、それによってサプライチェーンシステム全体の制御が困難となることを示した。

今後の課題として、プル方式以外の制御方式を本研究のシステム表現の枠組みで解析することと、サブシステムが3つ以上の一般的な場合を取り扱うことがあげられる。

## 参考文献

- [1] 圓川隆夫, 生産システム, 生産管理における全体最適, 精密工学会誌, 67-11, pp.1764-1768(2001)
- [2] 伊藤利昭・橋本芳宏・石原大司, 最適制御理論を用いたブルウィップ効果を防止する在庫補充方式の提案, 日本オペレーションズ・リサーチ学会2006年春季研究発表会, pp.66-67(2006)
- [3] 西平直史, サプライチェーンにおける Bullwhip 効果を抑制するための一手法—むだ時間システムとメモリーレスフィードバックを用いた解析—, 山形大学人文学部研究年報, 5, pp.205-214(2008)
- [4] 西平直史, むだ時間システムとしてとらえたサプライチェーンについての—考察—リードタイムが既知の場合—, 山形大学人文学部研究年報, 6, pp.157-162(2009)
- [5] 西平直史, サプライチェーンに対して構成したサーボ系の解釈とその応用, 山形大学大学院社会文化システム研究科紀要, 7, pp.105-109(2010)
- [6] 渡部慶二, むだ時間システムの制御, 社団法人計測自動制御学会, (1993)
- [7] 萩原朋道, デジタル制御入門, コロナ社, (1999)

**An Analysis of the Supply Chain System using a  
Time-Delay System Representation**  
— a Case when the subsystems are two

Naofumi NISHIHIRA

This paper considers the problem of an analysis of a supply chain system consist of two subsystems. We formulate the supply chain system as dynamical systems with time-delay. First, a case of the leadtime is not exsistance. Futhermore, a case of the leadtime is exsistance. Moreover, we compare the above cases and showed the leadtime is a source of instability.



## ソークラテースのアイロニー<sup>(1)</sup>

グレゴリー・ヴラストス

(古川英明訳)

「アイロニーとは」とクインティリアヌスは言う、「言われていることと反対のことが理解されなければならない」(*contrarium ei quod dicitur intelligendum est*)<sup>(2)</sup> ような言葉の比喩的表現ないし用法である。彼の公式は時のテストに耐えてきた。それはそのままの形でジョンソン博士の辞典に取り入れられ(「意味が語と反対であるような語り方」(1755年)),そして実質的にはそのままの形で私たちの辞典の中に生き残っている。「アイロニーとは、その文字どおり(literal)の意味とは、別のことを、そしてとりわけ反対のことを表現するための言葉の用法である」(*Webster's*)。ここに、私にも作ることのできるまことに単純でつまらない例がある。イギリスからの訪問客が、どしゃぶりのなかロサンゼルスに降り立って、「ここは何て素晴らしい天気なんだろう」と言っているのが聞こえる。天気は悪い、彼は天気を「素晴らしい」と言い、それでいて、自分は言っている(say)のと反対のことを意味し(mean)ているのだということを何の問題もなく理解してもらえている。

どうして私たちは言葉にそのようなひねりを加えようとするのだろうか。その「文字どおりの」——すなわち、確立され、一般に理解される——意味とは非常に異なる、時にはその反対にもなりうることを言葉に意味させるというようにして、言葉をひねろうとするのは何故なのであろうか。一つにはユーモアのため、また他には嘲笑(mockery)のためである。あるいは、もしかすると、その両方の理由からなのかもしれない。たとえば、次の場合がそうである。ジェラルド・フォード大統領がホワイトハウスの公式晩餐会にメイ・ウェストを招待したとき、彼女はこの招待を辞退しようとして、その理由を次のように説明した。「たった一度の食事に出かけるには、とんでもなく遠い距離ですわ。」この冗談は誰かに当てつけたものであり、辛辣な言葉であるのだが、知的な笑みに包まれることで社交上好ましいものになっている。

アイロニーの第三の可能な用法はこれまでほとんど注目されてこなかった<sup>(3)</sup>、名前が付いていない。実例を示すことでそれを確認させてほしい。ポールは、いつもはよくできる学生なのだが、今日のはうまく行っていない。チュートリアル[個別指導の時間]をしなくじって、チューター[指導教員]をひどく立腹させ、その挙句に悪態をつかせることになってしまった。「ポール、君は今日はまったく素晴らしい。」ポールは戸外の暗闇に押し込まれているような気持ちになる。しかしどうして? 自分は何かそんなにひどいことを

したのだろうか。取りとめのない話し方で、まとまりが無く、言葉づかいがずさんで、だらしなく、文法違反をし、構文間違いをし、準備不足で、知識がなく、混乱し、一貫性がなく、支離滅裂であったのだろうか。これらの誤りのうちのどれのせいで自分は非難されているのだろうか。彼は教えられていない。彼は謎 (riddle) をかけられ、それを独りで解く羽目になっている。アイロニーのこの形式は、たしかに普遍的ではないが、しかし、一見そう思われるほどに稀なのでもない。最初の例におけるようにアイロニーのきわめて拙劣な形式にだけ、それは完全に欠けているのだ。第二の例にはそれがわずかだけある。メイ・ウェストは私たちをからかうように、あの最高の招待を辞退する理由から逸らすのである。彼女はほめかしているのだ、「もしもあなたが全くのお馬鹿さんでないのなら、これが私の本当の理由でないことはあなたにも分るでしょ。それが何なのか、当ててごらん。」

アイロニーが謎かけであるとき、それは誤解されるのを覚悟の上で言われている。極端な場合、聞き手がアイロニーに全然気づかないということすら起こるだろう。もしもポールが愚鈍とも見えるほどに自惚れが強く、自己批判をひどく欠いた学生であったとすれば、彼はチューターの言葉に飛びついて、とにかく自分は何か素晴らしいことを言ったに違いないのだと考え、得意になったかもしれない。もしもそんなことになったとすれば、私たちは、話者の意向に反して欺瞞 (deception) が起きてしまった、と言いたくなるであろう。というのも、もしもチューターがアイロニカルに話すつもり (mean) であったとすれば、その場合には、彼は欺くつもりはなかったであろう。二つの意図 (intention) は両立しえないのである。初めの意図が実現される限りにおいて、後の意図は実現されえない。実際、欺こうとする意図がなかったことは、上の三つの例のすべてにおいて明らかだろう。そしてこのことがこれらの事例にたまたま備わった特徴であるというのではないことは、本稿冒頭の定義をもう一度参照することによって理解しうるのである。二つの意図が両立不可能であるというそのことから、次のことも導き出せる。それはつまり、もしも先の訪問客が誰かを、——例えば、ロンドンに残してきた彼の妻を——欺いて、ロサンゼルスLos Angelesの天候はちょうどその時晴れていたと思わせようとするつもりであったとすれば、彼は電話で「当地の天候は晴れである」とアイロニカルironicallyに話してそうすることはできなかつただろう、ということである。というのも、「当地は晴天である」とアイロニカルに語るということは、「晴天」という言葉でその反対を自分の妻に理解させようと意図しつつ、その言葉を語るということであるから。もしも彼の妻がそのように理解したのであれば、欺かれることもないのである。ロサンゼルスLos Angelesの天候はちょうどその時、「晴れ」の反対であったのである。

これは非常に基本的なことであるから、例をもう一つ出しても悪くはないであろう。ある詐欺師が指輪を手に入れたが、彼にはそこに嵌められた宝石がにせ物であることは分っていた。彼は人をペテンにかけてやろうと企み、「ダイヤモンドの指輪です、いいでしょう？」

(Can I interest you in a diamond ring?) と声をかけて回っていた。彼のこの言葉をアイロニーと呼ぶ人がいるとすれば、その人は、「アイロニー」という言葉の意味がまるで分

っていないことを自白しているようなものだろう。「アイロニー」の定義がその訳を教えてくれる。詐欺行為が成立するとすれば、「ダイヤモンド」の文字どおりの意味がこの詐欺師の伝達しようと意図する意味でなければならない。彼が「ダイヤモンド」という言葉をアイロニカルに使用しているのを私たちが見ようとするのであれば、この意図を彼がもっていないような事例を用意しなければならないであろう、——例えば、この詐欺師が自分の十歳の娘に、本心がどうしても現れてしまうような輝きを眼に見せて、「ね、ダイヤモンドの指輪だよ、いいだろう？」(Luv, can I interest you in a diamond ring?) というような事例。さて、彼がそのような合図なしに自分の娘に同じ言葉を言ったと仮定しよう。それでもこの言葉を「アイロニー」と呼ぶことはできるであろうか。彼は騙そうと試みているのではないと確信できる場合には、という条件を付けて、そのように呼ぶことはできるであろうと思われる。つまり、娘は五歳ではなく十歳なのだ、だから、もしもその装身具が本物のダイヤモンドの指輪であったとすれば、それは何千ドルもの値打ちがあるから、お父さんがそれを自分の見えないところへ置くわけがない、ということが分らないといけないんだ……。もしも私たちが、これが彼のしようとしていることであると、——つまり、彼は娘の知能と分別の程度を験してみようとしていると、考えるならば、私たちは依然として、先の言葉をアイロニーと見ることができよう。つまりこれは、謎かけという種類のアイロニーの純粋な見本である。仮にこの小さな女の子がその試験を不合格になっても、それはやはりアイロニーの資格を失わないであろう。というのも、あの発言は欺こうとする意図から為されたのではなかったのであるから。同様に例のチューターは、ポールがアイロニーに気づかずに非難を賞讃と誤解する恐れのあることをよく承知したうえで、「素晴らしい」と言ったのかもしれない、——このことを承知しつつ、ポールが誤解する機会を捕まえてやろうと、何か然るべき理由があって望んだのかもしれない。

以上のことを理解したうえで、私たちが古代ギリシアに帰り、欺こうとする意図は、アイロニーを表わす私たちの言葉[“irony”]と全然相容れなかったのに対して、その祖語であるギリシア語の *eirōneia*, *eirōn*, *eirōneuomai* においては、普通 (normal) に認められるものであることを発見したときには、不意打ちを食らうことは必定である<sup>(4)</sup>。この相違は、*eirōneia* 等がアッティカ原文伝存資料集に現れる最初の三つの文例——これらはすべてアリストファネスのものであるが——、この三つの文例において明白である。『蜂』174行では、ὡς εἰρωνικῶς は、フィロクレオンが裁判人になりたいばかりに、嘘をついて家屋敷から自分の驢馬をつれ出そうとしていることについて言われている。『鳥』1211行では、それは、イーリスが鳥の国に入ろうとして嘘をつくことに対して適用されている。『雲』449行では εἶρων は、「ずるい」という意味の二つの語に挟まれて、「訴訟相手の狡猾な人間を罵る言葉のカatalog」<sup>(5)</sup>のなかに登場する。前四世紀になると、私たちは同じ用法にいっそう多く出会うのである。デーモステネース(『フィリッポス弾劾第一』第七節)は、この言葉を、退屈な市民的義務を逃れようとして言葉を曖昧にする市民について使用

している。プラトーンは『法律』(908E)において、異端者に対する刑罰を規定する際に同じ言葉を使用している。彼は偽善者を *eirōnikon* な種類の異端者と呼んでいる。彼らに対してはプラトーンは、死刑または死刑以上の刑罰を法によって定めている。しかし、偽善者同様に考えが誤ってはいても正直で率直な異端者は、監禁され訓戒を与えられた後に放免される。『ソフィステース』ではプラトーンは、ソクラテースの間答法をソフィスト術の優れた形式<sup>(6)</sup>であると断言しつつ、これを並みのソフィストが実践する、ありふれたソフィスト術と対比している。プラトーンがこの技術のうちの *eirōnikon* な種類に割り当てるのは、これらの人々である。ソクラテースではなく、彼の主要なライバルを、——プラトーンはこの人たちをペテン師と見ているのだが——、また *eirōnes* (268A-B) とも呼ぶのである。

*eirōn* の最もありきたりの用法では、それが不誠実を意味するものとしていかに定着し固定化していたかということは、アリストテレースとテオフラストスによる *eirōn* の描写を見れば分かるのである。*eirōn* は両者において非常に異なっていて、テオフラストスでは憎悪すべき人間、アリストテレース<sup>(7)</sup>では愛想のよい人間であるのだが、しかし、彼らの描写は一つの点では同じである<sup>(8)</sup>。というのは、いずれの *eirōn* も、自分を語る際にわざと言い紛らすのである。アリストテレースはソクラテースについてはそのような偽り隠すこと (*dissembling*) を大目に見ている。彼はソクラテースに *eirōn* という役を割り振るのであるが、ソクラテースとは対極的な人物である自慢屋 (*alazōn*) と比較して、ソクラテースは比べようもない程に、はるかに魅力的であるとしている。それというのも、ソクラテースは自分には名声を博するような資質は具わっていないと言い立てて、しかも、それは「尊大さを避ける」という理由からそのように言っているのだが、この点をアリストテレースは好ましいとするからなのである (*N.E.*1127b23-6)。とは言え、注目すべきなのは、アリストテレースは好ましいとは見たものの、賞讃に値するとは見ていないということである。ソクラテースの人となり賞讃を表す場合には、彼はぜんぜん別の特性に移行している。つまり、彼がソクラテースを心の大きな (*megalopsuchos* *Po. An.* 98a16-24; cf. *D. L.* 6.2) 人と考えるのは、ソクラテースが運命のもたらす諸々の偶然的出来事に対して無関心 (*apatheia*) であったという理由によるのであって、*εἰρωνεία* の故では全くないからである。テオフラストスは *eirōn* を情け容赦なく批判している<sup>(9)</sup>。このような人物は計画的に人を欺くのであり<sup>(10)</sup>、胸くそが悪くなるほどに裏表があり<sup>(11)</sup>、利己的な偽装に長けていると述べている<sup>(12)</sup>。

トラシュマコスも、ソクラテースの「いつもの」*eirōneia* に言及する、あの有名な箇所、彼をそのような仕方で見ているのである。

T1 *R.337A*: 「おやまあ」と彼は言った、「これはソクラテースのいつもの空とぼけ (*εἰρωθυῖα εἰρωνεία*) だ。私はこの人たちにあらかじめ言っておいたのだ、あなたは答え

を拒むだろうとね、そしてあなたに質問しても、あなたは空っとぼけ (εἰρωνεύσοιο), 絶対に答えはしないだろうというようにね。」

他人に質問しておいて、自分はその答えを持っていないとソクラテースが言うのは嘘である、とトラシマコス是非難しているのである。ソクラテースが答えを持っているのは全く確実なのだ。それなのに、彼はそれを秘密にしておきたいばかりに、自分を持っていないとうそぶいている。だから彼はわれわれの答えを攻めたててずたずたに引き裂いて、それでいて自分は攻撃から守られているから、大はしゃぎできるのだ。——トラシマコスはこのように抗議しているのである。だからこの *eirōneia* を “irony” と翻訳する理由は少しもない (ブルーム, グループ, ショーリー) <sup>(13)</sup>。もしもそのような翻訳が正しい翻訳であるとすれば、嘘をつくことがアイロニーの標準的な形式であるということになるだろう <sup>(14)</sup>。

アリストファネスからテオフラストスに至る上掲のアッティカのすべてのテキストに現れる εἰρωνεία の振舞い方に基づいて、ひとはおそらく誤った結論に飛躍するであろう。εἰρωνεία はこの時代をとおして、ずる賢く故意に欺こうとする言動を表示するのにきわめてふつうに (commonly) 用いられているのだが、その故にプラトーンは、この言葉をソクラテースについて常にそのような仕方で用いていなければならないのか? [用いていなければならない、というように——] 多くの著名なギリシア学者たちは、そのように想定した。そのなかにはバーネット <sup>(15)</sup>、ヴィラモーウィッツ <sup>(16)</sup>、ガスリー <sup>(17)</sup> がいる。この種の推論は非常に危険であると指摘させてもらおう。ある語が多くの場合に或一つの意味で使用されているという事実から、他の場合に別のそれと明確に異なる意味で使用されることはありえないということが帰結するわけではない。そのような統計的推論はつねに危険を伴う。そして上の統計的推論が誤りであることは確かなのである。次のテキストを考察せよ。

T2 G. 489D-E: [a] ソクラテース: 『よりよい』によって君は『より強い』を意味しているのではないのだから、君が意味しているのは何なのか、僕にもう一度言ってくれたまえ。そしてもっとやさしく教えてくれないか、ねえ君、立派なお人よ。僕が君の学校から逃げ去ろうとしないようにね。」 カリクレス: 「あなたは私を嘲笑っている (εἰρωνεύη) のだね。」

[b] ソクラテース: 「いや、ゼトスに誓って僕は嘲笑っていない。君が以前に僕をさんざん嘲笑う (πολλὰ εἰρωνεύου) のに用いたあのゼトスに誓ってね。」 <sup>(18)</sup>

[a]では、ソクラテースが自らにカリクレスの生徒の役を割り振っていることに対して、カリクレスが抗議している。——これは、裏が透き通って見えるくらいアイロニーで

ある。というのも、明らかにカリクレースは、校長の役割をずっと務めてきたのは、反対にソクラテースの方であると感じているから。[b]では、ソクラテースは、カリクレーの方こそ以前に嘲笑のために自分をゼトスの兄弟の哀れなアムフィオンに結びつけた、と応酬している。アムフィオンは「高貴な人間であるにもかかわらず、愚かな若者の外見をしている」(485E-486A)のである。いずれの場合にも嘲笑に対する抗議が為されているが、しかしそこには故意に欺いているとの非難はみじんも含まれてはいないのである。いずれの場合も、ふりをしているとか、ずるいとか、言い抜けしているといったことは全く問題になっていない。——それは、彼らがあからさまな悪口という手段をとって、互いに「豚！」とか「頓馬！」と罵り合った場合にも、そういったことが問題にならないのと同じである。

私の目的にとって同じくらいに教えるところがあるのは、*Rhetorica ad Alexandrum* (『アレクサンドロスに贈る弁論術』、著者不詳、おそらく前四世紀の論考)からの以下のテキストである<sup>(19)</sup>。

T3 *eirōneia*とは、[a] 或ることを実際には言っているのに、言っていないと称することであるか、それとも、[b] 物事をそれと反対の名前でもって呼ぶことである。(21)

[a]には何も新しいものは見当たらない。*eirōneia*はこの必携書が弁論家に提供する商売上の多くのトリックの一つである<sup>(20)</sup>。[b]はそうではない。そのことは彼の挙げる例においていっそう明瞭になる。

T4 明らかに、この善き人々 (οὗτοι μὲν οἱ χρηστοί) は味方に対して大きな害悪を及ぼしたが、これに対してわれわれ悪しき人間は、彼らに多くの恩恵をもたらした (*loc. cit.*)。

*χρηστοί*のここでの用法は、アリストファネース『雲』冒頭でストレブシアデースが独白する台詞を私たちに想起させる。「この善き若者 (ὁ χρηστός οὗτος νεανίας)」と老人は役立たずの息子について言っている<sup>(21)</sup>。これは最も純度の高いアイロニーである。すなわち、相手を欺こうとする意図が少しもない嘲笑である。

私たちはこの事態を理解することができるか？ 多数のアッティカのテキスト(——そのうちの八つに私は言及したが、同じ種類のテキストをさらに多く付け加えることもできただろう、)において、*ειρωνεία*は故意に誤って伝えることを含意していた。しかし九番目のテキスト(T2)ではそれはそのような含みを全く欠いた嘲笑を表わしているし、十番目のテキスト(T3)の[b]でもそのことは同じである。T3では前四世紀アッティカの用法に深く通じた弁論家が*ειρωνεία*の定義を与えているが、この定義はクインティリアヌスをあまりに見事に先取りしているので、二つの定義は正確に等価のものになっているほどであ

る。つまり、両者ともに同じ言語行為を記述しているのであって、T3[b]では話者の観点から、クインティリアヌスにおいては聴者の観点から、それが見られているのである。この言語現象は理解可能であるか。然り、私たちが英語の“pretending”の同じような振舞い方を想い起すときには、完全に理解可能となる。仮病を使う人が病気だと“pretend”しているとか、ペテン師が自分にはいいコネがあるのだと“pretend”していると言うことは、彼らは人を欺く人間だと言うに等しい。つまり、「偽りの申し立てをする」(to allege falsely)ということが、to pretendの基本的な用法である。しかしコンテキストによっては、“to pretend”が偽りを迂回するがゆえに、偽りの申し立てを迂回するということが起きる。それは、子供たちは色のついたチップがお金であると“pretend”している(彼らはそれを“pretend-money”[おもちゃのお金]と呼ぶ)とか、人形が病気であるとか死ぬとか学校に行くと“pretend”している、と私たちが言うような場合である。それとちょうど同じように、先の例で詐欺師は自分の娘に宝石を差し出して、これはダイヤモンドだよと“pretend”していると言うこともできるだろう。この場合の“pretending”は、彼が引っかけようとしている人たちに宝石を呈示して、これはダイヤモンドですよ、と“pretend”することからこの上なく隔たっている。後者が“pretending”の最もふつう(common)の(そして論理学に関しては第一次的な)用法でなければならないということは、この一次的用法に接している、その語の二次的用法を少しも妨害するものではない。それは意図して欺くということから全く離れた副次的用法であって、「自ら進んで不信を中断すること」に、すなわち、私たちがそれによって芸術や演劇における想像上の虚構世界に入っていくところの、あの自発的な「不信の中断」に基づいた用法である。メイ・ウェストの発言にあったようなアイロニカルな言葉づかいを解明するうえで援用できるのは、“pretending”のこの意味である。私たちは、彼女は旅の長い道のりが招待を断った理由であると“pretend”している、と言うことができるであろう。しかし、私たちが“pretending”を第一次の意味で使用して、そのように言うとするれば、それはまったく筋の通らぬばかげた言い方である。偽りの申し立ては存在しない、なぜなら申し立てが存在しないからである。彼女は私たちをからかっているのである。

以上のことから次の事実が適切に説明されると私は思う。つまりそれは、*eirōn*, *eirōneia*, *eirōneuomai*という言葉は、ふつう不誠実を暗に意味するために使用されるのであるが、それでもしかし、そのような含意を喚起することから完全に離れた、それに代る用法を持つことができるという事実であり、また、パーネットやヴィラモーヴィッツ、ガスリー<sup>(22)</sup>やドーヴァー<sup>(23)</sup>には失礼ながら、それらの言葉は時にそのような仕方でもプラトーン<sup>(24)</sup>のソークラテースによって使用されるという事実である。私が思うに、生じたのは次のことである。すなわち、アッティカで *eipōveia* の使用が普及したとき、(それは遅くとも前 433 年よりは前である、) その意味の場 (semantic field) は現代英語の “pretending” のそれと同じ広がりを持っていた、そして *eirōn* はたいへん好ましくない意味を含む言葉であった

——中傷ないし悪口の言葉として用いられた——、それというのも、先に見た二つの用法のうちで第一の用法が第二の用法にはるかに優越していたからである。*eirōn* と呼ばれることは、よく言って失礼なことであり、最悪の場合には侮辱的なことであっただろう。しかし、歴史のページを三百年ばかり繰って——前四世紀のギリシアから前一世紀のローマに行く——、私たちは長く親しんでいるので慣れていますが、そうでなければ仰天させられるであろうような変化を見ることになる。この言葉は今やその不愉快なニュアンスを失ってしまっている。キケローは音訳したギリシア語によって彼の母語を豊かにすることを好んだ人であるが、彼がこのやり方で *ironia* という新しいラテン語を産み出したとき、その意味には全く異なった色合いが付いていた。それは洗濯され脱臭され、今や、都雅と優美と良き趣味の、その全てを高度に備えていることを表わす印になったのである。

T5 Cicero, *De Oratore* 2.67: 君が思っていることと違ったことを言うときには、偽って隠すこと (*dissimulatio*) は、また都雅でもある。・・・私が思うに、ソークラテースはこのイロニアと偽って隠すことにおいて魅力と人間味によって他のすべての人びとに優っていた。その様式は非常に優雅であり、真面目さで味付けされている<sup>(24)</sup>。

そして二世代後にクィンティリアヌスがこの語の用法を固めて、その意味を本論考冒頭に掲げた定義の中に包み込んだとき、*ironia* がその評判の悪い過去を完全に脱ぎ捨てて、現代のヨーロッパの言語と感性においてそうなるであろうところのものにすでになっているということ、私たちはもはや少しも疑わないのである。言っていることと反対の意味を表現するための言葉——欺瞞なき嘲笑のための完全な媒体。この用法は、ギリシア古典期の祖語においては副次的であったのに、今や標準的な用法に変わっている。*εἰρωνεία* はアイロニーに急変したのである。

このような事態を生ぜしめたのは何であったのか、それを正確に述べることはできない。この語の上方移動といった事態を追跡するには、私たちに言語的資料が大量に欠けているからである。私たちとして言うことができるのは、誰がこの事態を生ぜしめたのかということである、と私は思う。それはソークラテースである。といっても彼がこの語に攻撃を加えたというのではない。彼がそんなことをしたと信じてよい理由は何もない。彼が「*F*とは何であるか」という設問で「*F*」に *eirōneia* を代入したり、またその他の仕方で *eirōneia* を論駁のハンマーで叩いて攻撃したということは何の文献にも出て来ない。彼がこの語に変化をもたらしたのは、何か *eirōneia* についての理論を立てるということによってではなく、それが意味すべき或る新たなことがらを創り出すことによって、その語を変化させたのである。そしてこの或る新たなことがらというのは彼自身のうちに実現された生きることの新しいかたちであるが、それはまさに、彼の当時の用法のうちでは第二の用法における *εἰρωνεία* がソークラテースという一人の人間となって実現しているということなのであ

った。つまりその新たなかたちとは、子供がおもちゃのチップをお金だと見せかけるのと同じように故意に欺くということが少しも無く、真正のゲームと同じように偽り装うこととは無縁であるが、しかしゲームとは違い、その嘲笑することにおいて真面目 (*cum gravitate salsum*) な、ふざけることに至極真剣 (*severe ludens*) な、そのような εἰρωνεία が、まさに一個の人間として実現したものであった。それは以前には知られてもいず、想像もされなかったタイプの個性であった。彼の時代には非常に人目を引くものであり、その後は永久に記憶に残るものであったから、ソクラテースの死から数世紀後には、教養ある人士が *ironia* を考えるときにはほとんどいつの場合もソクラテースを思わずにはいられなくなるといった時代が来るだろうと思われるほどであった。そしてそのような時代が到来したとき、*eirōneia* という語の意味は変わったのである。典型的な *eirōn* としてのソクラテースのイメージは、その語がかつて含んでいた意味に変化をもたらした<sup>(25)</sup>。*eirōn* ないし *eirōneia* が人となって実現したのがソクラテースであったという、人びとの思いの中の、彼のその残像が最終的な影響を彼らに及ぼしたことによって、古典期には周辺的で重要でなかった用法がその中心的な、その普通で基準的 (*normative*) な用法となった。*eirōneia* は *ironia* になったのである。

私は重要なことを主張した。私たちの資料集の中に、ソクラテースが本当に、キケローやクインティリアヌスが考えたような第一のアイロニスト (*arch-ironist*) であることを教えてくれるテキストは見つかるだろうか。

アリストファネスには何もない。『雲』のアンチ・ヒーローはそれぞれの人に違った人物として、多くの人びとのあいだで多くの顔を持つものとして現れるが、しかし誰に対してもアイロニストとして現れることはないのである。自然哲学者ないし賢者ないし秘儀を司る者としてはひどく謹厳であり、青年の教育者としては悪党すぎる<sup>(26)</sup>。『蛙』(1491-9)において間接的に非難されるときにも、彼はアイロニストとしては描かれていない。彼の肖像画は今はかなり違っている。思案所の外では——そうでなかったら、並みのアテナイ人が彼の隣りに席を選ぶという問題は起きないであろう——、彼はもはや意地悪な人物ではない。しかし彼は依然として理屈をこねる人間であり、その重箱の隅をほじくるような厳肅さ (ἐπὶ σεμνοῖσιν λόγιοι καὶ σκαριφησιμοῖσι λήρων, 1496-7) は、彼と話す人びとを無味乾燥なつまらぬことごとくに呑み込んでしまう。この勿体ぶったのらくら者のお喋りには、ほんのわずかのアイロニーも見出せない。

クセノフォーンに目を転じてみよう。最初はここでも捜しているものは見出せないように思われる。『思い出』のほとんどの箇所をとおして、この疲れも知らずに説教を続け、真面目一方で退屈なソクラテースは、アリストファネスの戯画に描かれた無神論的自然哲学者にして「まこと微妙複雑なる戯言ほざく大祭司」<sup>(27)</sup> 同様に、その魂の中に冗談も嘲笑も謎かけも持っていないのである。しかし時々それはそれとは違ったものが閃くのを私たちは認める<sup>(28)</sup>。そしてそれから、第三巻第十一章において私たちは大きな変化に出会う。こ

ここではソークラテースは、移り気な人間に変わり、美しいテオドテーの訪問に出かける<sup>(29)</sup>。彼は彼女に顧客の数を増やすための提案を申し出て、彼女の方は彼に、男の友人たち (*philoí*) を捕える協力者になるように依頼する。彼はいやだと言って、公私にわたってたくさんの仕事があると申し立て、さらに次のように付け加える。

T6 Xen. *Mem.* 3.11.16: 「僕には自分の女友だち (*philai*) がいるのだが、彼女たちは僕から惚れ薬と魔法を学ぼうとして、昼も夜も僕の許を去ろうとしないのだ。」

彼女は、この「女友だち」が哲学者である<sup>(30)</sup>のを、がっかりさせられることに中年男であるのを覚らなければならず、また、事実、覚るのだから、ソークラテースには恋の妙薬を教授してやるような可愛い女の子がいっぱいいる、と考えるような過ちを犯すことなどありえないのである。だから私たちはここでとうとう、キケローやクインティリアヌスであれば *ironia* として認めるであろう、と思われる或るものを獲得するのである。もっともそれは珠玉の *ironia* とはとても認められない。そのユーモアは余りにいたずらっぽく、またわざとらしいからである。

『思い出』のソークラテースは、テオドテーを訪問した後に、再び、その陳腐健全なる道徳的説教を続ける。しかし彼は、これを最後に、クセノフォンの『饗宴』では、そのような習慣をきれいさっぱり改めている<sup>(31)</sup>。『思い出』はソークラテースのために厳しく弁明しようとしていて、そのためにそこでのソークラテース像の色合いは濃淡様々の灰色にトーンダウンしているが、かりにそんなことがなかったとすれば、『思い出』のなかの彼も、私たちが現に『饗宴』のなかに見ているようなソークラテースであったかもしれない。饗宴という舞台設定に促されて、クセノフォンはこの作品の絵の中に明るい、それどころかけばけばしい色を塗っている。君が大きな誇りを抱いている君自身の技術は何かと問われると、それは取持ち業 (*μαστροπός*, 4.56) である、と彼は言う。美男子のクリトブ羅斯に、あなたと私のどちらが美しいか競い合いをしようと挑まれると (5.1ff.), 彼は、自分のこの上なく醜い顔立ち——獅子鼻と特大の朝顔形の鼻孔——のほうが、〈役に立つ〉は〈美しい〉と同じであるということを利用して、いっそう美しいと主張している (5.6)。私たちはここでアイロニーの新しい形を見ているのであって、それというのも私の知る限りでは、ギリシア文学にその前例が見出せないからで、これはソークラテース特有の形式なのである。他によい名称がないので、私はそれを「複合的アイロニー」(complex irony) と呼んで<sup>(32)</sup>、単純なアイロニー (simple irony) ——つまり、私が本章でこれまで論じてきたアイロニー——と対照することにしよう。「単純な」アイロニーにおいては、言われていることは意味されている (is meant) [、つまり話者が言おうと (意図) している、ないしは言いたい] こととはまったく違っている。その通常の (ordinary), ふつうに理解されている意味 (sense) に取られると、当該言明はただの偽りであるにすぎない。「複合的

な」アイロニーにおいては、言われていることが意味されていることであり、且つ、意味されていることではないのである。その表層内容 (surface content) は一つの意味においては真であるように、そして別の意味においては偽であるように意図されている。たとえば、ソクラテースが自分は「取持ち屋」であると言うとき、彼は自分が言っているそのとおりのことを言おうとしている (mean) のではないが、しかしそれでもやはり、その言葉どおりのことを言おうとしているのである。彼がその語のふつうの、通俗的 (vulgar) な意味において意味している [、あるいは言おうとしている] のでないことは明らかである。しかしそれにもかかわらず、彼はその語に特別に (*ad hoc*) 別の意味を与え、それに、「ある男 [X] のために取持ってやった女性 [Y] が、この男 [X] が彼 [ソクラテース] と交際することになる場合には、この男 [X] にとって魅力的となるようにする人」(4.57) を意味させているが、このもう一つの意味では、彼は言っていることをそのとおりに意味している [、あるいは言おうとしている] のである。クセノフォンのソクラテースはまさしく取持ち業を営んでいる、と主張することができる。自分の平たく押しこまれた鼻と突き出た眼と大きくて朝顔形の鼻孔は美しいのだ、と彼が言うとき、彼はその言っていることを意味しているのでないし、また意味しているのである。「美しい」という語の通常の意味では、彼は、それらが美しいということを躊躇なく否定するであろう。しかし、もしも「美しい」によって、「それらに求められる機能のために巧く作られている」(5.4) を意味することが許されるならば、その場合には彼は、自分の特別な種類の眼や鼻は最高に美しいということを私たちに教えているであろう。ファッションモデルの深くくぼんだ眼とは違い、彼の眼はただ真っ直ぐ前を見るだけでなく、脇を見ることもできるし、彼の鼻は当今横顔をほめそやされる人の鼻よりもずっと効率的な通気孔であるというわけである。

それだから、クセノフォンの描くソクラテース<sup>(33)</sup>には微かではあるが、ほんもののアイロニーがあるということは疑えない。しかし、*eirōneiā* が *ironia* に変化するに際して決定的役割を果たしたのは、真実、ソクラテースであったということを私たちに納得させるには、クセノフォンがソクラテースについて語るところは、いくつかの重要な点において未だ欠陥を有しているであろう。

第一に、クセノフォンがソクラテースの肖像画に描き入れたアイロニーには、全くと言ってよいほどに学說的意義が認められない。それらのアイロニーはソクラテースの哲学を解明するのになら貢献するところがないのであって、それというのも、彼は、ソクラテースが自分の哲学を特徴づけるもののうちで、まさに「複合的アイロニー」として、—すなわち、クセノフォンが彼の主人公に“自分は取持ち屋であり魅力的な鼻を持っている”と言わせることで例示して見せた類いの「複合的なアイロニー」として、—理解してほしいと思っている、そうした特徴を、一貫して無視するからである。私が言っているのは、プラトンの初期対話篇のうちに聞きとれる重要な哲学的パラドックス、た

たとえばソクラテースが自分には知識はなく他人を教えたこともないと言っているような、そのような哲学的パラドックス<sup>(34)</sup>のことである。これら二つのパラドックスはいずれも、複合的なアイロニーとしての外には理解することができない。自分には何の知識もないと公言するとき、その言っているとおりのことを彼は意味しているし、また意味しているのではない。彼はこの言葉によって聞き手に、道德の領域においては自分が確実に知っている主張できるような命題は一つもないことを、納得してほしいと思っているのである。しかし「知識」(knowledge)の別の意味では、すなわち「知識」という語が正当化された真なる信念(justified true belief)、——論駁的(elenctic)議論というソクラテース独特の方法によって正当化できる真なる信念——を指示するときには、彼が知っている主張できるたくさんの命題が存在する<sup>(35)</sup>。そこでまた、私は、知識の否認と並行する教授の否認も複合的なアイロニーとして理解されるべきだ、と主張するであろう。慣習的

(conventional)意味では、「教授する」(teach)とは教師の精神から学習者の精神に知識を移譲することを言うにすぎないのであるが、この意味では、ソクラテースは、その言葉どおりのことを意味している。つまり、そうした類いの教授を彼は行わないのである。しかし「教授」に彼が与えるであろう意味においては、——すなわち、自称学習者を論駁的議論に関わらせ、彼らに自分の無知を気づかせ、自分の力で、教師が秘密にしている真理を発見できるようにすることという、——その意味においては、ソクラテースは、自分は教師である、ただ一人の真の教師であると言いたかったであろう。仲間たちとの対話は道德的自己改善に向かつての彼ら自身の努力を呼び起こし、手助けするという効果を上げるべく意図され、また事実そのような効果を上げたのである<sup>(36)</sup>。

第二に、クセノフォンのソクラテース的著作においては、*eirōneia*, *eirōn*, *eirōneuomai*という言葉がソクラテースに対して、クセノフォンその人によっても、また他のいかなる人によっても一度も適用されたことはないのである。仮に今日、クセノフォンの描くソクラテースしか伝存していなかったとすれば、ソクラテースの同時代人は*eirōneia*を優れてソクラテース的な特性と見ていた、と私たちが考える根拠は何もないことになるだろう。前出 T1 でのトラシュマコスソクラテース攻撃においては、名詞 *εἰρωνεία* とその同族動詞 *εἰρωνεύσομαι* は非常に目立っていたのだが、しかし、『思い出』のヒッピアースもこれと全く同じ非難を口にしてしているのに、このときには、それら二つの語は脱け落ちてしまっているのである。ヒッピアースが申し立てる次の苦情は、ソクラテースの *eirōneia* に対する苦情として読まれなければならない。

T7 Xen. *Mem.* 4.4.9: <sup>(37)</sup>「君は誰に対しても質問し反駁し、それでいて自分では誰に対しても説明しようとせず、あるいは何についても君自身の意見を述べようとせず、他人を嘲っているが、われわれはそうした君にはもううんざりしているのだ。」

T1におけるソクラテースの「いつもの *eirōneia*」への言及は、ここでは洗い落とされている<sup>(38)</sup>。

幸運なことに私たちにはプラトーンのソクラテース的対話篇が残されている。そこにはクセノフォンの与えなかったものが非常に豊富に提供されていて、それを全部仔細に調べ上げようとする、一冊の書物を著わさなければならないほどである。取捨選択する必要があるが<sup>(39)</sup>、私は一箇所だけに集中することにしよう。——それはプラトーンの『饗宴』におけるアルキビアデースの演説を構成する6頁ほどの箇所である。この文章はプラトーンの中期対話篇に属しているにもかかわらず、そこでのソクラテースは、間違いなく初期対話篇の哲学者である<sup>(40)</sup>。彼は初期対話篇のソクラテースに、——これは、私が第2章で論じるように、歴史的ソクラテースをプラトーンが再創造したものなのであるが、——非常に顕著な特徴となっている、知識の徹底的な否認を表明する人間として描かれている<sup>(41)</sup>。ソクラテースは『饗宴』における自身の演説で、ディオティーマの講話を、彼の公言するところでは報告しているが、それは超越的形相<sup>(42)</sup>というプラトーンの非ソクラテース的の教説を、彼の他のどの作品にも劣らず強力に肯定している。しかしアルキビアデースは、ソクラテースがディオティーマから学んだと言っている、その教説を聞いてはいない。彼はソクラテースが演説を終えた後に酒宴に加わったのである。アルキビアデースがこれから行おうとしているソクラテースに関する演説、つまり『饗宴』の掉尾を飾る演説のなかで、プラトーンは、非プラトニックなソクラテースを、——『国家』第一巻でも復活させているのだが、それと同じくらい——確実に復活させている<sup>(43)</sup>。彼は私たちを、ソクラテースという玄関から『国家』に案内し、また、私たちに付き添いながらソクラテースという後玄関から『饗宴』の外に連れ出すのである<sup>(44)</sup>。

アルキビアデースの演説のなかで鍵になる文は次のものである。

T8 *Smp.* 216E4: 「彼は *eirōneuēsthai* しながら (*eirōneuomenos*)、そして人びととふざけ合いながら、全生涯を過している。」

私たちは *eirōneuomenos* をどのように読めばよいであろうか。クインティリアーヌス (*Inst. Or.* 9.2.46) が *ironia* はたんに一つのテキストや一つの演説ではなく、「一つの生涯全体」 (*vita universa*) を特徴づけることがあると述べたとき、そのただ一つの事例はソクラテース [の生涯] であった。そこで私たちには、彼ならば、どのように当該テキストの *eirōneuomenos* を読んだであろうかということが分る。しかしそれは何度も、学者たちによって様々に読まれているのだ。ガスリー<sup>(45)</sup>は、その言葉は「ソクラテースが自分のほんとうの性格について、皆を欺くやり方」に関連すると取る。ドーヴァー<sup>(46)</sup>は、その言葉を上の T1 の *ειρωνεία* また *ειρωνεύσοτο* と同じように読み、それがここで “irony” を意味することを否定し、ソクラテースの「装われた無知」に関連すると取る。スージー・

グロドゥンは次のように訳している。

He *pretends* [my emphasis] to be ignorant and spends his whole life putting people on.

そして W・ハミルトンの訳。

He spends his whole life *pretending* [my emphasis] and playing with people.

クインティリアーヌスに従うと、アルキピアデースは、ソークラテースは生涯にわたるアイロニスト (a lifelong ironist) であると言っている、と理解できるだろう。ガスリーとその仲間たちに従うと、アルキピアデースは、ソークラテースは生涯にわたる欺瞞者 (a lifelong deceiver) であると言っている、と理解できるだろう。上に説明したとおり、当時は後者がもっともふつうの用法であったのだから、これらの学者たちのほうが正しいと推測されても致し方ないのかもしれない。そこで誰であれ、逆に、クインティリアーヌスの読み方が正しいと信じるのであれば、その人は、挙証責任を果たす必要がある。私は喜んでその責任を果たすつもりである。

しかし私は、アルキピアデースの演説のなかの、私の主張にとって等しく重要なもう一つの文から始めなければならない。というのも、この文でも決定的に重要な語は、一々の言葉のやりとりの中でソークラテースが語ったことに対してではなく、彼のいつもの特徴ある語り方に対して適用されているからである。

T9 *Smp.* 218D6-7: 「彼は僕の話をおしまいまで聞いていた。それから、非常に *eirōnikōs* に、極度に特徴のある、そしていつもの<sup>(47)</sup>言葉づかいで言った。…」

ここでグロドゥンと ハミルトンは、それぞれ次のように訳している。

“He answered in that extremely *ironical* way he always uses [my emphasis], very characteristically.”

“He made a thoroughly characteristic reply in his usual *ironical* style [my emphasis].”

かくて彼らは二人とも自分たちの方から進んで、私の欲しいものの全てを私に与えてくれる。自分たちが何をしているのか、彼らは気づいているのか。前の “*eirōneuomenos*” (T8) の翻訳——これは “pretend-s / -ing” と訳されていた、——をすっぽかしていることが彼らには分かっているのか。私は知らないし、また知る必要もない。この T9 ではプラトー

ンのテキストが“ironical”以外の訳語を許していない、ということだけを言うておく。

コンテクストを想い起してみよう。T9はアルキピアデース演説の主要部の、そのまた頂点に位置している。その頂点というのは、今ははるかな昔となった、若き日のエピソードを物語るところである。彼はその頃、いまだ「若さの盛り」(bloom)に、つまり、少年から大人の男に移行する最終の段階にあったのだが、この段階は彼らの文化においてはアルキピアデースの肉体が年長の男たちにとって最高度に魅力的となる時期であった。物語は次のように始まる。

T 10 *Smp.* 217A : 「彼はすっかり僕の若さの盛りに参っていると信じたものだから、僕はそれをもっけの幸い、すばらしい幸運と思ったのだ。だって、彼に僕の好意を与えることによって、僕は彼から彼の知っていることのすべてを学ぶことができるだろうからね。」

セックスと道徳的知恵を交換しようとする企ては、今日では信じられないことに思われるかもしれない。しかしその当時は、アルキピアデースと同じ状況に置かれた者にとっては少しもそのようには思われなかったであろう。

(1) 『饗宴』のパウサニアース演説(218D6-219A)から分るように、セックスと道徳的知恵を交換するということは、小年愛(pederastic love)の高貴な形態においては慣習(nomos)となっていた。つまり、少年は「好意」を与え、成年男子は知的で道徳的な向上を与える。

(2) アルキピアデースは、生涯を通してあの無節操な成功の大部分を自分にもたらしにくるようになった、己れの強みをすでに備えていた(、そして彼はそのことを自覚していた)<sup>(48)</sup>。その強みというのは、すばらしい美貌と優雅さ<sup>(49)</sup>である。

(3) プラトーンの他の対話篇によって<sup>(50)</sup>、またクセノフォーンによっても分るのだが<sup>(51)</sup>、ソクラテースは男性の美に非常に敏感であった。だから、セクシーな少年であれば、彼のこの敏感さに共鳴しないということはほとんどあり得なかったであろう<sup>(52)</sup>。

(4) ソクラテースは質問に答えない、また、自分の「知恵」を説明することもない。「知恵」の断片が論駁的な議論のなかにこぼれ出て、そのため、問答の相手は、ソクラテースは一体どれほど沢山の知恵を隠し持っているのだろうか、という思いのなかに置かれる。

(5) 私たちは、話し手が非常に意志の弱い人であることを知っている。彼は演説全体を次のような告白から始めている。

T11 *Smp.* 216B3-5 : 「僕は彼に反論できないということ、そして彼に命じられるままに行わなければならないということが、僕には分かっているのだ。しかし、彼から離れてしま

うと、僕は大衆の称讃にうち負かされてしまう。」

アルキビアデースは他のティーンエイジャーとは違っていた、と考えなければならない理由は少しもない。

上記5つの点を考え合わせると、「立派で高貴な人間」(*kalos kagathos*)になることを切望している少年が、その手がかりはソクラテースの知恵の膨大な秘密の蓄えのなかに隠されていると思ひ、そこで、もしも僕が、僕の知るすべての男たちを魅了する、僕自身の最上の「若さの盛り」を見返りとして差し出すとしたら、ソクラテースの方でも僕にその手がかりをそっと与えてやろうという気持ちになるかもしれない、と思ひこんだとしても不思議はないだろう。彼はこの計画を念入りに遂行した。少年を誘惑するためのその当時使われた手管の全レパートリーのなかからその一つ一つを実行してみた<sup>(53)</sup>。しかし効き目は全然なかった。ソクラテースは相変わらずやさしかったが、そこには距離があった。アルキビアデースは恋の甘くたわい無い言葉を聞きたいと思ったのに、返ってくるのは何時にも変わらぬ論駁的な議論であった。とうとう彼はソクラテースを起こして自分の計画を漏らしてしまう。彼が得た返答は次のようなものであった。

T12 *Smp.* 218D6-219A1: 「彼は僕の話をおしまいまで聞いていた。それから非常に *eirōnikōs* に、極めて特徴のある、いつもの言葉づかいで次のように言った<sup>(54)</sup>。『ねえアルキビアデース、もしも僕について君の言うことが真実であり、君をもっとよい人間にすることのできる何がしかの力が本当に僕のうちにあるとすれば、君も愚か (*phaulos*) ではないと見える。つまり君は僕のなかに、想像もできないほど美しく、君の美貌にも圧倒的に優っている何かを見ているに違いないのだ。君のしているのがこのようなものであり、美と美を交換したいというのであれば、君は僕を大いに利用し騙そうという魂胆なのだ。君は本物の美を見かけの美と、「黄金を真鍮と」交換しようと試みているわけだからね。』

ここでは *eirōnikōs* の意味が “ironically” でなければならないということは、議論の余地なく明白である、と私は思う。というのもコンテキストは、見せかけ (*pretence*) ないし欺瞞を考えるための足場にならないからである。ソクラテースは、それはいかさまだと言って、提案された取引をきっぱり断っている。彼はまず単純なアイロニーから始めている。つまり、彼はアルキビアデースに「君は愚かではない」と言っているのだが、その意味は明らかに、「君は愚かである、非常に愚かである。私が騙されて黄金と真鍮を交換するなど考えること以上に、愚かなことが一体あるだろうか」ということなのである。ソクラテースがここで真似ている『イーリアス』の一節でそうしたことが起きたとき、一グラウコスが自分の黄金の甲冑を真鍮の甲冑と交換したとき——、詩人は次のように説明している。「ゼウスは彼の知力を奪った」<sup>(55)</sup>。ソクラテースは次のようにアルキビア

デースに言っているのである。「私が君の提案を受け入れるとすれば、さだめし私は気が狂っていることであろう。君は私のことを何という愚か者だ、申し分ない馬鹿者だと考えているに違いない。私が君のその提案を受け入れるがままになるだろうと、君が考えているとすれば。」

彼は「複合的な」<sup>(56)</sup>アイロニーで結んでいる。

T13 *Smp.219A1-3* : 「でもねえ、君、もっとよく見てごらん。僕が何ものでもないということを知っていないようではいけないからね。精神の眼は肉体の眼が盛りを過ぎて初めて鋭くなるものだが、君はまだそこには全然至っていないのだからね。」

アルキピアデースは、自分の探している「黄金」が結局そこにはないということを教えられる。もしも道徳的な知恵が——アルキピアデースが理解したように——、何かと交換に手渡しできる、そういった類いのもので理解されねばならないとすれば、ソクラテースは、自分にはそのような道徳的な知恵は全くない、そのような知恵の保管所としては自分は「何ものでもない」と主張するだろう。しかし、だからといって、ソクラテースが別種類の知恵を持っているということを否定しているわけではない。この別種類の知恵というのは、もしもアルキピアデースがソクラテースを指導者 (*guru*) ではなく探究のパートナーと見て、自分でそれを探すのであれば、ただで得ることのできるような、そのような知恵のことである<sup>(57)</sup>。私たちがこの言葉のどこかに欺瞞を見出そうとするのであれば、私たち自身がその欺瞞をそこに植え付けるのでなければならないだろう。ソクラテースが非常に *eirōnikōs* にアルキピアデースに語った言葉には、彼をミスリードしようとする意思はいささかもないのである。

それでは、これまでの考察から *eirōneuomenos* (T8) の意味は確定できるだろうか？ 否。しかしその考察から、この言葉の意味もまた *eirōnikōs* (T9, T12) と同じであるだろうと推測することができる。というのも、仮にステファノス版頁付けでちょうど2ページ前の「彼は全生涯を *eirōneusthai* しながら (*eirōneuomenos*) 過している」(T8) という言葉が、ソクラテースは「自分のほんとうの性格について皆を欺きながら」生涯を送っているという考えを伴っていたとすれば<sup>(58)</sup>、その場合には、*eirōnikōs* が T9 において上述の仕方で使用されるということはあるそうにないからである。そこでコンテクストを、すなわち誘惑物語の直前の段落を精しく見てみよう。これらの段落はアルキピアデースの演説冒頭にあった有名な比喩を追求している。

T14 *Smp. 215A7-B3* : 「彼は彫像屋の作業場に置かれたシレーノス像に非常によく似ている、と僕は言いたい。…それらのシレーノス像を開いて二つにすると<sup>(59)</sup>、その内部には神々の似像のあることが明らかになるのだ。」

この文章は仮面の陰に隠れて生きた人間の、——神秘的な、謎のような人物であって、誰一人として知る者のない人間の——、真実を鮮やかに描いている。「君たちの誰も彼を知ってはいないのだということを、君たちは知るべきなのだ」(216C-D)、とアルキビアデースはソークラテースの友人たちに語る。しかし、このように言ったからといって、それは、ソークラテースがこれまで友人たちを欺いてきたと言おうとしているのでは全くない。感情や考えを表に現わさないということと、欺瞞的であるということとは同じではない。この比喩から得られるものは、隠蔽ではあっても<sup>(60)</sup>、欺瞞ではない、ということだけである。しかしたとえそうだとすると、アルキビアデースはこの喩えについての彼自身の説明のなかで欺瞞を仄めかしてはいないだろうか、と私たちは問うてみなければならない。

**T15 Smp. 216D2-5**:「君たちがご存じのとおり、[a] ソークラテースは美しい若者に恋をしていて (erotically disposed)、絶えず彼らにつきまとい、彼らにすっかり参っているのである。そしてまた [b] 彼は何も知らないし、万事について無知であるということ、これまた諸君の知るとおりだ。…これはシレーノスに似てはいないだろうか？ 然り、ものすごく似ているのである。」

ソークラテースの **eroticism** [少年の若さの盛りに異常に恋心をそそられること] への言及 ([a]) は、プラトーンやクセノフォンなどの他の箇所においても十分に裏づけられる<sup>(61)</sup>。しかしここでは、ソークラテースが美しい若者の若さの盛りを追い回すことを描写の中心に据えた後で、アルキビアデースはそれを全面的に撤回しているように見える。

**T16 Smp. 216D7-E1**:「誰かが美しかったところで、そんなことを彼はまったく意に介していないのだ、ということを、君たちは知るべきなのだ。彼がどれほどその種のことを嘲っているかということは、君たちには信じられないだろうね。」

彼は誘惑の企てが頂点に達したところで同じことを四回も述べている。

**T17 Smp. 219C3-5**:「彼はあんなにも見下し、僕の若さの盛りを軽蔑し嘲笑し、またあんなにも馬鹿にしていた。」

だからソークラテースは、一方では男性の美に「すっかり参っている」が、他方ではまたそれをまったく軽蔑もしている、と言われる。ガスリーであれば、このことを恰好の根拠にして、T8 の *eirōneuomenos* に欺瞞を読み込んだのではないだろうか？ もしもソークラテースが男性の美をあれほどまでに軽蔑しているのであれば、それを追いかけるのはい

んちき以外の何であるだろうか。

これは非常に適切な疑問である。私は真っ向からこの問題にぶつからなければならない。そのために私はソークラテースの *erōs*[恋]について少しばかり述べて、プラトーンの *erōs* から区別しておかねばならない、それというのも、ソークラテースの *erōs* とプラトーンの *erōs* の融合ということが非常にしばしば起きるからであって、——いちばん最近ではドヴァーの *Greek Homosexuality* (1978) とフーコーの *Histoire de la Sexualité, vol.2* (1985) において、そのような融合が生じている。二つの *erōs* は次の四つの点において違っている。

1. プラトーンの *erōs* においては、恋する者が美しい少年のうちに恋しているものは、この美しい少年がその似像<sup>(62)</sup> であるところの超越的な美の形相である。ソークラテースの存在論には超越的な形相は含まれない。だから、彼が美しい少年のうちに恋するものは美しい少年それだけである。

2. プラトーンの *erōs* においては、情熱的な身体の接触<sup>(63)</sup> は普通のことである。『ファイドロス』の恋人たちは触れ合い、口づけし、「一緒に寝て」「一緒に眠る」(255E)<sup>(64)</sup>。ソークラテースにおいてこれに相応するエロース的親密さ (*erotic intimacy*) は心の、ないし眼による接触に限られている<sup>(65)</sup>。

3. プラトーンもソークラテースも最終の満足を禁止したが、禁止の理由は両者において異なっている。プラトーンの場合、その理由ははなはだしく形而上学的である。というのは、彼は魂が肉体に結合されていることを一つの運命と見て、この運命は生涯を通じての訓練を、——それは現世において魂を肉体からできるだけ分離し、そうすることで死後において輪廻の苦しみから解放されることをねらっているのだが——、そうした訓練を必要としていると見るのである。しかるに性の悦びは、この努力を挫折させ、魂を肉体に「釘付けにし」、真にあるところのものへの魂の感覚をゆがめるといっているのである<sup>(66)</sup>。このような教説はソークラテースにはまったく異質無縁のものである。どの文献にも、ソークラテースがオルガスムの快樂そのものに異議を唱えたということは書かれていない。彼はただ、少年愛的結びつきにおいて追求されるようなオルガスムの快樂に対してだけ反対したのであり<sup>(67)</sup>、しかもそれは道徳的な理由によるのであって、形而上学的な理由からではなかった。彼はそれを略奪の一形態、つまり、若い男性のほうが恋する者によって食物にされ(「食い尽くされ」<sup>(68)</sup>)、恋する者の一方的な満足<sup>(69)</sup> のために利用されるという、そのような掠奪の一形態と見て、少年にとって悪いものと考えたのである<sup>(70)</sup>。

4. プラトーンの *erōs* は奔流のような勢いをもつ感情を発生させる。それは、詩人たちが、

あらゆる形態の性的激情に、——それが少年愛と少女 (lesbian) 愛と異性 (heterosexual) 愛のいずれの恋に起因する激情であろうと——、帰するところの、そうした勢いに匹敵するものである。詩人たちと同じように、プラトーンは *erōs* を「狂気」と呼び、次のように記述している。

**T18 *Phdr.* 251D-252B** : 「そしてそのようにして悦びと苦痛のあいだで、恋する者は自分が次のような奇妙な状態にあることに取り乱すのである。混乱し熱狂し、彼を襲う狂気のために夜は眠ることもできず、昼は静かに座っていることもできない。母親も兄弟も友人も皆忘れてしまい、自分の財産を顧みないために破産したところで意に介することもない。以前には誇りに思っていた規則や上品さも今はこれを軽蔑し、奴隷の境遇を喜んで受け入れ、ただ彼として精いっぱい恋人の近くにいることができれば、とにかくどこでも眠るのである。」

そのような親しみと近しさを感じさせる、恋する者のしでかす愚行を、ソクラテースの *erōs* は受け入れることができない。この *erōs* は平衡を保ち、快活でこっけい、滲刺として頑固なまでに健全である<sup>(71)</sup>。ソクラテースが性的拒食症であるというのではない、(それと反対であることを私は上で強調した、) 或いは、彼が性の悦びを幸福の経済から削除するという、キュニコス派やキリスト教の決定を先取りしているというのでもない。ソクラテースは自身に認めたわずかな悦びでさえ、それをおおっぴらに追求し、少しも気後れするところがなかったし、どんな場合でもその悦びが自分の手に負えなくなるのではないだろうかと懼れることもなかった。というのも、彼の魂の力学においては、それは比べようもないほどに強い駆動力の場の中に保持されていたからである。アルキビアデースが、かつて垣間見た、サテュロスのごとき下卑た外見に隠された、「神の似像」を語る段になると、彼の言葉は恍惚とした響きを帯びてくる。言葉は、煌めく、感情を喚起する、形容句の揺らぎのなかに溶融する。

**T19 *Smp.* 216E-217A** : 「僕がかつてそれらの似像を見たことがある、そしてそれは非常に神々しく、黄金で出来ていて、申し分なく美しく、素晴らしいもののように思われたのだ。」

ソクラテースがおのれの魂の内に秘めている、この目もくらむばかりに眩しく魅惑的なものは何であるのか。それはソクラテースの *sōphrosynē* [節制] だと、アルキビアデースは言う。

**T20 *Smp.* 216D7-8** : 「だが、飲み仲間諸君、彼を二つに開いてみると、その内部がどれほどの *sōphrosynē* に満ちているか [が分かるだろう]。」

しかしそれが *sōphrosynē* だけであるということはほとんどありえないであろう。というのもこれは誰の眼にも見えているものであるから。ソクラテース以外の誰にも見るのでできないものは、*sōphrosynē* のうちに彼が見出した幸福である、と私は言いたい。これこそは彼にとって、肉体の美やその他のいかなる現世的な善きもの——健康、富、名誉、生命それ自体——から得られるであろうと彼に思われたものよりも、はるかに魅惑的なものであった。だから彼は、これらの善きもののいずれについても、それをそれだけの価値のものとして愉しみ、それぞれのうちに満足ないし喜びの僅かではあるが美味しい分け前——それだけであって、それ以上ではない、——を賞味し、もしもそれがその分け前以上のものを約束した場合には、それに対して鼻に親指を立てた（それを「軽蔑した」）。最大の熱情は一切の小さな熱情を楽々と支配することができる。近頃ではフーコーにならって、恋 (love) に関する西洋の全ての論説において、「性は人を不安にさせる難題である」と言われている<sup>(72)</sup>。もしもこのとおりであるとすれば、ソクラテースは例外である。私たちがプラトーンからソクラテースの *erōs* について学んだところによれば<sup>(73)</sup>、この *erōs* には不安 (*inquiétude*) は全く存在しないのである<sup>(74)</sup>。

以上のことを考慮すると、ソクラテースが若者の「若さの盛り」に戯れるということに欺瞞や見せかけを読み込むのは、恣意的な読み方だということが判る。ソクラテースの *erōs* は、アルキピアデースが T15 の [b] で彼に認めたのと同じ種類の複合的なアイロニーとして理解することができる、——すなわち「何も知らないし、万事について無知である」という言葉がそうであるような複合的なアイロニー。「自分は何も知らない」と主張するとき、ソクラテースはその言葉どおりのことを意味しているし、また意味しているのではないのだが、ちょうどそれと同じように、彼が若くて美しい男性への恋に魅せられている (*erotically attracted*) と言うときも、彼は言っているとおりであることを意味しているし、また意味しているのではないのである。少年愛の世間一般に (*currently*) 理解されている意味においては、彼はアルキピアデース<sup>(75)</sup> を、また彼が追い求めている他のどんな若者をも恋してはいない。しかし、恋すること (*erān*) がソクラテースの *erōs* の学説と実践において持っている別の意味においては、ソクラテースは彼らを恋しているのである。彼らの肉体の美は、彼と彼らの精神との愛情深い出会いに添えられる特別な薬味である。だから「自分はアルキピアデースを恋する者である」(*G. 481D*) と他人に向かって言うときに、そして同じことを、アルキピアデース本人に言うときにも、——彼は疑いもなくそう言ったのである、——そこには何らの見せかけも欺瞞も存しないのである。

「しかし、あのように軽薄な若者たちに言い寄れば、彼らは日頃、アテーナイの有力者たちのおべっかを聞いて、そのせいで頭がくらくらしているから、必ずや欺かれるだろう。だから結局は、ソクラテースは故意に欺くという罪を犯しているのではないか？」このようにひとは言うであろう。他の場合はどうであったのか、それについては私たちは積極

的な情報を何一つ持ち合わせていない。しかしアルキビアデースの件については、自信をもって返答するに十分な資料があるのである。そのとおり、アルキビアデースは欺かれた。というのも、そうでなければ、彼が若さの盛りと知恵を交換するなどという、あのような気違いじみた計画を企むことはなかったであろうし、そのことに長い間こだわるといふこともなかったであろうから。彼はそのことに執着したけれども、ソークラテースは誘いのことを拒み続けた。彼は欺かれた、しかし誰に？ ソークラテースではなく、自分自身に欺かれたのである。彼が自分の行動を信じたのは、それを信じたかったからである。私たちがそんなことだろうと思ったかもしれない。だが推測は無用、まさに彼自身の物語るところから、自分自身に欺かれるということが起きたと判るのである。T12でソークラテースは申し出に対して「否」と言っている。禅の老師は愚かな質問に対すると、棒を質問者の頭に力いっぱい打ち下すことで答えるであろう。ソークラテースの拒絶も、老師の「否」と同じくらいに断固としたものであった。アルキビアデースは自分の計画が拒否されていることを覚らざるを得なかった。だがそれでも彼は、拒否されているとは思いたくなかった。彼はまるで「うん」とか、或いはそうでないまでも、せめてものことに、「さあどうだろう」とでも答えられたかのように、ソークラテースの寝椅子に入りこんだ。そして、これがあのと起きたことであつたとすると、ソークラテースはアルキビアデースを欺いた、彼は、この若者に自分が求めているのは肌を触れ合う恋 (skin-love) であると思ひこませようとして、それを言葉や行動に表わしたのだと、私たちが信じてよい理由は少しもないのである。

しかし私は問われるかもしれない。「たとえそうだとしても、上の説明から次のように推定できないであろうか。つまり、ソークラテースはあの晩よりもずっと前に少年の頭の中で起きていることを知っていて、しかし知っているのに、この若い友が自己欺瞞に耽るのを、それを追い払うために断固とした行動に出るといふことも全くなく、自分から進んで放置したのだと。」この疑問に対しては、確かにそのとおりである、と答えなければならない。あの夜以前に何度もソークラテースには、アルキビアデースに対して、君は馬鹿なまねをして物笑いになっている、自分の願望的思考に騙されている、と説明する機会はたつぷりとあつたであろう。だがソークラテースは何も言わなかった。毎日、彼は見守り、沈黙し続けた。何故そうしたのであろうか。筋の通った答えをしようとすれば、次のように答えるほかない。つまり彼は、アルキビアデースには真実を自分の力で突きとめて欲しかったのである。アルキビアデースへの彼の恋にはアイロニーが含まれていて、それは最初から謎を投げかけていた。そして苦痛に満ちたあの長い屈辱の夜に、少年がソークラテースの——そして彼は氷の塊であつた！——隣で裸のまま、苦勞して答えを見出すまで、そのアイロニーは続いたのである。

この第1章は、“irony”と“*eirōneia*”という二つの語の意味についての探究であつた。そしてそのかなりの部分は、アルキビアデースの演説に現れる *eirōneia* のたった二つのト

ークンの意味に当てられた。その一つのトークンは *eirōneuomenos* (T8) であり、他は *eirōnikōs* (T9) である。しかしこの探究の及ぼす影響はさらに遠くにまで達している。そこでそうした影響について一言述べて、結論に代えることにしよう。

プラトーンのスークラテス的対話篇を私たちが勉強するときに、つねに心に重くのしかかってくる問題がある。それは、この対話劇の主人公は討論の戦術として相手を欺くことも辞さなかったのかという問題である<sup>(76)</sup>。もっとも熱心なソークラテス研究者のなかには、彼が討論の相手を欺くのを当然のことと考える者もいる。キルケゴールにとってソークラテスは、ソフィスト術から繰り出すアイロニーによってソフィストを騙し、真理を認めさせるアンチ・ソフィストであった<sup>(77)</sup>。パウル・フリートレンダーにとって、——この人の三巻本のプラトーン研究書は同時代に刊行されたどの学術書にも劣らぬ学識に溢れたものであったが——、そのフリートレンダーにとってソークラテスは「真理を認識する者は認識しない者よりもいっそう巧みに欺くことができるという事実と、故意に欺く者は故意にではなく、心ならずも欺く者よりもいっそう優れているという事実とを証す生き証人」なのである(1964: 145)。こうした見方の影響は広い範囲に及んでいる。それはプラトーンに関するマイケル・オプライエンの見事な著作<sup>(78)</sup>の核心部分にも、また、多くのすぐれた研究<sup>(79)</sup>の端々にも見て取ることができる。しかし、そうした見方に対する明白な異論は、プラトーンがソークラテスをして次のように語らしめるところに含まれているのである。

T 21 G. 458A-B: 「僕はと言え、僕は、あなたが僕と同じ種類の人間であるという前提を立てた上で、あなたに対して喜んで反対尋問を行うだろう。そうでないならば、僕はあなたを立ち去らせるだろう。では、その人間というのは、どんな種類の人間なのだろうか。僕は、もしも真実でないことを言ったときには反駁されることを喜び、もしも他人が真実でないことを言ったときには彼を反駁することを喜ぶような、しかし、反駁するよりは反駁されることの方を、——自分から最大の災悪を取り除くことの方が他人から最大の災悪を取り除いてやることよりもいっそう善いわけで、だからその分だけ、より多く、——喜ぶような、そんな人間の一人なのだ。というのも、僕たちが今議論している事柄について誤った信念をもつことほど、人間にとって災悪なことが何か他にあるなどということは、僕には信じられないのだ。」

この言葉は上に挙げた学者たちにはおなじみのものである。私たちは彼らに、あなたがたはこの言葉の誠実さを疑っているのかと、そして、疑ってはいないということを請け合うかどうかを、尋ねてみよう。さてその次には、以下のように尋ねてみよう。もしもソークラテスという人は、真理が相手側にあるときには、議論に勝つよりもむしろ負けるほうを望むのだとすれば、偽りの前提やソフィスト的推論を忍ばせることで彼にはどんな得があるのだろうか、と。この議論は決定的なものであるはずなのだが、しかし、次のような

言葉を私たちに返してくる学者たちの前ではまったくの失敗に終わる。彼らは言うのである、——あなたがたは、まさにそのような議論をすることで、今までアイロニーを解することなくプラトーンの手紙を読んできたということを暴露しているのだ、と。彼らは言う、——哲学的言説の通常の様式においてなら有りえないであろうことも、アイロニカルな様式においては普通のことになりうるということ、これは分りきったことだろう。もしもソクラテースがソフィストたちにしつこく用いたソフィスト的詭弁が、アイロニカルなものであるとすれば、ソクラテースがソフィスト以上のソフィストであるということは、少しも逆説的ではないのだ、と<sup>(80)</sup>。

本論考において私は、こうした見方の基にあるアイロニー理解の誤りをはっきり掴もうと努めてきた。この目的のために私は、西洋のすべての言語における、“irony”に相当する生きた言葉の、——そして、キケローの“*ironia*”はそうした生きた言葉の最初のものであるのだが——、第一の、現実の意味に立ち返ったのである。哲学者によって発明されるすべての用法（、ここにはキルケゴールがヘーゲルから取り出した「無限の絶対的否定性」という用法も含まれる<sup>(81)</sup>、）がそこから派生しているところの、この第一の用法においては、アイロニーは単に、私たちが言おうとする(mean)こと[A]と反対のこと[non-A]を言う(say)ことによって、言おうとすること[A]を表現するという意味にするにすぎない。これは私たちが始終行っていることである、——子供ですらそれを行っている、——そしてもしもそれを行うことを選択するならば、私たちは、まさにそれを選択したことによって、欺瞞的に語るという選択肢を失っているのである。そうではないと考えるのは、*ironia*を*eirōneia*と誤解し、誤解することで、前者が後者から発展してきた、その過程を逆転させ、ソクラテースに対して、彼に名声をもたらした主要な諸資格の一つを拒むことなのである。その資格というのは、彼の西欧的感性への貢献ということであり、これは、西欧の道徳哲学に対する彼の貢献と同様に記憶すべき業績なのである。

しかしこの探究の過程で、私は当初当てにもしていなかった或る事実を偶然に発見することになった。それは、プラトーンが描くソクラテースの人格(*persona*)は、キルケゴールの天才とフリートレンダーの学殖がともに読み込んだものを私たちが説明する際に手助けしてくれる、という事実である。私が精査してきたあの小さな証拠の切れ端から、いかにしてソクラテースは欺こうと意図することなしに欺くことができたのか、ということが理解できるのである。いま、君は若いアルキビアデースであって、ソクラテースに言い寄られているのだと仮定してみよう。その場合、ソクラテースの謎かけのアイロニーをどのように解釈するかは決定は、君自身の考えに委ねられているであろう。もしも君が道を誤り、彼がそれに気づいたとしても、彼は君の誤りを追いつくためには指一本たりとも動かさないかもしれない。まして、その誤りを君の頭から叩き出してあげなければならない、と感じることもないかもしれない。もしも彼のアイロニーが些細な事柄について言われたのであれば、こんな事態に立ち至っても、君は何も重大な害悪を被らないだろ

う。しかしそれが最重要の事柄についてのアイロニーであったとすれば、どうであろうか。——彼は君を恋しているのか、それとも恋していないのか？ 彼は「君を恋している」と言う (says), しかしその言葉は謎であって、つまり、ある一つの意味に取るか否かを君の自由に任せておいて、しかし彼の意図としては (are meant), 君にそれとは別の意味に取ってほしいと望んでいるというような、そんな謎をソクラテースは投げかけているのだ。そして彼は、君が道を間違えていると気づいても、君をそのままに放っておくのだ。君は何と言うだろうか。僕が真実に気づくということにあなたは関心がないのだ、とは、君はよもや言わないだろう。そうではなく、君はこう言うだろう、あなたは別のことにもっと関心があるのだ<sup>(82)</sup>, それは、もしも僕が真実に気づくとすれば、僕は僕一人の力でそれに気づかなければならないということなのだ、と。

プラトンのソクラテース的対話篇において道徳的自律の概念が明るみに出るということを決してない<sup>(83)</sup>。しかし、だからといって、この概念はそれらの対話篇におけるソクラテースの最も深いところにある、最も深遠な事柄であることを止めているわけではない。また、それがソクラテースの諸々の道徳的関心事のなかで最も強いものであるということにも何ら変わりはないのである。彼の考えの基礎にあるのは、私たちの話すほとんどすべてにおいて、私たちは解釈の負担を聞き手の側に押しつけている、という事実である。ある文を語る時、私たちは、その文をどのように受け取るべきかについて、注釈を付け加えるということとはしない。そうした仕方では聞き手から解釈の負担を取り除くことはできないであろう。というのも、それは終りのない仕事になるだろうから。つまり、それぞれの注釈は同じ問題を引き起こし、一つの注釈にはまたそれについての別の注釈が、というように、注釈は無限に存在しなくならなくなるであろうから。ソクラテースのアイロニーは、すべての有意義な意思疎通に内在する自由の負担を認めている、という点でユニークなのではない。それは、あの「[解釈を予測する] ゲーム [sc. 話し手の言葉を聞き手がいかに解釈するかを、話し手が言い当てるという賭け] に西洋の他のどの哲学者よりも多額の金銭を賭けた、という点でユニークなのである。ソクラテースは、彼と私たちがそれによって生きなければならない道徳的知識は、かつて理解されたり、否それどころか想像されたりした、ありうべき道徳的知識とはまるで違っている、と言っているのではない。彼は、ただ、呪わしいことに、自分には道徳的知識は無い、と言う (say) だけである。そして彼は、そのことは何を意味し (mean) うのかというパズル [sc. 謎かけのアイロニー] を自分で解くようにと、私たちを放り出すのである。

#### [注]

- (1) この論考は元々ケンブリッジ大学古典学部 B Club のために執筆され、コーネル大学

- (Townsend Lecture) とコロンビア大学 (Trilling Seminar) において口頭発表され検討されてきたものである。本論考を現在の形にまとめる上で私はいくつかの論評から影響を受けた。それらの論評をお寄せくださった方々に感謝申し上げる。
- (2) *Institutio Oratorica* 9.22.44. ほとんど同じ定義が 6.2.15 と 8.6.54 にも登場する。
- (3) Muecke, 1969 : 15-19 の諸見本は、—それらの中のいくつかは申し分のない珠玉の見本ではあるのだが—、この種類に属する純粹の実例をまったく含んでいない。この優れた書物にも、また別の優れた書物、Booth, 1974 にもアイロニーのこの次元は気づかれていないのだから、まして探索されているわけではないのである。
- (4) εἶρων が古典期における悪口の言葉 (*Schimpfwort*) であったことについては、Ribbeck の画期的な論文 (1876 : 381ff.) を参照せよ。後続の研究がこの論文に取って代わるものではないので、私はそれら諸研究を論評することは控えておく。
- (5) Dover (1968) *ad loc.* in his invaluable edition of the *Clouds*.
- (6) ἡ γένει γενναία σοφιστικῆ (「家柄の高貴なソフィスト術」), 231B.
- (7) *N. E., E. E., M. M.* においてソークラテースは、そのような人間として言及されている。しかし恐らく *Rhet.* ではそうではないであろう。ここでは εἰρωνεία は「軽蔑されるべき」特性 (καταφρονητικόν, 1379b31-2) と見なされている。
- (8) 同一のものが中核に存している。つまり、アリストテレスでは προσποιήσις ἐπὶ τὸ ἔλαττον, *N.E.*1108a22 が、テオフラストスでは προσποιήσις ἐπὶ τὸ χεῖρον, 1.1 が存するとされるのであって、それゆえ、いずれの場合にも装うこと (ないし、見せかけ (pretence)) が存しているのである。
- (9) 「そのような人間はまむし以上に避けられなければならない」(1, *sub fin.*)。
- (10) 「彼は聞いているのに聞かなかつたと、見たものを見かなかつたと、同意したことを全然覚えていないとうそぶく」(1.5)。
- (11) 「彼は裏では攻撃し面と向かってはほめるだろう」(1.2)。Friedländer (1958 : 138) が、テオフラストスは εἰρωνεία を描写しても、「価値評価していない」と言っているのには呆れてしまう。ここに引用した言葉や前の注で引用した言葉以上に強い否定的評価がありうるだろうか。ソークラテースを圏外に置くことによって、テオフラストスはふつうの見方からすれば当然浴びせても構わないと思われる軽蔑を憚ることなく εἶρων に浴びせている。
- (12) 君にとって最も危険な敵は、「物静かで本心を隠し (dissembling), 平気で悪事を働く人間である (οἱ πρᾶτοι καὶ εἴρωνες καὶ πανούργοι)。彼らは平静な外見の下に邪悪な意図を隠している」(*Rhet.*1382b21)。
- (13) Bloom (1968) と Grube (1974) は “irony” が εἰρωνεία と εἰρωνεύσοιο の意味であるとしている。Shorey (1930) も “irony” が εἰρωνεία の意味であるとしている (彼は *Symp.* 216E に言及しているが、この箇所については後に論じる)。しかし彼は後者

の訳語については説明もなしに “dissemble” に変えている。彼は英語の “irony” の意味について混乱し支離滅裂になっているのではないかと私は思っている。というのも彼はそれが “dissembling” を意味すると解しているのだから。

- (14) 一応満足できる翻訳については, Lindsay, 1935 (“slyness”), Cornford, 1945 (“shamming ignorance”), Robin, 1956 (“feinte ignorance”)を調べてみよ。

“shamming”, “feigning”がここでの意味であることは, コンテキストから全く明らかであろう。

- (15) Plato, *Ap.* 38A1 への彼の注において:「(プラトーンにおける) εἴρων, εἰρωνεία, εἰρωνεύομαι は, ソクラテースに対しては彼の敵対者たちだけが用いていて, つねに好ましくない意味を有している。」Burnet は *Ap.* 38A1 の εἰρωνευόμενον を見落としてはいない。Allen の翻訳 (1984) においても同じ意味:「あなた方は, 私がずる賢く不正直であると考えるだろう。」しかし Burnet は『饗宴』のアルキピアデースの演説におけるこの語の注目すべき二つの用例 (後に論じる) をいずれも無視している (或いは「誤解している」?)。

- (16) 1948: 451, n. 1: 「[プラトーンにおいて] [イロニーが] ソクラテースに述語づけられる場合, それは常にソクラテースを非難する述語である。Smp. 216E のアルキピアデースもまた, ソクラテースを非難して εἰρωνεύομενος と言っている。」彼も Burnet (前注) も, Ribbeck の *R.* 337A についての議論に何らの注意も払わなかった。しかし Ribbeck は, この箇所の εἰωθυῖα εἰρωνεία の意味を正確に捉えている。

- (17) 「プラトーンではそれは, トラシユマコスのような辛辣な敵対者やソクラテースが誰に対しても自分の本当の性格を偽るそのやり方に怒った振りをして見せる人 (Smp. 216E, 218D のアルキピアデース) の口から話されるときには, 悪い意味を保持している」(Guthrie, 1969: 446)。Guthrie は, *Ap.* 38A1, οὐ πείσεσθέ μοι ὡς εἰρωνευόμενον を付け加えることもできたであろう。ソクラテースは, 神託物語から得た「命令」とこの物語そのものが不正直な虚構として受け取られるであろうと予期している。しかし Guthrie は *G.* 489D-E (次の T2 のテキストについて論ずる予定) にまったく注意していない。そして *R.* 337A の εἴρων-は *Smp.* 216E また 218D のそれと同じ意味であると想定している。

- (18) 私の訳は Croiset & Bodin, 1955 に従っている。Woodhead の “You are ironical” は, [a] ではまずまずの訳ではある。というのも, ここではソクラテースの嘲笑はじじつアイロニカルであるから。(それは話者が真実であると信じていることとは反対のことを語るという形式を取っている。) しかし [b] ではそのような訳文は全く採れない。というのも, カリクレースのソクラテースへの嘲笑はアイロニーではないから。Irwin の “sly” もよくない。というのは, 言葉の調子やコンテキストには特に “cunning, wily or hypocritical” (*O.E.D.* の “sly” の説明) といったところはないから。[a] の意味につい

での Ribbeck の理解の仕方も退けねばならない。彼は εἰρωνεύῃ に「言い抜け、ごまかし」を読み込んでいるが、それは理解できないことである。しかし [b] の εἰρωνεύου についての Ribbeck の評釈（「偽りの、不誠実な、ほめ言葉を使用することによる嘲笑の一つの形式」）には全く悪いところはない。その評釈は、ここでの εἰρωνεύεσθαι の用法を Pollux 2.78, καὶ τὸν εἴρωνά ἔνιοι μυκτῆρα κάλουσι と、そして 諷刺詩人 Timon のソクラテースへの言及 (fr.25D, ap. D.L.2.19), μυκτῆρ ῥητορόμυκτος[,] ὑπαττικὸς εἰρωνευτῆς とに結びつけているが、これは正しい。Ribbeck は [b] について次のように述べている。「したがって、その当時の εἰρωνεύεσθαι についての理解は一般に想定されているよりももっと広がったに違いない」(loc. cit.)。彼はこの「もっと広い」用法をよりはっきりと特定すべきであっただろう。εἰρωνεύεσθαι は、欺瞞を少しも仄めかすことなく、嘲笑そのものを表現するために用いることができるということを彼は把握しなかったように見える。そうでなければ、「言い抜け、ごまかし」が [a] の意味になるであろうか？

(19) Long はこれをアリストテレスの論考だとした（ベルリン版アリストテレス著作集にこれを含めた）。その後この論考の著者は、テオフラストスと同時代の Anaximenes of Lampsacus とされるようになった（Loeb Classical Library, 1973 所収の H. Rackham による翻訳に彼が付けた序論 (p. 258 ff.) を見よ）。Lampsacus を著者とするのはまったく不確かなことであるが、しかし彼よりもずっと後にこの論考が成立したということもまたありえない。その言語的また政治的な雰囲気は四世紀アテナイのそれであって、イソクラテースの *Technē Rhētorikē* を反響させている。この論考の中の 8 個の断片は編者によって三世紀前半のものとしてパピルスに現れている（Greenfell & Hunt, *Hibeh Papyri* pt. 1, no. 26, pp. 113 ff.）。

(20) Cope, 1867: 401 ff. は、この書の推奨する説得の形式は、「トリックやごまかしや言い抜けの体系であり、正邪あるいは真偽に対するまったくの無関心を現わしている」と述べている。

(21) ある言語において、アイロニカルな言語行為が出現することと、この言語行為をアイロニカルと記述する手段が利用できるということは無関係であることを、読者は想起すべきであろうか。アイロニーを使用するという事は、それについて思索することとは別のことであって、遠い昔から為されていたのである。私たちは一人の穴居人が仲間堅いステーキを差し出して、「この柔らかいのをちょっとやってみろよ」と言うのを想像することができるだろう。ホメーロスにも例は十分にある。（エウマイオスが「乞食」に対して [言う]。「もしもわしがお前さんを殺したとすれば、人びとの間でわしのよい評判が立ち、立派な奴だと言われることだろう。」 *Od.* 14.402. 彼が言っているのはそれとは正反対のことである。）

(22) 前掲の注 15, 16, 17 を見よ。

(23) *Smp.* 216E4.への彼の注釈を参照。「εἰρωνεία は (‘irony’ とは異なって) 『見せかけの謙遜』, 『装われた無知』 のことである。 *Rep.* 337A ではトラシユマコス は (全然友好的でない口調で) 『ソクラテースのいつもの εἰρωνεία』 と言う。」 ドーヴァーは εἰρωνεία が二つの箇所と同じ意味で使用されていると想定している。

(24) “Urbane is the dissimulation when what you say is quite other than what you understand. ... In this irony and dissimulation Socrates, in my opinion, far excelled all others in charm and humanity. Most elegant is this form and seasoned in seriousness.” T5 の *dissimulatio* を “dissembling” と翻訳するときには、(私たちは辞典に十分な裏付けがあるので、そのように訳すかもしれないが、) 次の点に留意しなければならない。それは、英語の “dissembling” によって通常伝えられているような、他人を欺くために隠すという意味は、キケローが注目している言い回しには欠落しているという点である。他人を欺く話し方は彼が *urbane dissimulation* と呼ぶものではないであろう。「そのような都会風に雅に隠すことにおいては、君の話の全体的な調子から、君が思っているのと違うことを話しながら真面目にふざけている (*severe ludens*) ということが明らかである」 (*loc. cit.*)。

(25) これは非常に徹底的な変化であったので、キケローやクインティリアヌスの視野から、その元の意味を覆い隠すほどであった。その隠蔽は全面的であるように思われる。*ironia* についての彼らの発言からは、私たちは、彼らのよく知っているテキストにおいてその原語の εἰρωνεία が悪口の言葉 (*Schimpfwort*) であったとは決して推測できないであろう。ソクラテースという範型の権威はキケローにとって決定的なものであったから、彼はその語によって、単に、「ソクラテースに見出される・・・あの *ironia*, すなわち、ソクラテースがプラトーンやクセノフォーンやアイスキネースの対話篇のなかで効果的に活動させている *ironia*」 (*Brutus*, 292) を理解している。そしてクインティリアヌスが「*ironia* はある人の生涯全体を特徴づけることがある」と述べるとき、彼はソクラテースに、そしてソクラテースだけに言及しているのである (*Inst. Or.* 9.2.46)。

(26) 彼は自分では曲った議論を教え込むことはしないが、そうした議論の求めには、これを迎え入れている。彼はこの曲った議論とその反対の議論 (δίκαιος λόγος と ἄδικος λόγος) の両方を店舗に常備していて、客はいずれでも選ぶことができる。Cf. Nussbaum, 1980 : 48 : 「劇の最初から最後までソクラテースは、正義を教授し弁論の技の正しい使用法を強く勧めるということは試みない。彼の態度はよくても中立的であり、最悪の場合には他人を欺くことを許容している。」

(27) *Clouds*, 359 (Arrowsmith [1962] 訳) .

(28) キルケゴール (Kierkegaard, 1965, notes 58-9 & 64 ) は、カリクレースとの対話 (1.2.36) やヒッピアースとの対話 (4.4.6) のなかでアイロニーが閃いていることに注

目している。

- (29) ここではキルケゴールの嗜好が、いつもは間違いを免れているのに、彼を見棄てている。この逸話は彼を「うんざりさせる」ものであった。
- (30) 彼は彼から離れることのできないアポロドーロスとアンティステネースの名前を、そして彼をしばしば訪れるテーバイのケベースとシミアースの名前もまた挙げている (3.9.17)。
- (31) この作品のアイロニーを鋭く批評したものとして、酒宴での振舞いについての Higgins, 1977 : 15-20 のコメントを見よ。同じ資料を詳細に論じたものとしては、Edelstein, 1935 : 11-12 も見よ。ただしまったく奇妙なことに、彼女はそれがアイロニーであるとは気づいていない。
- (32) 私はこの用語をここで、そしてこの後も本書を通じて準専門用語として使用し続けるつもりである。私はこの用語を Vlastos, 1985 : 1 ff. at 30 において導入したのだが、そこに立ち戻ることにする。
- (33) そこでキケロー (*Brutus* 292 : cf. 前注 25) がプラトーンの対話篇に加えて、(アイスキネースと)クセノフォンの対話篇におけるソークラテースの *ironia* について語っているのも理解できる。しかしキケローが *ironia* を描写するために向うのはただプラトーンの対話篇だけであり、そしてそうすることにおいて、彼が注視している(「万事について無知」 *omnium rerum inscium* である)ソークラテースは、アイスキネース的人物ではあったかもしれないが、クセノフォン的人物ではありえなかったということは明白である。Aeschines fr. 11 を見よ。(これは後出 additional note 1.4 に翻訳され第3章の T21 としても引用されている。)  
「私はそれをとおして、それを彼に教授することにより、彼を益することのできるような、知識は何ももたない。」
- (34) これら二つの複合的なアイロニーと、それらに密接に関連する第三の複合的なアイロニーについては、additional note 1.1 を参照せよ。
- (35) このように主張するための基礎となるテキストについては、Vlastos, 1985 (pp. 6-11) に相当詳しく述べてある。
- (36) 彼は、自分は「真の政治術を企てている (*ἐπιχειρεῖν* : cf. additional note 1.1, n.21), ただ一人のアテナイ人とは言わないまでも、少数のアテナイ人の一人である」(*G.* 521D), と言っている。この言葉は、ある人が政治術を実践しているか否かは、その人が自分の同胞市民の道徳的性格のうえに効果を上げているか否かによって判定される、というようなコンテキストにおいて発言されている (*G.* 515A)。いずれのテキストも additional note 1.1 で論じられる。
- (37) このヒッピアースの言葉は第3章の T24 では、その全てが引用されている。
- (38) それにまたクセノフォンにおいては、ソークラテースの問答の相手を務める者も誰も、ソークラテースは εἶρων であると明言することも、また暗に言うことも決してな

い。そこではソクラテースは、友人であれ敵であれ、彼らの上に、プラトーンのアルキピアデースの上に引き起こしたような、つまり、いつものように特徴ある仕方アイロニカル（後出 T9 の εἰρωνικῶς の意味。これについては T9 に注釈する際に論じるであろう。）であるという印象を生ぜしめる者としては決して描かれていないのである。クセノフォーンの『饗宴』でソクラテースが、自分は取持ち屋であり、美しい容貌をしていると語りかけている相手の人間は、勿論、彼がアイロニカルに語っていることは理解している。しかし、彼らは、これをソクラテースのいつもの習慣的な特性として認識しているということは全く示唆しないのである。

- (39) しかし第 5 章第 II 節も参照せよ。
- (40) ソクラテース描写という観点から見た（、文学的成果を分かつための）二つの時期の間の多種多様な相違点については、第 2 章で論じられるであろう。
- (41) 216D (=T15) : 「彼は何も知らないし、万事について無知である。」
- (42) 第 2 章第 III 節で論じられる。特にその T22 についての注釈を見よ。
- (43) additional note 2.1 (『国家』第一巻の構成) を見よ。
- (44) 同様に『ファイドーン』でも、真正のソクラテースの材料が、これまた同様に真正のプラトーンの哲学的議論を導入し (57A-64A), そして仕上げる (115A から最後まで) ために使用されている。
- (45) Guthrie, 1969: 446.
- (46) 前注 23 を見よ。
- (47) εἰωθότως. この語については、前出の T1 における εἰωθυῖα εἰρωνεία を参照せよ。
- (48) 217A5-6, 「僕は自分の若さの盛りに自惚れていた。」
- (49) Cf. W. Ferguson in the *Cambridge Ancient History* v (Cambridge, 1935), 263 : 「彼は注目を集めるほどに美しかったので、アテネの男たちから、他の社会においてなら並はずれて美しい女性に対して与えられるのが通常であるところの評価と特典を受けとった。そしてその尊大さを彼は非常に魅力的な振舞いで飾ったので、彼が神々にも男たちにも、老人にも権威にも、後見人にも妻にも尊敬を表わさなかつたときも、その行為の無法ぶりはしばしば忘れられ、ただ行為者の外見や雰囲気のみが思い出されるだけという有り様であった。」
- (50) *Prt.* 309A; *G.* 481D; *Chrm.* 155C-E; *Men.* 76C1-2.
- (51) *Xen. Smp.* 8.2.
- (52) クセノフォーン (*Mem.* 3.11.3) は貴重な情報を加えてくれる（、これはプラトーンからは決して得られないものである）。それによると、ソクラテースは女性の美に対しても敏感であった。肌もあらわなテオドデーを見てソクラテースは（自分自身と仲間を弁護して言っている）、「僕らが目にしているそのものにどうにかして触れてみたい、僕らは興奮し (ὕποκνιζόμενοι), 恋いこがれたまま (ποθήσομεν) 立ち去るだろう。」

- (53) 但しここでは、役割が逆になっている。つまり少年のほうが追いかけているのであって、追いかけているのではない。
- (54) T12 の最初のこの部分は上に T9 として引用された。
- (55) *Il. 6. 234.*
- (56) *pp. 31-2 & additional note 1.1.*
- (57) 『ラケース』におけるソクラテースの行動を参照せよ。ソクラテースは道徳的知恵を需めに応じて与えるようにと頼まれるが、そのような道徳的知恵を彼は強く否認している。「彼はそのようなことがらについての知識は持っていないし、[それについて] あなた方のうちのいずれが真実を話しているかを判断する能力も持っていない。彼はその種のどんなことがらの発見者でも学習者でもなかった」(186D-E)。しかしラケースが教えを求めて自分自身をソクラテースに提供するとき(189C)には、ラケースは歓迎を受ける、——それは、他の誰かから知識を注いでもらうためではなく、ソクラテースとの「共同の協議と探究」(συμβουλευεῖν καὶ αὐσκοπεῖν ——前綴りは問題となっている関係の協働的本性を二度続けて伝えている)に参加するためである。
- (58) Guthrie, 1975 は伴うと取る。
- (59) 限りなく貴重なものを顕わにするために、——それは俗衆の眼には隠されているものだが、——「完全に開く (open up)」というイメージは、216D6, 216E6, 222A でも繰り返される。Martha Nussbaum は、プラトーンによって使用される限りでのこのイメージは「本質的に性的」(1986: 189) であると考えるのであるが、しかし彼女のこの考えを支持する根拠を、これらのテキストのどこにも私は見出すことができない。性的関係において恋人が有する独特の形式の知識が獲得される、という同氏の思想には深遠な真理が存している。このような知識への私たちの欲求においては、「性的要求と認識論的な[知識の]要求とは結合され、明らかに分離できない」と彼女は言っている(1986: 190)。しかし、プラトーンのテキストにはかかる思想をそこに読み込むことを保証してくれるようなものは何もない。アルキピアデースは 216D-E において、彼の飲み仲間に、ほんとうのソクラテースが性的関係を通して、彼や彼の仲間に顕わにされる(「完全に開かれる」)であろうとは示唆していないのである。
- (60) ソクラテースの *ironia* のキケローによる記述に現れる *dissimulatio* についての私の注釈(前出注 24)を参照せよ。
- (61) 前出注 50, 51 と Dover, 1978: 154-5 とにおける参照箇所への指示を見よ。
- (62) あるいは “namesake” (ἐπωνομίαν, *Phdr.* 250E3) また “likeness” (μειμημένον, *ibid.* 251A)。
- (63) これは「節度のない馬」の性欲を強く刺激して、この馬をして性の悦びを求めて騒ぎ立てるように仕向ける、と述べられている(255E-256A)。
- (64) この 肉体的関係 (physical intimacy) は、『ファイドロス』のテキストでは極め

てははっきりとしているのに (cf. Vlastos, 1974 and 1981: 39), プラトーンの *erōs* について説明がなされる際にそれが指摘されることは滅多にない。Wilamowitz, 1948: 368-9 (cf. 前出注 16); Gould, 1963: 119; Guthrie, 1975: 405 においては, それは無視されている。初期の翻訳はプラトーンの言葉の真意を曖昧にし, その意図を隠蔽している: Jowett では, συγκατακείσθαι は “embrace” に, ἐν τῇ συγκαομίσει は “when they meet together” になっている。

(65) クセノフォーンにおいては, 魅力的な若者との身体的接触に対するソクラテースの恐怖心は強迫的なものであった。(可愛らしい顔にキスすることは「ただちに自由人であることをやめて奴隷になること」である, *Mem.* 1.3.11. 彼の裸の肩が美しいクリトブロースの裸の肩に一瞬でも触れようものなら, 彼はまるで「野獣に咬まれた」ような影響を被った。彼の肩は何日もひりひり痛んだ, *Xen. Smp.* 4.27-8.) しかるにプラトーンにおいては, ソクラテースは美しい少年と肌を触れ合うことへの恐怖を全く表わさない。アルキビアデースと裸で相撲を取るということは「しばしば」起きたことである。もっともそれは, ただアルキビアデースの主導のもとでのことに過ぎないのではあるが (*Smp.* 217C)。そしてプラトーンの話篇には, ソクラテースが「恋人の」若者との間での身体的愛情表現を促していると思わせるような箇所はどこにもないのである。

(66) 第2章の注 42, 43 を見よ。

(67) Cf. *Xen. Mem.* 2.6.22: ソクラテースは「若さの盛りの少年がもっている性的魅力を悦ぶような人たち」に対して, 「それを拒まれている人びとを苦しめないために」少年の魅力に抵抗するように勧めている。

(68) *Chrm.* 155D-E: 「そして僕はキュディアースが *erōs* の様々な道についてどれほど適切に理解しているかを考えてみた。彼はある人に美しい少年に関する助言をして, 次のように警告したのだ, 『子鹿をライオンに近づけ過ぎてはいけな, ライオンは子鹿の肉を食い尽くしてしまうからね』と。また *Phdr.* 241D: 「狼が子羊を好むように, 恋する者は少年に恋をする。」

(69) *Xen. Smp.* 8.19: 大人の男は「自分のためには快楽を, 少年にはもっとも恥ずべきことを取っておく。」 *Ibid.* 21 (一部は E. C. Marchant にならった翻訳): 「少年は女性のように男性と性の悦びを共にするのではない。少年は素面の状態で恋に酩酊する相手を眺めている。」

(70) Cf. additional note 1.3 on ἔρωος καλός.

(71) それはプラトーンの話篇でも, またクセノフォーンの話篇でも, そのように描かれている。また, Aeschines Socraticus によるアルキビアデースの名前を冠した話篇 (fr. 11 Dittmar: その全体は additional note 1.4 に引用し論ずることとする,) で, ソクラテースのアルキビアデースへの ἔρωος に言及する箇所も, プラトーンやクセノフォーンと異なる話をしていてではない。

(72) Michael Ignatieff, in his review of M. Foucault, *Histoire de la Sexualité* in the *Times Literary Supplement*, 28 Sept., 1984, p. 1071.

(73) ただクセノフォンによれば、そうではない。というのも、身体的接触へのあの強迫的な恐怖心 (cf. 注 64) が不安の徴候であることは確かであろうから。この点については、他の点についても同じであるが、クセノフォンの証言がプラトーンのそれと食い違ったときにはプラトーンの証言を採るのが賢明であろう。ソークラテースとの直接の交わりは、プラトーンの場合のほうがはるかに親密であったと信ずべき十分な理由があるからである。

(74) ソークラテースの ἔρωσ へのこの根本的な特色は、キルケゴールからフーコーに至る、私の知るそれについての全ての説明において見落とされてきたものである。キルケゴールはロマン的空想のために、ソークラテースの ἔρωσ のうちに「熱情的混乱」を読み込んでいる (1965:88)。プラトーンにおける「真実の恋」(le véritable amour) についてのフーコーの議論は極めて洞察力に富むものであるが、それでも “l'Érotique socratique-platonicienne” (vol.2 of *Histoire de la Sexualité*, 1985) というハイフン付きの表現に残存している盲点を露わにしている。プラトーンの ἔρωσ の孕む不安は『フェイドロス』のなかに脈打っている。戦車を駆る御者と良いほうの馬は、悪いほうの馬が彼らに対して禁忌とされている極悪非道の所業を強要することのないようにと「甚だしく悩む」(254A)。彼らはただ、「その穢れなき玉座についている」(254B) 美の形相の幻が折りよく回帰してくることによってのみ救われる。

(75) Cf. *Prt.* 309A1-D2: ソークラテースは、自分がアルキピアデースの若さの盛りを「追いかけて」きた (παιδραστία における求愛の標準的な隠喩) ことを認めつつ、次いでそれをアイロニーのなかに包んでしまう。

(76) この問題は第 5 章でもっと詳しく論じられるだろう。

(77) 「ソークラテースはプロタゴラスを騙して、彼からあらゆる具体的な徳目を奪い取った。各々の徳目を一に還元することによって、彼はその徳目を完全に解消してしまう。しかるにソフィスト術とは、彼にこのことを為さしめる力のうちにあるのである。したがって、ここにはソフィスト的対話術によって産み出されるアイロニーと、アイロニーのうちに安らうソフィスト的対話術とが同時に存在している」(1965:96)。

(78) O'Brien, 1967. 私たちのソークラテース理解への彼の貢献も、脇道にそれてしまっている。というのも、著者はソークラテース的対話篇に存するアイロニーの使用法を誤った仕方で適用し、ソークラテースの最も根本的な学説のいくつかを、進んで放棄しようとしているからである。例えば、もしも *Prt.* 352D4 の καλῶς が、その言っていることの反対を意味しているとすれば、ソークラテースの *akrasia* 不可能説の全体が失われるであろう。アリストテレスの証言を引用したところで無駄であろう。この証言に対しては、アリストテレスもまた問題のアイロニーを理解しそこなっていると反論するこ

とで対応できるだろう。

(79) いちばん最近では、Charles Kahn (1983 : 75 ff.)。彼はソクラテースがポーロスを「騙し」て反駁したこと (90) について語っている。この議論の私自身の分析 (Vlastos, 1967 : 454 ff.) の彼による記述、すなわち「ソクラテースはポーロスを騙した」という記述を、私は受け入れないだろう。私は、ソクラテースの議論が故意に誤ったものであるとの示唆に対して反論したのである。私は第5章第III節でこの問題に戻ることにする。

(80) 前注77のキルケゴールを参照。

(81) Kierkegaard, 1965 : 276 *et passim*. ソクラテースのアイロニーについての彼の論じ方は、目もくらむような神秘化によって絶望的なまでに混乱している。そうした神秘化に誘惑されたために、彼は自分では注釈を付けているのだと言っているが、プラトーンのとテキストのなかに空想的短編物語風の気まぐれを発見するのである。「アイロニーに必然的に伴う偽装と神秘性 …… それが帯びる無限の同情、捕まえどころのない名状しがたい理解の瞬間、直ちにそれにとって代わる誤解への不安」等 (85)。

(82) この論考の以前の版では私は、「恋の不在」(failure of love) を説明のために提出していた。Don Adams は当時コーネル大学での私のセミナーの参加者であったが、彼は私に、この説明の方向が誤りであることを納得させてくれた。ソクラテースがアルキビアデースに真実を自分の力で苦勞しながら突きとめてほしいと望むということは、この若者への彼の恋と完全に両立しうる。

(83) 伝存するソクラテース文献のどれにおいても、*αὐτονομία* が道徳的な(あるいは政治的な)面に応用されることは決してない。

#### 参考文献

- Allen, R. E. (1984). *The Dialogues of Plato* (translation with analysis), vol. 1, New Haven
- Arrowsmith, William (1962). *The "Clouds" of Aristophanes*, translated with introduction and notes, Ann Arbor
- Bloom, A. (1968). *The Republic of Plato*, translated with notes and an interpretive essay, New York
- Booth, Wayne C. (1974). *The Rhetoric of Irony*, Chicago
- Burnet, John (1924). *Plato's "Euthyphro", "Apology of Socrates" and "Crito"*, Oxford
- Cope, E. M. (1867). *Introduction to Aristotle's Rhetoric*, London
- Cornford, Francis M. (1945). *The "Republic" of Plato*, New York

- Croiset, A., and Bodin, L. (1955). *Gorgias and Meno* in *Platon, Œuvres complètes*, vol. III, part 2, text and translation, Paris
- Dover, K. J. (1968). *Aristophanes, "Clouds"*, Oxford
- (1978). *Greek Homosexuality*, Cambridge, Mass.
- (1980). *Plato Symposium*, Cambridge
- Edelstein, Emma (1935). *Xenophontisches und platonisches Bild des Sokrates*, Berlin
- Friedländer, Paul (1958). *Plato*, translated by H. Meyerhoff, vol. 1 : *An Introduction*, London (2nd.edn., 1969)
- Foucault, M. (1985). *The History of Sexuality*, vol. II : *The Use of Pleasure*, translated by R. Hurley, New York
- Gould, Thomas (1963). *Platonic Love*, London
- Grube, George (1974). *The Republic of Plato*, translation, Indianapolis
- Guthrie, W. K. C. (1969). *History of Greek Philosophy*, vol. III : *The Fifth-Century Enlightenment*, Cambridge
- (1975). *History of Greek Philosophy*, vol. IV : *Plato, the Man and His Dialogues : The Earlier Period*, Cambridge
- Higgins, W. E. (1977). *Xenophon the Athenian*, Albany, N. Y.
- Irwin, T. H. (1979). *Plato's "Gorgias"*, translated commentary, Oxford
- Jowett, B. (1953). *The Dialogues of Plato translated into English with Analysis and Introductions*, 4 vols., 4<sup>th</sup> edn., Oxford
- Kahn, Charles (1983). "Drama and Dialectic in Plato's *Gorgias*", *Oxford Studies in Classical Philosophy* I
- Kierkegaard, Soeren (1965). *The Concept of Irony*, translated by Lee Capel, Bloomington, Ind.
- Lindsay, A. D. (1935). *The Republic of Plato*, Everyman's Library, London
- Muecke, D. C. (1969). *The Compass of Irony*, London
- Nussbaum, Martha (1980). "Aristophanes and Socrates on Learning Practical Wisdom", *Yale Classical Studies* 26 : 43-97
- (1986). *The Fragility of Goodness*, Cambridge
- O' Brien, M. J. (1967). *The Socratic Paradoxes and the Greek Mind*, Chapel Hill
- Ribbeck, O. (1876). "Über den Begriff des *Eiron*", *Rheinisches Museum* 31 : 381 ff.
- Robin, Léon (1956). *Platon : Œuvres complètes*, translated with notes, Paris
- Shorey, P. (1930). *Plato, Republic*, vol. 1, translated with introduction, London
- Vlastos, G. (1967). "Was Polus Refuted ?", *AJP* 88 : 454-60
- (1974). "Socrates on Political Obedience and Disobedience", *Yale Review* 63 : 517-34

(1981). *Platonic Studies*, 2<sup>nd</sup> edn., Princeton

(1985). “Socrates’ Disavowal of Knowledge”, *Philosophical Quarterly* 35 : 1-31

Wilamowitz, Ulrich von (1948). *Platon : Sein Leben und seine Werke*, 3<sup>rd</sup> edn. by Bruno Snell, Berlin

Woodhead, W. D. (1953). *Plato, Gorgias*, translated in *Socratic Dialogues*, Edinburgh

(Gregory Vlastos, *Socrates Ironist and Moral Philosopher*, ch. 1. Socratic irony, Cambridge University Press, 1992, pp. 21-44.)

(※) この翻訳の第一稿は、2010年度後期、2011年度前期「哲学演習(一)」のために作成し教材としたものです。「文字どおり」拙い訳文を読んでもくれた学生諸君に深く感謝する。このたび上梓するにあたり、再度検討を加えました。その際、本学部教授富澤直人先生から英語学上の、また英文の読み方に関するご教示をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。【了】



# 中世叡尊教団の薩摩国・日向国・大隅国への展開 ——薩摩国泰平寺・日向国宝満寺・大隅国正国寺に注目して——

松 尾 剛 次

## はじめに

奈良西大寺叡尊を中心とする叡尊教団は中世において日本全国に末寺を展開し、叡尊の時代には1500箇寺もの末寺があった<sup>1</sup>。ここでは、南九州<sup>2</sup>の薩摩・日向・大隅3国における叡尊教団に注目するが、とくに薩摩国泰平寺、日向国宝満寺と大隅正国寺に光りを当てる。というのも、本文で述べるように3寺ともに、おのおの薩摩、日向、大隅3国における叡尊教団内で第1位の寺格を誇る末寺であったからだ。とりわけ、薩摩国泰平寺と日向国宝満寺は両寺ともに、室町幕府の利生塔設置寺院であった<sup>3</sup>ように、室町時代には薩摩・日向での一大拠点寺院だったからである。

## 第1章 薩摩 泰平寺

J R九州新幹線で、鹿児島中央駅から1駅目が川内（鹿児島県川内市）である。川内は薩摩国国府が置かれ、国分寺や一宮が所在したように薩摩国の中心であった。島津師久・伊久の頃には川内の碓山城を根拠として薩摩国守護所が所在した。

泰平寺は、現在の川内市泰平寺に所在する<sup>4</sup>。現地に立つと、真南に川内川が見え、川内川を押さえる寺であったと考えられる。かつては、太（泰力）平橋まで船がのぼったという<sup>5</sup>。

現在の泰平寺は、近世の阿弥陀如来をまつる本堂1つの寺院であるが、奈良時代には、元明天皇勅願の寺といわれる程、栄えていた。中世においては、室町幕府が66国2島に置いた利生塔が設定された寺で、室町幕府にとって、薩摩における極めて重要な寺院であった<sup>6</sup>。戦国時代においても、九州征伐に赴いた豊臣秀吉が陣所を置いたほどの設備を有していた。

明徳2（1391）年に書き改められた「西大寺末寺帳」には、以下のように薩摩国において唯一の直末寺（西大寺から直接住持が任命される寺）として記載されている<sup>7</sup>。

薩摩国  
泰平寺

すなわち、薩摩国における叡尊教団の最大の拠点寺院であった。この寺の歴史については、『川内市史 上巻』<sup>8</sup>が詳しいが、問題が多い。それゆえ、『川内市史 上巻』を批判的に継承しつつ、私見を述べる。

泰平寺は、明治維新の廃仏棄釈によって無住となり、大正時代に復興して現在にいたっている。それゆえ、寺宝・古文書類も失われ、唯一、大黒天が残っているくらいである。しかし、幸いなことに、『三国名勝図会 第一巻』の「泰平寺」の項<sup>9</sup>には、当時、泰平寺に残っていた文書類などに基づいた詳しい記述がある。

『三国名勝図会』は、天保14（1843）年12月に編集されたもので、明治38（1905）年12月、島津家臨時編輯所の山本盛秀の名義で、もと全60巻という浩瀚なものを、20冊の和装本にまとめて出版された<sup>10</sup>。いわば、薩摩藩研究のバイブルとなっている。

そこで、まず、『三国名勝図会 第一巻』に基づいて、歴史を叙述してみたいが、『三国名勝図会』では、とても詳しく記述されているので要点をまとめると以下のようになる。

- (1) 泰平寺は、医王山正智院という元明天皇勅願寺で、和銅元（708）年の創建という。薬師如来を本尊とし、法相・天台・真言・律の4宗兼学の寺院であった。
- (2) 中世には、勅願寺に復し、足利直義によって、利生塔が設定され、所領が寄附された。宗派は律宗であった。
- (3) 利生塔は、9尺5寸もある五輪塔で、暦応3（1340）年2月に立てられ、境内の東側に、現存する。
- (4) その後、応永15（1408）年に教源によって復興がなされた。
- (5) 中世末になると衰退し堂舎も破壊されたが、享禄3（1530）年3月3日に死去した真言僧の宥海法印によって復興がなされ、以後、真言宗となった。宥海を中興開山とする。
- (6) 天正15（1587）年、宥印が住職の時には、九州征伐に来た豊臣秀吉が当寺を陣所とした。こうした『三国名勝図会 第一巻』の指摘を中世に関して再検討してみよう。

### 第1節 西大寺末寺としての泰平寺

西大寺末寺としての泰平寺に注目した場合に、まず、いつ西大寺末寺となったのかが注目される。それについては、西大寺関係者の物故者名簿といえる「西大寺光明真言過去帳」<sup>11</sup>が参考になる。

光明真言会は叡尊が文永1（1264）年9月4日に西大寺建立の本願称徳女帝の忌日を期して開始した法会である。7昼夜にわたって亡者の追善、生者の現世利益のために光明真言を読誦する法会であり、諸国の末寺から僧衆が集り、西大寺内に宿泊して法会を勤修する叡尊教団の年中行事の中で最大のものであった。「光明真言過去帳」は、光明真言会にさいして1臈・2臈の役者が真読、すなわち、声を挙げないで全体を読むべき過去帳で、書き継がれてきた<sup>12</sup>。

この「光明真言過去帳」によれば、泰平寺関係者で、最初に出てくるのは、史料(1)のように行円房である<sup>13</sup>。

## 史料(1)

## ○當寺第六長老沙門澄心

道忍房 保延寺	如性房 永興寺
寂勝房 戒泉寺	寛宗房 西琳寺
舜律房 當寺住	本乗房 雲富寺
照觀房 金剛宝戒寺	浄生房 弘正寺
本智房 當寺住	○本光房 極楽寺長老
圓印房 鷲峯寺	本圓房 興法院
行圓房 泰平寺	鏡智房 西光寺
如道房 報恩寺	禪修房 長福寺

(中略)

## ○當寺第七長老沙門信昭

すなわち、貞和3(1347)年9月5日に死去した第6代西大寺長老澄心静心房と、文和元(1352)年3月2日に死去した第7代長老信昭静観房<sup>14</sup>の間に、「行円房 泰平寺」と記されている。その間に、行円は死去したのであろう。

ところで、この行円は、後述するごとく、まさに、暦応2(1339)年の利生塔設置時期には、泰平寺の長老、住持であった。とすれば、「光明真言過去帳」に、泰平寺関係者で最初に出てくる人物であった行円こそ、泰平律寺の開山であったのかも知れない。

この行円がどんな人であったのかについては、史料が少なくははっきりしない。可能性のある人物として西大寺観尊の直弟子名簿である「授菩薩戒弟子交名」によれば「大和国人 祐実 行円房」<sup>15</sup>がいる。「授菩薩戒弟子交名」では、389人中で366番目に記されている。すなわち、おそらく、当時は若かったはずである。弘安3(1280)年時点で、20歳余とすれば、80歳まで生きていれば、泰平寺の行円房とは、大和出身の祐実ということになる。可能性を指摘しておこう。

行円房の他に、「光明真言過去帳」には、史料(2)のように、泰平寺明空房が、應永30(1423)年7月25日に死去した西大寺第24代長老元空と、永享2(1430)年8月2日に死去した西大寺第25代長老榮秀<sup>16</sup>との間に記載されている<sup>17</sup>。それ以後は、泰平寺関係者の名前はみられない。

## 史料(2)

## ○當寺第廿四長老沙門元空

興信房 律成寺	春鐘房 仙澗寺
覺恵房 長安寺	尊證房 常光寺

尊通房 當寺住	聖壽房 大乘寺
宗運房 法光明院	暁光房 大御輪寺
永賢房 大日寺	明空房 泰平寺
律國房 浄光寺	善心房 寶泉寺

(中略)

○當寺第廿五長老沙門榮秀

永享8(1436)年の「坊々寄宿末寺帳」には泰平寺は見えない<sup>18</sup>が、先述のように『三国名勝図会』によれば応永15(1408)年には教源による復興がなされたようなので、その頃には、西大寺末寺を離脱したのであろう。さらに、享禄3(1530)年3月3日に死去した真言僧の宥海法印によって復興がなされるにいたり、真言宗寺院となったのであろう<sup>19</sup>。

## 第2節 利生塔寺院泰平寺と五輪塔

泰平寺の歴史において、とくに利生塔が設定されたことは大いに注目される。泰平寺が、足利・北朝方にとって極めて重要な寺院であったのだらう<sup>20</sup>。また、この利生塔が設定されたのは、泰平寺が律寺、とくに西大寺直末寺の時であった。

すなわち、『三国名勝図会 第一卷』には史料(3)~(7)の文書が引用されている<sup>21</sup>。

史料(3)

舍利奉納文曰

奉安置泰平寺塔婆

仏舍利二粒

右於六十六州之寺社建一国一基之塔婆，恭任申請，為勅願，仍奉請東寺仏舍利各奉納之

伏翼，皇祚悠久，衆心悦怡，仏法紹隆，利益平等，安置之儀，旨趣如件

<sup>(1339)</sup>  
曆応二年曆応二年八月十八日 左兵衛督源朝臣直義花押

史料(4)

院宣曰

薩摩国泰平寺塔婆事，為勅願之儀，遂修造之功，可奉祈天下泰平者，院宣如件，仍執達如件

<sup>(1339)</sup>  
曆応二年曆応二年十月十一日 按察使維願

行円上人御房

史料(5)

院宣曰

寺領興行事，任代々奉寄候，可有沙汰，甲乙人押領之所々以下，相尋在庁官人等，委可注進由，被仰下也，

史料(6)

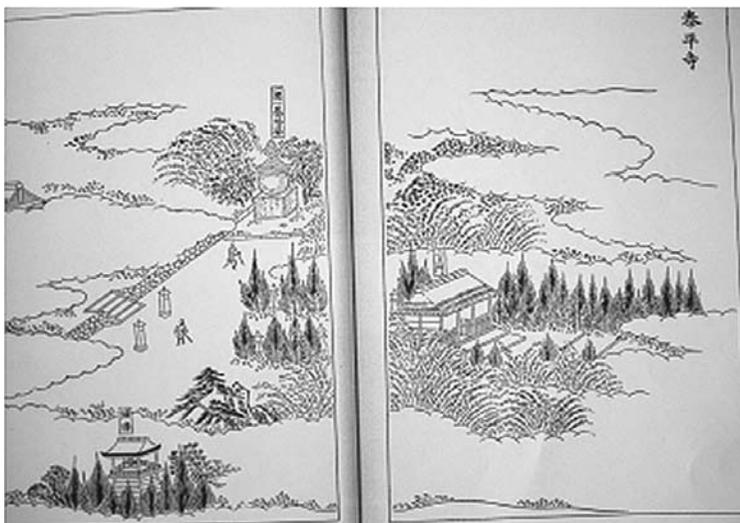
足利直義副書曰

薩摩国泰平寺塔婆事，院宣如件，為六十六基之随一，寄料所，可造立，可被存其旨之状如件，  
曆応二年十月十四日 左兵衛督花押  
泰平寺長老

史料(3)から史料(6)は，薩摩利生塔が泰平寺に立てられる経過を示している。まず，確認すべきは，通常，利生塔とは三重塔ないし五重塔と考えられている<sup>22</sup>。たとえば若狭神宮寺に設定された利生塔の場合，「曆応三年正月一日，仏舍利二粒，一粒は東寺，当寺の三重塔婆に奉納す」のように，三重塔に仏舍利2粒が納められた<sup>23</sup>。その中に東寺の舍利1粒と他の舍利1粒が納められていたのである。そうした利生塔が立てられた寺院には，所領が寄附された。

こうしたことを踏まえて史料を見ると，史料(4)から，薩摩利生塔の責任者は，先述した泰平寺行円であったことがわかる。また，先述のように，行円は泰平律寺の開山長老であった可能性がある。

ところで，泰平寺の利生塔については，従来，川内市史は，『三国名勝図会 第一巻』の説に従って，『三国名勝図会 第一巻』に描かれた巨大五輪塔（約2メートル85センチ）を利生塔に比定する。



図(1) 『三国名勝図会 第一巻』に描かれた泰平寺

それには、史料(7)のような銘文が記されていたという。

史料(7)

塔婆銘文曰

奉造立五輪塔一基

右志趣者、法界衆生殊一結講衆等菩提記也、仍所修如件、曆応三年二月時正、勸進、沙弥成道、大檀那善行

すなわち、史料(7)より、すべての衆生、とくに一結講衆の菩提のために暦応3(1340)年2月に、五輪塔が建てられたことがわかる。

たしかに、五輪塔造建の時期が暦応3(1340)年、利生塔の方が暦応2(1339)年であり、時期的に近接している。だが、通常の利生塔の例から判断して、利生塔は三重塔ないし五重塔であったはずで、五輪塔とは異なる。

おそらく、五輪塔は、『三国名勝図会 第一卷』が書かれていたころにも存在し(図(1))、史料(3)史料(6)にあった利生塔に、間違っ五輪塔が当てられたのであろう。

別稿で述べたように、中世の叡尊教団(西大寺とその末寺)では、2メートルを超える巨大五輪石塔が作られた。それらは、地輪の形の共通性から大きく3系統に分けられる<sup>24</sup>。本五輪塔も叡尊教団のものであり、残っていれば、貴重な文化財であるのに、現存しないのは惜しまれる。

ところで、泰平寺は、川内川のほとりに立っていた。南門を少し行くと川内川にゆきあたる。そこは大門口という船着き場であったという。そこまで、船が来ていた。

そもそも、中世の律宗寺院は、橋や港の管理を任されていた。鎌倉極楽寺と和賀江津、博多大乗寺と博多港、橋寺放生院と宇治橋などがその例である<sup>25</sup>。おそらく、川内川(それに掛かる橋)も泰平寺が管理していたのでろうと推測できる。

川内川は、川を境に隼人支配地との境界であったという。古代の泰平寺は、隼人支配の宗教的な拠点として建てられたのであろうか。中世においては、戦略上の拠点である川内川を押さえる泰平寺が重視されたのであろう。

## 第2章 日向志布志宝満寺

次に日向宝満寺(鹿児島県志布志市志布志町帖に所在した)に注目しよう。宝満寺についても優れた研究がなされてきた<sup>26</sup>が、叡尊教団の展開の視点から再検討してみる。

### 第1節 西大寺末寺志布志宝満寺の再興と展開

宝満寺の歴史については、『三国名勝図会』<sup>27</sup>、『志布志記』<sup>28</sup>、『宝満寺文書』<sup>29</sup>などを駆使した『志布志町誌 上巻』<sup>30</sup>が詳しく、かつ、きわめて実証的である。それによれば、宝満寺は、秘山

密教院宝満寺といい、中世島津莊救仁院志布志における重要な寺院であった。

聖武天皇の神亀年間(724～729)に皇国鎮護のために勅願寺として創建されたという。その後、源頼朝が九州の諸侯伯に命じて本堂にその肖像を安置し、鎌倉から鶴岡八幡宮を勧請して鎮守としたという。正和5(1316)年には鎌倉極楽寺忍性の弟子信仙房英基によって復興され、以後、奈良西大寺末寺として栄えた。元応2(1320)年に本尊如意輪観音が奈良西大寺から下向し、本堂に安置された。観音の蓮台には、「元応二年庚申九月十九日造功畢、南都於西大寺開眼、願主光信左衛門尉入道長教」と記され、「光信は原田入道、左衛門尉入道は仲津川左衛門、長教は不明」という。暦応3(1340)年には、足利直義によって舍利が奉納され利生塔寺院に設定される程であった。以後も、西大寺末寺であったが、明治の廃仏毀釈によって廃寺となったという。ここでは、他の史料にあたって、再検討してみよう。

『大宰管内志』(下)には、「志布志記略」を引用して、「諸縣郡志布志密教院宝満寺者花園院之勅願所也、鎌倉極楽寺ノ開山忍性菩薩之弟子信仙上人英基和尚、正和五年開此寺、為開山、此寺律宗而南都ノ西大寺京都ノ泉涌寺両山ノ末寺也、寺領三十一石五斗六升」<sup>31</sup>とある。

すなわち、それによれば、宝満寺は正和5年に極楽寺忍性の弟子信仙房英基によって開山され、花園天皇の勅願所であった。叡尊教団は、衰退した旧寺を復興することが多いので、信仙坊英基によって再興されたのであろう。

この正和5年の信仙による宝満寺の再興に関しては、「宝満寺文書」により、具体的となる。すなわち、正和5年付けの安藤蓮聖による打渡状があり、得宗領であった志布志津と密接な関連を持つ寺として再興されたと考えられている<sup>32</sup>。この点は、次章で述べる。

#### 史料(8)<sup>33</sup>

深聖房	浄土寺	○善願房	極楽寺長老
賢律房	當寺住	舜忍房	成願寺
信仙房	寶満寺	蔵性房	東光寺
願教房	安養寺	観宣房	當寺住
禪密房	西琳寺	圓法房	浄光寺
修真房	最福寺	實行房	尺迦寺
浄勇房	常光寺	○了心房	戒壇院長老

史料(8)は、前章で触れた「光明真言過去帳」の一部である。嘉暦元(1326)年8月10日に死去した極楽寺長老善願坊<sup>34</sup>と、元徳元(1329)年10月3日に死去した戒壇院長老了心房<sup>35</sup>との間に、宝満寺信仙房が記載されている。

それゆえ、正和5年に宝満寺の再興を開始した信仙房英基は、嘉暦元(1326)年8月10日から元徳元(1329)年10月3日までの間に亡くなったのであろう。

信仙房の活躍によって、宝満寺は西大寺の直末寺、すなわち、長老が西大寺から直接任命される寺院として発展していった。

往時には、宝満寺内の支院として光明院，吉祥院，妙特院，観音院，弥勒院，小塔院の6寺があり，志布志には九品寺という末寺もあったという<sup>36</sup>。

明德2（1391）年に書き改められた「西大寺末寺帳」には

史料(9)<sup>37</sup>

日向国

志布志

宝満寺

宝泉寺

とある。

すなわち，宝満寺は，明德2年には日向国における西大寺直末寺の筆頭であった。なお，第2位の宝泉寺がどこにあり，いかなる寺院であったのかなどは不明である<sup>38</sup>。

史料(10)<sup>39</sup>

東室三

天王寺

薬師院

摂州

吉祥寺

紀州

光明院

九州日向国

宝満寺

勢州

圓明寺

同神崎

極楽院

賀州

西光寺

また，史料(10)のように，永享8（1436）年3月日付けの「坊々寄宿末寺帳」によれば，西大寺光明真言会に際して，「東室三室」に泊まる末寺として宝満寺があがっている。それゆえ，永享8年までは，西大寺末寺として，奈良西大寺の光明真言会に参加していたのであろう。

史料(11)<sup>40</sup>

(婆)

奉安置日向国宝満寺塔□

仏舎利二粒 一粒東寺

右、於六十六州之寺社、□□国一基之塔婆、忝任申請、既為勅願、仍奉請東寺仏舎利、各奉納之、伏冀皇祚悠久、衆心悅怡、仏法紹隆、利益平等、□置之儀旨趣如件

曆応三年正月一日 左兵衛督源朝臣直義 (花押)

史料(11)によれば、曆応3 (1340) 年に足利直義により利生塔が設置された寺院であったことがわかる。なお、奉納された仏舎利は、現在、田中家に伝わるという<sup>41</sup>。



図(2) 田中家に伝わる仏舎利

史料(12)<sup>42</sup>

日向国島津庄内宝満寺塔婆事、為六十六基□随一、寄料所可令興隆也、可被存其旨之状如件

曆応三年三月廿七日 左兵衛督源朝臣直義

当寺長老

史料(13)<sup>43</sup>

日向国宝満□□□事、為勅願之□□修造之功、殊可□□天下泰平者、院宣如此、仍□□□□

曆応三年四月八日

舜律上人御□

史料(12)も史料(13)も、利生塔寺院設定に関わるものであり、いずれも宝満寺長老に宛てられたと考えられる。

それゆえ、史料(13)の舜律上人が、暦応3（1340）年時点での宝満寺長老であったと考えられる。おそらく、信仙房のあとを継いだ第2代長老であろう。

史料(14)<sup>44</sup>

○當寺第六長老沙門澄心

道忍房 保延寺 如性房 永興寺

寂勝房 戒泉寺 寛宗房 西琳寺

舜律房 當寺住 本乗房 雲富寺

照観房 金剛宝戒寺 浄生房 弘正寺

本智房 當寺住 ○本光房 極楽寺長老

(中略)

當寺第七長老沙門信昭

この舜律上人に関しては、先の「西大寺光明真言過去帳」に、西大寺第6代長老澄心と同第7代長老信昭との間に挙がっている。

澄心は貞和3（1347）年9月5日に亡くなっている<sup>45</sup>。信昭は文和元（1352）年3月2日に亡くなっている<sup>46</sup>。それゆえ、舜律はその間に亡くなったと考えられる。舜律には、「当寺住」と注記があり、宝満寺ではなく、最後は西大寺で亡くなったと考えられる。だが、暦応3年頃は宝満寺長老であったのだろう。宝満寺長老は、西大寺によって任命されており、本寺にもどることもあったのであろう。

## 第2節 宝満寺を支えた人々

### 第1項 光信五輪塔

ところで、宝満寺の裏山の住職墓地には、数多くの五輪塔がある。とくに、小ぶりだが花崗岩製の光信五輪塔は注目される。

この光信五輪塔は、佐藤氏によって発見されたものである<sup>47</sup>。すなわち、本五輪塔の地輪の部分には、「元徳二年 キリーク 沙弥光信」とあることから、光信によって元徳2（1330）年に立てられたと考えられている<sup>48</sup>。また、先述した元応2（1320）年に本堂に安置された本尊如意輪観音の蓮台部には、「元応二年庚申九月十九日造功畢、南都於西大寺開眼、願主光信左衛門尉入道長教」と記されていた<sup>49</sup>が、その光信を五輪塔の光信と同一人とされる。

同一人物とする指摘は説得力があるが、光信を信仙の後を継いだ第2代長老と推測される点は支持できない。というのも、光信は半人前の沙弥に過ぎず、長老は比丘でなければならない。ところが、先述のように、信仙房は1326～29年の間に死去しており、元徳2年には、光信は長老でなければならないが、その当ても沙弥であった。しかも、先述のように舜律房が第2代



図(3) 光信五輪塔

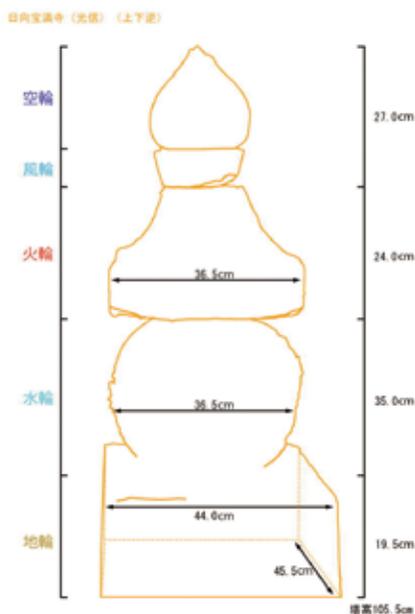
佐藤聖氏は、様式が西大寺様式の五輪塔であるとされ、関西からもたらされたと推測されている。

長老と考えられる。それゆえ、沙弥光信は、宝満寺信者の在家沙弥であったと推測したい。

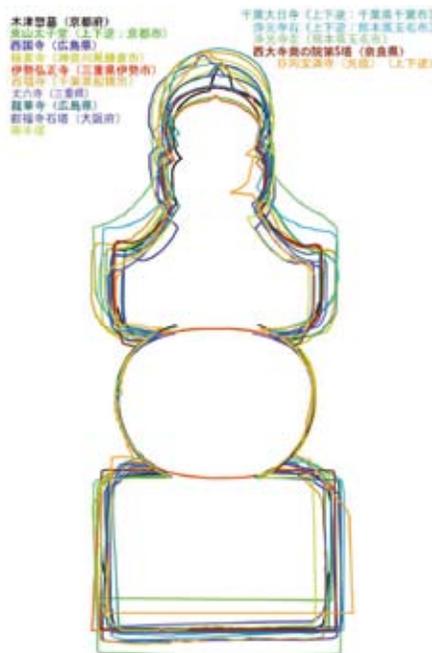
ところで、「志布志記」<sup>50</sup>「三国名勝図会」<sup>51</sup> いずれも、光信を原田入道とする。残念ながら、その根拠が示されていないが、観音の蓮台に記された願主三人について、「光信は原田入道、左衛門尉入道は仲津川左衛門、長教は不明」とし、「長教は不明」と指摘するように、その記述は実証的である。

宝満寺には、現在は失われた古文書がかつては数多く残っていたようなので、光信を原田入道とする文書があったのかもしれない。

さて、光信の五輪塔は、以下のような、寸法の五輪塔である。地輪幅 44cm、奥行 45.5cm、高さ 19.5cm 水輪幅 36.5cm、高さ 35cm、火輪幅 36.5cm、高さ 24cm。但し風輪と空輪は合わせて高さ 27cmだが、別石である。



図(4) 光信五輪塔線画



図(5) 木津惣墓系五輪塔

先述したように、水輪の形に注目すると、西大寺様式の五輪塔は3系統に分類できるが、光信五輪塔は、水輪の上下をコンピューター上で逆にすると、図(5)のように木津惣墓系統に分類できる。その点からも、西大寺様式であると考えられる。

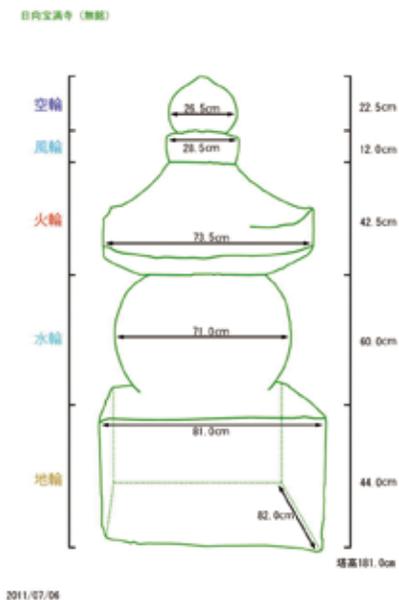


図(6) 住職墓6尺塔

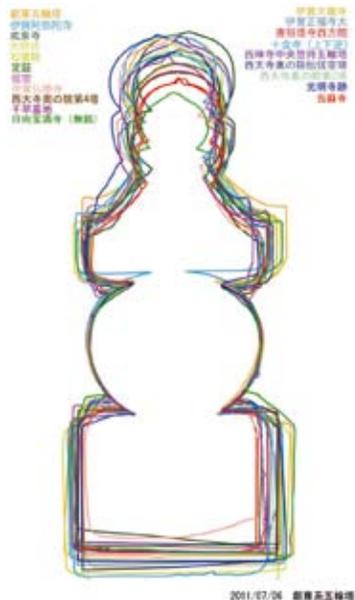
住職墓地には光信五輪塔以外にも、五輪塔が数多くあるが、いまだ調査されていない。そこで、現存する五輪塔で最大の6尺塔を調査した。大きさなどは、以下の通りである。地輪幅81cm、奥行き82cm、高さ44cm、水輪幅71cm 高さ60cm、火輪幅73.5cm、高さ42.5cm、風輪幅28.5cm、高さ12cm、空輪幅26.5cm、高さ22.5cm。

凝灰岩製であるが、非常に形が整っている。無銘であるが、住職のものであろう。

この五輪塔も、水輪に注目する西大寺様式の3系統と比較すると、図のように叡尊系五輪塔と一致する。



図(7) 住職墓6尺塔線画



図(8) 叡尊系五輪塔

## 第2項 安東蓮聖・志布志津・宝満寺

前章において、志布志宝満寺が、勅願寺で、室町時代には利生塔設定寺院であるほど栄えていたことがわかる。

そうした宝満寺の繁栄を支えたものは、島津荘の外港であった志布志津<sup>52</sup>の管理権であっ

たと推測される。そこで、ここでは従来さほど注目されていない、志布志津との関わりについてみてみよう。

史料(15)<sup>53</sup>

奉打渡

日向方島津御庄志布志津大沢水宝満寺敷地四至境事

限東深小路大道

限南経峰

限西河

限北天神山後堀

右、任被仰下之旨、奉打渡于宝満寺之状如件、

正和五年十一月三被 沙弥蓮正 在判

史料(15)は、蓮正打渡状である。この蓮正については、得宗被官安東蓮聖とする見解が有力である<sup>54</sup>。正和5（1316）年は、信仙房による宝満寺再興が始まった年で、救仁院内の志布志は得宗領であった。安東蓮聖は、90歳まで長生きをしたが、当時、70歳であり、引退していた可能性もあるが、ひとまず、打渡状の発給者が得宗被官安東蓮聖であった可能性はある。

また、志布志津は日向本荘島津院（都城市）の外港であった。すなわち、重要な港で、種子島とも結ぶ南方貿易の港であった。

さらに、信仙房は、極楽寺忍性の弟子であり、得宗や安東蓮聖と面識があった可能性も高い。とすれば、この志布志宝満寺と志布志津修築の際も久米田寺再興と福泊り修築などで、叡尊教団を支援した得宗と安東蓮聖<sup>55</sup>が協力した可能性は高い。

『志布志町誌 上巻』には、昭和30年代の聞き取りをもとに、作成された明治元年頃の志布志の絵図が付録として付けられている<sup>56</sup>。それによれば、宝満寺が前川（志布志川）に面し、中世の海岸線を考えると、まさに志布志津に面していたことがわかる。

この配置は、種子島慈恩寺にもあてはまるが、慈恩寺が赤尾木津（西ノ表港）を管理した<sup>57</sup>ように、宝満寺は志布志津の管理を担当していた可能性は高い。

なお、『種子島家年中行事』によれば、種子島時充（?～1396）の妻は、日向志布志の野辺盛忠の息女という。すなわち、「御譜云、六代左近将監時充公室ハ、日州志布志の野辺肥後守盛忠息女也」<sup>58</sup>とある。種子島と志布志とは、人的にも密接に結びついていた点も忘れてはならない。

### 第3章 大隅国正国寺

梅霊山無量寿院正国寺は、現在、廃寺であるが、大隅正八幡宮（現在の鹿児島神宮）の神宮寺3箇寺<sup>59</sup>の1つで、かつては霧島市隼人町字内山田の宇都山集落内に所在<sup>60</sup>した。西大寺

末寺の律寺であった。もともとは現在の隼人塚（鹿児島県霧島市隼人町）の地に所在した。というのも、隼人塚の石仏とよく似た、康治元（1142）年の銘を持つ石仏が宇都山の正国寺跡から発掘されたからである。この石仏の存在により、正国寺は康治元年頃には所在した寺院であったことが明らかとなった。

この正国寺については、霧島市教育委員会や八尋和泉氏の研究<sup>61</sup>がある。教育委員会の報告書は、文化財を中心に正国寺の歴史を明らかにしている。他方、八尋氏は、律宗寺院の美術史の観点から研究されており、隼人塚にのこる四天王像が、「体形の内どりや大きな兜の誇張された彫出、甲冑と衣文の織りなす襞の処理」などから、その制作年代を鎌倉時代末、南北朝時代の初めの律寺として最盛期のものとされる<sup>62</sup>。しかし、正国寺の歴史については『三国名勝図会』の記述を引用するに止まっている。そこで、もう少し検討してみよう。

### 第1節 律寺としての正国寺

『三国名勝図会』によれば、(1)正国寺は西大寺末寺の律寺であり、(2)慈道の弟子円秀を開山として、(3)元徳2（1330）年に創建されたこと、などが記されている<sup>63</sup>。

まず、西大寺末寺であった点についてみてみよう。明徳2（1391）年に書き改められたという「西大寺末寺帳」には以下のように記載されている。

史料(16)

大隅国	
正国寺	慈音寺

すなわち、正国寺と慈恩寺<sup>64</sup>の2箇寺が挙がっている。明徳「西大寺末寺帳」は、先にも触れたが、奈良西大寺の直末寺を書き上げたもので、それらの寺院は、ようするに、西大寺から直接に住持（長老という）が任命された。また、正国寺が大隅国の直末寺の筆頭に記載されていることから、大隅国の西大寺末寺の筆頭寺院であったと考えられる。

また、永享8（1438）年の「坊々寄宿末寺帳」にも、「四室分」に「大隅国宮内正国寺」として挙がっている。光明真言会に際して、「四室」に泊まることになっていたと考えられる。

さらに、正国寺は江戸時代（元和元年以後）の「西大寺末寺帳」にも記載されており、江戸時代においても西大寺末寺であったと考えられる。

ところで、いつから律寺となったのであろうか。『三国名勝図会』によれば、亀山院によって、蒙古襲来に際して、一宮・国分寺の興行が西大寺叡尊に命じられ、1国に1寺建てられたが、正国寺は大隅国分であったという。その伝承が正しければ、正国寺は、大隅国の一宮大隅八幡宮の神宮寺であり、蒙古襲来にともなう一宮・国分寺興隆にともなって建立（中興）されたということになる。それゆえ、鎌倉末期に中興されたことになる。実際に、弘安7（1284）年には鎌倉幕府は国分寺・一宮の興行を宣言し、それを実際には西大寺・極楽寺が担っていた<sup>65</sup>。

それゆえ、正国寺の中興は、蒙古襲来に際しての一宮・国分寺の興行、ここでは大隅一宮正八幡宮興行のために、西大寺に命じて行われたのであろう。

## 第2節 開山円秀とその後の住持

さて、『三国名勝図会』によれば、正国寺は西大寺第2代長老慈道房信空の弟子円秀によって開山されたという。この円秀がいかなる人物がはっきりしない。

史料(17)<sup>66</sup>

為三宝久住利楽諸衆生奉造立、離愛金剛之尊像爲奉納御身、令賢比丘書漢字令嚴貞比丘、寫梵字自書之令、寂忍近事造經臺以奉納此經、矣即自八月十八日初夜至于同廿五日、黄昏七ヶ日夜之間令衆僧誦彼、神呪睿尊嚴貞共修六時行法各三時

日本国入王八十九代宝治元年 歲次丁未 八月十八日記之

仏師善円  
経師実有  
大檀越範恩近事  
大願主叡尊比丘

衆僧

比丘嚴貞、比丘善嚴、比丘幸円、比丘聖尊、比丘忍性、比丘寂尊、比丘親如、比丘叡実、比丘賢任、比丘頼玄、比丘源真、比丘覚順、比丘永真、比丘重円、比丘幸真  
沙弥信空、形同沙弥妙尊、形同沙弥円秀、形同沙弥惣持

史料(17)のように、宝治元(1247)年8月18日付「金剛峰楼閣一切瑜伽瑜祇經奥書」に忍性や「沙弥信空」らとともに、「形同沙弥円秀」なる人物が見える。形同沙弥は、沙弥の前段階の存在であり<sup>67</sup>、この人物が、若き日の円秀なのかもしれない。

円秀以後の住持はだれであったのだろうか。先の「光明真言過去帳」によれば、西大寺第15代長老興泉と第16代長老禅譽の間に「了浄房 正国寺」が記されている<sup>68</sup>。第15代長老の興泉信葉は康暦元(1379)年6月1日に86歳で死去した。また、第16代禅譽圓宗は嘉慶2(1388)年5月5日に90歳で死去している<sup>69</sup>。それゆえ、康暦元年6月1日から嘉慶2年5月5日の間に死去したのであろう。この了浄房以外にも、「乗源房 正国寺」、「良瑜房 正国寺」などが挙げられている。

## 第3節 元徳2年の創建とは

『三国名勝図会』が伝える寺伝(由緒書)によれば、元徳2(1330)年の創建という。しかし、

元徳2年は亀山院の時代ではないことなどから、『三国名勝図会』の編者は、それを否定し、『鹿児島県の地名』も同様である。

先述した康治元（1142）年の石仏の存在から、平安末期には正国寺は存在していた。それゆえ、元徳2年は、中興の年である。

ここでは、寺伝を尊重したい。というのも、『三国名勝図会』には、「暦応五年、六月、時の住僧、当寺修營の事を奉行所に訴へし文に、来由を書して、元徳年中草創なりと記しぬ」<sup>70</sup>とあり、暦応5（1342）年の段階で、寺僧は元徳年中の草創と認識していたことになり、ひとまずそれを尊重すべきであろう。亀山院の時に創建（中興）計画が立てられたとしても実行に移るまでにタイムラグがありうるからである。すなわち、実際に中興が行われたのが元徳2年と考えたい。おそらく、その際に、隼人塚の地から、宇都山の地に移ったのであろう<sup>71</sup>。

最後に、大隅国利生塔との関係に注目したい。前章までで論じてきたように、薩摩泰平寺も日向宝満寺もいずれも、薩摩・日向の利生塔があった。とすれば、西大寺末寺内で同様な寺格であった大隅正国寺も利生塔寺院であった可能性を指摘しておきたい。

また、他の薩摩泰平寺も日向宝満寺も、川や津の管理を担当していたと考えられる。大隅正国寺については、史料がないが、正八幡宮から隼人塚を通って濱に出る道があり、その濱を管理していたかもしれない。

## おわりに

以上、薩摩泰平寺、日向宝満寺、大隅正国寺に注目して、叡尊教団による薩摩・日向・大隅3国への展開をみた。叡尊教団の活動によって、泰平寺、宝満寺が室町幕府の地域拠点寺院たる利生塔設置寺院となるほど大発展を遂げていたことは大いに注目される。

また、2メートルを超える巨大五輪塔が江戸時代までは泰平寺に所在するなど、叡尊教団による巨大五輪塔造立の事実が確かめられた。

さらに、律寺が河川・港湾管理を担うという原則が、その3寺にもほぼ当てはまることがわかった。

本文で述べたように、泰平寺は、川内川のほとりに立ち、川内川を管理していたようである。そもそも、中世の律宗寺院は、橋や港の管理を任されていた。おそらく、川内川（それに掛かる橋）も泰平寺が管理していたのでろうと推測している。川内川は、川を境に隼人支配地との境界であったという。古代の泰平寺は、隼人支配の宗教的な拠点として建てられたのであろうか。中世においては、戦略上の拠点である川内川を押さえる泰平寺が重視されたのであろう。

他方、正和5（1316）年の信仙による宝満寺の再興は、得宗被官安東蓮聖も協力したものであり、それは、島津荘の外港で南方貿易の港でもあった志布志津の管理者としての宝満寺に注目したものであったと考えられる。志布志宝満寺のケースも西大寺末寺興隆と港整備に得宗被官安東蓮聖が協力した事例であったといえる。

正国寺については、史料がないが、八幡宮の放生会の濱殿下り神事で向かう隼人港を管理していたのかもしれない。今後の課題である。

## 註

- 1 拙著『勸進と破戒の中世史』（吉川弘文館，初版1995，本稿では改訂版である2002年刊行の第2版を使う）131頁。
- 2 近年の南九州地域史の重要な研究として、柳原敏昭『中世日本の周縁と東アジア』（吉川弘文館，2011）がある。
- 3 拙著『日本中世の禪と律』（吉川弘文館，2006）198頁。
- 4 2009年3月7日，泰平寺を訪ねた。突然の来訪にも関わらず，話をしてくださった泰平寺住職羽坂光昭氏に感謝の意を表します。
- 5 御住職のご教示による。
- 6 拙著『日本中世の禪と律』〈前註（3）〉198頁。
- 7 拙稿「西大寺末寺帳考」『勸進と破戒の中世史』（吉川弘文館，1995）152頁。
- 8 川内市史編纂委員会『川内市史 上巻』（鹿児島県川内市，1985，以下『川内市史 上巻』という）481・482頁参照。
- 9 原口虎雄監修『三国名勝図会 第1巻』（新潮社，1982）928～938頁。
- 10 原口虎雄監修『三国名勝図会 索引』（新潮社，1982）の「解題」3頁。
- 11 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」（速水侑編『日本社会における仏と神』吉川弘文館，2006）91頁。
- 12 元興寺文化財研究所編『西大寺光明真言会の調査報告書』（元興寺文化財研究所，1982）15頁，拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註（11）〉参照。
- 13 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註（11）〉91頁。
- 14 「西大寺代々長老名」（『西大寺関係史料（一）』奈良国立文化財研究所，1968）73頁。
- 15 「西大寺叡尊像に納入された「授菩薩戒弟子交名」と「近住男女交名」（拙著『日本中世の禪と律』〈前註（3）〉78頁。
- 16 「西大寺代々長老名」〈前註（14）〉73頁。
- 17 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註（11）〉105頁。
- 18 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前註（1）〉の「西大寺末寺帳考」154～161頁参照。
- 19 『三国名勝図会 第1巻』〈前註（9）〉930頁。
- 20 利生塔の概説については，拙著『日本中世の禪と律』〈前註（3）〉第4章「安国寺利生塔再考」参照。
- 21 『三国名勝図会 第1巻』〈前註（9）〉933～935頁。
- 22 拙著『日本中世の禪と律』〈前註（3）〉186頁参照。

- 23 『福井県史資料編9』所収「神宮寺文書」10号文書。
- 24 拙著『中世律宗と死の文化』（吉川弘文館，2010）83頁参照。
- 25 極楽寺と和賀江については拙著『忍性』（ミネルヴァ書房，2002）参照。博多と大乘寺については，拙稿「博多大乗寺と中世都市博多」『鎌倉遺文研究』17号，2006（拙著『中世律宗と死の文化』〈前註（24）〉所収）参照。橋寺放生院と宇治橋との関係については，拙稿「叡尊教団と中世都市平安京」『戒律文化』7号，2008（拙著『中世律宗と死の文化』〈前註（24）〉所収）参照。
- 26 『志布志町誌 上巻』（志布志町役場，1972），八尋和泉「九州西大寺末寺とその遺産」（『仏教芸術 特集 叡尊と西大寺派美術』199，1991）。『宮崎県史通史編中世』（宮崎県，1999，402～405頁），佐藤亜聖「鹿児島県志布志町宝満寺所在元徳二年銘五輪塔について」『元興寺文化財研究』（元興寺文化財研究所，2004）。また，平成13・14年度には境内地の発掘も行なわれた（『志布志町埋蔵文化財発掘報告書（31）』鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会，2003）。それによると，洪水のため遺跡が削られるなど遺構の痕跡はなくなっていた。しかし，少数ながら貿易陶磁器を含めた中・近世の陶磁器片が出たことは注目される。
- 27 『三国名勝図会 第4巻』（青潮社，1982）1032～1045頁。
- 28 『志布志記』（志布志町教育委員会，2000）に翻刻。『志布志記』は1783年に作成された（『志布志記』4頁）。
- 29 「宝満寺文書」は『鹿児島県史料 旧記雑録前編1』（鹿児島県，1979）448，595・596，728・729頁に所収。
- 30 『志布志町誌 上巻』〈前註（26）〉415頁。
- 31 伊藤常足『太宰管内志（下）』（歴史図書社，1969）108頁。
- 32 『宮崎県史 通史編中世』〈前註（26）〉405頁。
- 33 拙稿「西大寺光明真言過去帳の分析」〈前註（11）〉87頁。
- 34 「常楽記」（『群書類従』29）212頁による。
- 35 「招提千歳伝記」（『大日本仏教全書』所収）55頁による。
- 36 原口虎雄監修『三国名勝図会 第4巻』〈前註（27）〉1044頁。また，大隅國曾於郡にも持宝院という末寺があった（原口虎雄監修『三国名勝図会 第3巻』（青潮社，1982）418頁。
- 37 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前註（1）〉。
- 38 『角川 日本地名体系 宮崎県』によれば，宮崎市に浄土真宗の「宝泉寺」があり，真言系の寺院が真宗化したという。この寺院が宝泉寺だったのかもしれない。
- 39 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前註（1）〉158頁。
- 40 瀬野精一郎編『南北朝遺文 九州編二』（東京堂出版，1981）1464号文書。
- 41 志布志市役所志布志支所で写真を撮影した。
- 42 「宝満寺文書」『鹿児島県史料 旧記雑録前編1』〈前註（29）〉729頁

- 43 同前。
- 44 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註 (11)〉頁。
- 45 「西大寺代々長老名」〈前註 (14)〉73 頁。
- 46 同前。
- 47 佐藤「鹿児島県志布志町宝満寺所在元徳二年銘五輪塔について」〈前註 (26)〉。
- 48 光信の供養のために立てられた可能性もある。
- 49 山岸公基氏は平成 20 年に、もと宝満寺にあったという如意輪観音像を調査されたが、そうした銘はなかったという。しかも、その像は江戸時代のものという。ただし、江戸時代の「志布志記」に銘文の存在が見えるし、光信五輪塔の発見によって、如意輪観音像銘文の光信の実は実証されたことになる。たぶん、現在の如意輪観音像は本尊の如意輪観音像とは別物なのであろう。
- 50 『志布志記』〈前註 (28)〉65 頁。
- 51 『三国名勝図会 第4巻』〈前註 (27)〉1034 頁。
- 52 『宮崎県史 通史編中世』〈前註 (26)〉89 頁。
- 53 「宝満寺文書」『鹿児島県史料 旧記雑録前編1』〈前註 (29)〉。
- 54 『宮崎県史通史編中世』〈前註 (26)〉405 頁。
- 55 戸田芳実『中世の神仏と道』(吉川弘文館, 2010) 所収「播磨国福泊と安東蓮聖」参照。
- 56 『志布志町誌 上巻』〈前註 (26)〉巻末付図。志布志市教育委員会の米元史郎氏のご教示による。
- 57 拙著『中世律宗と死の文化』〈前註 (24)〉254・255 頁参照。
- 58 『種子島家年中行事』(熊毛文学会, 1964) 135 頁。
- 59 正高寺, 正興寺, 正国寺の3つである。
- 60 藤浪三千尋氏のご教示による。藤浪氏によれば霧島市立隼人塚史跡館所蔵の正国寺の石仏は字内山田の宇都山集落から出たという。
- 61 八尋和泉「九州西大寺末寺とその遺産」〈前註 (26)〉。また、『鹿児島神宮史』(鹿児島神宮, 1989), 『隼人町の石造遺物』(隼人町, 1995), 『鹿児島県の地名』(平凡社, 1998) 624 頁, 『海と城館が支えた祈りの世界-大隅正八幡宮と宮内の1000年』(霧島市立隼人歴史民俗資料館, 2010), 『霧島市文化財調査報告書 大隅正八幡宮関連遺跡群 -総合調査報告書-』(霧島市教育委員会, 2011) も参考になる。正国寺については、『霧島市文化財調査報告書』が現在の研究の到達点といえる。
- 62 藤浪氏は、四天王像を12世紀のものとする(「隼人塚石塔と四天王像との関係の研究」『南九州の石塔』14号, 2004)。
- 63 『三国名勝図会 第3巻』〈前註 (36)〉70 頁。
- 64 大隅慈音寺については拙著『中世律宗と死の文化』〈前註 (24)〉247～261 頁参照。慈音

寺は種子島（15世紀後半までは、種子島、屋久島、口恵良部島三島全体の寺院が律宗であった）を代表する律寺であった。

- 65 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前註（1）〉27頁。
- 66 『西大寺叡尊伝記集成』（法蔵館，1977）328頁。
- 67 蓑輪顕量「戒律復興運動」（松尾剛次編『叡尊・忍性』吉川弘文館，2004）64・65頁。
- 68 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註（11）〉98頁。
- 69 「西大寺代と長老名」〈前註（14）〉73頁。
- 70 『三国名勝図会 第3巻』〈前註（36）〉71頁。
- 71 『霧島市文化財調査報告書』（藤浪氏執筆部分）〈前註（61）〉も、元徳2年に隼人塚から移転したと推測している。

## **The Development of the Eizon Order in Satsuma Province, Hyūga Province, and Ōsumi Province focusing on Taihei Temple, Hōman Temple and Shōkoku Temple in the Middle Ages**

Kenji MATSUO

This paper aims to clarify how the Ritsu sect prevailed in southern Japan, focusing on Taihei Temple in Satsuma province, Hōman Temple in Hyūga province, and Shōkoku Temple in Ōsumi province. In the Middle Ages, though no longer, all belonged to the Ritsu sect and were branch temples of Saidai Temple in Nara. At that time, Satsuma, Hyūga and Ōsumi provinces, which make up modern Kagoshima prefecture, were ruled by Shimazu clans.

The restoration of Taihei Temple began in the late 13th century by Gyōen, a disciple of Eizon, founder of the Ritsu sect. Gyōen succeeded in its reconstruction and it then became one of the Muromachi shogunate's Rishōtō temples. One temple in every province was designated as a Rishōtō temple by the Muromachi shogunate. Eiki, who belonged to the Ritsu sect, restored Hōman Temple in 1316 with the cooperation of Renshō Andō. It also became a Rishōtō temple. Shōkoku Temple was re-established in 1330 by Enshū and later became a branch temple of Saidai Temple, to which Enshū was affiliated.

As just illustrated, these three temples were restored by Ritsu monks, after which they became branch temples of Saidai Temple. It is noteworthy that two of them were also Muromachi shogunate's Rishōtō temples. In this way, the Ritsu sect expanded in Satsuma, Hyūga and Ōsumi provinces.



## 像の媒体性と想像表象

### —フッサールの 1904/05 年講義を手がかりに—

小 熊 正 久

(哲学)

一枚の肖像画を見る際、われわれはそれをいく通りかの仕方で捉えることができる。絵の具の塗り方やひび割れを見る場合のように、それを、画布やその上の線や色の集まりとして捉えることがある。また、それを、人の顔の形を表すものとして捉えることもある。さらに、その顔を、特定の人物（例えば画家レンブラント）の顔を表すものと捉えることもありうるであろう。このように、同じ一枚の画像であってもいくつかの仕方で捉えることができるわけであるが、そこには、画布上の線や色の集まりは人の顔の「像」であり、さらに、それはレンブラントの「像」であるという了解も含まれている。

この了解は、人の顔やレンブラントの姿を表す「像」として現れている絵画がレンブラントの姿を表現する「媒体 Medium」となっているということの意味しているであろう。つまり、線や色の集まりそれ自体ではなく、それを「媒体」（媒介物）としてレンブラントの姿が見て取られるということになるからである。しかもその際、注目すべきことに、その肖像画をレンブラントの姿を表す「像」として捉えるときには、線や色の集まりはそれ自身としては「姿を消し」、そのようなものとしては現れず、いわば「透明になって」、レンブラントの「像」として現れるのである。

だが、「線や色の集まり」であるものが、他のものの「像」でもあるとはどのようなことであり、どのようにして可能になっているのであろうか。画像自身は「姿を消し」、他のものを表すこと、すなわち、「媒体」となるということはどのようなことなのであろうか。

フッサールは、「知覚作用 Wahrnehmung」を、それが知覚された対象そのものを眼前に現に存在するものとして与えるという性格を具えているゆえに、「現前化 Gegenwärtigung」ないし「現前化する作用」と呼んだ。他方、「画像による表象」、「想像」、「想起」などは、対象を目の前に現にあるものとして表すわけではないが、「あたかも現にあるように表す」という意味で、「再現前化 Vergegenwärtigung」と呼んでいる。そして彼は、「再現前化」について、「知覚作用」や「記号による表象作用」と並ぶ重要な「表象作用」の一種として、『論理学研究』刊行

(1900/01) 以前から分析を重ねてきた<sup>1</sup>が、とくに1904/05年冬学期には、講義“Phantasie und Bildbewusstsein (想像と像意識)” (以下『想像講義』と略す)を行っている。その中で、彼は、上のような画像のさまざまな把握の仕方を区別するとともに、それぞれの把握の相互関係や重なり合い、また、画像表象と想像の関連などを詳細に分析している。

そこで小論では、この講義におけるフッサールの分析に依拠しながら、「画像」が他のものの「像」として、すなわち「媒体」として捉えられることはどういうことか、それと「想像表象」との関連はどのようなものであるか、を考察する。

なお、この講義以降もフッサールは「想像」や「像意識」の分析を続けており、フッサール著作集第23巻 *Phantasie, Bildbewusstsein, Erinnerung*<sup>2</sup>には、『想像講義』とともにそうした分析も合わせて収められている。また、この主題については、『イデー 第一巻』における叙述も存在する<sup>3</sup>。だが、上の『想像講義』は一貫して「像表象」ならびに「想像」の問題を追究して一定の結論に到達していると思われること、また、「像の媒体性」という問題を考察するために有益な论述を含んでいることから、小論では、検討対象を上の『想像講義』に絞り、その読解を通して先に述べた問題に関する考察を行いたい。

## 第1節 像表象の基本構造

フッサールが、『想像講義』で分析対象としているのは、「志向的」体験の基盤をなす「表象」としての「想像」および「像表象」であり、そこではその本質構造を、「知覚作用」や「記号的思念の作用」（空虚な志向ないし思念）などといった表象と比較検討しながら考察している。そのうち、「像表象」は二種類に分かれる。一つは、冒頭でみたような絵画や写真といった「画像」を「像」と捉えることによって或るものを表象する作用であり、物からなる像（画像）を媒介するという意味で、「物的 (physisch) 像表象」と呼ばれる。もう一つは、「物的像」ではなく、「精神的 (geistig) 像」（イメージ）を「像」として或るものを表象する作用である。これは「精神的像表象」と呼ばれる。こうして、上の二つの「像表象」は、ともに像を媒体とするという点で共通性をもつが、その意味で、一括して「イマギナツィオン」と総称されている。小論ではこれを「像表象」と呼ぶこととする<sup>4</sup>。

さて、フッサールの言う「想像 Phantasie」とは、たとえばペガサスや竜といった神話的なものを「想像する」こと、将来の出来事を「想像する」こと、友人Aの姿や顔を「想起するこ

1 1898年には“Phantasie und Bildliche Vorstellung” (想像と像的表象) という講義を行っており、その記録は、Husserliana Band XXIII に収められている。

2 *Phantasie, Bildbewusstsein, Erinnerung*, Husserliana Band XXIII, Nijhoff, 1980. 本書からの引用箇所は、小論本文中で、セクション番号 (§) と頁数 (S) によって示す。その際、傍点是小論筆者による。また、原文における強調箇所は、小論ではイタリック体によって表す。

3 cf. *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und Phänomenologischen Philosophie, Erstes Buch*, 1913 (die erste Auflage), 1950 (Husserliana Band III, Nijhoff), §109-§112.

4 「イマギナツィオン」などの語がとくに必要な場合には、「像表象」にルビをふって示す。

と」などを含み、われわれの「想像」という語の使用とあまり異なるところはない<sup>5</sup>。だが、のちに小論で見ると、その本質構造は、『想像講義』の中で、検討すべき問題として扱われることになる。

すなわち、講義の最初の部分では、「想像」は「精神的像表象」と同一視されているが、講義の中でその見方は問題視され、「想像」の独自性が考察され、講義の最後では、両者の同一視は行われなくなるのである。

フッサールは「物的像意識」、「知覚」、「想像」を比較しながら、考察を進めているが、われわれもその分析を援用しながら、「像表象」とその「媒体性」について、そして、それと関連してくる「想像」について考察する。

「知覚作用」の内部構造をみることから始めて、諸作用の分析に必要な区別をみていこう。

例えば、眼前の机の上に、しかじかの窪みや取っ手をそなえたカップを「知覚」する場合には、広がりや形や色を具えた感覚である「感性的内容」が知覚野において「射映」として与えられている。そして、多様な「射映」は身体的運動や時間意識の中で総合され、「そのような形の物」、あるいは「カップ」という「意味」で「把握」される。すなわち、そうした統握によって、諸射映は一つの対象の多様な諸射映として捉えられることになる<sup>6</sup>。こうした、「感覚内容」と「意味的統握」という二つの契機を具えながら、知覚対象は、「生き生きと現前するもの」として与えられるのである。

さて、「知覚」と「想像」について、フッサールは、理念的可能性としては、両者の間に対応関係が考えられるとする。

「理念的可能性の意味で言えば、あらゆる可能な知覚表象には、同じ対象に、或る意味でまた全く同じ仕方でも、関係する可能な想像表象が対応する。われわれがある風景を再現前化するなら、それには知覚の風景が対応し、想像された部屋には知覚された部屋が対応する。その際、われわれが知覚に関して行ったほとんどすべての区別が想像においても適用されるということも明らかである」。

そこで、「想像」においても「知覚」の内部構造として認められた区別が認められなければならない。それは、「感性的内容」、「対象」、「意味的統握」などである。だが、「想像」において統握される「感性的内容」は、「感覚」ではなく「ファンタスマ Phantasma」と呼ばれている。それは、例えば赤いセーターを思い起こすときに、知覚的な現れ方とは違うが、やはり何らかのかたちで現れる「赤さ」や「形」といったものである。だが、「ファンタスマ」の特徴づけについては、フッサールの見解に変遷もみられ、『想像講義』の末尾（第9章）においても、またその後も、考察が続けられている。そこで、小論では、「ファンタスマ」についての本格

5 「想起 Erinnerung」は対象の存在についての信憑の様態に関して「想像」と異なるが、『想像講義』などでは、「想像」の中に含めて扱われている。

6 「射映」とその「総合」については、拙論「フッサールにおける「射映」の概念—表象媒体の研究の一環として—」、山形大学紀要（人文学部）、第17巻第3号、2012.2.を参照されたい。

的な検討は断念せざるをえないが、必要な限りで扱うこととしたい。

ともあれ、「感性的内容」としての「ファンタスマ」と「統握」を具えた「想像」において対象は「現前的に」ではないが、「再現的に」感性的内容とともに与えられる。

こうした「知覚」と「想像」という表象に対して、ただ言葉だけによる対象の「意味的な思念」もありうるわけだが、その場合、対象についての「感性的表象」は存在しない。ただし、記号としての言葉の「感性的内容」（声、文字の色、形など）と「統握」、それによる対象の理解は存在する。この場合には、知覚や想像の場合と「統握の形式」が異なるのである。

次に、「物的像表象」（画像による表象）における諸区別をみておこう。それによって、「像」の「媒体性」を考察するという課題の内実も明瞭になるであろう。

小論冒頭で触れたことと重なるが、「物的像表象」における三種の像の区別を確認しておこう。

第一は、彩色され、額縁に入った画布としての、あるいは、印刷された紙などとしての像である。それは、「物的な物としての像」と呼ばれている。

第二は、たとえば、子供を写した写真の場合であれば、現実の子供ではなく、「子供に全体として似てはいるが、現出している大きさや色などについてはきわめて明瞭に子供とは異なる像」、あるいは、「薄暗い紫色の細密画としての子供の像」といった現れである。これは、「代表象する客体」ないし「像客体 Bildobjekt」と呼ばれている。

第三は、絵画や写真において主題となっているものとしての像であり、第二の意味での像によって「代表象された客体」である。これはまた、「像主題 Bildsujet」とも呼ばれる。

以上が「物的像表象」の内的構造であるが、「精神的像表象」のほうはどうであろうか。その際の「精神的像」は、上の第二の意味での「像」に相当するもの（「想像の像の正確な類似物」と考えられているが、ただ、その「精神的像」が与えられるために「物的な像」は必要ないということになる。まとめれば、「精神的像表象」においては「精神的像」が「代表象する客体」としてはたらくことにより、「主題」を代表象するのである。

さて、このように三種類の「像」が区別されたが、「代表象する客体」はいかにして「像主題」を「代表象するか」のか、すなわち、「代表象する客体」と「像主題」の関係はどのようなか、という問題が生じてくる。両者に関しては、それらの「差異」が「像意識」にとって重要であるが、その理由は、「現出する客体はそれ自身で存在するものとして妥当するのではなくて、それに同等ないし類似の、別のものに対する代表者として妥当する」（S20）からである。

さらに、「代表象するものとしての客体」の存在については、「通常の意味で対象として存在する客体ではない」と言われている。「像表象」が成立するということがなければ、単に「感覚的な所与の複合」および知覚対象（物的な物としての像）が存在するのみであり、「像（現出し類比的に代表象する諸対象として理解された像）」[代表象する像]は本当は無である」（S22）というのである。

同様の問題は、「精神的像表象」（想像）の場合にもなりたつ。「ファンタスマ」に「客観化

的意識」が付け加わり、それらを「統握」することによって、「代表象する像」が「精神的像」として成立するということになるが、しかし、「像主題」が成立しなければ、「まだわれわれは本来の意味での像をもっておらず、せいぜいのところ、のちほど像として機能することになる対象をもつだけ」(S23)なのである。

このことは、画像についてのわれわれの経験に照らしても首肯しうるものと思われる。ある写真を見たときに、それが何の写真なのかがわからなければ、その写真が「像」であるとは言いがたいし、絵画の場合にも、人物を特定できないにしても、何らかの人物やどこかの風景を描いたと言うことができなければ、やはり、「像」とは言いがたいであろう。そのようなものがまったく見いだせない場合には、美しい図案や模様が現れていると言えるにしても、「像」であるとは言えないであろう。写真や絵画の「像」はまさしく「媒体」にほかならないのである。

フッサールは上の問いを以下のように定式化している。

「われわれに像客体が現出する際にわれわれがそれでは満足せずに、それを介して別の客体を思念するということは、どのように理解できるというのであろうか」 (§11,S23) と。

これはまさしく、「像主題」の成立についての問い、「代表象する客体」としての像が如何にして「像主題」を媒介するのかという、「媒体性」についての問いである。フッサールの『想像講義』とともに、小論もそれを追究しよう。

## 第2節 統握の複合

この問題に対しては、まず、像的表象の「複合的構造 (二重性)」を示すことによる説明がなされている。最初に、「精神的像表象」、次に「物的像表象」の場合をみよう。

「精神的像表象」(「想像」)においては、第一の統握(ファンタスマの統握)によって「代表象する客体」が成立し、それを基礎として第二の統握が成立し、「像主題」への関連づけがなされると考えられている。

「私はベルリン城を思い浮かべる。すなわち、私は像においてそれを思い浮かべ、像が私に思い浮かぶが、私は像を思念しているのではない。むしろ、像統握においては、第二の統握が基づけられて (fundiert) おり、この統握は像統握に新しい性格を刻印し、新しい対象的關係を付与するのである」 (§11,S24)。

第二の統握が「基づけられて」成立することによって、「それ自体は城ではない像において、城を直観する」ことができる、というのである。こうした複合性は像表象の「間接性 Mittelbarkeit」(媒介性)をも意味している<sup>7</sup>。

7 「基づける fundieren」ことおよび「複合された作用」については、『論理学研究』(第五研究)において次のように述べられている。「複合された諸作用はまた基づけられた作用でもある。そしてその全体的性質は各部分作用の諸性質の単なる合計ではなく、まさしく一つの性質である」(Logische Untersuchungen, Zweiter, Band Erster Teil, Husserliana Band XIX/1, §42, S.515)。『想像講義』の上の箇所では、「像表象」における「基づけ」や「複合」の有様が問題になっていると言える。

もう一つの、「物的像表象」の場合の「複合性」ないし「媒体性」については、フッサールは「代理」という言葉を使って次のように述べている。

「私が写真画像で見るラファエロのマドンナはもちろん、写真的に現出する小さな像ではない。そこで、私は、単なる知覚を遂行しているのではなく、知覚の現出は知覚されていない対象を像化しているのである。…感性的感覚の上に建てられた統握はたんなる知覚的統握ではない。それは変化した性格をもつ。つまり、類似による代理、像の中で見るという性格を受けとる」 (§12,S26)。

以上のように、フッサールは、「想像（精神的像表象）」においても、「物的像表象」においても、二つの統握が複合されている（kompliziert）と述べていた。だが、この複合は、たとえば、一冊ずつの本のそれぞれの統握が組み合わさって「二冊の本」という新しい統握が成立するとか、色ガラスの知覚とボールの知覚の対象が組み合わさって「色ガラスを通して見えるボール」という知覚ができるなどといった複合ではなく、特殊な複合である。

この複合の特殊性について、『想像講義』 §13 では、次のように言われている。

「第二の対象はまったく特殊な仕方では志向的となる。それにはどんな現出も対応しない。その対象は切り離されて現に在るのではない、それは固有な直観において現にあるのであり、それは第二の対象として像の傍らに現出するのではない。それは像の中で像とともに、まさしく、像の代表象（再現化）が生じることによって現出するのである」 (§13,S28)。

すなわち、像客体と別の客体が現前するのではなく、「像の中で、像とともに」或る事柄が現出するのである。

また、そうした特殊な仕方では現出する事象については、以下のように述べられている。

「像客体は、なるほどそれと同一ではないが、内容的にそれと多かれ少なかれ同等であるか類似であるものを直観化するのである」 (§14,S30)。

すなわち、内容の面で像客体と「同一ではないが多かれ少なかれ同等であるか類似のもの」が「像主題」となるのである。

さて、以上が「代表象」の「特殊性」と考えられるが、「像客体」が「媒体」となって表象される場所の「像主題」が如何にして与えられるかは、ここまででは、まだ解明されていないままであろう。「像主題」への新しい志向を「基づける」ものが何であるかが、説明されていないからである。

だが、この問題を追究する前に、「像主題」が成り立っている場合の、「像客体」と「像主題」の関連の仕方とそれらの内容上の類似性について、みておくことにしよう。

### 第3節 「像意識」における関心の方向と機能、類似性

「像表象」は、「像客体を通して像主題を表象する」ことにより「媒体」となるが、体育館な

どで非常口を示す「象徴」も、数学で積分を表すインテグラルの「記号」も、それ自体とは異なる何ものかを指し示すことにより「媒体」としてはたらく。こうして、「像表象」,「象徴による表象」,「記号による表象」は、「媒体による表象」という点で共通性をもつが、その際の「表象の仕方」,ないし、「媒体の指し示し方」は異なっている。フッサールによれば、「象徴的統握はそれ自体から外へ、そしてさらに記号的統握は、現出しているものとは内的に異なる対象を指し示すのである」。それに対して、「像的統握」については、「常に同種的で類比的で、自らを像の中で呈示する対象を指し示すのであり、とりわけ対象を、それ自体を通して (durch sich selbst hindurch) 示す」 (§15, S34) とされている。

フッサールによれば、さらに、この「像的統握」のなかにも相違が存在する。すなわち、「像」には、「内的・再現的に (表象的に)」機能する場合と「外的・再現的 (象徴的に)」に機能する場合がある、というのである。前者は、絵画や肖像写真のように純粋に像の中を覗きこみ、像の中に生きる場合であり、像そのものにおいて客体の再現前化をもつのである。これに対して後者は、美術館の多くの絵画を載せたカタログのように、それ自身ではなくて他のもの (オリジナルの絵画) を指し示し、それを想い起こすために役立つような場合である。なお、ここでは、絵画のカタログのようなものは、ややまぎらわしいが、「象徴」のあり方に近いけれども、「像」に属するものとして分類されているのである。

こうして、「像客体」と「像主題」に対する関心の方向の相違が存在するが、この相違はまた、「像」の「機能」上の相違とも重なってくる。「像」が「象徴」に近い働きをする場合には、関心は「外的」であるが、像を「美的に鑑賞する」ような場合には「内的」となる。その場合には、関心は「像主題」よりもむしろ、それがどのように「像客体」において像化されているか、どのような技法で描かれているか、ということのほうに向かうのである (§18)。

ところで、こうした関心の転換は、心理学的関心 (あるいは現象学的関心) などによっても可能であり、思念の方向を「像客体」に、「像主題」に、また両者が重なった「主題の像としての像客体」に、という具合に変更することができる。さらに、「現出の仕方」 (つまり色や立体的形態といった現出の構成要素やファンタスマなど) に注意を向けることもできるのである (§19)。

つぎに、「像客体」と「像主題」の間の「類似性」についてみておこう。それは、「像表象」の「適切性」という意味でも述べられ、「像客体」が「像主題」にとって適切かどうかを示す観点の検討がなされている。

「像客体」において現れたものの「輪郭」,「立体的形態」,「形」,「色」などといった諸契機に即して「適切性」が問題になるが、まず、そうした諸契機の「外延」つまり「範囲」という観点で問題になる。例えば、油絵は、「色」,「形」などさまざまな契機を含むので、単に「形」の契機のみをもつ銅版画や墨絵など比べて大きな「外延」をもつということになる。これに対して、「内包」とは、上に挙げた個々の契機に関する「適切性」や「類似性」の度合いのこと

であり、これに関しても類似や適切性が問題になる。だが、これらの観点からみられた「像」の「適切性」や「類似性」は、客観的な尺度を示すというわけではない。必ずしも銅版画よりも油絵の場合の「像客体」のほうが「像主題」に似ているとは言えないであろうし、「形」という点に関しても、たんに精密に描けば類似度が高いというものでもないであろう。それは、われわれがどのような「類似性」を読み取るか、また要求するかということに大きく依存するのである。また、フッサールも言うように、「完全な類似物」はもはや「像」ではない。

#### 第4節 物的像表象における知覚と像表象の葛藤

「像客体」と「像主題」の統握の「複合性」のゆえに、「像表象」は、「象徴による表象」や「記号による表象」に対する特殊性をもつとともに、関心の向かい方に応じて諸機能をもちうること、また、表象内容の面で像の「類似性」や「適切性」について語られうることをみた。次に、第3節で触れておいた像主題の「非現前性」という特殊性を顧慮しながら、「像表象」と「知覚表象」の対比的考察についてみていこう。これは、「物的像表象」が画布や線描などの「物的なものの知覚」と深く関連しているという点で重要性をもつつともに、「像主題」や「像表象」全体の成立の問題とも関連しているからである。

『想像講義』§20では、「知覚表象」と「像表象」が関連する例として、精巧にできた蠟人形を見る場合のように、人形（という「像」）と捉えるか、それとも人間と捉えるか、という把握の転換が挙げられている。そうした場合、最初に蠟人形を人間と見るが、次には人形（像）であることに気づくように、「知覚表象」が「像表象」に変化しようという理由から、〈像客体の現出〉が〈像へと変様させる統握〉を基づけているのだと説明されている。

だが、この説明に対しては、〈像へと変様させる統握〉がどのように生じるのかは明らかでなく、「知覚表象」がそれだけで「像表象」を、あるいはそれへの「変様」を基づけることにはならない、と言うべきであろう。むしろそのゆえにこそ、「知覚表象」と「像表象」の「葛藤」の余地もあるのである。

そのような変様の特質を明らかにするために、フッサールは、「像表象」における「像主題」の「虚構性」に注目していったように思われる。われわれもそれを追うことにしよう。

人形による「像表象」は、眼前にいない人物をそこにいるかのように表すという点で、「虚構物 Fiktum」の表象である。また、画像なしに或るものを「想像」ということも、現にないものを「想像」するのであるから、「虚構物」の表象である。さらに、写真による「像表象」も、まさしく写真そのものは現実の風景ではないのであるから、「虚構物」の表象といえる。こうして、「像表象」はいずれも「虚構」を含んでおり、この意味で、「非現前的なもの」の表象なのである。そして、まさしくこの点に、「知覚」と「像表象」の間に「葛藤」が起こる理由が存在するのである。この点についてフッサールは次のようにまとめている。

「虚構物において非現前的なるものが現出し、その結果像的に呈示されうるということ、

われわれは把握する。虚構物は、他のあらゆる現在の現出とは別様に特徴づけられ、それは、それ自身無性の烙印を担っており、それは、対象性の表象であるが、葛藤が、それは非現前的なものだということを示すのである。もし葛藤が欠けるなら、どのようにして現出は、現前的なるものと別なものを表象できるのであろうか」 (§26, S56)。

では、「非現前的なもの」の現れは、どのようにして成立するのであろうか。まさしくこうした問題が存するゆえに、フッサールの探究は、「像表象」の内部構造を「葛藤」という面から検討することに向ったと思われる。

まず、「物的像表象」における「葛藤」を見てみよう。

「われわれが主題の像表象に生きている間、われわれの知覚の視野は消滅しない。逆に、たとえ一次的思念の形式においてではないとしても、周囲の知覚を持っている。そしてその周囲は像の周囲、確かに或る仕方では主題の周囲でさえある。第一に、像に関して言えば、線描 (Zeichnung) が届かない限りで、像は知覚の統握の統一にともに属する」 (§22, S45)。

これは、像の周囲で、あるいは、線描が届かない限りで、知覚表象が支配しており、知覚風景の中に画像があるという状況である。続いて、これと対照的に、線描が像としてはたらく有り様が描かれている。この場合には、線描の「統握内容」も「像」に属するのであり、紙の「知覚」を押しよけるのである。

「それに対して、線描そのものには通常の知覚の統握が欠けている。少なくともわれわれはここですぐさま、われわれは紙を見る、と言うことはできない。統握内容が合致する限りにおいて、像の統握は紙の統握を押しよける。あるいはもっと正確に言えば、像客体が現出し、それが、主題-意識の担い手である。統握内容はこの現出のために使い果たされているのである」。

こうした把握の変遷の叙述のあとで、これらは「葛藤」としてまとめられている。「像」は、「知覚的現実」からみれば、「無」なのである。

端的に言えば、ここには葛藤 (Widerstreit) がある。しかし固有な種類の葛藤である。像客体は、それが現出に至る限りにおいて勝利する。その統握内容は像客体の統握に浸透し、現出の統一に溶け込む。しかし、他の統握もまだそこにあり、周囲の現出との通常的確固とした連関をもっている。知覚は現前的現実性の特性をもっている。周囲は現実の周囲であり、紙は現実の現在である。像は現出するが、それは、現実の現在と葛藤する。それは単なる『像』であり、それは、どれほど現出しようと、無である」 (§22, S45-S46)。

こうして、「知覚意識」と「像意識」が、いわば一枚の画布において「葛藤」し、「感覚内容」をも奪い合うのであり、たしかにこうした「葛藤」の中で「像意識」が成立しているといえるであろう。そこで、懸案の問題、「非現前的なものの意識」である「像意識」はいかにして成立するのであろうかという問題に戻ろう。

その成立の一因として、まさしくこうした「葛藤」との関連で、周囲と像を区切る額縁と

いった「枠 Rahmen」の存在が挙げられるかもしれない。だが、これは確かに、「像意識」成立の一契機として重要な機会を与えるとも考えられるが、「枠」そのものがそれだけで「非現前性」を構成するとは考えにくい。むしろ、「枠」は何らか別の形で成立する「非現前性」や「葛藤」を強調するとともに、区切りによって、「現前性」と「非現前性」の対比を助長するためのものであり、それだけで対比が形成されるとは言えないように思われる。

また、上の問いに関しては、先にみた「像客体」と「像主題」の「類似性」や「適切性」ということが、「像主題」の表象を可能にする原因として考えられるかもしれない。「像客体」は「像主題」と「多少なりとも類似したもの」であるはずだからである。そして、「類似性」については、像の諸契機の「外延」と「内包」、**「適切性」という観点が示されていた。**

だが、これは「表象内容」の点からは重要性をもつであろうが、「類似性」を、**非現前的な「像主題」**の成立を説明しうる主要な理由と考えるのには、無理があろう。

もちろんここでは、或るものがあつたときにそれに似たものを想い浮かべるのは当然だ、という見解は、この問題に対する論点先取であるという点に注意しなければならない。まさにそれこそが説明されなければならない事柄なのである。こうしてみると、像における「非現前性」の由来に関しては、以上ではまだ解答はえられていないものと判断されるべきであろう。

さて、「非現前性」という点に注目すると、「非現前的なものとして想い浮かべる」ということ、すなわち「想像」こそ、「非現前性」に関わるという点で、「像主題」の成立にとって何らかの役割を果たしているのではないという考えは、不自然なことではなからう。つぎに、その「想像表象」の内部構造に関するフッサールの論述をみていこう。

## 第5節 想像概念の再検討と「端的な想像」の概念

まず、知覚物とは対照的な想像物の現れ方が記述されている。

「想像物は形あるもの、色あるもの等として出現するが、それにもかかわらず、われわれは、知覚諸対象のまっただなかにまさしくそのようなものを発見するとは期待できないのである」 (§27,S58)。

つまり、想像されたもの(想像物)は「知覚野」のなかで知覚されたものと並んで現れるのではないということである。たしかに、机に向かいながら、友人の顔を想い浮かべるような場合、何らかの姿形が想い浮かぶにせよ、知覚野のある場所にその顔が現れるわけではない。

そのほかに、想像物の現れ方は、知覚物や画像の現れとは違って、以下の特性をもっている。やや長くなるが、「想像表象」の特性を示す重要な箇所なので引いておく。

「想像現出が核的な対象として与えられ、明確に描写され立体的で色に満ちた諸対象を直観にもたらずという場合がしばしばある。[だが、] 無数のたいていの場合には事情は異なる。想像の客体は空虚な図のように、透明で色あせ、まったく不満足な色彩と不完全な立体性を伴い、しばしば曖昧で変動する輪郭で満たされ、何であるかわからないもの、ないし、本来

的に無で埋められ、現出するものにとって、限定し然々の色彩の面として付け加えられて解釈される無で満たされたものとして、現出する。変幻自在に現出は変わり、そこに色と立体的形態といったものがひらめき、またもはや過ぎ去り、色は、たとえひらめくときでさえも、特有な空虚で、不鮮明で、無力なところをもっている。また、同様に、形は曖昧で影のようなところをもっている。そのようなものが顕在的な知覚の像性の領域へと置き入れることは思いつきえないほどである。それは、われわれがなるほど知覚の領域に基づいて表現によって記述しはするが、そこに再び見出すことのない諸区別である」 (§28, S59)。

フッサールはこのような「想像表象」における現出様式を「変幻自在的 proteusartig」と呼んでいるが、その特徴を、知覚における現出様式と対比すると、「充実、力強さ、活発性 (Lebendigkeit) がつぎつぎと転変すること」、「変化に統一性がないこと」、「断続的であり、消滅や出現があること」などと整理される。さらに、「対象の同一性を保ったままでの諸性質の変化」だけでなく、「対象そのものの変化」といった特徴も重要である。これらに対して、「知覚」や「画像」における現出には、以上とは逆に、対象の同一性、その枠内での関連し合った現出の変化といった特性があるわけである。

フッサールは、以上の現出特性を具えた「想像表象」の本質的特性を「非現前性」と規定している。

想像の本質には、**非現前性の意識** (Nicht-gegenwärtigkeits-Bewusstsein) が属している。われわれは現在において生きており、知覚の視野をもつが、そのほかにわれわれは、この視野のまったき外部に、非現前的なものを表象する現出をもつのである (§28, SS 58-59)。

さて、『想像講義』のこれ以降の進行は、この「非現前性」という「想像表象」の本質特性を根本として、それまで「精神的像表象」という「像表象」の一種として捉えられていた「想像表象」概念の再検討に向けられている。われわれは、その歩みの大要を追うことによって、「想像表象」の捉え直しがいかなる問題をめぐるものであるのか、そして、「想像表象」の内部構造はどのように理解され、その結果、「像表象」とその「媒体性」はどのように把握されるのか、をみていく。

講義 §31 においては、先にみた「想像表象」における現出の「変幻自在」性から、「像表象」における「像客体」(一次的客体と呼ばれている) が形成されないか、あるいは、形成されても変化してしまう場合のあることが認められている (S65)。ただし、「想像表象」が「明瞭で確固としている」場合もあり、その際は、ほぼ、状況は「物的像表象」の場合と同様であるとして扱われている。なおその場合、「物的像表象」とは異なり、先にみた画布のような現出の一部における「像意識」と「知覚意識」の「葛藤」ではなく、「想像野」と「知覚野」全体の「葛藤」が「想像表象」の「非現前性」を担保すると述べられている。そして、「想像表象」についてのこうした見解は、『想像講義』第6章「想像表象は像性の表象と解釈されるという見

解の総括的叙述」の題名が示すとおり、この章の終結部 (§33) にいたるまで保持される。

次の第7章「想像表象と像性の表象の間に本質的な区別を確立せんとする試み」においては、「知覚野」と「想像野」の違いとともに、「想像表象」における「統握内容」としての「ファンタスマ」と知覚における「統握内容」としての「感覺的所与」の相違が論じられ、次に示されるように、「ファンタスマ」の「非現前的特性」が強調され、明確化されてくる。

諸感覺のみが真正な実在性、しかも現在の実在性をもち、志向的諸連関のなかで真正な実在性を基礎づけるものである。それらに対して、ファンタスマは無性のようなものである。それは、非実在的であり、それ自身では何ものにも妥当せず、単に他のもの—それが与えられるのはまた感覺であるが—を呈示するものである (§37, S77)。

さらに以下では、「ファンタスマ」とその「統握」の有り様が記述されている。なお、この箇所では、「<sup>イマギナティブ</sup>像表象的統握」というこれまでの用語がそのまま使われている。

「だがファンタスマには<sup>イマギナティブ</sup>像表象的統握が属する。この像表象的統握は、感性的内容を初めて現前的なものとして定め、次に、別なものの像として受けとるといった知覚的種類の直接的統握に基づいてはいない。そうではなくて、<sup>イマギナティブ</sup>ファンタスマは直接に内在的再現前化の意識を基礎づけるのであり、それは、多少とも隔たった類似性によって、変様した意識、思念されたものを体験されたものの中に覗き込むという意識を基礎づけ、しかしながら、感性的に体験されたものが最初にそれ自身でそのようなものとして、しかも現前的なものとして妥当する必要はないのである。しかし事後的にわれわれは像表象のこの特性を捨棄することができ、われわれは具体的想像現出を、知覚の所与性と同時的なものと把握することによって、今として定めることができる」 (§37, S78)。

この文によれば、「ファンタスマ」は「現前的」である必要はなく、直接「非現前的に」存在し、「再現前化」の意識を基礎づけることになる。これは、以前にみた §31 の、「想像には像客体が形成されない場合がある」という見方を受け継ぐものである。そしてこの見方は以下の箇所でも、さらに明確に提示されていく。

「想像においてはわれわれは、『現前的なもの』を持たず、この意味で、<sup>イマギナティブ</sup>像客体を持たない。明瞭な想像においてわれわれはファンタスマと対象化的統握を体験するが、それは何ものをも（像性の意識の担い手として機能しなければならないような）現前的に現存するものとして構成しない。現出においては現在への関係がまったく欠けている。現出するものにおいて思念されたものを見ることが、直接に起こる。われわれは事後的に統握を遂行することができる。今私にはこれが現に現出する。私は今、市役所のこの現出を見るなどということであり、それを通して私は市役所『そのもの』に関係する。しかし<sup>イマギナティブ</sup>端的な想像体験においては、『現前的な市役所の現出』の統握、現前的に自らを呈示する像客体の統握は遂行されない」 (§38, S79)。

このように「想像表象」についての新しい見方が提示されているのである。振り返ってみれば、

当初の理解では、<sup>イマジナツィオン</sup>像表象は、物的像表象と精神的像表象に区分されていた。そして、物的像表象においては、絵画や写真などによって「精神的像」ないし「像客体」が形成されて、それを「媒体」として、「像主題」が表象されるのであった。他方、精神的像表象においては、物的なものによらずに「精神的像」が形成され、それを介して「像主題」が表象されるということであった。そして、「想像作用」とはこの「精神的像表象」のことと解されてきた。ところが、上の箇所では、そうした「像客体」が存在しない場合があるとされているのである。また注目すべきことに、「像」として統握することは事後的に行われうるのであり、「端的な想像体験」においては、「像客体」といったものなしに、「想像」という在り方において、市役所の現前が直接に起こるとされているのである。

「想像」についてのこのような新しい見解は、§38, §39, §40でも追究されている。ただし§38後半の「不明瞭な想像」を扱っている部分では、あまり明快な説明はみられず<sup>8</sup>, §39, §40では、実質的には「端的な想像」と言われることになる想像のあり方が認められているものの、「<sup>イマジナティブ</sup>像表象的」という形容詞が付与されている点が不徹底なままとなっている。

そして、『想像講義』第8章「諸成果と時間意識の分析への前途瞥見」の§41においては、こうした用語も明確に整理されることとなる。その箇所で、フッサールは、「想像作用」の中には「像」を媒介としないものが存在するということを認め、それを「端的な想像 schlichte Phantasie」と呼んでいる。そして、この「端的な想像」について、フッサールは次のように述べている。

「われわれの想像が戯れながら天使や悪魔、小人や水の精とかかわっているときには、あるいは、われわれの想起が過去に入り込んで、直観的諸形態がわれわれの精神の前を通り過ぎるときには、現出する諸対象は像的客体、単なる再現者、ほかのものの類似物や像として妥当するのではない。真正な像〔すなわち像表象〕においては、像の外側を見やること、ほかのものへと指示されていることが可能であり、そうしたことが起こるのであるが、それに対して、正確に考察すれば、ここでは〔端的な想像表象においては〕そうしたことはまったく意味をもたない」 (§42, S85)。

われわれが天使や悪魔などを想像する場合、たしかに、絵画などを思い出してそれを介して天使の姿を想像するということもあるが、そうした像と無関係に、あるいは、像に描かれているのとは別な風に、天使を想像することはありうる。もちろんその際、發生的にみて、像が何らかのきっかけとなるかどうかは、別の問題である。

一緒にいるのではない友人を思い起こすような場合にも、端的にその姿形を想起することはありうる。もちろんこの場合にも、以前に撮った写真を見たり、アルバムに貼られた写真を想起することを通して、その姿を思い起こすということもあろうが、そうでなく端的に以前に会

8 「不明瞭な想像」については、『想像講義』§43において再度扱われている。

った際の姿を思い起こすこともある。その際、思い起こされた友人を通して、それとは別の本人のことを思い浮かべるというわけではない。

こうした「端的な想像」の内部構造については、ちょうど「知覚表象」の場合に「感覚内容」が「統握される」ことによって知覚が成立するように、「想像表象」において「ファンタスマ」が統握されるのだと説明されている。そして、この「端的な想像」は、「知覚表象」とは異なり対象を「知覚野」のなかに「現前」させないが、「多重的」つまり「複合的」にではなく、直接に対象を思い浮かべさせるという点で、「知覚表象」と同列のものとされ、次のように、「再現前化」の働きであるとされている。

「想像表象は、それ自身において多重的な[すなわち複合的な]志向を含んでいない。ちょうど、知覚的表象すなわち現前化と同様に、再現前化は直観的表象の最終的様態である」 (§42,S86)。

### 第6節 基づけられた表象としての像表象

それでは、この「端的な想像」が存在することを考慮したとき、「像表象」における「像」のあり方、その「媒体性」はどのように理解されることになるのであろうか。この点に関しては次の説明がある。

「想像における真正な<sup>イマギナティブ</sup>像表象的機能は、もはや再び<sup>イマギナティブ</sup>像表象的ではなく少なくとも同じ意味でそうではない想像表象を前提するということは、明らかである。したがってわれわれは端的な想像表象のほうへと指示される。知覚の像性が知覚に基づいているように、想像の像性は想像に基づいているが、この想像自身はなんら像性 [像によるもの] ではない」 (§41,S84)。

ここで、「知覚の像性」とは「物的像」(画像)の知覚を介する表象、「想像の像性」とは「精神的像」を介する表象のことを指し、いずれも複合的表象であるが、前者は現前化の端的な様態である「知覚」を、後者は再現前化の端的な様態である「想像」を含みながら、それらに「基づいて」成立しているというのである。

「想像表象」についてまとめれば、それには、「精神的像」を「媒体」とするものと、そうではなく「端的な」ものがあるが、前者は後者に「基づく」ということになる。すなわち、「精神的像」は物的像(画像)なしに像を形成することによるであろうが、この像の形成そのものは、何らかの像(たとえば写真など)を直接思い浮かべるという「端的な想像」を前提としているというわけである。

では、「物的像」(画像)を「媒体」とする場合はどうであろうか。

『想像講義』の終局部の §43 に、「分析の中で出現する表象諸様態についての最終的概観」がある。

「われわれの分析を通して、一次的表象様式として、以下のものが浮かび上がる。

- (1) 二つの本来的な表象つまり(a)知覚と(b)再現前化の端的な様態、
- (2) 非本来的な表象の一つの端的な様態つまり(c)空虚な志向、



小論は、フッサールが1904/05年の講義『想像と像意識』において分析した「像表象」および「想像」の特性を「媒体性」という観点から考察した。フッサールは、1913年に刊行された『イデー 第一巻』§111においては、ここでみた「像客体」、「像主題」という事柄に、「中立的変様 Neutralitätsmodifikation」という概念を適用する事になる。これは、われわれのみた「1904/05年講義」での扱いの延長線上にあると推察されるところであるが、さらに検討を要する。

そのほか、「媒体」についてさらに広い観点からフッサールの分析を見直すこと、フッサールがこの講義のすぐ後に定式化することになる「現象学的還元」という方法論的操作、のちに問題視されることになる「ファンタスマ」や「感覺的所与と統握」図式、像の美的機能など、多くの関連する問題が存在するけれども、これらについては、稿を改めて考察することとしよう。<sup>9</sup>

---

9 小論は平成23年度山形大学人文学部プロジェクト研究「表象媒体の特質の研究－現象学と分析哲学の接点を探る－」による成果である。

**Medialität des Bildes und Phantasie**  
**— In Bezug auf Husserls Vorlesung „Phantasie und**  
**Bildbewusstsein 1904/5 “—**

Masahisa OGUMA

(Philosophie)

Die vorliegende Abhandlung besucht die innere Struktur der Bildvorstellung zu erläutern durch die Interpretation von der Husserls Vorlesung “Phantasie und bildbewusstsein 1904/5”.

In dieser Arbeit, die folgenden Punkte sind untersucht.

- 1) Grundstruktur der Bildvorstellung: Bild als wahrgenommenes Ding, Bildobjekt, Bildsujet
- 2) Komplexion der Auffassungen in der Bildvorstellung
- 3) Richtungen der Interesse und Funktionen der Bildvorstellung und Ähnlichkeit des Bildes
- 4) Widerstreitsverhältnis von Wahrnehmung und Bildvorestellung in der dinglichen Bildvorstellung.
- 5) Die Prüfung vom Begriff der Phantasie und der Begriff der “schlichten Phantasie”
- 6) Bildvorstellungen als fundierte Vorstellungen

Das Ergebnis ist folgendes.

Bildvorstellungen sind die fundierten Vorstellungsmodi, auf die schlichten intuitiven oder leeren Intentionen gebaut. Die schlichten intuitiven Vorstellungen sind Wahrnehmung und schlichte Phantasie. Daher Wahrnehmung ist charakterisiert als “Gegenwärtigung (Präsentation)”, schlichte Phantasie und bildliche Vorstellungen, als “Vergegenwärtigung (Repräsentation)”.



# 変化事象における非選択目的語の意味解釈のしくみ

## —世界知識と文脈情報の関与

鈴木 亨

### 0. はじめに

本稿では、位置変化あるいは状態変化という変化事象を内在化した構文表現における非選択目的語の導入を可能にする意味解釈の条件について考察する。まず動詞のタイプ別（結果含意他動詞，非能格他動詞，非能格自動詞）に，非選択目的語が生じた場合の適切な事象解釈のしくみを検討する。その際に非選択目的語が認可されるための世界知識と文脈情報の働きを区別し，動詞タイプによるそれらの関与の仕方について考察する。具体的には，結果含意他動詞の場合には世界知識の貢献が大きいのに対して，非能格動詞の場合には，世界知識も関与するが，むしろ文脈情報の方が適切な解釈にとって不可欠であることを論じる。

### 1. 非選択目的語の分析における前提

本稿では，次のような前提のもとに，非選択目的語の意味解釈のしくみについて分析を進める。非選択目的語は原則として，動詞の直接目的語として単独で生じることはなく，動詞補部の小節の主語として生起する。つまり，動詞補部への小節構造の導入，あるいは動詞と小節構造の併合（Merge）が必要な操作として要請される。小節は，前置詞句，もしくは形容詞を述語として含む<sup>1</sup>。前置詞句の場合は，「除去（removal）/離脱（egression）」，あるいは「挿入（insertion）/進入（ingression）」という境界横断的な有界性解釈を持つものが基本となる。形容詞の場合は，有界性解釈が必要である（鈴木2007，2008）。その点で，非有界性解釈の形容詞を許容する，いわゆる「本来的な結果構文」（影山1996，小野2007）や「弱い結果構文」（Washio 1997）とは異なる。

非選択目的語は，意味論的には動詞によって本来的には選択されていない要素であり，位置変化や状態変化の変化事象においては，そのままでは動詞活動の直接の受け手とは見なすことができない。にもかかわらず，非選択目的語が一定の変化主体（＝非影響項（patient））とし

1 不変化詞を含む句動詞表現にも共通する特性が見られるが，本稿では句動詞表現については部分的に触れるだけで，総合的な分析は機会を改めたい。

て解釈されるということは、動詞活動に起因する力 (force) が、何らかのかたちで間接的に非選択目的語に及んでいるということになる。2節では、3つの動詞のタイプ（結果含意他動詞、非能格他動詞、非能格自動詞）に基づいて、目的語の選択可能性とそこにおける解釈のしくみについて考察する。3節では、さらに非選択目的語の意味解釈を支える上での世界知識と文脈情報の寄与の仕方の違いと関連する構文イデオム化について論じる。

## 2. 非選択目的語と3つの動詞タイプ

### 2.1. 結果含意他動詞の場合

結果含意の他動詞の場合、動詞に本来選択される働きかけの直接の受け手 (force recipient) は、図式的には目的語位置に後続するPPの補部に「降格」され、目的語の位置には、非選択目的語が生じる。非選択目的語と動詞本来の意味的目的語との間には、部分と全体 (part/whole) の関係、あるいは図と地 (figure/ground) の関係が成立する。この両者の関係性は、世界知識 (world knowledge) と文脈情報 (contextual information) によって支えられる。

- (1) a. He broke some grapes off the branch.  
b. She melted the handle off the coffee pot.

(1a) における some grapes と the branch の関係は、一般的な世界知識 (ぶどうの木の枝にぶどうの果実がなる) によって仲介される。(1b) の the handle と the coffee pot の関係についても、ポットを構成する部分として取っ手があることは世界知識の一部であるといえる。いずれの場合も、主語による働きかけはPP内に降格された本来の目的語に作用すると考えられるが、部分と全体の関係を介して、行使される影響力は全体から部分に伝達され、後者の位置変化が生じるという解釈が成立する。つまり、文中の2つの項について、力が伝達される経路となる部分と全体の関係に基づいて解釈するために、世界知識が利用されていることになる<sup>2</sup>。

しかし、言語コミュニティで共有される静的な世界知識だけでなく、言語表現が発話される特定の場面という文脈に依存した情報も解釈に必要とされる事例もある。

- (2) He frightened the hiccups out of her. (Google検索に基づく作例)

2 ここでは部分と全体の関係の解釈を世界知識によるものとしたが、この場合の世界知識は、文法理論としては、例えば Pustejovsky (1995) の生成語彙論 (Generative Lexicon) の枠組みにおけるクオリア構造 (qualia structure) の主に構成役割 (constitutive role) として記述することが妥当であると考えられる。構成役割とは、事物の構造的特性を記述するクオリア構造の下位部門であるが、当該の事物の内部構造や、外在構造との関係づけが指定される。例えば、grapes がぶどうの木の一部であり、より具体的な細部においては、枝 (branch) の一部を構成しているというような情報が得られる。

この例では、しゃっくりについての世界知識（人の不随意的生理現象であり、ときに心理的ショックにより止められることがある。またしゃっくりの発作自体は比喩的に人の所有物となしうる）に加えて、先行する文脈情報（彼女がしゃっくりが止まらずに困っている）が補われることによって、聞き手は初めて適切な解釈に到達することになる。

結果含意他動詞に非選択目的語が生じる場合において、「降格」される本来の目的語の受け入れ先となるPPは一般に省略不可能であるが、これは力の伝達を媒介する全体と部分の関係性を復元可能にしておくための制約によると考えられる。つまり、全体を担う要素が明示されなければ、動詞活動によって生じる力の伝達経路を特定することができず、その結果、動詞活動と非選択目的語の関係を使役事象の枠組みで適切に解釈することができなくなるからである。

- (3) a. \*He broke some grapes (off).  
 b. \*She melted the handle (off).  
 c. \*He frightened the hiccups (out).

非選択目的語を伴うこのタイプの動詞に形容詞（結果句）の選択があまり見られないのも、同様の理由であると考えられる。すなわち多くの形容詞は、構造的に補部をとることができないので、全体の解釈を担う要素を文中に明示することができないからである<sup>3</sup>。

- (4) \*The bear frightened the campground empty.

以上のように、結果含意他動詞の場合、非選択目的語が生じるためには、（クオリア構造に指定された）世界知識によって非選択目的語と本来の目的語の間に成立する部分と全体の関係が確定され、動詞活動によって行使される力の伝達経路が保証されることが必要条件であることを見た。また、部分と全体の関係が復元可能であるためには、典型的にPPによって部分と全体における「全体」を担う名詞句を明示することも必要である<sup>4</sup>。

3 (4)の例に関して、前置詞 of を用いて frighten の本来の目的語を表すことも考えられるが、インフォーマントによる判断は不適格であった。

(i) \*The bear frightened the campground empty of people.

これは、一部の例外を除いて（例えば、fond of X）、英語の形容詞に関しては一般に of に導かれる要素は構造的には付加部であり、補部ではないということによるのではないかと考えられる。つまり、部分と全体の関係性の解釈には構造的な制約があるということになる。もう1つの可能性として、2種類の異質な変化スケールを1つの文内で両立させることができないという説明もありうるが（Rappaport Hovav & Levin 2010 参照）、ここでは最終的な判断は保留する。

4 部分と全体の関係は、基本的に世界知識における事物の特性の一部として記述されるが、場に依存した認識に基づく図と地の関係は、(2)におけるしゃっくりと人物の関係のようにより文脈依存度が強く、静的な世界知識の記述にはなじみにくいと思われる。

## 2.2. 非能格他動詞の場合

非能格他動詞（多くが表面接触を意味する活動動詞である）の目的語は、動詞の働きかけの受け手であると想定されるが、そこに被影響性（affectedness）の含意はない。つまり、動詞の活動によって位置変化や状態変化が生じるという含意はない（Beavers 2011参照）。

- (5) a. She kissed her son, but he kept sleeping without noticing it.  
b. He bit the meat, but it was too hard to cut off.

このタイプの動詞に非選択目的語が生じるときも、本来の目的語は後続するPP内に「降格」され、非選択目的語と本来の目的語とのあいだには、部分と全体の関係が成立する。

これらの例において、力の伝達経路を保証する部分と全体の関係を確定するには、文を構成する項に関する世界知識よりもむしろ、場面を特定する文脈情報の補完が不可欠である。

- (6) a. Messenger kissed these questions from her lips. (David Lodge, *Thinks...*)  
b. Bite it [= the pain] into Bobby's belt. (Stephen King, *Hearts in Atlantis*)

(6a) では、彼女が聞こうとしていた質問を封じるかたちで男（Messenger）がキスをする。質問（these questions）はもともと彼女の唇（her lips）にあるわけだが、この関係は静的な世界知識として記述するにはあまりにも偶有的であり、むしろこの発話の直前の文脈として、彼女が男にどうしても聞きたいと思っていることがあるという情報を提示しておくことが必要である。(6b) では、肩を脱臼した子どもの口にベルトを噛ませて、応急処置の痛みをがまんさせようとしている状況である。ここでも、痛み（the pain）とベルト（Bobby's belt）の関係は、世界知識的な部分と全体の関係としては記述のしようがない。先行する文脈として、話し手がいっしょにいたボビーという男の子のベルトをはずさせて、脱臼した女の子の口にあてがうという場面が提示されることで、はじめてこの表現における噛むという行為によって伝達される力の経路としての部分と全体の関係が確定されることになる。

なお、結果含意他動詞の場合と同様に、形容詞の結果句は降格された本来の目的語を構造的に保持することができず、部分と全体の関係の復元可能性が失われるので、一般には排除される<sup>5</sup>。

5 ただし、本来の目的語が保持された上での形容詞を伴う結果構文は可能である。

(i) a. She bit her lower lip bloody.  
b. The prince kissed her awake.

また、drink, eat などの消尽動詞（consumption verbs）も、非選択目的語を伴うことができるが、これらの動詞は、他動詞用法に加えて、習慣的な行為としての自動詞用法も定着しているので、ここでは非能格他動詞には含まれないものとする。

(ii) a. She ate the plate clean.

表面接触の除去動詞wipe/scrapeなどの場合は、非選択目的語パターン（図 (figure) となる異物が直接目的語となり、PP内に地 (ground) として表面接触を受ける本来の目的語が生じる）も、すでに語彙化された語義として辞書に記載されているものが多い。項構造が組み替えられたかたちで語彙化が十分に進んでいるので、文脈に応じて本来の目的語が省略され、不変化詞のみが生じることも可能である<sup>6</sup>。

- (7) a. She wiped the crumbs away.  
b. He scraped the dirt off.

非能格他動詞は、本来行為の対象物を表す目的語を持つ他動詞であるということと関係すると思われるが、身体部位などを伴ういわゆる強意の誇張表現（例えば、He scraped his fingers raw.）を除いて、非選択目的語を伴う場合でも、行為自体が目的性を持つ自発的活動であるのが一般的である。先に見た (6a) では、質問を封じることが男にとってキスすることの目的であるとも解釈できるし、(6b) では、ベルトを強く噛むのは苦痛を追いやることが目的であることが文脈上明らかである。除去動詞においても同様に、文字通り異物を除去することが動詞行為の目的となる。

ここまでをまとめると、非能格他動詞が非選択目的語を認可する場合は、結果含意他動詞と同様に、PP内に本来の目的語が「降格」され、非選択目的語との間で、位置変化の事象における部分と全体の関係が成立するが、その関係は世界知識の記述にはなじまず、特定の文脈においてその場限りで成立するような偶有的なものである。その点で「部分と全体」ではなく、むしろ「図と地」の関係と呼ぶのがより正確であろう。したがって、このタイプの非選択目的語を含む表現が適切に解釈されるためには、世界知識よりも文脈情報が重要な働きを果たすといえる。

### 2. 3. 非能格自動詞の場合

非選択目的語をとることのできる代表的な非能格自動詞は、動詞が表す活動の意味分類から大まかに次の3つのタイプに分けられる。

- 身体動作系：全身を使った身体動作 (dance, play, run, swim, walk)
- 放出活動系：主に口からの音や空気の放出を伴う活動 (bark, cough, cry, laugh, sing, sneeze,

b. They drank the teapot dry.

6 除去動詞については、例えば Washio (1997) が示唆するように、必ず変化を含意するわけではないが、変化が起こるとすれば一定の方向性を持つ変化になることが意味的に指定されているとする立場もある。また、Mateu & Rigou (2010) は、一般に英語型の結果構文を許さないとされるロマンス語の1つであるイタリア語においても、除去動詞は不変化詞と共起することにより、潜在的に指定された方向性のある変化含意に基づいて、使役移動構文的な表現が可能になるという分析を提案している。

snore, stare, talk)

- 静的活動系：目立った身体動作のない活動 (sleep)

以下では、3つのタイプの代表的な事例を見ながら、それぞれの場合の特徴を考察していく。

### 2.3.1. 身体動作系

身体動作系の動詞は、基本的に全身を使った様々な動作活動を意味するが、非選択目的語を伴うものとして、次のような例がある。

- (8) a. The joggers ran the pavement thin. (歩道がすり減ってくるほどジョギングが盛んである；Carrier & Randall 1992: 217)
- b. The bus will bounce it [= the flower] open. (話し手の子どもは、食虫植物 (= it) を持って通学バスに乗ると、その振動で花びらが開いてしまうのではないかと心配している；Megan McDonald, *Judy Moody*)
- c. …it [= another gust of wind] made them both wince their eyes shut. (強い風にとっさに身じろぎをした勢いで目を閉じる；Stephen King, *Insomnia*)

(8a-b) は、活動場面における偶発的な近接物に影響が及ぶ変化事象の描写であり、文脈情報の補完が必要とされるが、いずれも想定外の結果に対するマイナス評価の含意がある。(8c) も想定外の否定的結果としての解釈になるが、文脈情報によるというよりも、全身的な動作が身体部位 (their eyes) に影響を及ぼしているという点で、人間の身体に関する世界知識による部分と全体の関係が不可欠な情報として利用されていると考えられる。

また、全身運動ではなく、身体のごく一部分に限定される動作であっても、その行為自体が結果の実現にとって有意味なものと解釈されれば、同様の例が可能である。

- (9) I snapped everything back to life. (語り手は、特殊な能力により指を鳴らすことで自分以外の物の動きを時間的に止め、またその状態を解除することができる；Nicholson Baker, *Fermata*)

さらに、このタイプの動詞では、イディオム的な誇張表現として行為の過剰さによってその影響が再帰的に行為主体である主語に及ぶという、再帰代名詞や身体部位を非選択目的語とした機能不全解釈の事象を表す事例も多く見られる。

- (10) a. He walked himself to exhaustion.  
b. He walked his feet sore.

c. He walked his feet off.

これはイディオム化の一例として分析できるが、(11)のように不変化詞offやawayを用いて、身体運動を通じて身体に含まれる望ましくない物を除去するという一般化されたシナリオを表す事例も多い。

- (11) a. Let him walk it [= carsick] off. (Kazuo Ishiguro, *Never Let Me Go*)  
b. You can {dance/run/swim} your fat off.  
c. He tried to blink the grisly vision away. (恐ろしい光景を目にして思わず瞬きをする； Stephen King, *Insomnia*)  
d. Apple the doctor away. (ことわざ“An apple a day keeps the doctor away.”をもとにした「りんごを（毎日）食べて医者寄せつけない」という意味； Mike Keneally “Potato”)

意図せざる結果を示す(10)のような事例に対して、(11)の例は、望まれない物の除去という明らかに行為主体の意図的な行為を表している。

まとめると、身体動作系の動詞では、世界知識の関与が必要な事例もあるが、文脈情報の補完、あるいはイディオム化によって適切な解釈が得られるものが多い。また、目的性のある意図的使役行為解釈と想定外の結果がもたらされる非意図的で否定的評価を伴う変件事象解釈の両方があることがわかる。

### 2.3.2. 放出活動系

放出活動系は、主に発声器官から音や空気を放出すると理解される身体行為を表す自動詞である。このタイプの動詞とともに非選択目的語が用いられる例には次のようなものがある。

- (12) a. She laughed my remark off.  
b. He talked us into a stupor.  
c. The neighbor's dog barked me awake.  
d. She sang her baby to sleep.  
e. The teacher stared the children into silence.

これらの動詞に共通する特徴は、本来自動詞であるにもかかわらず、潜在的な働きかけの対象、すなわち動詞行為から生じる物理的あるいは比喩的な何らかの力が潜在的に向けられる対象を、前置詞を介して表すことができるものが多いという点である。

- (13) a. She laughed at me.  
 b. He talked to me.  
 c. The dog barked at me.  
 d. She sang to her baby.  
 e. She stared at the children.

通常であれば間接的にPP内に表される潜在的行為対象が「格上げ」されて非選択目的語になるということは、動詞行為の程度が何らかの意味で強まるという事態と呼応する。つまり、通常の活動では作用の及ばないものにまで何らかの力が及ぶということである。これらの事例において、本来PPを用いて表現されるはずの非選択目的語は、働きかけを受けるものとして動詞活動の場に潜在的に存在するものと考えられる。このように動詞の潜在的指向性が認められるということは、動詞行為を通じて主語から特定の対象に向けて物理的あるいは比喩的に影響力が行使されるというシナリオが、非選択目的語の導入に関与していることを示唆している。

また、次の例のように行為者からの放出物 (emitted object) の物理特性が結果状態の実現に直接関与している場合もある。

- (14) a. Freddy cried the handkerchief wet. (Vanden Wyngaerd 2001: 75)  
 b. I've pissed myself free. (Mikael Niemi, *Popular Music from Vittula*)

(14a) では、潜在的な放出物 (tears) の液体としての性質が結果状態 (wet) を直接引き起こしている。(14b) は、氷点下の厳寒の屋外で誤って自分の肌を金属製のドアにつけて凍結させてしまったという文脈で、語り手が自分の小便の熱によって凍結部を溶かして体をドアから引きはがすという状況のユーモラスな描写であるが、いわゆる機能不全の読みとは異なる意図的な使役行為である。いずれも、動詞ごとに世界知識として記述される放出物の性質の理解が、適切な解釈に寄与している。

ここまで見てきた放出系動詞の事例は、動詞行為の潜在的行為対象が非選択目的語になるものであったが、これらの動詞と共起する非選択目的語が必ずしも前置詞を伴って表される行為対象を「格上げ」したものとして分析できるわけではない。例えば、動詞 laugh には、笑う行為の対象物が非選択目的語として生じる場合もあるが、文脈上偶然に動詞の活動の場に存在する事物が非選択目的語となる場合もある。

- (15) a. They laughed the actor off the stage.  
 b. John laughed tomato soup up his nose. (Verspoor 1997: 115)

(15a) では, the actor自身がlaughingという行為の対象であると考えることが可能だが, (15b) では, tomato soup自体がlaughingの対象とは考えられず, laughingという活動の場面にたまたま存在した事物にすぎない。このことから, 非能格自動詞の場合は, 前置詞によって表現される潜在的な行為対象は, あくまでも非選択目的語として認可されやすいというだけで, 必要条件というわけではない。つまり, これらの動詞にとって非選択目的語になりうるのは, 潜在的な行為対象か, 行為の場における偶有的な近接存在物のいずれかということになる。後者の類例としては次のようなものがある。

- (16) a. Frank sneezed the tissue off the table. (Goldberg 1995: 152)  
 b. I nearly hiccupped my coffee down the wrong tube. (Google検索)  
 c. I nearly coughed my tea over the monitor. (Google検索)  
 d. Please do not snore me awake. (Google検索)

これらの例では, いずれも偶有的な近接物が動詞の作用を受ける非選択目的語となることにより, 概ね非意図的活動に対するマイナスの評価を伴う描写となっている。また, 適切な解釈には, 個別の動詞に関して放出活動系であるという知識に加えて, 非選択目的語として導入されるのは動詞行為の場に近接した存在物であるということが文脈情報によって明らかにされていなければならない。

さらに, 放出活動系における第3のタイプの非選択目的語として, 放出物の代行とでもいうべきものがある。

- (17) She stared daggers at him. (Kazuo Ishiguro, *Never Let Me Go*)

この例は現代英語においては, 文脈依存というよりも, daggersという名詞に特化した構文イディオム (おそらく [shoot daggers at/to X] を基本モデルとしたlook daggers at X/talk daggers to Xのような類例がある) からの派生的事例と分析できるが, イディオム化の起源としては, このような非選択目的語は, 動詞の潜在的放出物の代行物と考えることができる。つまり, daggersは, 彼女の目から発せられる強い視線 (her stare) を比喩的に代行しているのである。同様の代行物としての非選択目的語には, 次のような例がある。

- (18) She beat the Ten Commandments into her children. (Broccias 2003: 86)

ここでは, 動詞beatの本来の目的語と解されるhis childrenが「降格」されるとともに, 行為としてのbeating (のエネルギー) が対象に向かう放出物であるという抽象的理解のもとで, その

代行物としてthe Ten Commandmentsが非選択目的語として導入されていると分析することができる。

まとめると、放出活動系の非能格自動詞と共起する非選択目的語には、解釈上3種類の実現の仕方、すなわち(1) (前置詞を伴って表しうるような) 行為の潜在的な対象物、(2) 行為の場に偶有的に存在する近接物、(3) 行為に伴う放出物の比喩的な代行物、があるということになる。いずれも文の適切な解釈には、文脈情報が大きく関わっている。

### 2.3.3. 静的活動系

静的活動系の動詞は、sleepのように活動自体に目立った動作が含まれず、基本的に指向性もないので、比喩的にも力の放出や行使という場面が想定しにくい、次のような非選択目的語をとる例がある。

- (19) a. He tried to sleep the anxiety away.  
b. Sleep your wrinkles away. (Levin & Rappaport Hovav 1995: 36)

ここでは、動詞sleepが、意図的な行為を促す動詞tryの補部や命令文として使用されていることに注意する必要がある。つまり、本来は対外的な力の行使を伴わない活動であっても、行為の意図性の読みが強制される文脈に埋め込まれることによって、動詞行為の目的に対する指向性が獲得されると考えられる。なお、このタイプでは、主語にとって望ましくない（本来は譲渡不可能な）存在物の除去というシナリオが共通している。

### 2.3.4. 非能格他動詞と非能格自動詞についてのまとめ

ここまで見てきた非能格他動詞と非能格自動詞について非選択目的語が生じる文の特徴をまとめると、次のような一般化ができる。意図的行為の場合には、非選択目的語は、動詞行為の潜在的な働きかけの対象としてPPで表されうるものが「格上げ」されるのが典型である。一方、非意図的な想定外の事象の場合には、非選択目的語は、世界知識的な意味では動詞の潜在的行為対象ではなく、動詞行為の場に偶有的に存在するだけの近接物であるというものである。後者の場合、意図性のない想定外の事象であることから、否定的評価の解釈が多くなるのは自然な帰結である。ただし、特に静的活動系の動詞は、命令や努力目標という文脈に置いて意図的行為の読みを強制すると、世界知識に依存しない完全に文脈依存の非選択目的語をとることができ、その場合はむしろ目的性のある使役行為として解釈される。

### 3. 世界知識と文脈情報

本節では、これまでに見てきた各種の動詞タイプにおける非選択目的語の認可における世界知識と文脈情報の関与の仕方におけるいくつかの一般化についてさらに考察する。

#### 3.1. 意図的行為と非意図的行為

前節での分析は、意図的行為は解釈における世界知識への依存度が高いが、一方、非意図的行為は世界知識に加えて文脈情報への依存度が高いという傾向の違いを示している。そもそも結果構文における結果句、あるいは使役移動構文における移動経路によって結果を明示することは、結果状態、あるいは移動先（経路）そのものに一定の情報的な価値があることが前提となる。結果状態や移動先が情報的価値を持つのは、(1)動詞行為の目的（結果）の達成が目指される場合と、(2)逆に動詞行為によって話し手もしくは主語にとって想定外の結果がもたらされる場合、という2つの可能性が考えられる。後者の場合は、さらに目的性の欠如を反映して、さらに機能不全解釈のイディオム化も進んでいる。

関連して、影山（2005）は、bark someone awakeという形をとる結果構文表現では、想定外の偶発的な出来事としてよりも、目的性のある意図的行為としての解釈の方が容認しやすいという母語話者の判断を指摘している。

- (20) a. The neighbor's dog barked me awake.  
b. The rescue dog barked me awake in the snow.

(20a) では、隣家の犬が私に向かって直接吠えるわけではなく、外で吠えているのを聞いて私が目を覚ますわけだが、(20b) では、救助犬が遭難して気を失っている私を見つけて直接吠えて起こすという状況である。

非選択目的語を伴う派生的な使役事象表現では、文脈による特別な誘導がなければ意図的行為事象の読みが想定外の非意図的事象の読みよりも優先されるという一般的解釈規則があるのかもしれない。使役事象解釈の典型性から考えると、行為の目的性は期待される結果と組み合わせられ、さらにその反転として、想定外の結果が否定的評価の機能不全解釈を導くということになる。

#### 3.2. 非使役的同時進行解釈

ここまでの非選択目的語が生じる事例は、意図的行為も非意図的行為も、基本的な事象構造の枠組みとしては、使役行為としてまとめられるが、非使役的な同時進行の事象として解釈される事例もある。Rothstein（2004）は、非選択目的語を伴う次のような結果構文で、典型的な

使役解釈ではなく、2つの下位事象の単なる同時進行解釈が可能であると指摘している<sup>7</sup>。

- (21) a. The crowd cheered the huge gate open. (群衆が歓声を上げるなかで門が開く；Rothstein 2004: 131)  
b. Every night the neighbor's dog barks me asleep. (隣の家の犬が吠えるのを聞きながら寝つく；ibid.)

いずれも動詞行為が変化事象を引き起こしているわけではなく、ある状況で2つの事象が単に並行的に進行していることを表している。類例として次のような例もある。

- (22) He ate himself older, drank himself dizzy. (Squeeze “Labelled With Love”)

前半部He ate himself olderでは、eatingの行為の継続と歳をとるという変化は、使役的な因果関係とはいえ、並行的な同時進行（「たくさん食べながらどんどん歳をとっていく」）であると解釈される。結果句としてはあまり見られない比較級の形容詞が用いられており、そのため有界性の解釈にはならないが、これはFolli & Harley (2006) による、使役移動構文においてPPが必ずしも完結性（有界性）であるわけではないという指摘にも対応している。上の(21a)の例でも、openは、「徐々に開いていく」という状況を描写しており、必ずしも完結性の解釈になるわけではない。(21b)のasleepも有界性の解釈に限定されるわけではない。使役性のない同時進行解釈においては、PPだけでなく形容詞結果句においても、有界性制約が適用されない場合があることがわかる。

目的性のある意図的使役行為を基準としてそこからの逸脱という観点から考えると、目的性が欠如することにより、使役性を残したまま想定外の結果を伴う否定的評価の解釈と、使役性が漂白された同時進行解釈という2つのパターンに分かれることになる。

### 3.3. 非選択目的語の逸脱パターン

非選択目的語は、意味解釈において他動詞の本来の働きかけの対象となる典型的な目的語から何らかの方向に逸脱したものと考えられるが、その逸脱の仕方は、ここまでの議論をもとにすると、次のようにまとめられる。

- (23) 動詞行為の受け手としての非選択目的語の逸脱パターン

- 本来の目的語を構成する一部分（事物の部分全体構造に関する世界知識と必要に応じた文

---

7 使役解釈と同時進行解釈の多義性について、Rappaport Hovav & Levin (2001) も参照。

脈情報による)

- 潜在的な働きかけの対象 (動詞に関する世界知識と文脈情報による)
- 場面において偶有的な近接関係のある事物 (文脈情報による; 放出物の代行を含む)
- 動詞の主語 (行為者), あるいはその身体部位 (再帰的な作用による機能不全解釈として構文イディオム化)

結果含意他動詞の場合には, 動詞行為の力の伝達の解釈は, 基本的に世界知識 (特にクオリア構造における構成役割) に依存した部分と全体の関係性に基づいてなされる。つまり, 本来の目的語の一部分を構成するものしか原則的には非選択目的語として認可されない。これらの動詞では, 使役の基本スキーマにおいて影響を受ける変化主体 (= 被影響項 (patient) としての本来の目的語) が義務的なものとして語彙的に指定されるので, 非選択目的語はその被影響項と関連づけられる必要がある。おそらく, 動詞に指定された被影響項は文法表示から抹消することはできないという制約が機能していると考えられる。その結果, 結果含意他動詞の場合には, 世界知識 (部分と全体の関係性) によらずに, その場の文脈情報のみによって支えられるような非選択目的語は許されないので, 構文としての文脈依存性は相対的に低くなる。

一方, 非能格動詞の場合には, 本来的な他動詞では, 部分と全体の関係性など世界知識が関与するが, 特に自動詞では非選択目的語となる潜在的な選択肢が広がるので, むしろ解釈に必要な場面を特定するための文脈情報への依存度が高くなる。また, 結果含意他動詞の場合とは異なり, 部分と全体の関係が明示されない, つまり本来の目的語に当たる表現が直接具現化しない場合でも, 世界知識によるサポートが当該の部分と全体の関係性の復元に寄与する場合もある。

(24) a. They drank the teapot dry. (Levin & Rappaport Hovav 1995: 187)

b. Drive your engine clean. (ibid.)

ここでは, 動詞行為に関わりを持つ典型性の高い事物と非選択目的語とのあいだに, 世界知識により全体と部分という関係が容易に推測できる。(24a) では, 本来の目的語teaはteapotのクオリア構造における目的役割から復元可能であり, (24b) では, engineのクオリア構造における構成役割から, 本来の目的語carを復元することが可能である。

また, 非能格自動詞で文脈依存度が特に高い場合には, 動詞と結果句の組み合わせに関していわゆる一度限り (one shot) の創造的な用例となることが多い。固定的な世界知識ではなく, 流動的な文脈情報への依存度が高いということが, トークンとしての生産性の低さに反映されているといえる。

### 3.4. 非選択目的語構文におけるイディオム化

非選択目的語に関わる構文イディオム化は、一部の語句を固定することにより、特定の文脈の型を喚起し、必要とされる個別の文脈情報を最小限に押さえる機能を持つ。それにより、本来の文脈依存度の高さから生産性が限定される、非能格動詞を含む結果構文や使役移動構文が、高い生産性を持つようになる。非選択目的語に関しては、次のような構文イディオムのレパトリーがすでに確立していると考えられる。

#### (25) 非選択目的語を伴う構文イディオム

- 再帰代名詞 + 機能不全結果句 (blind/crazy/dizzy/hoarse/sick/silly/unconsciousなど)
- 身体部位 + 機能不全結果句 / off/out [過剰な動詞行為の強調]<sup>8</sup>
- 異物 (望ましくないもの) + away/off [動詞行為によって異物を除去する]
- タブー語 (the hell, the devil, the witsなど) + out of X [過剰な動詞行為の強調]<sup>9</sup>

再帰代名詞と身体部位の場合には、使役事象の典型的な解釈から目的性が失われ、その裏返しとして想定外の機能不全に至る変化事象に解釈が特化されている。除去対象の異物の場合には、使役事象の目的性が維持されるが、異物の所有者は動詞の主語、すなわち行為者自身に特定されているため、不変化詞のaway/offのみの表示である。タブー語の場合は、その所有者は主語に限定されず、むしろ他者であるのが普通であり、out ofの目的語として明示されることになる。

## 4. 終わりに

本稿では、変化事象を表す構文表現、特に結果構文と使役移動構文における非選択目的語の導入をめぐる意味解釈のしくみについて考察した。動詞本来の目的語ではない非選択目的語が、使役行為における動詞の作用との関係において適切に解釈されるためには、世界知識と文脈情報が補完される必要があるが、動詞のタイプによって場合分けすると、結果含意動詞の場合には、世界知識に基づく部分と全体の関係性が解釈の中心的な役割を果たすのに対して、非能格動詞の場合には、場面における近接物としての関係性を特定する文脈情報への依存度が大きい

8 身体部位を非選択目的語とする機能不全解釈の構文イディオムでは、強調される動詞行為に最も直接的に結びつく(過剰な行為によって酷使されやすい)身体部位が選ばれていることにも注意したい。

(i) a. They danced their {butts/feet} off.  
 b. They waved their hands off.  
 c. She cried her eyes out.  
 d. He coughed his lungs out.  
 e. I studied my brains out.

9 非選択目的語としてタブー語が固定された構文イディオムの起源とその広がりについては、Hoeksema and Napoli (2008)、大室 (2006) を参照。

ことを論じた。

\*本論文は、科学研究費補助金（基盤研究(C)課題番号21520499）の助成を受けた研究成果の一部をまとめたものである。

## 参 考 文 献

- Beavers, John (2011) "On Affectedness," *Natural Language and Linguistic Theory* 29, 335-370.
- Boas, Hans C. (2003) *A Constructional Approach to Resultatives*, CSLI Publications, Stanford.
- Broccias, Cristiano (2003) *The English Change Network: Forcing Changes into Schemas*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Carrier, Jill and Janet H. Randall (1992) "The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives," *Linguistic Inquiry* 23, 173-234.
- Folli, Raffaella and Heidi Harley (2006) "On the Licensing of Causative of Directed Motion: Waltzing Matilda All Over," *Studia Linguistica* 60, 121-155.
- Goldberg, Adele (1995) *Constructions: A Constructional Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.
- Hoeksema, Jack and Donna Jo Napoli (2008) "Just for the Hell of it: A Comparison of Two Taboo-term Constructions," *Journal of Linguistics* 44, 347-378.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』, くろしお出版.
- 影山太郎 (2005) 「辞書的知識と語用論知識 - 語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて」, 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラムNo. 1』, 65-101. ひつじ書房.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge.
- Mateu, Jaume and G. Rigau (2010) "Verb-particle Constructions in Romance: A Lexical-Syntactic Account," *Probus* 22, 241-269.
- 小野尚之 (2007) 「結果述語のスケール構造と事象タイプ」, 小野尚之 (編) (2007) 『結果構文研究の新視点』, 67-101, ひつじ書房.
- 大室剛志 (2006) 「構文イディオム you scared the living daylights out of me について」, 田中実・神崎高明 (編) 『英語語法文法研究の新展開』, 77-83, 英宝社.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*, MIT Press, Cambridge.
- Ramchand, Gillian (2008) *Verb Meaning and the Lexicon: A First Phase Syntax*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2001) "An Event Structure Account of English

- Resultatives,” *Language* 77, 766-797.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2010) “Reflections on Manner/Result Complementarity,” Rappaport Hovav, Malka, Edit Doron, and Ivy Sichel (eds.) *Lexical Semantics, Syntax and Event Structure*, 21-38, Oxford University Press, Oxford.
- Rothstein, Susan (2004) *Structuring Events: A Study in the Semantics of Aspect*, Blackwell.
- Suzuki, Toru (2007) “Between Conventionality and Compositionality: The Resultative Construction Deconstructed?” *English Linguistics* 23, 213-244.
- 鈴木亨 (2007) 「結果構文の有界性を再考する」, 小野尚之 (編) 『結果構文研究の新視点』, 143-176, ひつじ書房.
- 鈴木亨 (2008) 「結果構文の半生産性と創造性のありか」, 金子義明他 (編) 『言語研究の現在』, 387-396, 開拓社.
- Vanden Wyngaerd, Guido (2001) “Measuring Events,” *Language* 77, 61-90.
- Verspoor, Cornelia Maria (1997) *Contextually-dependent Lexical Semantics*, Doctoral dissertation, University of Edinburgh.
- Washio, Ryu-ichi (1997) “Resultatives, Compositionality and Language Variation,” *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.

**On the Semantic Interpretation of Unselected Objects in the  
Change Event: How They Interact With  
World Knowledge and Contextual Information**

Toru SUZUKI

The purpose of this paper is to examine the semantic mechanisms of interpreting unselected objects in the change event, in particular, as realized in the resultative construction and the caused motion construction. Three types of verbs, namely result verbs, transitive unergative verbs, and intransitive unergative verbs, are involved in the relevant constructions, and it is shown that each type of verb tends to interact with different types of information provided by world knowledge as specified in qualia structure of relevant lexical items and by contextual information given online. Specifically, the unselected object with result verbs is mainly interpreted via part-whole structure specified in world knowledge of the 'original' object while the interpretation of the unselected object with unergative verbs significantly relies on contextual information, allowing more innovative, if not productive, 'one-shot' instances. Some related constructional idioms are also discussed.



## 固定される聴取者，明かされない過去 ——ジークフリート・レンツのラジオドラマ「迷宮」

渡 辺 将 尚

1

筆者は以前、ジークフリート・レンツの初期のラジオドラマ「家宅捜索 (Haussuchung)」(1963年) について論じたことがある。その際、この作品にはラジオドラマならではの技法が随所に用いられていることを明らかにした。<sup>1)</sup> それはたとえば以下のような場面で見ることができる。

「トム：で、君はどこに行くんだい？ 僕を待たせるつもりかい？

クリスティーナ：長くはかからないわ。彼 (= 夫であるボッセ) を呼んできて、すぐに戻ってくるわ。彼がもう戻ってきてたらいいんだけど。そしたら、あの役人たちもすぐに消えてくれるのに。

ドアの音。彼女の足音が遠ざかっていく。ふたたび足音。しかし、男のもの。ドアの音。ボッセが家に入ってくる。彼は、自分の実際の価値と、他人からの評価 (の相違) を知っている。自分の存在価値に慣れることに成功している。手慣れた謙虚さが彼の特徴である。

ボッセ：叫ぶ：クリスティーナ！クリスティーナ！」<sup>2)</sup>

この作品の主人公である主婦クリスティーナは、犯罪の嫌疑をかけられている学生トムを自宅のガレージにかくまっている。引用した部分は、クリスティーナがトムのもとを訪れ、ふたたび家の中へ戻る場面である。注目したいのは、ト書きの前半部分である。(ト書きの後半は、ボッセの性格描写であり、実際の放送<sup>3)</sup> には現れない。) ここでは、足音を境にして、突然の場面転換が行われている。実際の放送では、地面を歩く音から階段を登るような音に変化するだけで、そこだけではまだ聴取者は、クリスティーナが階段を上がったものと感じざるを得ない。その後、彼女の夫ボッセが「クリスティーナ！クリスティーナ！」と叫ぶことによって初めて、足音の主が実際は変わっていたこと、つまり、急激に場面転換が行われたことを認識するに至るのである。

この技法は、ラジオドラマの特徴を最大限に利用している。なぜなら、紙媒体の小説では、いくら語り手が突然の場面転換を行おうとも、読者にはそれにしたがう義務はなく、前の場面にとどまることも、場合によってはそこで読書を中断してしまうこともできるからである。ラジオドラマではそれは不可能である。聴取者は、ラジオを通じて流れてくるものをそのまま受け容れるしかないのである。

ラジオドラマの特徴を生かしたこの技法は、これほど劇的ではないにしても、突然の場所移動という形で、少し後に書かれたラジオドラマ「迷宮 (Das Labyrinth)」(1967年)でも見ることができる。これは、聴取者が知らない間に場所を移動させられ、後になって気づくという点で、「家宅捜索」の場面転換と同じ意味を持つ。なぜなら、すでに述べたように、ここに聴取者に選択の余地はないからである。しかし、そのような場所移動が顕著に行われるのは、作品前半のみである。後半にはいると、逆に聴取者は一定の場所に固定されることが多くなる。つまり、前半ではさまざまな場所を強引に連れ回されるのに対し、後半ではある1人の人物に一定時間付き従い、そこから出来事を観察することになるのである。このことが意味するものは何なのだろうか。前述のように、突然の場面転換は、ラジオドラマの特徴を最大限に利用している。ならば、その場面転換を放棄するということは、ラジオドラマの特徴を放棄したことになるのだろうか。本稿では、同時期に書かれた長編小説をも参照しながら、これらの問題について考えてみたい。

## 2

「迷宮」の前半部分において見られる場面転換とはどのようなものだろうか。ここではまず作品の内容を追いつながりながら、この点を見ていくことにしよう。

物語は、エルフィとトルーディという初老の姉妹が暮らす家に警官が訪ねてくることから始まる。姉妹はテラスで警察官を迎える。

「警察官：酔いをさまそうと、あなたの家のさんざしの生け垣で眠ってしまった酔っぱらいの消息がまったく分からなくなっているんです。

エルフィ：明らかに私たちが疑ってらっしゃるんですね。ここで、誰彼かまわず葬る墓地を運営していると・・・

トルーディ：震える声で抗議する：そう感じざるを得ないですね。

警察官：私はただ、あなたがたがそれについておっしゃることがあるかどうか、知りたいだけなんです。

エルフィ：何についてです？

警察官：後に行方不明として届けられる人たちが、最後にあなたがたの敷地で目撃されているということについてです。」<sup>4)</sup>

この引用より前の部分で、さらに数人の人物が、この家の敷地に入ったきり行方不明になっていることが報告されている。警察官が姉妹のもとを訪れたのは、その事情をくわしく確認するためである。そのうちに警察官は、庭にある小屋を発見する。

「警察官：ところで、あの小屋は？

エルフィ：どの小屋ですか？

警察官：あそこにある廃屋というか、何というか。

トルーディ：迷宮のことを言っているのよ、エルフィ。

警察官：あの五角形の廃屋です。

エルフィ：あれは迷宮・・・ちょっとした庭園迷宮 (ein kleines Gartenlabyrinth) ですよ・・・」<sup>5)</sup>

この後、この迷宮は父がペルシアからの贈り物としてもらったものであること、この迷宮に立ち入ることは父から強く禁じられており、2人がいまだにその教えを守っていることなどが説明される。しかし、警察官は、迷宮を見てみたいと言い出す。

「警察官：ちょっと見てもいいですか？

エルフィ：私たちがついて行かなくてもよいのなら・・・それと、植えたばかりの花壇に注意してくださいよ・・・

警察官：私自身も庭をもっていますから・・・失礼しますよ。

音楽」<sup>6)</sup>

ここで注目したいのは、引用最後のト書き部分である。実際の放送では、ここに数秒間の音楽が入り、物語は一度中断する。この音楽が意味するものは、そのすぐ後のトルーディと弟アルトゥスとのやりとりによって明らかになる。

「トルーディ：警察のあの若いのはどこに行ったのかしら？

アルトゥス：迷宮さ。

トルーディ：まだいとまを告げてはいないでしょ？

アルトゥス：迷宮を調べたかったみたいだからね。

トルーディ：でもこんなに長くはね・・・あの中で何をしてるのかしら・・・」<sup>7)</sup>

トルーディは、警察官がまだいとまを告げていないのに、姿を現さないのを心配している。

つまり，この短い音楽の間にすでにある程度の時間が経過しているのである。聴取者は，トルーディの最後のセリフ「でもこんなに長くはね」によって，間にはさまれた音楽が時間の経過を示すものと認識するに至るのである。また，アルトゥスが警察官の足跡をたどってそれが間違いなく迷宮につながっていることを確認する場面があるが，そこから，先の音楽の間に3人の登場人物——エルフィ，トルーディ，アルトゥス——が，警察官を迎えたテラスから迷宮近くに移動していることも明らかになる。この音楽によって聴取者は，気づかないままに場所を移動させられていたのである。

他にも同様の箇所がある。

警察官は結局，迷宮に入ったまま姿を現さない。この迷宮を利用して，エルフィとお婆のマルリースは，男の暴挙に苦しむ女たちのための相談所を開設し，そのような男たちを迷宮に葬ってしまおうと考える。以下の引用は，その計画に関する話が終わり，実際に相談所が始まる場面である。

「マルリース：なんて音かしら・・・波がますます強く・・・ますます高くなるわ・・・波が防波堤に打ち寄せてる・・・

エルフィ：何か飲んだら，マルリースお婆さん。

音楽。

ドア。さわがしい声。ドア。静寂。

マルリース：万事うまく進んでる？トルーディ。

トルーディ：疲れ切って：今一時的に閉めたわ。部屋があふれかえってるから。恐ろしいわ・・・みんな悪魔と暮らしてるのね。」<sup>8)</sup>

マルリースは以前から耳鳴りに悩まされている。「波」とはその耳鳴りのことである。その後音楽が挿入されているが，ここでもこの音楽をはさんで時間の隔たり——おそらくは，相談所の計画から実際に開設するまでの数日間，あるいは数週間——がある。また，聴取者はこの音楽を境に場所を移動させられている。注目すべきは，中程にあるト書きの2行目「ドア。さわがしい声。ドア。静寂。」である。これは，ドアが開いてさわがしい声が聞こえ，ふたたびドアが閉じて静寂がもどったと解釈できる。しかし，これだけでは聴取者は自分がどこにいるのか分からない。それが明らかになるのは，その後のマルリースとトルーディのやりとりを聞いてからである。トルーディの最後のセリフにあるように，「部屋があふれかえって」おり，そこには「悪魔と暮らしてる」人たちがいるということから，その部屋が待合室であり，すでに相談所が開設されたと理解することができる。そうした状況の中で聴取者は，警官が訪ねてきて以来ずっと留まっていた屋外から，いつの間にか多くの人びとがひしめく待合室につづく静かな部屋——おそらくは相談室であろう——に移動させられ，隣室から入ってきたトルー

ディのセリフを聞いていることになっているのである。

### 3

以上の例から、「家宅搜索」と「迷宮」の共通点は明らかである。音楽が挿入される、されないの違いはあるものの、いずれの作品でも、聴取者は制作者の思うままに、しかもそれとは気づかないうちに場所を移動させられるのである。

しかし、冒頭に述べたように、作品後半に入ると、そのような場所移動はあまり見られなくなる。以下の引用は、相談者の夫をうまく迷宮に誘い込む役を負っていたトルーディが、実際声をかけたものの、そのままその男と話し込んでしまう場面である。

「ある男：(略) あの黒いボール——あれは何かご存じですか？

トルーディ：もちろん・・・正確に言えば、風速警報器ですわ。風向はだめですが、風力は6から7までを示すことができるんですよ。

ある男：驚くほど知識をお持ちですね。

トルーディ：単に必要だったというだけですわ。

ある男：もしか、気象学に入れ込んでらっしゃるんですか？

エルフィ：近く、警告するように、独り言：トルーディ・・・その話はやめなさい、トルーディ・・・

マルリース：彼女は何をしているの？」<sup>9)</sup>

ここで注目したいのは、7行目のエルフィのセリフに付けられているト書きである。「近く」とあるのはマイクの近くという意味であり、実際の放送では、その直前にある、男とトルーディの会話よりも大きく聞こえてくる。このことが示すのは、聴取者は、男とトルーディのところではなく、エルフィおよびマルリースのところにいる、ということである。聴取者は、エルフィとマルリースが女性から話を聞く相談室にいて——おそらくは窓越しに——外にいる男とトルーディの会話を聞いているのである。前章の引用（注釈8）で、聴取者は相談室の中にいて、隣室から入ってきたトルーディのセリフを聞いていることを確認した。その後につづくのは、エルフィとマルリースが女性からの相談を受ける場面である。だとすれば、相談が始まる前の注釈8の引用から、実際に相談が始まった後である注釈9に至るまで、聴取者は一切場所の移動をしていないことになる。先に引用で見たト書き「近く」は、外での会話に焦点が移行したからといって、決して聴取者が場所を移動したわけではないということ、あらためて印象づける効果を持つ。

同じ効果をもたらす場面が直後にもうひとつある。直前の引用同様、ある男とトルーディとの会話である。

「ある男：あの奇妙なあずまやは？

トルーディ：迷宮です・・・(略)

ある男：見下したように：あの中で道に迷って言うんですか？

(略)

ある男：すぐに戻ってきますよ。笑いながら：むしろ浴槽の中の方が迷いそうですね。

トルーディ：戻っていてもいいですか？

ある男：すぐに追いつきますよ。聞。

マルリース：近く：完璧ね。

エルフィ：まるで教科書だわ。」<sup>10)</sup>

ここでも注目すべきは、最後の2行，マルリースとエルフィのセリフである。2人は、やはり相談室の中から外を見て、男を迷宮へと導くトルーディのやり口を絶賛している。聴取者も同様に、相談室から移動することなく、部屋の中から外の様子を見ているのである。

ずっと一定の場所に固定されていた聴取者が解放されるのは、クノプフという名の相談者が現れる場面である。トルーディは、これまで同様、庭に出て相談者の夫に声をかけようとする。

「音楽。

外を歩くトルーディの足音。

トルーディ：こんにちは。聞こえますか？

クノプフ：愛想よく：こんにちは・・・」<sup>11)</sup>

足音まで明確に聞こえるということは、聴取者はすでに相談室を後にして、トルーディのいる庭に出て来ていることになる。音楽の間に場所を移動させられているのである。ここに来て、聴取者はようやく相談室から解放される。

聴取者を一定の場所に固定するというのは、明らかに意図的になされている。なぜなら、注釈8の引用でも、注釈10の引用でも、あえてマルリースとエルフィのセリフを入れる必然性はまったくないからである。では、聴取者を一定の場所に固定する、あるいは突如としてそこから解放することで得られる効果は何なのだろうか。以下では、いよいよこの問題について考えていくことにしよう。

作品ではその後、直前の引用文でトルーディが話しかけた相談者の夫とは、実はかつてトルーディと恋人関係にあり、迷宮に入っていったきり行方不明になったと思われていたブルクハルト・クノプフであったことが判明する。実際には、彼は迷宮にすがたを消したわけではなかった。

「クノプフ：彼女（＝エルフィ）は、僕を愛していると言った——彼女は僕にこの家をいっしょに出てほしいと頼んだ——僕たちが君の帰りを待っている間にね・・・

トルーディ：うそよ、ブルクハルト・・・そんなことあり得ないわ！

クノプフ：彼女の荷物もすでに用意されていた。僕はこの目で見た・・・彼女は、あとは君の同意を待つだけだった・・・それどころか、彼女はもう切符も用意していた。自分の分と僕の分をね・・・僕は、君が何もかも知っていると思っていたよ・・・エルフィとは後で何も話さなかったのかい？」<sup>12)</sup>

エルフィは、クノプフが妹トルーディの恋人であることを知りながら、いっしょに逃げようという頼みを持ちかけていた。その後のことについては、これ以上語られないが、エルフィがこの家に残っているという事実から、この話は実現しないままクノプフだけがすがたを消したことが分かる。

すでに確認したように、このやりとりは庭で行われ、聴取者自身もすぐそばでこれを聞いている。このことが示すのは、このやりとりを、相談室にいる当のエルフィは聞いていない、あるいは、エルフィに聞こえるようには行っていないということである。それは、聴取者を近くに移動させたというだけでなく、直前の引用の少し後に置かれた以下の部分からも明らかである。

「音楽。

エルフィ：急いで：片付いたの、トルーディ？ --25番は片付いたの、と聞いているの。

トルーディ：断固として：どうして外に出て確認しないの？」<sup>13)</sup>

「25番」とは、この日の25番目の相談という意味であり、25番が片付くとは、クノプフを迷宮に追いやることを指す。また、トルーディの「どうして外に出て確認しないの？」というセリフから、これらの会話が部屋の中で交わされていることが分かる。外から部屋の中に入ってきたトルーディに、エルフィがクノプフの件がどうなったのか尋ねているということは、彼女が外の様子をうかがっていなかった、あるいは、彼女に聞こえないように会話が行われたことを示している。

この作品における場所移動の——もしくは、あえて場所移動させない——効果は、まさにこの点にある。聴取者を、ある時は長い間一定の場所に固定し、またある時は、音楽をはさんで別の場所に移動させることによって、その時その時の情報を登場人物中のだれが把握しており、だれが把握していないかが明確になる。つまり、トルーディと「ある男」の会話は、エルフィとマルリースにまで把握されているが、その後のトルーディとクノプフとのやりとりは、この2人以外誰にも聞かれていないのである。

4

ここから得られるメリットは何なのだろうか。それはまず，物語の中心の移動である。聴取者が音楽をはさんで相談室から外に連れ出されるまで，物語の中心——これを主人公と呼んでよければ，主人公——は，明らかにエルフィである。注釈8および10の引用で，トルーディとある男の会話にあえてエルフィのセリフを挿入したのも，この意図であると解釈することができる。<sup>14)</sup>先に述べたように，聴取者はエルフィのそばにいて，彼女の側から出来事を観察しているのである。しかし，聴取者が外に出た瞬間，物語の中心はトルーディに移行する。ここで，聴取者は，クノプフから過去に関する重要な秘密を聞くことになるが，これを聞いているのは，聴取者の他にはトルーディだけである。

相談室に戻ったトルーディは，エルフィに怒りをぶつけ，これ以上彼女に協力しないことを明言する。さらに，突然の出来事で何が起こったか分からないエルフィに，トルーディは，外にクノプフがいることを告げる。

「エルフィは窓際に駆け寄る。

トルーディ：そうよ，外を見なさいよ・・・彼よ。分かった？

エルフィは外へ走り出て行く。ドア。

トルーディ：さあ行きなさい・・・さあ。

ドア。

マルリース：いったい何があったの・・・」<sup>15)</sup>

引用3行目のト書き「ドア」は，エルフィが外へ出て行った音である。また，5行目の「ドア」は，今度はマルリースが外から部屋の中へ入ってきた音である。したがって，トルーディは，エルフィが出て行った後も，聴取者とともに，相談室に残されたことが分かる。

その後，エルフィがいらないことに気づいたマルリースは，トルーディにつぎのように尋ねる。

「マルリース：(略) エルフィはどこ？

トルーディ：そこよ。

マルリース：どこ？庭？*間*。困惑して：あれはまさか男じゃないでしょうね？

トルーディ：その通りよ。マルリースおばさん。

マルリース：驚いて：迷宮に入っていくわ・・・いっしょに・・・ほら見て，トルーディ・・・どういうこと？いっしょに・・・急いで急いで，トルーディ・・・」<sup>16)</sup>

すでに確認したように、聴取者は、マルリースが入ってきた後も部屋にいて、窓から外の様子を見ている。窓の外では、再会したクノプフとエルフィが迷宮に入っていくのが見える。2人が迷宮に入っていく理由はもはや知ることはできない。なぜなら、場所の移動が行われないうちによってトルーディとともに部屋の中に固定された聴取者は、外にいる2人のすがたを遠くから眺めることができるだけだからである。作品前半において、物語の中心であったエルフィは、もはや聴取者がその行動を把握できない遠い位置にいる。

これは、ラジオドラマの特性を十分に生かした技法であると言える。なぜなら、同様のことを紙媒体で行おうとすれば、そこには著しい不自然さを伴うこととなるからである。すなわち、語り手は、対象としている登場人物（たとえばAならA）が、状況をどこまで把握し、どこから把握していないかを地の文により説明しなければならない。この不自然さを避けようと思えば、登場人物Aに1人称の語り手として語らせるしかない。しかし、その場合でもラジオドラマのように、語り手の自在な移動をごく自然に行うことは不可能である。

聴取者がエルフィから離れ、物語の中心がトルーディに移動したことによって、物語の核心をなす過去の出来事——エルフィがブルクハルトと逃げようとしたこと——の詳細は、結局それ以上聴取者には明かされない。その詳細が明かされるためには、エルフィとクノプフの会話を聞かなければならないが、その2人の様子を聴取者は窓越しに眺めているだけだからである。

クノプフの出現とともに突然よみがえってきた過去によって、エルフィ・トルーディ姉妹の、曲がりなりにも調和が取れていた生活は崩れ始める。すでに述べたように、過去の出来事を知ったトルーディが、エルフィにもはや協力しないことを告げたからである。

「トルーディ：(略) 今日から私抜きでやってちょうだい・・・あなたなら私の役目を引き受けられるかもしれないわね。あなたのエネルギーと復讐の願いでもって・・・私は旅に出るわ。

エルフィ：トルーディ、あなた、自分を見失い始めたんじゃない？

トルーディ：逆よ。自分を見いだそうとしているのよ。

間。」<sup>17)</sup>

この後、物語は、トルーディが、男たちを迷宮で始末していたエルフィとマルリースを告発しようと警察に向向き、事情を話して帰るところで終わる。つまり、「迷宮」は、過去の問題がすべて明るみに出ない、言い換えれば解決しないことによって、現在の姉妹の関係が破壊される様を描く物語であると言える。そして、この物語の進行を下支えしていたのが、聴取者がある時は一定の場所に固定し、ある時は解き放すという、場所移動に関する技法であった。

この現在と過去との関係は、「家宅搜索」とはまったく異なるものである。本稿の冒頭にお

いて、2つの足音による突然の場面転換を取り上げた。その際、それは、聴取者がラジオを通じて流れてくるものをそのまま受け容れるしかないという、ラジオドラマの特徴を最大限に利用しているのだと述べた。つまり、聴取者は、その場その場の流れ、言い換えれば、今現在ある時間の流れに身を任せるしかない、と言える。この技法は、作品の内容とも一致している。ボッセは、現在第2次世界大戦の英雄として知られているが、ある男の出現により、その過去が嘘であったことが明らかになる。やがて、それが妻クリスティーナの知るところとなる。クリスティーナは、そのような夫とはもう暮らせないと言うが、最後は結局また2人で新たに生活を始めていくことになる。過去に拘泥することなく、現在の状況を受け容れて先へ進もうとするのである。

同時期に書かれた長編小説『パンと見世物』(1959年)も同様である。この小説では、1万メートル走者として華々しい活躍をしていたベルトが、いかにして落ちぶれてレースに敗れたかが、記者である語り手の目を通して語られている。ここで特徴的なのは、そのようなベルトの過去が、彼の最後のレースの様子(=現在)と重ね合わされ、交互に語られているという点である。しかし、主導権は明らかに現在の方にある。なぜなら、レースが中間点に達すれば、回想も中間点に達し、レースが終われば回想も終わるように描かれているからである。つまり、回想は、レースが続いている間だけ存在を許可されているのである。この作品において、過去はただ、現在ある状況(=ベルトが敗れたということ)を説明するという意味でのみ価値を持つ。ここで、「家宅捜索」との共通点は明らかである。現在は現在で否応なく進んでいくのであり、過去は現在に影響を及ぼすものではないのである。

この、現在が過去に対して持つ主導権を完全に逆転させたのが、本稿で取り上げた「迷宮」であると言える。この作品において現在は、過去の出来事を不問のものとすることによってのみ成り立つものである。しかし、過去は、現在がそのようにして否応なく進んでいくことを許さない。解決されていない過去は、ある瞬間にかならず現在の中にすがたを現し、現在を破壊するのである。<sup>18)</sup>

この延長上にあるのが、1968年に出された長編小説『国語の時間 (Deutschstunde)』である。

窃盗の罪を犯し刑務所に服役している20歳の青年ジギーは、刑務所から「義務の喜び」というタイトルの作文を課題として課される。その中で彼は、第2次大戦中異常な義務感にかられ、警察官として上からの命令に盲目的にしたがうことしかできなかった父親を子細に描写しようと決心する。700ページ以上にわたるこの長編小説のほとんどが、父親の異常な行動を描写するジギーの作文の内容そのものであるが、そこで彼は徹底的に父親を糾弾していく。

ジギーの論点は一貫している。自分が今刑務所に服役しているのは、大人たちに原因があるということである。彼は、刑務所長ヒンペルに向かってつぎのように言う。

「僕は、ルクビュルの警察官である父の代わりにここ(=刑務所)にいるのです。(略)そ

れどころか、もしかしたらここにいるすべての若者が、だれかの代わりなのかもしれません。(略)なぜ問題ある大人のための島やその手の施設がないのでしょうか。」<sup>19)</sup>

ジギーのいる刑務所は、川の中州に建てられ、外界から孤立している。引用3行目の「問題ある大人のための島」とは、問題ある大人を社会から隔離し教育するための施設の意である。上からの命令に従うこと自体は罪ではない。しかし、そのようにしてナチズムを容認(あるいは加担)した大人こそ、もう一度教育を受けるべきである。<sup>20)</sup> 罪を負うべきは、大人たちのもとでゆがんでしまった若者たちではない。大人たちがナチズムを容認したという過去が解決されていないということが、現在に生きる若者を破壊しているのである。ジギーが、作文の中で、戦時中の父親の行動を子細に描写し、過去を徹底的に白日の下にさらそうとするのは、そのためである。彼が回想している場所は刑務所であり、彼は作文を書き終えるまでいつまでも与えられた個室を使用することが許されている。つまり、過去が徹底的にあぶり出されるまで、現在は歩みを止めたまま、延々とつづいていく。「迷宮」同様、過去が解決されない以上、現在は破壊されたままなのである。

\*

この章で挙げた諸作品は、現在と過去との関係において、2つに分けることができるだろう。<sup>21)</sup> すなわち、1つは「家宅搜索」と『パンと見世物』、もう1つは「迷宮」と『国語の時間』である。前者の主導権は現在にあり、後者は過去にある。ラジオドラマと長編小説がそれぞれ対をなすということは、レンツにおいて、ラジオドラマと長編小説の流れは明らかに連動しているということを指す。たしかに、ラジオドラマには長編小説が持つような重々しい雰囲気はまったく感じられない。しかし、現在と過去の関係——つまり、過去の出来事を現在からどう捉えるか——という、レンツのライフワークとも呼べる問題意識において、両者は確実に同一線上にある。レンツ文学の基礎は、このようにラジオドラマと長編小説が連動し相互に補完しあうことによって、形作られていったと言える。

## 注

- 1) 拙論：「時間の文学としてのジークフリート・レンツ——ラジオドラマ「家宅搜索」と長編小説『パンと見世物』」〔山形大学人文学部研究年報〕第8号〕2011, 146～149ページ。
- 2) Lenz, Siegfried: Werkausgabe in Einzelbänden. Hamburg (Hoffmann und Campe) 1998. Bd.18. S.189. 斜字体の部分はト書き。( )内は引用者による説明であることを示す。以下の引用でも同じ。
- 3) 本稿を執筆するに当たり、実際の放送を録音したCD-ROMを使用した。出典は、以下の通り。Siegfried Lenz. Das Rundfunkwerk. Hörspiele, Features, Essays, Feuilletons, Reisebilder,

Autobiografische Texte, Gespräche, Dokumente. Hrsg. von Hanjo Kesting. Hamburg (Hoffmann und Campe) 2006.

- 4) Lenz, Siegfried : Werkausgabe in Einzelbänden. Bd.18. S.119f. 引用文中の「・・・」は原文のまま。引用を省略する場合には，(略)と表記する。以下の引用でも同じ。
- 5) *ibid.* S.120f.
- 6) *ibid.* S.122.
- 7) *ibid.*
- 8) *ibid.* S.137.
- 9) *ibid.* S.149.
- 10) *ibid.* S.151.
- 11) *ibid.* S.154.
- 12) *ibid.* S.157f.
- 13) *ibid.* S.158f. なお，引用文中の「---」は原文のまま。
- 14) たしかに注釈8でも注釈10でも，エルフィとともにマルリースが発言している。しかし，作品全体を見た場合，これだけをもってマルリースを物語の中心と言うことは難しい。マルリースに比較的大きな位置づけが与えられている背景には，構想段階においては彼女が主人公であり，迷宮は死んだ彼女の夫の所有ということになっていたという事情が関係しているのであろう。(Begleitbuch, Siegfried Lenz. Das Rundfunkwerk. S.34.)
- 15) Lenz, Siegfried : Werkausgabe in Einzelbänden. Bd.18. S.161.
- 16) *ibid.* S.161f.
- 17) *ibid.* S.159f.
- 18) とはいえ，この変化は，まったく脈絡のないところから突然に起こったのではない。作品化こそされてはいないが，レンツは早くから政治的・社会的問題に対して発言し行動していた。アデナウアー（在任1949-63）の政治に対するレンツの態度を，Erich Maletzkeは以下のようにまとめている。「彼（＝レンツ）は，ナチ国家において罪を犯した医者や裁判官などが，新しい民主主義的ドイツにおいても不問のまま彼らのキャリアを継続できており，それを同盟二党（CDUとCSU）が黙認したことをとりわけ非難する。」(Maletzke, Erich: Siegfried Lenz. Eine biographische Annäherung. Springe (zu Klampen) 2006. S.80.) 《過去を不問にすることによって成り立つ現在》という問題意識は，まず初めにレンツの政治的行動から現れ，それが若干の間において作品化されたと見ることができる。
- 19) Lenz, Siegfried : Werkausgabe in Einzelbänden. Bd.6. S.702.
- 20) こうした問題意識の背景には，レンツが1926年生まれであるという事情も大いに関係している。Alfred Neven DuMontは，1926年および27年生まれの人々について，第2次大戦終結時17歳から19歳であった彼らは，当時戦争を指揮する立場になかったにもかかわらず，罪だ

けを負わされた世代であったと指摘している。(Jahrgang 1926 / 27. Erinnerungen an die Jahre unter dem Hakenkreuz. Hrsg. von Alfred Neven DuMont. DuMont Buchverlag (Köln) 2007. S.7.) この点をふまえれば、「ナチズムを容認(あるいは加担)した大人こそ、もう一度教育を受けるべきである」という批判は、容易に理解することができる。

21) もちろん、レンツ作品に通底する特徴は、この4作品にも見ることができる。Wilhelm Großeは、その特徴について以下のように述べている。「レンツは、自分が没落するか、他人を裏切るかという二律背反しかない極限的な状況に、登場人物たちを置くのである。」(Große, Wilhelm : Textanalyse und Interpretation zu Siegfried Lenz Deutschstunde. C. Bange (Hollfeld) 2011. S.11f.) 「自分が没落するか、他人を裏切るかという二律背反しかない極限的な状況に」置かれた人物とは、それぞれ、「家宅搜索」では過去を隠蔽していた時点でのボッセ、『パンと見世物』ではライバルにけがを負わせることによって勝利をつかむベルト、「迷宮」ではエルフィとブルクハルト・クノプフとの過去の出来事を知ってしまったトルーディ、そして『国語の時間』では、父親の異常な義務感に耐えきれず反旗をひるがえすジギーに対応する。本稿で2つの枠組みに分類したのは、あくまで現在と過去との関係を問題にした場合である。

## **Festgehaltene Zuhörer, verheimlichte Vergangenheit ——Siegfried Lenz' Hörspiel „Das Labyrinth“**

WATANABE Masanao

Im Hörspiel „Das Labyrinth“ (1967) wird ein bemerkenswertes Mittel benutzt, das von einer Eigenschaft des Radios guten Gebrauch macht : Die plötzliche Änderung des Schauplatzes. Von Musik, die zwischen die Szenen eingeschaltet wird, werden Zuhörer zu einem anderen Ort bewegt, ohne das zu wissen. Beim Lesen eines auf Papieren gedruckten Werks ist es unmöglich, weil die Leser keine Pflicht haben, den Änderungen des Schauplatzes zu folgen : Sie können bleiben, wo sie wollen, und auch mit dem Lesen aufhören. Dieses Mittel ist eine Eigenschaft des Radios, wodurch man gesendete Sachen so akzeptieren muss, wie es ist.

Aber in der zweiten Hälfte des Hörspiels wird dieses Mittel aufgegeben : Zuhörer werden oft in demselben Ort festgehalten. Wie lässt sich das erklären?

Das Ziel dieses Festhaltens ist Verheimlichung der Vergangenheit. Die Hauptpersonen dieses Werkes sind eine Rentnerin Elfi und ihre Schwester Trudi. Vor vielen Jahren hatte Elfi einen Plan, mit dem Geliebten Trudis (Burckhardt Knopf) ins Ausland zu fliehen. Indem Knopf allein verschwunden ist, ist dieser Plan gescheitert. Dass Knopf jedoch wieder erschienen ist, hat die Geschichte an den Tag gebracht. Aber die ganze Geschichte können die Zuhörer nicht erfahren, weil sie in demselben Ort festgehalten sind und sich nicht durch verschiedene Szenen frei bewegen können.

Danach wird die Beziehung zwischen den zwei Schwestern zerstört. Nämlich behandelt „Das Labyrinth“, wie verheimlichte Vergangenheit (dass Elfi mit Knopf fliehen wollte) Gegenwart (die Beziehung zwischen Elfi und Trudi) zerstört. Diese Stellung gegenüber Vergangenheit und Gegenwart ist ganz anders als in den vorhergehenden Werken von Lenz : Dort ist Gegenwart wichtiger als Vergangenheit. Die Zeit vergeht ohne weiteres, und Vergangenheit ist nur wichtig, um zu erklären, wie die vorliegenden Situationen entstehen.

„Das Labyrinth“ kehrt dieses Verhältnis um : In diesem Werk, wie gesagt, zerstört verheimlichte Vergangenheit Gegenwart. Das heißt, Vergangenheit ist wichtiger (oder mächtiger) als Gegenwart, weil Gegenwart für immer zerstört bleibt, wenn Vergangenheit nicht gelöst wird. In den späteren Werken von Lenz ist dieses Stellung unverändert. Das Hörspiel „Das Labyrinth“ hat in der Literatur von Lenz einen großen Wendepunkt gemacht.

## 平成22年度研究・教育活動報告

### 【人間文化科】

#### Mark Irwin

##### (1) 研究成果

発表：2010年5月 Irwin, Mark. Mora Splitting in Loanword Compound Clipping. 東京音韻論研究会, 東京大学.

書評：2010年9月 Irwin, Mark. 'Japanese Linguistics: An Introduction' (Yamaguchi, Continuum, 2007)' eLanguage.

2011年1月 Irwin, Mark. 'The Linguistics of Football' (Pavric et al., Narr Francke Attempto Verlag, 2008)' The Linguist List 22 : 527.

論文：2011年2月 Irwin, Mark. Mora Obstruent Epenthesis in Loanword Adaptation. 山形大学紀要 (人文科学) 17: 2, 53-70.

論文：2011年3月 Irwin, Mark. Japanese Loanword Orthography From 1955. 山形大学人文学部研究年報 8 : 39-57.

##### (2) 教育, 地域連携等の活動

(担当授業名)

言語学演習, 英語コミュニケーション上級, 英語コミュニケーション中級, 英語C

#### 相沢 直樹

##### (2) 教育, 地域連携等の活動

平成22年度の授業：文化交流史講義 (前期), ロシア文化論 (後期), ロシア文化講読 (前期), ロシア語 I・II

#### 浅野 明

##### (1) 研究成果

- ・監修：クリステル・ヨルゲンセン他/竹内喜・徳永優子訳『戦闘技術の歴史3 近世編 AD1500 - AD1763』(創元社, 2010年10月)

##### (2) 教育, 地域連携等の活動

- ・担当授業：西洋中世の歴史と社会 (歴史学), 西洋史概論 (一), 西洋史講義 (一), 西洋史演習 (一), 西洋史講読 (一)
- ・出張講義：山形県立南陽高等学校 (山形県南陽市, 7月1日)

(3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

『戦闘技術の歴史 3』は、2009 年に監修をおこなった『中世編』に次ぐもので、やはりわが国では類書がほとんどない分野である。高等学校の出張講義については、「歴史学（西洋史）と私たち—多様な文化と刻まれた記憶—」と題して、前半では、世界の多様な食文化の歴史について、また後半では戦争の記憶について、具体例をあげながら解説した。

**芦立 一郎**

・著書論文 なし

・教育，地域連携等の活動

アジア文化概論 アジア文化論演習 中国文学講義 中国語ⅠⅡ

NHK 文化講座講師

\* 唐宋の詩歌，愛情表現に関係する語彙の様相と構造について調査研究中である。

**阿部 宏慈**

(1) 研究成果

1) 論文

阿部宏慈「ドキュメンタリー映画における〈アクチュアル〉の問題に関する一試論」山形大学人文学部研究年報 第 8 号（平成 23 年 3 月）pp. 83 - 111.

阿部宏慈「声とテキスト」(Nord - Est, 日本フランス語フランス文学会東北支部会報[Web 版] No. 3)

2) 口頭発表

阿部宏慈「メディア化された身体のカロスオーバー」(シンポジウム「映画は今?」)平成 22 年度日本フランス語フランス文学会東北支部大会 (於：秋田大学，平成 22 年 11 月 13 日)

(2) 教育，地域連携等の活動

1) 教育

基盤教育共通科目コミュニケーション・スキル 2（フランス語）を担当した。また，欧米文化論専修ならびに比較文化・表象文化論専修の開講科目を担当し，両コースの卒業論文指導にあたった。

2) 地域連携活動

山形国際ドキュメンタリー映画祭理事として，映画祭準備年の活動に携わった。

山形新聞に「偏愛映画」のコラム等を執筆した。

(3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

研究については，ドキュメンタリー映画を中心とする視覚表象の問題に関して，科学研究費の助成を受けておこなった成果を公表した。また，研究分担者として参加している「声とテキスト」の研究について，前年に実施したシンポジウムの記録を発表した。さらに，2 月にはフランスに赴き，フランス国立図書館において，特にジャン・コクトーとジャン・デボルドなど

に関する資料を調査してきた。その成果は、平成23年度中に論文として公表する予定である。

教育活動に関しては、基盤教育が発足し、その共通科目としての初修外国語を担当した。学生たちもまじめで熱心な学生が多く、楽しみながら学ぶことができた。学部のフランス文化論は、ショパン生誕200年を受けて、ショパンを狂言回しに「七月王政のパリ」という主題で講義をおこなった。比較文化・表象文化論関連の授業では、「表象文化演習」を担当した。指導した卒業論文のテーマは、1970年代のフォークソングの研究や2000年代のインディーズロックの研究といったポピュラーミュージック関連から、『赤毛のアン』の世界の研究、日本映画における少女表象と多岐にわたった。

## 新宮 学

### (1) 研究成果等

論文：「中国近世における羅城—明代南京の京城と外郭城の場合—」橋本義則編

『東アジア都城の比較研究』3-22頁 京都大学学術出版会 2011年2月

論文：「北京城と葬地—明王朝の場合—」同書141-164頁

研究ノート：「明清北京城の禁苑」同書370-373頁

研究ノート：「明嘉靖年間における北京天壇の成立と都城空間の変容」同書395-397頁

海外調査：2010年8月17-26日 韓国内の新羅・高麗・李朝の副都・王都の調査

海外調査：2010年8月29日-9月7日 モンゴル都城調査（ウランバートル・ハラホリン等）

国際会議報告：「中国近世的羅城—以明代南京の京城和外郭城為例」2010年10月29日 中国首届世界城市史論壇（フォーラム）（中国杭州師範大学）

### (2) 教育、地域貢献等の活動

〔教育〕担当授業：〔学部〕東洋史概論（一）、東洋史講義（一）、東洋史演習（一）、東洋史講読（一）、文化環境学（一）、北京の歴史（歴史学）、マルコ・ポーロの『東方見聞録』を読む（教養セミナー）、外国史概説（地域教育文化学部兼担）〔大学院〕東アジア近世史特論Ⅰ、東アジア近世史特別演習

卒業論文指導：東アジア近現代史をテーマとする学生1名

修士論文指導：台湾近現代史をテーマとする院生1名

〔地域貢献〕

- 模擬講義：福島県立原町高等学校 9月14日
- 高校訪問：仙台市内の高校4校 9月
- 教職免許状講習：高校地歴・中学社会「東アジアからみた世界史」8月6日
- 放送大学面接授業：歴史学 2月5-6日

### (3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

研究活動では、21年度より始まった基盤研究(B)「近世東アジアの都城および都城制についての比較史的総合研究」の研究代表者として共同研究を進めた。また新たに基盤研究(A)「比較史的観点からみた日本と東アジア諸国における都城制と都城に関する総括的研究」（代表

橋本義則教授)に分担研究者として、基盤研究(B)「朝鮮史における複都・副都の位置・構造・機能に関する調査研究」(代表 田中俊明教授)に連携研究者として加わった。

## 池田 光則

### (2) 教育, 地域貢献等の活動

#### (i) 担当授業

- 学部専門教育科目: 言語学概論(一), 言語学概論(二), 言語学演習, ラテン語初級
- 教養教育科目: 言語学概論(言語学), 言語学とその周辺領域(言語学), 英語
- 大学院: 言語学特論

#### (ii) 出張講義等: 山形県立酒田西高等学校(2010年10月14日), 石巻専修大学平成22年度教員セミナー「教養科目における大人数講義の授業実践」(2010年12月2日)

#### (iii) 卒業論文指導テーマ

- 日本語の語基「感」の考察—その意味, 用法の拡大について
- 狂言におけるリズムの構造について

## 石澤 靖典

### (1) 研究成果

[著書・論文]

- 「十五世紀フィレンツェにおける都市図の展開—フランチェスコ・ロッセッリの地図制作と都市の理念—」, 『都市を描く—東西文化に見る都市と景観図—』(佐々木千佳・芳賀京子編)所収, 東北大学出版会, 2010年, 31-97頁。
- 「フランチェスコ・アルベルティーニ『彫刻・絵画に関する覚書』(一五一〇)」, 『美術史学』, 31-32号, 2011年, 153-182頁。

### (2) 教育, 地域連携等の活動

- 非常勤講師: 東北学院大学(芸術論), 東北生活文化大学(美学), 宮城学院女子大学(イタリア語)
- 講演: NHKカルチャー仙台校特別公開講座「フィレンツェ・ルネッサンスの美~都市を彩った芸術家たち~」(2011年3月9日)

### (3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

平成23年10月に本学に着任した。平成22年度は東北大学大学院文学研究科専門研究員として研究教育活動にあたった。

## 磯野 暢祐

### (2) 教育, 地域貢献等の活動

- 基盤教育として, フランス語Ⅰ(前期)を週4コマ, フランス語Ⅱ(後期)を週4コマ, フランス語Ⅲ(前期)を週1コマ担当。
- 専門教育として, 言語学特殊講義(音声学)(前期), 言語学特殊講義(ロマンス語学)(後期),

- フランス語学演習・中級（前期）、フランス文化講読（後期）、欧米文化概論（前期）を担当。  
・大学院では、音韻論特論Ⅱ（前期）を担当した。

## 板垣 哲夫

### (1) 研究成果

「前期西田幾多郎（最初期～一九二五年三月）における内在と超越」（『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第7号，2010年10月）

「中期西田幾多郎（一九二五年四月～一九三二年一〇月）における内在と超越」（『山形大学紀要（人文科学）』第17巻第2号，2011年2月）

### (2) 教育、地域連携等の活動

日本史概論（二）、日本史講義（二）、日本史演習（二）、日本史講読（二）、スタートアップセミナー（人文学部・人間文化学科）、福沢諭吉再考（歴史学）、江戸時代とは何か（教養セミナー）、教員免許状更新講習（日本歴史の前提）

## 伊藤 豊

### (1) 研究成果

（論文）

"Fenollosa, Art Education, and the Art Industry in Meiji Japan," The International Association of Japan Studies: Newsletter, No. 7, 2011.

（学会発表）

「移民同化論の肯定的考察」、日本国際文化学会創立10周年記念特別全国大会、共通論題2：変容する国際秩序と文化の展開（2011年7月2日、名桜大学）

### (2) 教育、地域連携等の活動

- ・担当授業：例年に同じ。
- ・地域連携等：（1）放送大学山形学習センターにて客員教員を務める（客員教員としての通常業務＋前後期それぞれ1回の面接授業をおこなう）。（2）岩手県立高田高校にて出張講義（2011年10月17日、講義タイトル「移民について考える」）。

## 伊藤 晶文

### (1) 研究成果

[学術論文等]

伊藤晶文（2010）：豪雨による土砂災害防止対策を考える—鹿児島県シラス台地周辺を事例に一。季刊地理学, 62, pp. 143 - 145.

伊藤晶文・木場幸乃（2011）：鹿児島における1830年代から1850年代の気候復元。鹿児島大学研究紀要自然科学編, 62, pp. 1 - 8.

[学会発表]

伊藤晶文：大隅半島北部におけるシラス台地の開析谷の形態と分類（第2報）. 2010年5月. 2010年度東北地理学会春季学術大会.

佐々木明彦・吉田明弘・箱崎真隆・大山幹成・伊藤晶文：鳥海山七高山溶岩の下位にみられる2層の泥炭層から得られた花粉化石および木材化石. 2010年5月. 2010年度東北地理学会春季学術大会.

伊藤晶文・木場幸乃・福山愛：古日記による1830年代から1850年代の鹿児島島の気候復元. 2010年10月. 2010年度東北地理学会秋季学術大会.

菊地 仁

(1) 研究成果

[論文]

- ・「中世の『伊勢物語』注釈とその周辺—物語草子から近世絵画への波及—」, (『伊勢物語享受の展開（伊勢物語成立と享受2）』, pp. 51 - 70, 2010年5月)

[書評]

- ・「美濃部重克・美濃部智子『酒吞童子絵を読むまつろわぬものの時空』」, (『説話文学研究』4, pp. 182 - 185, 2010年7月)

[目録]

- ・「西行文献目録（地方文献版）山形県」(『西行学』1, pp. 188 - 193, 2010年7月)

(2) 教育, 地域連携などの活動

[2010年度の担当授業]

・前期

人間を考える（基盤教育）/

スタートアップセミナー・日本文化演習・日本古典文学講義/

日本古代中世文化特論・アジア文化特別研究（大学院）

・後期

山形に学ぶ（基盤教育）/

文化構造学・日本文化概論・日本文学演習/

日本古代中世文化特別演習・アジア文化特別研究（大学院）

[出張講義]

- ・宮城県石巻高等学校・大学模擬講義（2010年10月21日）
- ・栃木県立宇都宮南高等学校・進路学習講座（2010年10月28日）

[地域連携]

- ・放送大学客員教員

小熊 正久

(1) 研究成果

- 論文：「視覚媒体としての光とその経験」(山形大学人文学部研究年報第8号, H23. 3)
- 研究発表：「映画と身体」(於ハルビン工業大学。当大学と山形大学人文学部とのシンポジウムにて, H22. 9)

(2) 教育, 地域連携等の活動

- 上記シンポジウムに参加。
- 出張講義：新潟県佐渡高校 (H22. 8.20)。長野県木曾青峰高校 (H23. 3. 7)。
- 担当授業：基幹科目 (西洋の自然観と人間観), 共生人間学一 (自然と環境の思想), スタートアップセミナー, 哲学演習二 [前, 後], 西洋哲学史 (科学革命～ライプニッツ), 人間文化入門総合講義 (実存について), 西洋哲学講読, ギリシア語 [前, 後], 基盤教育 (人間と世界), 哲学講義一 (他者の問題), 哲学演習二 (Heidegger), 哲学基礎。
- 指導した卒論題目：「ハイデガーにおける現存在の実存論的分析—死の概念—」

(3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

平成22年度人文学部プロジェクト研究「メディアにおける画像の分析—現象学と分析哲学によるアプローチ」(小熊ほか, 清塚, 山田圭一, 田口)として「画像」や「画像表象」の在り方を中心に共同討議を行った。今後の共同研究に活かしたい。

**清塚 邦彦**

(1) 研究成果

(a) 研究業績

論文

「フィクションの統語論をめぐって」『哲学の探究 (哲学若手研究者フォーラム)』第37号, 5-17頁, 2010年6月。

書評

「川野洋『ネットワーク美学の誕生: 「下からの総合」の世界に向けて』」『科学哲学 (日本科学哲学会)』第43巻第2号, 115-118頁, 2010年12月。

(b) その他の研究活動

日本科学哲学会 『科学哲学』編集委員

科学基礎論学会 『科学基礎論研究』査読委員

(2) 教育, 地域連携等の活動

(a) 担当授業

(教養教育)

「哲学ってどんなこと? (哲学)」(前・後期)

(専門教育)

「哲学基礎」(後期), 「人間情報科学基礎」(後期), 「論理学概論」(前期),

「情報記号論」(後期), 「現代応用倫理」(後期), 「情報記号論演習」(前・後期)

(大学院)

「論理学特論」(前期), 「論理学特別演習」(後期)

(b) 講演会ほか

第8回 新潟哲学思想セミナー (シンポジウム提題「フィクションとリアリティ」) (2011年3月, 新潟大学人文学部にて)

**坂井 正人**

(1) 研究成果

[口頭発表]

1. Estableciendo los Centros de las Organizaciones de los Paisajes en las Sociedades Andinas, 1er Encuentro Academico Internacional: Deidades, Paisaje y Astronomia en la Cosmovision Andina y Mesoamericana, Museo Nacional de Arqueología, Antropología e Historia del Perú. 2010年4月28日 .

[著書・論文・エッセイなど]

1. El Templo del Sol Coricancha en Cusco y Vilcabamba (Masato Sakai), *Miradas al Tahuantinsuyo*, Fondo Editorial PUCP, pp.133 - 158.

2. Excavación en el Templete de Limoncarro, valle bajo de Jequetepeque (Masato Sakai, Juan Martínez), *Boletín de Arqueología PUCP*, Fondo Editorial PUCP, 12, pp.171 - 201.

3. *Informe Final del Proyecto de Investigación Arqueológica de las Líneas y Geoglifos de la Pampa de Nasca* (Primera Temporada) (Masato Sakai, Jorge Olano), Instituto Nacional de Cultura del Perú, pp. 1 - 149.
4. *Informe Final del Proyecto de Investigación Arqueológica de las Líneas y Geoglifos de la Pampa de Nasca* (Segunda Temporada) (Masato Sakai, Jorge Olano), Ministerio de Cultura del Perú, pp. 1 - 141.
5. 「ナスカ台地の放射状直線の制作時期をめぐって」(坂井正人, ホルヘ・オラーノ)『季刊地理学』, 62, pp.239 - 242.
6. 「ナスカの地上絵の分布と制作方法に関する予備的考察：人工衛星画像と現地調査より」(坂井正人ほか)『可視化情報学会誌』30 (117), pp.126 - 127.
7. 「日本の歴史教育における先コロンブス期アメリカ大陸史とよりグローバルな「真の歴史」」(青山和夫, 坂井正人, 井上幸孝, 吉田栄人, 多々良穰)『考古学研究』57, pp.15 - 19.
8. 「先コロンブス期アメリカ大陸史に関わる世界史教科書問題」(青山和夫, 多々良穰, 坂井正人, 井上幸孝, 吉田栄人)『古代アメリカ』13, pp.31 - 39.
9. 「ナスカ台地における放射状直線の地上絵：2009～2010年度の現地調査より」『チャスキ』42.
10. 『世界遺産ナスカの地上絵完全ガイド』(坂井正人・監修)ダイヤモンド社, pp.1 - 128.

## (2) 教育, 地域連携等の活動

[担当授業]「文化人類学入門 (文化論)」, 「文化人類学・宗教史基礎」, 「比較地域生態概論」, 「文化人類学・宗教史演習 (二)」, 「文化人類学・宗教史実習 (二)」。

[卒業論文] 11名

[地域連携]

1. 「世界遺産ナスカの地上絵と古代アンデス文明」県立山形北高等学校, 2010年6月16日。
2. 「アンデス文明の謎と実像」古代アメリカ学会主催・公開シンポジウム『マヤ・アンデス文明の謎と神秘のバールをはぐ』仙台国際センター, 2010年10月3日。
3. 「ナスカ地上絵の最前線：2010年の調査より」東根市民立大学・タントまなべ学園思学部・テクノロジーコース, 2011年2月22日。

## (3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

「環太平洋の環境文明史」計画研究 A03「アンデス文明の盛衰と環境に関する学際的研究」(科学研究費補助金・新学術領域研究)によって、ナスカの地上絵に関する現地調査を実施した。今年度はまず地上絵の分布に関するデータを集めた。その結果、人間の「首級」および「動物」だと思われる地上絵を発見した。また、放射状直線の中心点(ライン・センター)を新たに76点発見した。次に、地上絵付近に分布する人工遺物(8500点以上)を収集し、計測・記載・分類・写真撮影・図面化することで、人工遺物のデータベース化に努めた。なおこの現地調査は「研究活動推進のための特別免除措置」(平成22年度後期)によって可能になった。

さらに、バルー北部高地のパコバンバ遺跡の考古学調査(科学研究費補助金・基盤研究(A)・

研究代表者・国立民族学博物館教授・關雄二)に参加して、この遺跡の景観構造に関する調査を継続した。

講義と演習では、世界の諸民族に関する事例を検討することで、文化人類学の基本的な考え方、民族誌の読み方と議論の仕方について扱った。

#### 佐藤 清人

##### (1) 研究成果

###### 論文

- ・「初期日系アメリカ文学に関する考察」山形大学紀要 (人文科学) 第17巻第2号

##### (2) 教育、地域連携等の活動

###### 教育

担当授業科目：英語 (R)、英語 (C)、英米文学概論、英米文化講読など

##### (3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

特になし

#### 嶋田 珠巳

##### (1) 研究成果

###### [論文等]

「言語意識の問題～アイルランド英語の“Irishness”と“Bad Grammar”～」, 『東京大学言語学論集』第30号, 215 - 231 頁,

What grammatical features are more marked in Hiberno - English? : a survey of speakers' awareness and its primary details, 『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第7号, 1 - 25 頁 .

The 16<sup>th</sup> IAWE: World Englishes Today (Conference Review) , *Asian Englishes vol. 13 (2)* , 76 - 81 頁 .

###### [学会発表等]

「アイルランドの言語接触と二言語共存」, 日本ケルト学会東京支部研究会, 慶應義塾大学 .

「アイルランド英語のアイデンティティ 文法的自律性と話者意識」, 日本英文学会第82回全国大会, 神戸大学 / 『日本英文学会第82回大会 Proceedings』, 98 - 100 頁 .

Hiberno - English in the context of *World Englishes, World Englishes 2010 (The 16<sup>th</sup> IAWE)*, サイモン・フレーザー大学, バンクーバー .

Grammatical Innovations and Contact - induced Restructuring in Hiberno-English, *Language Contact and Change - Grammatical Structure Encounters the Fluidity of Language (GFSL2010)* , ノルウェイ科学技術大学, トロンハイム .

###### [コラム]

英語玉手箱 <アイルランド> 「アットホームな食卓」, 『英語教育』6月号, 58 頁 .

(2) 教育，地域連携等の活動

実践英語 III，言語学基礎，英語 (C) / (R) の授業を担当した。

8月21日～9月5日，ケアンズでの異文化コミュニケーション実習を担当した。

**鈴木 亨**

(1) 研究成果

論文

- 「複合的变化事象の意味論に向けて—状態変化と位置変化が両立するとき」『山形大学人文学部研究年報』第8号，19 - 37.

(2) 教育，地域連携等の活動

- 担当授業：英語 C，英語 R，英語学概論 (二)，英語学演習，英作文 (中級)，英語語法論特論，英語語法論特別演習

(3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

研究面では，変化事象において，一般的な制約 (唯一経路制約) に反して1つの単文中に状態変化と位置変化が両立していると思われるいくつかの事例について分析し，そこに共通する成立条件を探った。

教育面では，専門の複数の授業で，授業時間外の課題として多読レポートを課し，多面的な英語力の養成に努めた。基盤教育の英語では，テキストの内容を復習させる小テストを毎回行い，自宅での復習学習を促した。

**富田 かおる**

(1) 研究成果

“Pattering of native and non-native intonations in yes/no,” *Bulletin of Yamagata University (humanities)* 17 : 2, 71 - 88.

『リスニングとスピーキングの理論と実践』大修館書店 (2011 年 1 月) (第 1 章第 3 節「発音の指導」執筆，第 4 章「リスニングとスピーキングの今後の課題」共同執筆)

(2) 担当授業

英語学特殊講義，英語 (R)，英語 (C)

(3) 平成 22 年度の研究・活動計画に関するコメント

言語の生成を主なテーマとし，特に発話の音響分析を基に，米国人話者の母音とイントネーションのフォルマント測定と特徴分析を行った。

## 中澤 信幸

### (1) 研究成果

#### [論文]

- ・「-ng 韻尾」認識の変遷と漢字音資料 —未来の中国語学習へ生かすために—, 田島毓堂編『日本語学最前線』(和泉書院), pp.665 - 684, 2010年5月
- ・『日台大辞典』付載「日台字音便覧」について, 『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』7, 右 pp. 1 - 9, 2010年10月

#### [講演]

- ・『日台大辞典』と東アジア共通漢字, 山形大学人文学部国際学術講演会「共振する東アジア2」, 2011年2月19日

### (2) 教育, 地域連携等の活動

#### [担当授業]

- ・学部専門科目: 日本語(一), 日本語学概論(二), 日本語学特殊講義, 日本語学演習, 日本語学講読, 言語学基礎, 国語の教材研究B
- ・大学院科目: 日本語史特論I, 日本語史特別演習
- ・基盤教育科目: 日本語と他の言語との共生(文化・行動B), 日本語の歴史(言語学)

#### [地域連携]

- ・『論語』を読もう3 ~公冶長・雍也・述而~, NHK文化センター山形教室講座, 2010年4月10日・5月8日・6月12日・7月10日・7月31日・9月11日
- ・『論語』を読もう4 ~泰伯・子罕~, NHK文化センター山形教室講座, 2010年10月9日・11月13日・12月11日
- ・Let's「論語」, かほく町民大学ひなカレッジ「こころ学」, 2010年10月13日・11月10日・12月8日
- ・日本語は変わっている?, 出張講義: 宮城県小牛田農林高等学校, 7月7日

### (3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

『日台大辞典』付載「日台字音便覧」のデータベースをもとにした、「東アジア共通漢字」発音対照一覧の作成に着手した。これに関連する研究発表や論文執筆も行った。地域連携についても『論語』に関する講座を各地で開催するなど、充実した年であった。

## 中村 篤志

### (1) 研究成果

#### 論文

- ・「北京值班モンゴル王公の日記について」(モンゴル語) C N E A S Report, vol. 2, pp. 84 - 89, 2011年3月

#### 辞典執筆

- ・歴史学研究会編『世界史史料4 東アジア・内陸アジア・東南アジア2 10 - 18世紀』2010年,

岩波書店の二項目を分担執筆

学会・研究会発表

- ・「モンゴル都城研究の諸問題——カラコルムを中心に」近世東アジア比較都城史研究会第3回研究会，2010年6月26日（於：山形大学人文学部）
- ・「清朝宮廷儀礼におけるモンゴル王公の位置づけ」東北アジア研究センター共同研究「北アジアにおける帝国統治の遺産に関する研究」平成22年度第一回研究会，2010年7月3日（於：東北大学東北アジア研究センター）
- ・「清朝治下モンゴルにおける兵役・賦役について」軍隊と社会の歴史研究会第28回例会，2010年12月4日（於：山形大学人文学部）
- ・「近年のモンゴル研究の動向と日記史料の可能性について」中国社会科学院民族学与人類学研究所学術交流会，2011年3月10日（於：北京市中国社会科学院民族学与人類学研究所）

## (2) 教育・地域貢献等の活動

〔担当授業〕

東洋史講義（二），東洋史概論（二），東洋史演習（二），東洋史講読（二），歴史学基礎，文化人類学・宗教史講義（三），モンゴル・遊牧を考える（教養・歴史学），モンゴル語で読むモンゴル史（教養・歴史学）

〔教育活動〕

- ・卒論指導：中国近世史など2名の卒業論文を指導した。

〔地域貢献活動〕

- ・出張講義：秋田県立横手城南高校高大連携授業「モンゴル遊牧民の生活と歴史：変容する“家族”をめぐる」(2010年7月21日)

## (3) 平成21年度の研究，教育活動に関するコメント

- ・新宮教授を代表とする科研費基盤研究B「近世東アジアの都城および都城制についての比較史的総合研究」のメンバーとして，モンゴル史上の都城問題について研究報告し，8月にモンゴル国における10日間の都城調査を実施した。
- ・自身の科研費若手研究Bの調査として，3月に北京において史料収集などをおこない，現地研究者・協力者と情報交換をおこなった。

## 中村 隆

### (1) 研究成果

- ・論文：「博士論文報告：Dickens in the Late-Victorian Context」，『ディケンズ・フェロウシップ年報』第33号（2010年）pp. 158 - 166
- ・研究発表「博士論文報告：Dickens in the Late-Victorian Context」（学会：ディケンズ・フェロウシップ日本支部春季大会，場所：大阪市立大学，時：2010年6月12日（土））

(2) 教育, 地域連携等の活動

基盤教育の英語 (R) では, 速読の基本と音読の基本を重点課題とした。英語 (C) では, 聞き取りと発話の反復練習, 音読の基本を重点課題とした。英米文学講読では, ホガースの解説本を教材とし, 正確な意味の把握のための語彙の拡大と文法の理解を重点課題とした。英文学特殊講義では, ディケンズの小説と挿絵の関係を論じた。欧米文化演習では, 相沢直樹教員との共同担当の授業であったが, ユートピアをキーワードにして, 活発な発表と議論があった。

目標評価委員会の入試方法検討部会委員として, 短大訪問, 高校訪問を受けて, 意見集約などに参画した。

(3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

ディケンズの挿絵画家クルックシャンクの絵の背景にホガース以来の英国の諷刺画の伝統のあることを論じた。また, 挿絵が小説の単なる説明ではなく, 挿絵が本文と独立して意味の発信をすることが, ディケンズの文学とクルックシャンクの挿絵の関係の中で起こりえたことを解明した。

中村 唯史

(1) 研究成果

[論文]

1. トルストイ『戦争と平和』における「崇高」の問題, 山形大学人文学部研究年報, 8号, 2011年3月, 113-143頁
2. 境界をめぐる思考: 近代ロシア文学のコーカサス・イメージトルストイ『コサック』を中心に, ヨーロピアン・グローバル化と諸文化圏の変容 IV (東北学院大学オープン・リサーチ・センター), 2011年3月, 210-220頁

[翻訳]

ヴィクトル・ベレーヴィン『寝台特急 黄色い矢』(共訳), 群像社, 2010年12月

[書評・エッセイ等]

1. 1910-20年代のソ連批評理論における声とテキスト, Nord-Est: 日本フランス語フランス文学東北支部会報, 3号, 2010年6月, 3-6頁
2. 乗松亨平著『リアリズムの条件 ロシア近代文学の成立と植民地表象』, ロシア語ロシア文学研究(日本ロシア文学会), 42号, 2010年9月, 80-83頁
3. 山形新聞文化欄コラム「<ことばの杜>へ」:  
「カジミール・マレーヴィチ『キュビズム, 未来主義からスプレマチズムへ』」2010年4月10日, 「石川啄木『飛行機』」同6月4日, 「レフ・トルストイ『戦争と平和』」同7月31日, 「瀬田貞二訳『三びきのやぎのがらがらどん』」同9月25日, 「岡本かの子『東海道五十三次』」同11月20日, 「1991年8月20日夜モスクワで聞いたことば」2011年1月22日

[口頭発表]

1. Before an Unknowable Current: Boris Eikhenbaum's Perception of History,

ICCEES VIII World Congress, 2010年7月26 - 31日, 於スウェーデン王国ストックホルム市  
2. 日本比較文学会 2010年度東北大会シンポジウム「ユートピア文学はどこにあるのか」パネ  
リスト, 2010年12月4日, 於岩手大学

(2) 教育, 地域連携等の活動

[担当授業]

教養教育: ロシア語 I, ロシア語 II

専門教育: 表象文化講義, 欧米文化基礎, 欧米文化概論, 欧米文化演習, ロシア語学演習, ロシ  
ア文化講読

[指導卒業論文テーマ]

[<少女雑誌>考察:なぜ<少女>は叙情画を手元に置きたかったのか], [他人としての分身], [浜  
田廣介論: アンデルセン童話の翻訳を中心に], [アバター論: ウェブ上に形成される<わたし>  
とは], [原作の変換について: パロディから二次創作まで], [メディアミックス研究: <消費さ  
れるギャップ>と<反発されるギャップ>], [少女マンガにおける視覚効果の変遷について]

[地域連携等]

- 非常勤講師: 宮城学院女子大学 (表象文化論)
- 北海道大学スラブ研究センター客員研究員
- 日本ロシア文学会国際交流委員, 学会賞選考委員, 大会実行委員
- ロシア東欧学会編集委員
- 日本比較文学会東北支部会役員
- 「ロシア語ロシア文学」, 「Japanese Slavic and East European Studies」誌査読担当
- 出張講義:
  1. 山形県立山形南高等学校 「日本のマンガのしくみを考える」2010年9月15日
  2. 山形県立高畠高等学校「映画とアニメから見るソ連社会」2010年10月20日
- 講演:
  1. 「歴史の中のロシア・アヴァンギャルド: 成立までとその時代」, 2010年4月29日, 於山形美術館ミュージアムスクール。
  2. 「境界をめぐる思考: 近代ロシアのコーカサス・イメージ」, 東北学院大学オープン・リサーチ・センター公開講演会「コーカサスとヨーロッパ」, 2010年9月25日, 於東北学院大学。
  3. 「日本マンガの構造的なめぐって: その興隆と盛衰」, 2011年1月30日, 山形市立図書館市民講座。
  4. 山形フォーラム「ロシア文学映画館シリーズ」解説:
    - 16回『ワッサ』2010年6月25日, 17回『妖婆・死棺の呪い』同7月16日, 18回『カラマーゾフの兄弟』同8月27日, 19回『ワーニャ伯父さん』同9月24日, 20回『鏡』同10月29日, 21回『僕の村は戦場だった』同11月26日, 22回『ハムレット』同12月17日, 23回『リア王』2011年1月28日, 24回『オブローモフの生涯より』2011年2月25日。
- 山形新聞「山新文学賞」選評担当 (毎月1回)

- (3) 平成 21 年度の研究, 教育活動に関するコメント  
特になし

### 西上 勝

- (1) 研究成果

[論文]

「墨戯について」, 山形大学紀要 (人文科学), 第 17 卷第 2 号, pp107 - 119

- (2) 教育, 地域連携等の活動

[担当授業]

研究科: 中国中世文化論など

専門教育: 中国文学概論など

基盤教育: 外国語科目・中国語 I など

- (3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

特になし。

### 福野 光輝

- (1) 研究成果

[分担執筆]

福野光輝 (2010) . 交渉 海保博之 (編集主査) 感情と思考の科学事典, 朝倉書店, 382 - 385.

- (2) 教育, 地域貢献等の活動

[担当授業]

「人間の心と行動 (基幹科目 [文化・行動 A])」(前期), 「『日本人の集団主義』を再考する (教養セミナー)」(後期), 「共生人間学 (一)」(前期), 「社会心理学演習」(前期・後期), 「心理学実験」(前期), 「心理学特殊実験」(前期・後期), 「人間文化入門総合講義」(前期, 第 4 回担当), 「行動科学情報処理実習」(前期), 「心理学基礎」(後期) 「社会心理学特論 I」(前期), 「社会心理学特別演習」(後期)

[卒業論文指導]

「恐怖感を伴う暴力的テレビゲームが攻撃性に及ぼす影響: ゲーム経験の有無による効果の比較」

「服装イメージが行動におよぼす効果」

「高信頼者は騙されにくいのか」

「気分と課題継続時間が発散的思考課題に及ぼす効果」

「顔と名前に付属する意味情報の相違が記憶成績に及ぼす影響」

「心的負荷条件下における自己欺瞞と対処方略の適応効果: ストループ課題を用いた状態不安の変化および課題成績の比較検証」

「アイオワギャンブル課題における直観: 総計か損失回避か」

「きょうだい間の嫉妬感情に関する心理学的研究：長子・中間子・末子の感情特徴の比較」

「罪悪感は身体的同調を引き起こすか」

「英語学習に対する効力期待と結果期待のフィードバックが学習意欲の向上に及ぼす影響」

[出張講義]

福野光輝(2010) . はじめての心理学 . (米沢興譲館高等学校, 山形県米沢市, 2010年7月14日)

福野光輝(2010) . はじめての心理学 . (栃木女子高等学校, 栃木県栃木市, 2010年9月30日)

## 福山 泰男

### (1) 研究成果

論著：「建安文学の形成と展開」（東北大学・博士学位論文，2010年12月）

学会発表：「徐淑小考—文学テキスト上の性差をめぐって」（2010年6月，第14回六朝学術学会大会）

### (2) 教育，地域連携等の活動

人文学部主催の国際シンポジウム「共振する東アジア」の運営に参画し，台湾・中山大学，琉球大学等との学術・教育連携を進めた。（2011年2月）

### (3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

研究：学位取得のため，研究成果をまとめ博士論文を東北大学に提出した。（2011年，学位取得）

その他：台湾，沖縄等と新たな連携を進めたが，今後，学部として，東アジア学術教育連携構想を企画・実行していくことが可能であれば，さらに参加していきたい。

## 藤澤 秀光

### (2) 教育・地域連携等の活動

#### ・担当授業名

（学部）アメリカ研究演習，アメリカ研究特殊講義，英語RⅡ，英語RⅢ，欧米文化概論，人間文化基礎演習

（大学院）英米現代文化論特論，英米現代文化特別演習

#### ・地域連携活動（ボランティア）

国際ロータリー第2800地区財団奨学生選考委員

国際ロータリー第2800地区財団ロータリー学友会代表幹事

### (3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

・ユダヤ系，日系といったアメリカの少数民族に関する小説，演劇，雑誌，新聞，広告，CM，映画，TV番組，音楽，スポーツといった，文字化，音声化，映像化された文化的生成物を対象にした研究を行なっています。

・教育活動としては，山形県のロータリークラブの財団奨学生のアドバイザーとして奨学金申請から海外の留学先の大学，大学院決定までの指導を行なっています。ちなみに，本年度は米国

ウイコンシン大学, オーストリアのウイーン大学, ベルギーの大学, スペインの大学に各1名ずつ留学できるよう指導しました。

## 古川 英明

### (1) 研究成果

- ① I・カント (原佑訳) 『純粋理性批判 下』第2刷, 平凡社ライブラリー, 2010年4月
- ② E・カッシーラー (森淑仁・笠原賢介訳) 『象徴形式の形而上学』法政大学出版局, 2010年8月

### (2) 教育・地域連携等の活動

#### 教養教育

- 前期 哲学 (『弁明』を読む (I))
- 後期 哲学 (『弁明』を読む (II))

#### 専門教育

- 前・後期 ラテン語上級 (Reading Latin, Cambridge U. P., Part One)
- 前期 哲学演習 (一) (キルケゴール 『イロニーの概念』)
- 後期 哲学演習 (一) (ヴラストス 「ソクラテースのアイロニー」)
- 後期 哲学講読 (M. Walser: Selbstbewusstsein und Ironie, 1. Romantische Ironie)
- 後期 [3回担当] 哲学基礎 (「声とイデア説」)

### (3) 「研究成果」に関するコメント

- ①-小生作成の「人名索引・事項索引」について可能なかぎり訂正と改良の手を加えた。。
- ②-この訳書は平成16年度研究活動報告に「2005年刊行予定」と記したものの。昨年8月, 森, 笠原両先生のご努力により日の目を見ることができた。小生は結局, 「カッシーラー遺稿研究会」会員諸氏と分担し翻訳第一稿を作成したに留まる。これは研究成果の報告ではなく, 6年後の経過報告です。

## 本多 薫

### (1) 研究成果

#### 論文

- 1) 門間政亮, 本多薫: 音楽に含まれる言語情報が文書課題の遂行に及ぼす影響—日本語歌詞と韓国語歌詞による比較—, 人間工学, 第46巻5号, p.342-345, 2010.10
- 2) 伊藤理絵, 本多薫: 音楽が画像の記憶再生に与える影響に関する検討, 日本生理人類学会誌, 第15巻4号, p.1-7, 2010.11
- 3) 本多薫: ナスカ台地におけるラインセンター間のネットワーク, 季刊地理学, 第62巻4号, p.234-238, 2011.1
- 4) 伊藤理絵, 本多薫, 渡邊洋一: 攻撃的ユーモアを笑う, 山形大学人文学部年報, 第8号, p.215-227, 2011.3

学会発表

- 1) 門間政亮, 本多薫: 音楽に含まれる言語情報が文書課題の遂行に及ぼす影響に関する研究—心拍, アミラーゼを生理指標として—, 日本人間工学会第 51 回大会講演集 (北海道大学), p.376 - 377, 2010. 6
- 2) 門間政亮, 本多薫: 音楽に含まれる言語情報の無意識処理に関する検討, 日本人間工学会関東支部第 40 回大会講演集 (東海大学), p.54 - 55, 2010.12
- 3) 本多薫: 社会ネットワークに関する基礎的検討—パルー, ナスカ台地を例として—, 日本人間工学会関東支部第 40 回大会講演集 (東海大学), p.22 - 23, 2010.12

(2) 教育, 地域連携等の活動

授業: (教養) 情報処理; (学部) 公務員対策セミナー, 人間情報科学概論, 人間情報科学基礎, 人間情報科学演習, 人間情報科学実習, コンピュータ・ネットワーク論, 人間工学; (大学院) 人間情報科学特論, 人間情報科学特別演習, 心理・情報特別研究

卒業研究の指導 (人間情報科学専修担当として指導):

- (a) 大学生の生活スタイルにおける携帯端末の占める役割に関する研究
- (b) 経路探索行動における移動プラン形成に関する研究

修士学位論文の指導

- (a) 笑いとユーモアの攻撃性に関する研究

地域貢献活動等:

- (a) 日本経営工学会東北支部 運営委員
- (b) 日本人間工学会 代議員
- (c) 日本建築学会 倫理委員会 教育・研究プログラム小委員会 委員
- (d) 土木学会 地下空間研究委員会 心理小委員会 委員

(3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

平成 22 年度は, 筋電, 心拍の生体情報処理, 音楽と言語情報の処理, ナスカの地上絵の情報科学の視点からの分析などの研究を進めた。また, 教育としては, 情報科学関連の講義を担当するとともに, 清塚邦彦教授との共同で卒業研究の指導, 渡邊洋一教授との共同で修士学位論文の指導を行った。

松尾 剛次

(1) 研究成果

① 著書

1. 遊学館ブックス『観る光らす 山形』(財)山形県生涯学習文化財団 (共著), 2010 年 5 月
2. 『新アジア仏教史 12 日本Ⅱ『躍動する中世仏教』 佼成出版社 (共著), 2010 年 5 月
3. 『中世律宗と死の文化』吉川弘文館, 2010 年 12 月, p 1 - 266

② 論文

1. 「仏教者の社会活動」『新アジア仏教史 12 日本Ⅱ 躍動する中世仏教』, 2010 年 5 月 (p 141

- 186)

2. シンポジウム「Monotheism in Asia」(東京大学, 2010, 8, 30 / 31) においてオルガナイザー兼シンポジストとして報告する。報告テーマは「Monotheistic Aspects in Japanese Buddhism Focusing on Honen and Shinran」。
  3. Monotheistic Aspects in Japanese Buddhism Focusing on Honen and Shinran Monotheism in Asia (The University of Tokyo 2010 8 30) pp92 - 97
  4. 「Death and Buddhism in the Japanese Middle Ages: From the Standpoint of the Official Monks/ "Secluded" Monks Paradigm of Japanese Buddhism in (THE EASTERN BUDDHIST, p72 - 96) , Vol.41 · No. 2 · 2010
  5. 「Monotheistic Aspects in Japanese Buddhism」(Monotheism in Asia, p109 - 112) 2010年12月
- ③ その他
1. 講演「葬式仏教の歴史と課題 ―現代宗教における葬儀の意義を考える―」(富山東別院会館 富山教区教化委員会 寺族研究小委員会), 2010年4月6日
  2. 書評「馬場基著『平城京に暮らす 天平びとの泣き笑い』」『山形新聞』2010年4月11日
  3. 特別寄稿「伊勢弘正寺の巨大五輪塔(後)」『月刊石材 vol. 355』2010年4月15日
  4. 書評「桜井義秀著『死者の結婚 祖先崇拜とシャーマニズム』」『山形新聞』2010年5月9日
  5. 監修「日本仏教の歴史を読み解く」「日本の仏教13宗の総本山・大本山を訪れる」『一個人』2010年7月
  6. 講演「鎌倉仏教と非人の救済」(熊本学園大学 差別と人権に関する委員会), 2010年7月2日
  7. 書評「川口マーン恵美著『ベルリン物語 都市の記憶をたどる』」『山形新聞』2010年6月13日
  8. 書評「高橋典幸著『源頼朝』東国を選んだ武家の貴公子」『山形新聞』2010年7月11日
  9. 模擬講義「オープンキャンパス『ジブリ作品と宗教学』」『人文学部103教室』2010年8月8日
  10. 書評「島蘭進著『国家神道と日本人』」『山形新聞』2010年8月15日
  11. 「山形美術館にて親鸞展ギャラリートークを行った」2010年8月22日
  12. 「聖徳太子」『やすらぎ通信 2010年夏・秋号』ユークャン出版事業部, 2010年8月(p 10)
  13. 書評「末木文美士『近世の仏教』華ひらく思想と文化」『山形新聞』2010年9月5日
  14. 「宗教学事典」『もの乞い・托鉢』『説経・唱導・勧進』MARUZEN, 2010年10月
  15. 書評「浅古弘・伊藤孝夫・植田信広・神保文夫編『日本法制史』」『山形新聞』2010年10月24日
  16. 記事「親鸞なう」『福井新聞』2010年10月15日
  17. 講演「山形夜話」(コンソーシアム山形) 2010年11月10日
  18. 公開講座「山形の魅力再発見パート8」(安達峰一郎記念対賢堂, 山形大学人文学部205教室, 庄内バスツアー) 10月16日・30日・11月7日
  19. 書評「三宅和朗著『時間の古代史～靈魂の夜, 秩序の昼～』」『山形新聞』2010年11月21日

20. 「最澄」『やすらぎ通信 2010 年冬号』ユーキャン出版事業部, 2010 年 12 月 (p 11)
21. 「仏教・宗教関係書 今年の 3 冊 2010」『週刊仏教タイムズ』2010 年 12 月 9 日
22. 歴史教室「奥州藤原氏と出羽の国」(平泉文化遺産センター) 2010 年 12 月 16 日
23. 書評「福島金治著『北条時宗と安達泰盛』」『山形新聞』2010 年 12 月 19 日

(2) 教育, 地域連携等の活動

(3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

本年は, 著書 3, 論文 5 など大いに成果のあがった年であった。また, 卒論・修論で 13 人の指導をするなど大変であった。

### 三上 喜孝

(1) 研究成果

(著書)

三上喜孝・藤森健太郎『Jr. 日本の歴史 2 都と地方のくらし 奈良時代から平安時代』小学館, 2010 年 11 月, 301 頁。

(論文)

三上喜孝「日本出土古代木簡 ―近年出土の木簡―」(韓国語)『木簡と文字』第 5 号, 2010 年 6 月, 韓国木簡学会

(学会発表)

三上喜孝「古代日本の境界意識とその変遷―北方地域を中心に―」山形大学歴史・地理・人類学会第 12 回大会 (於山形大学人文学部) 2010 年 6 月 19 日

三上喜孝「日本古代地方社会における論語の受容 ―習書木簡の検討を中心に―日本古代の文字と言語」成均館大学東アジア学術院 国際会議「『論語』と東アジア ―地下の『論語』・紙上の『論語』」2010 年 8 月 26 ~ 27 日。

(2) 教育, 地域連携等の活動

2010 年度における授業 (担当授業名)

基盤教育・教養科目「論争する歴史学」「貨幣からみた日本の歴史」(各 2 単位)

専門科目「歴史学基礎」「日本史概論(一)」「日本史講義(一)」「日本史講読(一)」「文化財調査実習」(各 2 単位)「日本史演習(一)」(4 単位)

大学院「日本古代史特論Ⅱ」「日本古代史特別演習」(各 2 単位)

卒業論文指導

「式部省の成立と性格」「律令国家における賤民について」「古代における賑給の考察」「古代における銀の役割」

地域連携活動 (審議会, 講演会, ボランティア等) の紹介

2010 年度山形大学人文学部公開講座「海を渡った Japanese」講演題「「日本」の船出 ~古代「日本」と東アジア世界の交流~」2010 年 6 月 7 日 於山形大学。

岩手県立盛岡第三高等学校緑丘プレ講座にて「『日本』の誕生から『日本史』はいつからはじまるのか～」と題して出張講義を行う(2010年10月13日)。

國學院大學栃木高等学校にて「出土文字資料からみた日本の歴史」と題して出張講義を行う(2010年10月30日)。

(3) 2010年度の研究・教育活動についてのコメント

研究面では、韓国に出土文字資料調査のために数度出張し、また、成均館大学の国際会議において韓国語で研究発表をした。さらに、中・高校生向けの「日本の歴史」シリーズ、という出版社の大型企画に関わり、執筆を担当した巻が刊行された。

教育面では、講読や演習を通じて文献史料の読解に重点を置いたほか、実習(奈良・京都方面)等を通じて生の歴史資料を見る機会を提供した。また、卒業論文の指導にも力を入れた。

元木 幸一

(1) 研究成果

(論文)

「笑いと教会—ヨーロッパ中世美術におけるユーモア表現について—」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第7号, 平成22年10月, 39-52頁。

「さかさまの世界: ヨーロッパ中近世美術におけるユーモア表現について」『山形大学人文学部研究年報』第8号, 平成23年3月, 59-81頁。

(2) 教育, 地域連携等の活動

(授業)

基盤教育基幹科目「美術における男女の共生/競生/狂生」教養科目「西洋美術への招待(芸術)」学部専門科目「芸術文化基礎」「文化環境学(一)」「芸術文化概論」「芸術文化特殊講義」「美学・芸術学演習」「美術史演習」「芸術文化実習」「人間文化総合講義」

大学院「欧米文化特別研究II」「美学・芸術学特論(地域教育文化研究科)」「美学・芸術学特別演習」(卒論指導)

「光と窓—17世紀オランダ風俗画に至るまで」「ピーテル・デ・ホーホの絵画にみられる女性像についての考察」「長井市総宮神社の獅子頭考」

(修士論文指導)

「ヤン・ファン・エイク作《受胎告知》(ワシントン・ナショナルギャラリー所蔵)の床面図像の解釈」(地域連携)

放送大学山形学習センター学生交流会非常勤講師「山形美術館作品解説」, 同センター「卒業論文の書き方」講演

(講演等)

「山形大学FDの一年: 教員の相互研修システムによる」(独立行政法人国立高等専門学校機構プロジェクト研究集会報告)

(3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

研究では、ヨーロッパ中世美術におけるユーモア表現に関する論文を二つ発表した。また鹿島美術財団からの助成金により、宗教改革期におけるニュルンベルクの農民祝祭版画を研究するため、夏期にニュルンベルク、ミュンヘン、ウィーンなどを調査旅行した。この時期のもっとも重要な木彫祭壇であるザンクト・ヴォルフガング祭壇を見ることもできて、かなり満足のいく成果を上げたと考えている。その成果は翌年に報告した。

教育面では基幹科目出発の年であり、かなり不安な気持ちを抱きながら授業をし、まだまだ満足のいく授業になったとは思えなかったが、授業後の学生のエッセイや授業アンケートの結果では意外に好評だったので、狐につままれたような印象。

卒論指導では、3名ともそれぞれの特徴の良く出た好感の持てる論文を完成することができたと思う。皆真面目に取り組んでくれたので、指導も楽しかった。

修論は、とてもレベルの高い修士論文を仕上げることができたので、本人は不満のようだが、指導教員としては比較的満足している。私と同じ分野の研究で、私自身は修士論文の主張に賛成ではないが、同じ土俵で相撲を取ることができるほどのレベルには達しているものと評価したい。この修論は平成 23 年度のティーデマン・ふすま賞を受賞することになる。

全体としてみれば、研究教育に比較的集中できた年だったように思う。

森岡 卓司

(1) 研究成果

[単著論文]

1. 森岡卓司「日本近代文学の地政学 ―文化的「翻訳」という問題―」ハルビン工業大学人文社会学院『ハルビン工業大学人文学院日本山形大学人文学部学術交流会記念論文集』平成 22 年 9 月 (10 日) pp90～96
2. 森岡卓司「ポスト六〇年代作家としての村上春樹 ―「1973 年のピンボール」試論―」東北大学文芸談話会『日本文芸論稿』第 34 号 平成 23 年 1 月 31 日 pp36～55

[記事]

1. 森岡卓司「やまがた再発見」15. 田山花袋 上, 16. 田山花袋 下, 『山形新聞』平成 22 年 7 月 26 日, 8 月 2 日
2. 森岡卓司「やまがた再発見」36. 森英介 上, 37. 森英介 下, 『山形新聞』平成 23 年 1 月 17 日, 1 月 24 日

[口頭発表 (単独)]

1. 森岡卓司「マラーノとしてのテキスト ―伊集院静と〈戦後〉日本の地政学―」日本比較文学会東北支部 第 8 回比較文学研究会 平成 22 年 7 月 31 日 仙台市青年文化センター
2. 森岡卓司「フィクションとアイロニー ―村上春樹「1973 年のピンボール」試論―」平成 22 年度日本近代文学会東北支部冬季大会 平成 22 年 12 月 25 日 山形テルサ

[講演]

1. 森岡卓司「「山形」の「文学」を考える」平成 22 年度山形県飽海地区高等学校国語教育研究協議会研究会 平成 22 年 5 月 13 日 酒田東急プラザビル「ル・ポットフー」

2. 森岡卓司「日本近代文学の地政学—文化的「翻訳」という問題—」ハルビン工業大学人文学  
院日本山形大学人文学部学術交流会 平成22年9月10日 ハルビン工業大学(中国)

(2) 教育, 地域連携等の活動

[出張講義]

新潟県立巻高等学校(平成22年9月22日)

札幌北陵高等学校(平成22年11月5日)

宮城県白石高等学校(平成22年11月15日)

[教員免許状更新講習]

芦立一郎, 中澤信幸, 森岡卓司「国語教材の研究」平成22年度教員免許状更新講習(中学校教諭(国  
語)・高等学校教諭(国語)対象) 平成22年8月3日~8月5日 山形大学人文学部

[論文指導]

卒業論文3名

[授業担当]

「谷川俊太郎の世界(文学)」ほか教養教育科目3, 「日本文学概論」ほか専門教育科目5, 「国語  
科教材研究A」として教職科目1, 「日本近現代文化論特別演習」ほか大学院担当科目2, 非常  
勤担当科目2(東北文教大学短期大学部)。ほかに, 進路指導委員会担当授業「キャリア・ガイ  
ダンス」担当, 「キャリア形成論演習」アテンド。

(3) 平成21年度の研究・教育活動に関するコメント

平成20年度科学研究費補助金基盤研究(C), 「1960年代日本における文学概念の変容に  
ついての総合的研究」(課題番号20520152, 研究代表者北海道大学大学院准教授押野武志),  
および「脱ジャンル領域としての「小品」に関する動的・文化史的総合研究」(課題番号  
20520153, 研究代表者東北大学大学院教授佐藤伸宏)の両共同研究の研究分担者として研究を  
進めた。

学会活動としては日本近代文学会東北支部運営委員, 日本比較文学会東北支部運営委員, 日  
本文芸研究会全国委員。日本近代文学会東北支部運営委員として, 冬季大会を山形テルサで開  
催した(12月24日)。

また, 『東北近代文学事典』の編集委員として事典編集に携わった。

学内委員としては進路指導委員(2年目), 公開講座運営委員(1年目), 他。進路指導委員  
として授業「キャリア・ガイダンス」の授業改善に取り組んだ。

人文学部の行事として, ハルビン工業大学に訪問し, 貴重な交流体験をさせていただきました  
ことに感謝します。

森田 光宏

(1) 研究成果

[研究論文]

1. 小泉有紀子・森田光宏(2011). E-learningによる授業外英語学習の促進を目指して—授業内

小テストによる学習確認と教員によるその活用（山形大学基盤教育院英語における事例）『東北英語教育学会』，第31号，113 - 119

2. 鈴木淳・森田光宏（2011）. 大学生の英語基礎力と TOEIC スコアの関係についての一考察 『東北工業大学紀要 II 人文社会科学編』，第31号，87 - 90

3. Matsuno, K., Murao, R., Morita, M., Sakaue, T., and Sugiura, M. (2010). Production units in English writing: A comparative study of writing fluency between native speakers and non-native speakers of English. in Hirakawa, M. et al. (eds). Studies in Language Sciences, 9, 143 - 159. Kuroshio Publishers

[口頭発表]

1. 森田光宏・小泉有紀子「英語日記支援のための SNS の活用」 第36回全国英語教育学会大阪研究大会（関西大学）（2010年8月8日）

(2) 教育，地域連携等の活動

- 教養教育担当授業：英語（C），英語（R），
- 専門教育担当授業：実践英語（一），英語学演習，英語の教材研究（B）

(3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

[研究]

- 本年度より科学研究補助金（日本学術振興会平成22，23，24年度科学研究費補助金若手研究（B）課題番号：22720210）の交付を受け，「日本人英語学習者の心的辞書における派生語と語幹の関係についての研究」を行っている。
- 文章産出過程を情報として含む新しい形式の日本人学習者コーパス「動的コーパス」を構築し，日本人英語学習者の英語産出過程を明らかにすること試みた。

[教育]

- 受講生らが互いに知識を確かめ合い，高め合うように授業内容を工夫した。

**山崎 彰**

(1) 研究成果

(口頭発表)

「19世紀前半ブランデンブルク貴族の地域支配」（「軍隊と社会の歴史」例会2010年12月4日）

(2) 教育，地域連携等の活動

- 基盤教育

「ヨーロッパ史における共生と環境」（基幹科目），「近代ヨーロッパ国家の多様なかたち」（教養科目）

- 専門教育

「歴史学基礎」「西洋史概論（二）」「西洋史講義（二）」「西洋史演習（二）」「西洋史講読（二）」「卒業論文」。以上の他に松本邦彦准教授とともに「地域づくり特別演習（二）」を企画，実施した。

・大学院教育

「ドイツ史特論」「ドイツ史特別演習」を用意したが、今年度は受講者はなし。

- ・社会連携の分野では、平成 22 年度山形大学地域貢献事業として、「山形ドキュメンタリーフィルムライブラリー収蔵作品の歴史的資料としての整理と紹介事業」を実施し、同ライブラリーのロシア、東欧、東ドイツ関係の収蔵作品の調査を行った。
- ・秋田中央高校で出張講義を行った。

(3) 平成 22 度の研究・教育活動に関するコメント

- ・科研費（基盤研究C）「創設期マルク経済協会に関する実証的研究」（代表・山崎彰）の初年度であり、ドイツにおける史料の存在状況について確認を行った。
- ・基盤教育授業「ヨーロッパ史における共生と環境」は、基幹科目「共生を考える」として今年度初めて実施したものである。今後授業としての完成度を高めていきたい。

山田 圭一

(1) 研究成果

[学会発表]

山田圭一「知識の物語り論序説 ——人称知識言明の分析を通じて——」, 東北哲学会（於 東北大学）, 2010 年 10 月。

山田圭一「初等中等教育における哲学教育の現場から考えた哲学の範囲と哲学の意義」(ワークショップ「哲学の範囲を描き直す」), 日本科学哲学会（於 大阪市立大学）, 2010 年 11 月。

(2) 教育, 地域連携等の活動

担当授業名: 「ドイツ語 A 1」, 「哲学概論」, 「哲学演習三」

(3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

- ・2010 年も前年から引き続き「初中教育における哲学教育研究」(挑戦的萌芽研究, 課題番号: 21652002) の研究代表者として初等中等教育段階での哲学教育の意義と可能性についての研究と実践を行った。
- ・同様に、前年から引き続き、日本科学哲学会の石本基金若手研究助成(課題名「帰属者の文脈主義モデルを用いた認識的多元性の解明」)を受けて、新しい認識モデルの構築を行った。
- ・教育活動においては、可能な限りこちら側から問いを投げかけ、学生自身に考えさせる授業をドイツ語、哲学両方の授業で試みた。

山田 浩久

(1) 研究成果

- ・「「まちづくり」を誘導する都市計画の可能性 ——山形県長井市を事例にして——」, 2010 年 3 月, 山形大学歴史・地理・人類学論集, 12.
- ・「地方都市の市街地再生事業が抱える問題点 ——山形県長井市を事例にして——」, 2010 年 4 月,

季刊地理学, 62 - 1.

- 「環境整備事業に伴う生活圏拡張の可能性と課題 —山形県長井市駅前親水公園事業を事例にして—」2010年4月, 季刊地理学, 62 - 1.
- 「自然災害の危険度が土地評価に及ぼす影響 —宮城県仙台市を事例にして—」, 2010年9月, 東北地理学会大会発表.
- 「土地の所有関係に起因する地方都市の問題点 —山形県長井市を事例にして—」, 2010年10月, 日本地理学会大会発表.

## (2) 教育, 地域連携等の活動

基盤教育: 地域の共生 (共生を考える)

学部教育: 地理学基礎, 地域構造論, 地誌学, 環境地理学演習, 地域構造論演習, 環境地理学調査実習, 都市地理学調査実習, 共生人間学 (一), 人間文化入門総合講義

大学院: 経済地理学特論, 経済地理学特別演習

- 山形県総合政策審議会特別委員
- 山形県広域調整会議委員
- 長井市経済再生戦略会議コーディネータ
- 上山市観光マップコーディネータ
- 高校に対する模擬講義, 学部説明 (富谷高校, 南陽高校, 黒磯高校, 角館高校, 多賀城高校, 楯岡高校)

## (3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

土地評価に関する研究は, 総括に時間がかかり2010年度中に研究成果の公表が出来なかった。東北諸都市に関する個別研究については, 相応の成果を上げることができたと考える。地域連携に関わる研究・教育活動は概ね順調であり, 今後も政策提案を含めた実践的な活動を継続していく予定である。

## 山根 純佳

[論文]

山根純佳「人権は誰の権利か」井上達夫編『講座 人権論の再定位5 人権論の再構築』法律文化社, (2010年10月) pp. 27 - 45

[共著論文]

山根純佳・山下順子「『選択』としての『おひとりさま』言説の功罪」千田有紀編『上野千鶴子に挑む』勁草書房 (2011年3月) pp. 323 - 342

[discussion paper]

“Difficulties experienced by care workers after the LTCI Act: the gap between user-centered care and efficient work,” University of Bristol International Workshop : Personalization of Care in Japan and the UK. 19, July, 2010

[学会発表]

「ケアワークにおける分業と再生産労働の位置づけ——介護施設における食事づくりを事例として」第83回日本社会学会大会, 名古屋大学, 2010年11月

[コメンテーター]

ラウンドテーブル 「エヴァ・キテイ著『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』(邦訳:白澤社)をめぐって」東京大学 教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター 2010年11月

(2) 教育, 地域連携等の活動

[担当授業]

現代社会学演習, 社会学演習, 社会調査論, 比較社会システム論, 調査方法演習

(3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

着任して1年目の年度で, 授業準備, 卒論指導などに力を入れた。社会調査関連の授業では山形大学の学生へのアンケート調査の実施, 集計などをおこない, 社会調査の具体的方法を学生が習得できるよう心がけた。

ライアン・スティーバン

(1) 研究成果

Ryan, S.B. (2011). Highlighting the Merits and Demerits of High and Low Context Oriented Communication Cultures in Business: Fukushima nuclear accident and Japan's communication with the international community. In Editor Lijuan, D. (Ed.) International Proceedings of Economics Development and Research: Humanities, Society and Culture (ICHSC 2011), pp. 231-235, Vol. 20. Singapore: IACSIT press.

2011. 1. Presentation. "How to Deal With Cross-Cultural Misunderstandings Between English and Japanese Speakers. Japan Association of Language Teachers (JALT). Yamagata Chapter.

2010. 12. Presentation. "Language and Culture's Influence on Thought". The International Association of Japanese Studies (IAJS). Yamagata, Japan.

2010.5 "Bringing Cultural Background Knowledge to the Surface to Better Understand Cross-Cultural Conflict in Specific Contexts." Intercultural Communication Studies Journal, University of Rhode Island, Vol. XIX:I, pp. 214-235.

(2) 教育, 地域連携等の活動

Society for Intercultural Education Training and Research (SIETAR)

Japan Association of Language Teachers (JALT)

(3) 平成23年度の研究・教育活動に関するコメント

Research interests include English language education, Intercultural Education and Training. Current research focuses on how cultural schema can result in cross-cultural conflict and misunderstanding.

## 渡辺 文生

### (1) 研究成果

《学会，研究会などの口頭発表》

「ストーリーを語る談話・文章における視点の表現の分析」2010 CAJLE Annual Conference, University of British Columbia, Vancouver, Canada, 2010.8.15.

「日本語の作文における視点の表現」ハルビン工業大学人文社会学院・山形大学人文学部 学術交流会議，ハルビン工業大学，中国，2010.9.11.

「語りの談話・文章における主題標識に関する日韓対照研究」7th International Conference on Practical Linguistics of Japanese, College of Humanities, San Francisco State University, USA, 2011.3.6.

《出版物》

「語りの談話・文章における文末表現について —「のだ」と「てしまう」—」南雅彦（編）『言語学と日本語教育・』pp. 123-140. くろしお出版

Clausal self-repetition and pre-nominal demonstratives in Japanese and English animation narratives. In P. Szatrowski (Ed.) , *Storytelling across Japanese Conversational Genre* (pp. 147-180) . Amsterdam: John Benjamins.

「初級日本語学習者の自主的教室外活動を目指したポートフォリオの導入 —学習者の目標設定と自己評価の観点から—」『日本語教育方法研究会誌』18 (1) : 56-57. (澤恩嬉・後藤典子・山上龍子との共著)

### (2) 教育，地域貢献等の活動

担当授業は，日本語学概論(一)・日本語学特殊講義・日本語学講読・日本語学演習・日本語(二)・共生人間学(二)《以上学部専門科目》，日本語意味論特論・日本語意味論特演《以上大学院科目》，基盤教育科目(言語学)・基盤教育科目(日本語)。

弘前南高等学校において出張講義を行った(2010年7月8日)。

### (3) 当該年度の研究，教育活動に関するコメント

研究活動に関しては，初級日本語学習者の日本語運用能力支援に関する科学研究費プロジェクトに研究分担者として参加した。また，2010年12月23日には，山形テルサにおいて第4回談話分析コロキウムを主催し，ミネソタ大学・群馬大学・筑波大学・一橋大学・東北大学から研究者・大学院生を招いて研究発表会を行った。

ハルビン工業大学人文社会学院と学術交流会議を共催するにあたり，山形大学人文学部側の企画とりまとめの仕事を担当した。2010年9月11日にハルビン工業大学で行われた会議では，それぞれの大学から7名ずつの教員が研究発表を行った。

学生の指導については，日本語学コース2名の卒業論文を担当した。

## 渡辺 将尚

### (1) 研究成果

#### ○論文

「時間の文学としてのジークフリート・レンツ

——ラジオドラマ「家宅搜索」と長編小説『パンと見世物』

(「山形大学人文学部研究年報」第8号, 145～159ページ, 平成23年3月)

## 渡邊 洋一

### (1) 研究成果

#### ・論文

伊藤理絵・本多薫・渡邊洋一, 「攻撃的ユーモアを笑う」, 『山形大学人文学部研究年報』, 8, 215 - 227, 2011年3月。

#### ・フォーラム

渡邊洋一, 「ナスカ台地の心理学的空間」, 『季刊地理学』, 62, 229 - 233, 東北地理学会, 2010. (2011年1月発行)

#### ・国際会議発表

渡邊洋一, 「有关那須加的地上画的跨学科的研究」, 哈爾濱工業大学人文社会科学学院2010年度国際学術講演会, 哈爾濱工業大学 (哈爾濱), 2010年, 9月。

#### ・講演要旨

渡邊洋一, 「ナスカ地上絵の空間イメージ」, 『イメージ心理学研究』, 7, 7 - 10, 日本イメージ心理学会, 2010年12月。

### (2) 教育, 地域貢献等の活動

#### a. 担当授業等

実験心理学入門 (教養教育科目), 心理学基礎, 心理学講義 (一), 認知心理学演習, 心理学実験, 心理学特殊実験, 行動科学情報処理実習, 卒業論文指導 (以上専門教育科目), 実験心理学特論, 実験心理学特別演習 (以上, 大学院授業科目)。

#### b. 学外活動

日本自動車連盟 (JAF) 山形支部交通安全実行委員会委員 (委員長)。

## 【法経政策学科】

## 赤倉 泉

### (1) 研究成果

特になし

### (2) 教育・地域連携等の活動

[教育]

担当授業 アジア政治論, アジア政治論演習, 政治学入門, 中国語

(3) 平成22年度の教育研究活動に関するコメント

研究に関しては, 引き続き毛沢東時代の政治および中国の民主化に関する研究を行った。教育に関しては, 中国をはじめとするアジア地域の政治状況等について取り上げた。政治学の授業では県選挙管理委員会の出前講座を利用するなどして工夫した。

**阿部 未央**

(1) 研究成果

- (論文)「雇用形態差別に対する法的アプローチ—イギリス法とアメリカ法の比較研究—(一)」『法學』第74巻第3号27-75頁(東北大学法学会, 2010年8月)
- (判例評釈)「配転後の精神障害と労災認定—国・福岡東労基署長(粕屋農協)事件福岡高裁平成21年5月19日判決労判993号76頁」『山形大学法政論叢』第50号81-95頁(2011年3月)

(2) 教育・地域連携等の活動

[教育] 労働法, 労働法演習, 人間と労働, 労働と法(教養セミナー), 公務員講座

[地域連携]

- 厚生労働省「精神障害の労災認定の基準に関する専門検討会」委員(2010年9月～)
- 出張講義 岩手県立金ヶ崎高等学校(2010年10月)

(3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

研究面では非正規雇用に関する論文を一部公表することができたほか, 「精神障害の労災認定に関する検討会」に参加する機会に恵まれた。

**和泉田 保一**

(1) 研究成果

- 論説

「英国都市計画法における広域計画団体と狭域計画団体の役割分担の変容」法政論叢第50号29-79頁

- 判例評釈

「監査委員に任意提出された資料の不開示事由該当性」民商法雑誌第142巻第3号371-380頁

(2) 教育, 地域連携等の活動

- 担当授業

行政法Ⅰ, 行政法Ⅱ, 行政法演習, 総合講座Ⅰ(「条例による地域政策」)・Ⅱ(「公法」2コマ), 人文学部公務員対策講座(集団討論2コマ他を担当)

- 地域連携活動

[審議会委員]

山形県情報公開・個人情報保護審査会委員, 山形県医療審議会委員

[外部研修講師]

北陸地方整備局職員研修「法律 (I)・(II)」(9月, 7月)

[出張講義]

宮城県立仙台第三高等学校 (5月)

(3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

ゼミ合宿を群馬県のハッ場ダム建設地で行い, 大規模公共事業の遂行の実際とそれに関わる問題点を実地で調査した。また, 平成21年度に実施したロンドンでの調査の成果として, 冒頭に掲げた論説を完成, 公表した。

**岩田 浩太郎**

(1) 研究活動

[科研費]

- ・科学研究費補助金・基盤研究 (C)「幕末・明治初年の農業構造と地域社会—羽州村山郡における再検討—」(研究代表者)

[その他]

- ・「紅花商業と東北」(山形大学都市・地域学研究所編『山形学—山形の魅力再発見—』山形大学出版社, 2011年2月, 19~28頁, 原発表2003年を一部補訂)
- ・「紅花交易と山形」(大学コンソーシアムやまがた・最上川学プロジェクト推進委員会編『最上川学活動報告集2010』山形大学, 2011年3月, 9~10頁)

(2) 教育, 地域連携等の活動

[担当授業科目]

- ・基盤教育科目: 山形の歴史 (地域学), 古文書を読む (教養セミナー)
- ・専門教育科目: 日本経済史, 地域経済史, 日本経済史演習
- ・大学院: 歴史文化特別研究II (修論指導・審査: 主指導 (主査) 1本, 副指導 (副査) 1本, 副査1本)
- ・大学コンソーシアムやまがた・単位互換授業: 最上川俯瞰講義 (オムニバス形式。うち1回, 「紅花交易と山形」を担当)

[委員会活動]

- ・学部: 法経政策学科長 (主に取り組んだ課題: 学科予算制度の明確化, スタートアップセミナーと法経政策専門基礎演習の段階的的制度設計, DP・CPづくりの方針検討, 定削経緯問題検証, 人事計画), 目標評価委員会委員 (「平成21年度監事監査結果報告書に対する意見」作成・提出, 「『中教審答申』『日本学術会議回答』から学ぶもの」報告), 科研費アドバイザー, 「学長選考制度の改善を求める意見書」作成・提出, 「学長選考会議審議に関する意見」作成・提出, 人事選考委員会委員 (社会政策論)

- ・大学院：社会文化システム研究科教員資格審査委員
- ・全学：山形大学研究活動に関する行動規範特別委員会委員

[講演・講座]

- ・山形地区社会保険委員会山形支部平成22年度定例総会講演「山形商人の実力—長谷川家の商業活動」, 2010年6月17日, 於パレスグランデール(約65名参加)
- ・福島大学教職員組合学習会報告「大学運営の問題点—山形大学の状況—」, 2010年7月29日, 於福島大学経済経営学類大会議室(約30名参加)
- ・小川とびきり会講演「山形の長谷川家について」, 2010年9月17日, 於ホテルキャッスル(32名参加)
- ・NPO法人柏倉家文化村主催:「柏倉家文化村まつり」における山形大学人文学部日本経済史(岩田)ゼミナールによる「近代柏倉家の投資・金融活動」報告会(個別報告「九左衛門家の有価証券投資」「惣右衛門家の貸付と投資」), 2010年10月3日, 於東村山郡中山町岡 柏倉九左衛門家北蔵(54名参加)
- ・NPO法人柏倉家文化村主催/山形県村山総合支庁・中山町教育委員会共催:柏倉家ひな祭りイベント「柏倉九左衛門家のことをもっと『知る』講演会」講演「柏倉家文書の魅力」, 2011年3月20日, 於東村山郡中山町岡 柏倉九左衛門家北蔵(約30名参加)

[社会活動]

- ・NPO法人「柏倉家文化村」顧問(山形県東村山郡中山町柏倉九左衛門家・柏倉惣右衛門家の調査研究, ひな祭りボランティア協力, 意見書「歴史文化遺産及び環境遺産としての柏倉九左衛門家と周辺エリア」を山形県へ提出)
- ・柏倉九左衛門家所蔵初堂古文書の整理保存・目録作成事業(2008年8月開始～2010年10月完了)
- ・柏倉惣右衛門家所蔵古文書の整理保存・目録作成事業
- ・奥羽史料調査会世話人(宮城県柴田郡村田町大沼正七家文書整理・目録作成・調査研究など)
- ・山形大学職員組合執行委員会副執行委員長(2009年7月～2010年6月)
- ・山形県山形市の旧家からの古文書寄贈や古文書撮影調査の要請への対応
- ・山形市民から依頼された研究論文・地誌の作成執筆に関わる指導・助言
- ・西村山郡河北町民からの地域史に関する問い合わせへの対応
- ・山形県村山総合支庁農業技術普及課からの紅花に関する問い合わせへの対応
- ・JR東日本鉄道事業本部への協力〔①大人の休日倶楽部広報誌『ジバング』2011年5月号の特集記事の内容提供・編集協力(「第Ⅱ特集 紅花商人の栄華を商都・山形に訪ねる」監修), ②同倶楽部旅行企画への協力(「『紅花の山形路』紅花商人の歴史と紅花摘み体験の2日間)〕

[その他]

- ・「結城学長の大学観と大学運営の問題点—『文科省が主役』の大学づくりを批判する!—」(『山大戦組情報』2010年度号外, 2010年5月, 1～11頁)
- ・「学科長インタビュー/魅力ある教育をめざしています」(人文ニュース『アゴラ』第42巻第2号, 2010年12月)

(3) 平成 22 年度の研究・教育活動等に関するコメント

平成 22 年度の特徴は、法経政策学科長としての諸活動が中心となり、まとまった研究活動ができなかったことがあげられる。

研究活動では、地味な成果だが、東村山郡中山町大字岡の柏倉九左衛門家の粕堂から「発見」された数千点の古文書資料の目録(手書き原稿)を完成させたことが大きい。2008 年夏の「発見」以来、同家に通い目録採りを継続した成果であり、同家に献呈した。年度始めに採択された科研費・基盤研究(C)のための諸調査(国文学研究資料館, 京都府立総合資料館, 河北町立中央図書館, 両柏倉家など)は頻繁に実行しえたが、それをまとめる時間がとれなかった。今後に期したい。

教育活動では、大学院の修論指導教員として3本の修論作成に関わった。とくに「近世後期村役人の動向について—羽州庄内川北大組頭制を中心として—」(杉原丈夫氏)の指導に力を注いだ。

社会活動では、JR 東日本「大人の休日倶楽部」企画に協力したり、県内の公共団体や NPO 法人及び民間業者からの要請に応えた講演を数度おこなった。紅花や古文書などに関する県や市民からの問い合わせや各種の要請へも対応した。

学内の活動では、大学運営と学長選考制度の民主化に関して提言したり意見書を発表した。学科長としては、通常の諸雑務をこなすとともに、中教審学士課程答申や日本学術会議回答及び他大学の動向を分析し、大学教育の自立性を尊重した観点もふまえながら、2011 年度にむけた人文学部及び法経政策学科における DP・CP づくりの方針を目標評価委員会で提起し議論した。また、関連して学科の将来計画=人事計画構想づくりを年度末から開始した。また、本年度からはじまったスタートアップセミナーの授業実践につき担当者反省会やアンケートにより改善点を検討するとともに、2011 年度から開始する専門基礎演習(2 年次演習)の制度設計をおこなった。学科スタッフの一連の協力に感謝している。

殷 勇

(1) 研究成果

著書:

Data Mining: Concepts, Methods and Applications in Management and Engineering Design, Springer-Verlag; 1st Ed. (January 29, 2011)

論文:

1. C.G.Liu, J.Lian, Y.Yin and W.J.Li "Seru seisan - an innovation of the production management mode in Japan", *Asian Journal of Technology Innovation*, Vol.18, No.2, pp.89-113, 2010.
2. D.B.Cao, Y.Yin and I.Kaku "A criterion of production model selection for building material with delivery delay", *International Journal of Production Research*, Vol.48, Nos.10-12, pp.3429-3443, 2010.
3. C.G.Liu, K.Yasuda, Y.Yin and K.Tanaka "A heuristic algorithm for cell formation problems with consideration of multiple production factors", *International Journal of Advanced Manufacturing Technology*, Vol.46, Nos.9-12, pp.1201-1213, 2010.

(2) 教育・地域連携等の活動

教育：

基盤教育：「経営学への招待」，「経営及び生産」

専門教育：「経営情報」，「オペレーションズリサーチ」

大学院：「経営情報特論」

地域連携：

庄内産業振興センターが主催する「木曜フォーラム」で、「勝つ経営—セル生産を中心に」という題名のセミナーを行い、地域企業の関係者数十人が出席しました。

(3) 平成22年度研究・教育活動に関するコメント

研究に関しては、以下の2点は評価できます。A. 著名な出版社 *Springer* から著書が出版されること；B. 著名な国際ジャーナル *International Journal of Production Research* に論文を掲載することです。

小笠原 奈菜

(1) 研究成果

[論文]

「フランチャイズ・チェーン運営者の加盟店に対する報告義務」

山形大学法政論叢 第48号 39頁

「当事者が望まなかった契約の適正化と情報提供義務—契約関係維持を中心として—(2)」山形大学法政論叢 第49号 101頁

[口頭発表]

「フランチャイズ契約の情報提供義務における「契約」概念」(国際取引法研究会，2010年12月18日，於 早稲田大学)

「更改，免除，混同，決済手段の高度化・複雑化への民法上の対応の要否」(民法の改正を考える研究会，2011年1月27日，於 明治大学)

「私立学校の教育内容の変更と不法行為の成否」(東北大学民法研究会，2011年2月17日，於 東北大学)

(2) 教育，地域連携等の活動

[担当授業科目]

- ・教養教育科目：判例を読もう（教養セミナー）
- ・専門教育科目：契約法入門，債権各論，民法演習  
(オムニバス方式) 総合講座Ⅱ(法律)，公務員試験対策セミナー
- ・大学院：比較契約法特論Ⅱ，比較契約法特別演習

[地域連携]

山形弁護士会主催判例研究会

[出張講義]

鶴岡中央高校

(3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

科学研究費補助金(若手研究(B))の初年度として、口頭報告を3本行なうことができた。成果の公表は次年度となる。教育・地域連携については、学部2年生向けの入門講義を新たに担当し、民法の基礎理論をわかりやすく教えるよう努力した。

**緒方 勇**

(1) 研究成果

[著書・報告書]

【書籍】『会計大学院教科書 管理会計演習 理論と計算』税務経理協会、2011年1月。(共著。緒方は第10章担当)

(2) 教育、地域連携等の活動

[担当講義] 管理会計、管理会計演習、経営分析入門、情報処理、法経政策学基礎演習、管理会計特論I(大学院)、管理会計特別演習(大学院)

[地域連携活動]

- 山形仙台圏交流研究会にメンバーとして参加
- 山形大学生協 監事

(3) 平成21年度の研究・教育活動に関するコメント

研究に関しては、経営者の利益調整行動に関する研究を行い、学会に投稿した(アクセプト済み)。来年度中には掲載される予定である。また、会計大学院向けの教科書(一部)を執筆した。

教育活動については、学生が理解できる授業を目標とし、分かりやすく理解しやすい資料を作ることを心掛けている。

**貝山 道博**

(1) 研究成果

[著書]

- 山形大学都市・地域学研究所編『山形学—山形の魅力再発見』(山形大学出版会、平成23年2月)の編集作業に従事

(2) 教育、地域連携活動

[担当授業]

- 学部: 財政学(前期・後期)、経済数学(後期)、財政学演習(通年)
- 他機関(非常勤): 開発経済学(埼玉大学)(前期集中講義)、統計情報分析力(山形県職員育成センター)(90分/回、計2回)

[地域貢献活動など]

- 学外：東北地方社会保険医療協議会山形部会長，山形県長寿医療懇談会長，上山市振興審議会議長，東北地方整備局入札監視委員会委員，山形運輸支局交通アドバイザー，山形県指定管理者審査委員会委員，社会保険診療報酬支払基金山形支部幹事
- 学内：山形仙台圏交流研究会座長
- その他：山形大学都市・地域研究所事務局長として，同研究所の賛助会員（地元企業）の獲得に努めた。また，同研究所主催の公開講座及び同研究所設立10週記念関連諸行事を企画・実施した。

(3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

山形大学附属学校運営部長として，1年間附属幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校の教育・研究活動の統括的管理・運営にあたった。

私が研究代表者になっている科研費（基盤（C））の研究「地域公共交通システムのあり方—デマンド交通を中心として」についての調査・研究を行った。

その他に，是川晴彦教授が研究代表者となっている科研費（基盤（C））の研究「中心市街地活性化」にも分担研究者として加わり，調査・研究を行った。

学部教育に関しては，通常のノルマをこなしたが，山形大学附属学校運営部長を兼務しているため，本来行うべき前期の経済数学の講義を免除してもらった。

山形大学都市・地域学研究所事務局長として，地域との連携に努めた結果，多くの賛助会員（地元企業）を得ることができた。また，同研究所と山辺町との連携協定締結も実現することができた。

## 金子 優子

(1) 研究成果

論文

『公益法人制度改革と公益法人の活動実態を示す統計について』，山形大学大学院社会文化システム研究科紀要第7号，2010年10月1日

『日本の地方議会に女性議員がなぜ少ないのか—山形県内の地方議会についての一考察—』，年報政治学2010-II ジェンダーと政治過程，2010年12月1日

編著書

『Public Administration Handbook of Japan (First edition)』，立命館アジア太平洋大学，2010年11月1日（鈴木糸子，三好皓一と共編）

国際会議での発表

『New Statistics on Citizens' Environmental Conservation Activities』，国際生活時間学会第32回大会，2010年7月7日

(2) 教育，地域連携等の活動

担当科目：行政学，公共政策論，日本国憲法，技術進歩と行政，行政学演習，総合講座I（公共

政策), 行政学特論 I・II, 行政学特別演習

外部研修講師

鎌倉市議会議員研修 講師 鎌倉市役所会議室 2010年5月

山形市職員研修「行政法研修」講師 山形市役所会議室 2010年9月

村山地方町村議会議員研修 講師 西川交流センター 2010年9月

審議会委員

東根市情報公開・個人情報審査会委員

村山公立病院情報公開・個人情報審査会委員

山形市行財政改革推進懇話会委員

(3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

研究活動については、外部研究資金(19-20年度科学研究費補助金 基盤研究C 研究課題番号:19530229「経済社会における公益法人の活動実態と期待される新たな役割に関する研究」)を得た研究の成果を外部に発表することができた。また、日本学術振興会から委託を受けた二国間交流事業 共同研究「地方行政改革における非営利セクターの役割に関する日韓比較研究」の第二年次として、日本と韓国において研究調査を進めることができた。

教育活動については、プレゼンテーションソフトを利用することにより分かりやすい講義となるように努めた。また、行政実務家を招請して行政の現場についての講義を行っていただき、大学教育と実社会との連携に努めた。

北川 忠明

(1) 研究成果

論文:なし

(2) 教育、地域連携等の活動

担当授業:「政治と人間」(基盤教育),「政治理論」(学部),「政治理論演習」(学部),「現代政治論特論」(大学院)

「現代政治論特演」(大学院)

地域連携:長井市「ながい市民未来塾」講師

山形県明るい選挙推進協議会委員

その他地域連携室長としての業務

(3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

本年度は翻訳・編集作業に大幅に時間が取られたため、論文執筆時間が十分に確保できず、発表にいたらなかったのが残念である。

## 國方 敬司

### (1) 研究成果

論文「イギリス農業革命研究の陥穽」(『山形大学紀要(社会科学)』第41巻2号, 2011年2月), pp.39 - 64.

### (2) 教育・地域連携等の活動

#### (a) 担当授業

- ・西洋経済史, 環境と経済, 西洋経済史・環境と経済演習, 教養教育(経済学), スタートアップセミナー

#### (b) 非常勤講師

- ・東北公益文科大学「環境経済学」「公害と市場経済」, 山形短期大学「くらしと経済」

#### (c) 出張講義

- ・「[環境政策の考え方]—ペットボトルリ・サイクルの問題点—」(愛知県立豊田北高等学校)

#### (d) 講演等

- ・山形県県政広報テレビ特別番組「いき★いきやまがた:いのちと暮らしを支える医療・福祉・子育て支援等の充実」コメンテーター, 2010年6月13日(日)YBC 他県内民放各局
- ・パネルディスカッション「地域素材を活かしたまちづくり」パネラー 第4次東根市総合計画策定記念事業まちづくり研修会(さくらんぼ東根温泉花の湯ホテル)2011年3月4日(金)

### (3) 研究・教育活動に関するコメント

特にコメントすべき点はない。

## 今野 健一

### (1) 研究成果

学会報告:「教育人権論の展開と教育法学の役割」〔第40回日本教育法学会定期総会・研究総会報告〕(明治大学/2010.5)

論文:「フランスにおける〈セキュリティ〉政策—立法のインフレ化と『自由』の危機?—」(一橋法学9巻3号〔2010.11〕)

提言:「〈人間教育〉の中の「憲法教育」～実践のための手がかり～」〔法学館憲法研究所HP内,「憲法教育を考える」に掲載〕(2010.11.22アップ)

論文:「教育人権論の展開と教育法学の役割」(日本教育法学会年報40号〔2011.3〕)

### (2) 教育, 地域連携等の活動

#### 担当授業科目

- ・学部専門科目:憲法Ⅰ, 憲法演習Ⅱ, 教育法, 総合講座Ⅱ(法律)
- ・基盤教育科目:日本国憲法(後期)

#### 地域連携活動

山形市情報公開・個人情報保護審査会委員，山形県後期高齢者医療広域連合情報公開・個人情報保護審査会委員

(3) 当該年度の研究，教育活動に関するコメント

研究面では，40周年を迎えた日本教育法学会の研究総会で報告を行う機会を得た。また，個人の人権とセキュリティに関する研究成果を論文として公表した。なお，民間の憲法研究団体の求めに応じて，憲法教育に関する提言を寄稿し，同団体のHPに掲載された（同団体発行の教員向け小冊子にも収録）。

教育面では，専門科目「総合講座Ⅱ（法律）」で取りまとめ役を務めた。法律学に1年生の関心をひきつけるのは案外大変であることを，今年度も痛感した。演習（ゼミ）では，恒例の卒業研究論文集を製作したが，2011年3月11日の東北大地震の影響で，卒業生たちに直接手渡すことができなかった。

是川 晴彦

(1) 研究成果

[科研費研究関係]

- 中心市街地活性化に関して，実態調査・ヒアリング，および理論的考察を行った（震災の影響で，調査の一部，および研究成果の取りまとめについて23年度への延期が認められた）。このため，中間的なまとめとして，

「豊橋市中心市街地の実態と活性化の取り組み」（mimeo）

(2) 教育，地域連携などの活動

[担当授業]

- 学部：ミクロ経済学，応用ミクロ経済学，公共経済学，ミクロ経済学演習
- 大学院：公共経済学特論，公共経済学特別演習

[地域貢献活動など]

- 山形県行政支出点検・行政改革推進委員会委員長
- 山形県産業構造審議会委員・部会長
- 山形県指定管理者審査委員会の外部委員
- ながい市民未来塾における講師
- まちづくり人材連携強化事業（村山市）
- 山形市における意見交換会の講師
- 出張講義（酒田西高校）

(3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

中心市街地活性化に関する研究（科研費研究：代表者）では，鳥取市，豊橋市などの事態調査やヒアリングを行った。その結果，地権者の意思決定に関する問題点や活性化政策の効果と課題について有益な知識や情報を得ることができた。また，他の科研費研究における研究分担

者として、長野県東御市におけるダイヤモンド交通システムの実態調査を行った。課税理論の研究では、前年度に引き続き、不完全競争市場を対象とした分析を継続し、先行研究などの検討を行った。

教育面では、前年度に引き続き、配布資料の更新を行い、受講生にとって要点が整理しやすい資料の作成につとめた。大学院の講義では、受講生の基礎知識や研究目標のちがいに応じて個別に講義を行い、より高い教育効果が上がるようにした。

## コーエンズ 久美子

### (1) 研究成果

[判例研究]

会社の代表取締役が事実上主宰する別会社を利用して競業取引を行った場合における同人に対する競業避止義務違反に基づく損害賠償請求において、代表取締役個人およびその家族への報酬合計額の5割を損害と推定するのが相当であるとされた事例

### (2) 教育、地域連携等の活動

[担当授業] 商法 I, 商法 II, 商法演習 I, 国際商取引法 (理工学研究科)

[地域連携活動] 山形県消費生活審議会委員

### (3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

取締役の競業避止義務に基づく責任につき、これまで研究を重ねてきた信託法理を参考に損害賠償のあり方を検討した。

教育に関しては、とりわけ演習において学生が自分の見解を積極的、かつ理論的に伝えることができるよう、口頭発表、質疑応答の仕方の指導に力を入れた。

## 澤田 裕治

### (1) 研究成果

・著書 (共著)

○『山形学—山形の魅力再発見—』山形大学都市・地域学研究所編, 山形大学出版会発行, 2011年2月 (澤田裕治「今なぜ安達峰一郎研究が必要か?」を執筆)

回顧と展望

○「中世／イギリス」『史学雑誌—2009年の歴史界—回顧と展望—』第119編第5号, 史学会, 2010年5月

・口頭発表

○「中世イングランドの婚姻訴訟について」西欧中世史研究会, 奈良女子大学, 2010年8月29日

### (2) 教育、地域連携等の活動

■平成 22 年度の担当授業の紹介

〔山形大学における講義・演習等〕

・教養教育科目：基礎から考える法学，基礎からの民法，教養セミナー「民法の体系的理解を目指す」

・専門教育科目：西洋法制史，西洋法制史演習

〔講演会〕 熊谷真一シベール会長の講演会（「井上ひさし氏の思い出」，山形大学都市・地域学研究所主催，山形大学，2010年）を企画・実施し，成功に導いた。

〔連携協定〕 山形大学・都市地域学研究所副所長として山辺町との間で連携協定締結（2010年12月14日）に漕ぎ着けた。

〔記念行事〕 山形大学都市・地域学研究所副所長として「山形大学都市・地域学研究所設立10周年記念式典・祝賀会」を企画開催し成功に導いた。

〔山形県立保健医療大学における講義〕 法学

〔山形県立産業技術短期大学校における講義〕 法学概論

〔山形市立済生館高等看護学校における講義〕 看護関係法規Ⅰ

## ■地域貢献活動

山形大学医学部附属病院医薬品等受託研究審査委員会委員

山形県立保健医療大学倫理委員会委員

山辺町・山形大学連携協定懇談会委員

### (3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

研究では，前年度に引き続き，カール・ギューターボックの研究を行ない，J・M・ケイの著作等の研究に従事しつつ，私訴追についての研究を深化させた。また不法行為法の危殆化責任に注目してドイツ法と英米法との比較法的研究を継続し，ジョン・M・クリーバークの論文「厳格責任から労働者災害補償法へ」について研究した。また新しく中世都市ロンドンの法と裁判に関する研究を開始した。

教育では，教養教育科目において，『対話 Dialogue17』と『対話 Dialogue18』と題するミニコミ誌を毎回発行し，学生同士と教員の相互コミュニケーションにより，講義内容の血肉化を図った。

## 下平 裕之

### (1) 研究成果

〔論文〕

・「C. R. フェイの協同組合論」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第7号，75 - 89ページ，平成22年10月。

・「D. H. マクレガーの有機的成長論批判」『山形大学人文学部研究年報』第8号，199 - 213ページ，平成23年3月。

〔研究会報告〕

・「計量文献学・計量言語学における分析手法について」（第29回経済思想研究会，2010年7

月 24 日，東北大学)

(2) 教育・地域連携等の活動

・教育活動

山形大学における担当授業：

[学部] 経済思想，経済学史，経済学史演習，地域づくり特別演習，公務員対策セミナー

[基盤教育] スタートアップセミナー，最上川俯瞰講義，最上川の自然と文化

[非常勤] 羽陽短期大学（経済学），放送大学（地域活性化）

・地域連携活動

高校での出張講義：新庄南高校，谷地高校

「ながい市民未来塾」における講演，講師担当

第 10 回最上を拓く高規格道路建設促進大会における講師，アドバイザー担当

山形財務事務所財務モニター

大学コンソーシアムやまがた企画会議委員長，やまがた里の暮らし推進機構理事（大学コンソーシアムやまがたを代表して任命）

川西町における学生フィールドワークの指導（やまがた里の暮らし推進機構からの委託事業）

山形大学まちづくり研究所，仙山圏交流研究会への参加

(3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

研究活動については，近年の主要研究テーマであるケンブリッジ学派の産業統治論に関連した論文を上梓するとともに，科研費のテーマである経済学の伝播と普及に関する実証分析のための基礎研究を開始した。地域連携活動については，「ながい市民未来塾」において市民向けの継続的な地域づくりに関わる講義に取り組んだ。

**真保 智行**

(1) 研究成果

・真保智行・長岡貞男「合併の研究開発シナジー：発明者データによる共同研究と知識フローの分析」『日本知財学会誌』Vol. 7, No. 1, 2010 年 8 月

・真保智行「ライセンス契約の形態の選択：技術移転の論理と機会主義の論理」『組織科学』Vol.44, No. 1, 2010 年 9 月

・中村健太・真保智行・長岡貞男「情報提供制度，異議申立，不服審判請求，無効審判請求に関する経済学的分析」，財団法人知的財産研究所編『平成 22 年度我が国における発明等の産業化に向けた出願行動等に関する調査報告書』，pp.153 - 183, 2011 年 3 月

(2) 教育，地域連携等の活動

・「経営学」「経営戦略論」「経営学演習」「スタートアップセミナー」「企業経営特論」

・2010 年 8 月，新庄北高等学校「山形大学研究室訪問プロジェクト」

・2010 年公開講座で「モジュール化の進展と日本企業の課題」を報告

(3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

これまでの技術導入を中心とした研究を一区切りとつけ、合併や特許制度といった新たな研究課題に着手した

**鈴木 明宏**

(1) 研究成果

- Do great distance and discussion among dictators facilitate self-interest of people? – Experimental evidence from dictator games, 山形大学人文学部法経政策学科 Discussion Paper Series 2010-E03, 2010.
- The Belief that Others Think Effort should be Rewarded: Experimental Evidence in Dictator Games, 山形大学人文学部法経政策学科 Discussion Paper Series 2010-E04, 2010.

(2) 教育, 地域連携等の活動

- 教育  
学部：ゲーム理論・産業組織論・意思決定論演習・現代の経済理論（基盤教育）  
大学院：ゲーム理論特論
- 地域連携  
仙山交流研究会・まちづくり研究会メンバー

(3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

上記の論文は海外雑誌に投稿中である。教育については修士 2 年の学生に修士論文の指導を行った。内容は主に行動経済学・実験経済学についてのもので、Impunity Game についての経済実験を行い人々の行動を分析している。

**鈴木 均**

(1) 研究成果

次年度論文作成の準備期間で、格段の成果は無い。

(2) 教育, 地域活動

- 教育活動  
山形大学における授業担当：  
教養教育（経済学）, ヨーロッパ経済論, 国際経済論, 国際経済論演習（専門科目）, EU 経済特論, EU 経済特講（大学院）
- 学会活動  
経済理論学会（幹事）, 日本 EU 学会, 国際経済学会
- 地域連携等  
山形県 9 条の会・憲法ネットワークの代表委員を継続して勤めている。  
雇用能力開発機構運営協議会委員

・その他

大学入試センター出題委員（政治・経済，21年・22年度）

大学院研究科社会システム専攻主任

(3) 平成22年度の教育・研究活動に関するコメント

格別なし。

**砂田 洋志**

(1) 研究成果

国際学会報告

- ・“Bayesian Estimation of Double Threshold GARCH Model and Its Application to Financial Data”  
第10回中国日本統計シンポジウム（2010年10月16日，西南財経大学，中国成都市）

(2) 教育，地域連携等の活動

担当授業

計量経済学，統計学，専門演習（学部），スタートアップセミナー（基盤教育），計量経済学特論・特別演習（大学院）

計量経済学Ⅰ・Ⅱ（東北公益文科大学・大学院）

客員教授（放送大学山形学習センター），卒業研究の指導（放送大学）

地域連携

山形県市町村職員共済組合における学識監事

山形仙台圏交流研究会への参加

青森県立八戸西高校での出張講義（2010年10月）

山形県統計利用アドバイザー

(3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

計量経済学関係の研究では，二重閾値 GARCH モデルの経済データへの応用を試み，研究成果を報告した。

中心市街地活性化の研究では，「大型店撤退後の中心市街地再開発における経済行動分析」という題目の科学研究費補助金の分担研究者として鳥取市と米子市を調査した。

デマンド交通バスの研究では，「高齢地域における地域公共交通システムのあり方：デマンド交通システムを中心として」という題目の科学研究費補助金の分担研究者として長野県東御市で調査をした。

教育関係では，講義ノートを配布するなどして，学生の理解を深めることに力を注いだ。大学院の特論の講義では受講生の知識に大きな差があったので，前期は2クラスに分けて講義を行った。

放送大学山形学習センターにて客員教員を務めると共に，卒業研究の指導を行った。また，専門演習では，2名の学生の卒業論文を指導した。

## 高倉 新喜

### (1) 研究成果

- 後藤昭・白取祐司編『新・コンメンタール刑事訴訟法』(日本評論社, 2010年7月)122 - 145頁[高倉新喜担当], 216 - 249頁 [高倉新喜担当], 910 - 922頁 [高倉新喜担当]
- 高倉新喜「判例評釈・被告人の検察官調書を取り調べなかった第一審の訴訟手続の適否」『速報判例解説』6号(2010年4月)225 - 228頁
- 高倉新喜「判例評釈・即決裁判手続の合憲性」『平成21年度重要判例解説・ジュリスト』1398号(2010年4月)223 - 224頁
- 高倉新喜「文献紹介・合理的な疑いの起源 James Q. Whitman, The Origins of Reasonable Doubt, Yale University Press, 2008, pp. ix + 276」『アメリカ法』2009年2号(2010年6月)353 - 357頁
- 高倉新喜「判例評釈・免訴判決を受けた場合の刑事補償の適否(横浜事件)」『速報判例解説』7号(2010年10月)201 - 204頁
- 高倉新喜「判例評釈・勾留請求却下の裁判に対する準抗告申立て事件」『法律時報』82巻13号(2010年12月)356 - 359頁
- 口頭発表「裁判員制度における公判前整理手続と精神鑑定」  
科研基盤(A)「刑事法学と心理学—刑事裁判心理学の構築に向けて」  
平成22年度研究集会(2011年1月22・23日北海道大学)

### (2) 教育, 地域連携等の活動

- 専門科目: 刑事訴訟法  
刑事法基礎  
刑事訴訟法演習  
総合講座Ⅱ(刑事法3・刑事法4)  
公務員対策セミナー(論作文演習「少年犯罪に関する問題」)
- 基盤教育: スタートアップセミナー  
裁判員制度—刑事司法との共生を考える(政経・社会B)
- 地域連携  
出張講義: 福島県立会津高等学校(テーマ:「法律学って, 何やるの?」)  
福島県立磐城桜が丘高等学校(テーマ:「法律学って, 何やるの?」)  
栃木県立足利高等学校(テーマ:「法律学って, 何やるの?」)  
山形県介護保険審査会委員  
山形県精神医療審査会委員  
山形県弁護士会綱紀委員会予備委員  
取材協力: NHK山形, さくらんぼテレビ, 山形放送, 山形新聞, 河北新報, 讀賣新聞

### (3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

研究面においては、『新・コンメンタール刑事訴訟法』がようやく出版されたことが、感謝

であった。判例評釈を発表する機会を多く与えられた。科研基盤（A）「刑事法学と心理学—刑事裁判心理学の構築に向けて」の研究分担者として、最終年度の研究成果を発表することができた。

教育面においては、スタートアップセミナーと公務員対策セミナーを初めて担当した。刑事訴訟法演習では、現地学習として山形刑務所見学を実施することができた。

裁判員制度と公訴時効の一部廃止等に関する取材協力が多かった。

## 高橋 和

### (1) 研究成果

#### ・研究報告

「越境地域協力と国境管理」

北東アジア学会・東亜経済学会合同学術研究大会

2010年8月27日（韓国・東海市コンベンションセンター）

#### ・著書（共著）『EU統合の流れのなかで東欧はどう変わったか』弘前大学出版会，2010年，3-116頁

#### ・論文「越境地域協力と国境管理—シェンゲン条約と人の移動の管理をめぐって—」山形大学『法政論叢』第50号，平成23年3月，1-27頁

### (2) 教育，地域連携等の活動

#### ○教育

・専門科目 国際関係論，国際公共政策，地域の国際化，政治学入門国際関係論演習を担当

・大学院 国際関係特論Ⅰ，Ⅱおよび国際関係特別研究を担当

#### ○地域連携

・山形県労働委員会公益委員

・山形県公立大学法人評価委員

・山形労働局 最低賃金審議会公益委員など

### (3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

学部教育では，平成21年度から採用しているクリッカーを使った授業を国際公共政策に取り入れ，学生の主体的な授業への参加を促す試みを続けている。

大学院の授業では，上記授業とともに，修士論文の指導を行った。

## 高橋 良彰

### (1) 研究成果

法政大学で，ボアソナード・梅謙次郎没後100年記念企画として行われた第1回シンポジウム「近代法曹養成と法政大学 東京法学校の教師たち」において，「司法省法学校における日本民法草案財産編講義とボアソナード」という報告を行った。

(2) 教育, 地域連携等の活動

金融取引法入門 (前期ゼメ), 債権総論・担保物権 (後期ゼメ), 教養教育 (前期), 民法演習Ⅲ (通年), 外書講読Ⅲ (後期)

(3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

目標評価委員会での会議などにおわれた一年であり, 研究成果が思うように挙げられなかった。なお, 科学研究費による法典調査会民法議事録の調査を引き続き行っている。

**田北 俊昭**

(1) 研究成果

○論文

田北俊昭・岡田真郁子: 高級果物における「地域ブランド」の評価について—日本山形産さくらんぼを事例にして, 山形大学人文学部研究年報, 第8号, 2011年3月

○学会報告

田北俊昭・岡田真郁子: 高級果物における「地域ブランド」の価値評価—日本山形産さくらんぼを例として—, 2010年度第24回応用地域学会研究発表大会, 名古屋大学, 2010年12月

○その他

田北俊昭・長谷川浩一・長谷川志郎: 近代遺産「長谷川製糸所上山工場」の発見, 月刊『かみのやま』, 第119号, 2011年3月1日

(2) 教育, 地域連携等の活動

○教育

- ・専門科目: 経済情報科学 (前期・後期), 地域科学, 経済情報科学演習
- ・教養科目: 都市経済と情報

○他大学との合同発表会・地域での教育活動

東北大学・山形大学・筑波大学・東京外国語大学等の国内大学・大学院の夏期合同セミナーに参加している。当研究室の所属学生は卒業研究 (3年次・4年次) または英文論文のレビュー発表を義務づけている。自分自身の現在の研究状況を客観的に把握するために, 他大学の大学3年から大学院修士・博士課程の学生の発表を聞いてもらう。自分自身の研究の進捗状況や研究レベル等を把握してもらい, 刺激を受けてもらうとともに大学院進学者も育成する。

都市・地域に関する経済分析を行うことも大事ではあるが, 山形の農林業や環境関連施設の見学・体験・研究会を通して, 様々なものの見方を養うことも大切にしている。今回は, 地域ブランド産業である「オリエンタルカーペット」, 山辺の「さくらんぼ」, 世界的に影響を与えた「安達峰一郎」, 紅花商人の長谷川家の紅の蔵での「創作デザート」について, 地域で活躍する関係者にご講演をいただきながら, 大学教員として私がコーディネートした。参加者については, 山形大学と東北大学の地域科学系の研究室の学生10名程度で, 2010年7月に開催し, 安達峰一郎記念館安達尚宏氏・山形市観光協会関係者の協力を得た。

○地域連携

- ・長谷川製糸所旧上山工場第1回調査 (2010年11月)

・長谷川製糸所旧上山工場第2回調査（2011年2月）

当研究室は、最高級「羽前エキストラシルク」に関する産業集積、明治期から昭和までの国内外の交通について調べている。シンボリックな製糸工場（内部の木造構造）がほぼ完全なかたちで見つかったのは感激であった。都市計画・施設計画、地域ブランド戦略等のまさに、建築・土木計画、都市経済学、都市交通史、農業生産・養蚕・繊維等の多数の分野を網羅する新しい地域ブランド戦略を構築していくための準備を進めている。

・地域ブランドに関する学術調査

2010年12月及び2011年1月には、高級米「つや姫」のブランド価値評価に関する東京銀座調査を、山形県および山形県観光協会の協力の下、調査を行った。

(3) 平成21年度の研究・教育活動に関するコメント

本研究室では、卒業論文の作成を毎年全員に提出をしてもらうが、国内外でまだ行われていない創造性のあるテーマを模索して、地域経済の分析を行うことを主眼としている。

**立松 潔**

(1) 研究成果

◆報告書・テキスト等

- 山形大学基盤教育院編集・発行『スタートアップセミナー教員用実践マニュアル なさねば成らぬ!』2011年3月
- 山形大学基盤教育院導入科目部門『スタートアップセミナーの改善・充実をめざして—平成22年度導入科目実施報告書』2011年3月
- 山形大学基盤教育院基盤教育実施会議『山形大学基盤教育実施報告書』2011年3月

(2) 教育、地域貢献等の活動

■平成22年度の担当授業の紹介

○基盤教育科目

「人間と経済（政経・社会A）」（基幹科目・人間を考える）

「スタートアップセミナー（人文学部法経政策学科）」

「Jリーグと地域社会」（教養セミナー）

○他の教員との共同で担当する基盤教育科目

「現代社会の諸問題」（基幹科目・共生を考える）1回担当

○専門教育科目

「日本経済論」前・後期

「地域経済論」後期

「日本経済論演習」通年（卒論指導も含む）

○オムニバス科目（他の教員と共同で担当）の専門教育科目

「公務員対策セミナー」運営事務局担当。講義、集団討論演習、論作文演習担当（計5回）

「総合政策講座Ⅲ」（経済・経営）：1回担当

○大学院

「日本産業構造分析特論Ⅰ」

「日本産業構造分析特別演習」

「特別研究Ⅰ」

「特別研究Ⅱ」

■地域貢献活動

○審議会委員等

山形県職業能力開発審議会（会長）

山形県労働委員会公益委員（会長代理）

寒河江市振興審議会委員（会長）

山形市地産地消の店認定委員会（委員長）

J1元気プロジェクト会議（会長代理）

○公開講座等

- 平成22年度山形大学公開講座（人文学部）『『失われた20年』と日本企業』平成22年10月12日
- 山形大学基盤教育シンポジウム「教育改革に向けた山形大学の挑戦」（初年次導入科目の取組についての報告と総括討議座長を担当）平成22年8月28日，キャンパスイノベーションセンター（東京都港区芝浦）

○出張講義等：

- プロジェクト4A FD／SD企画 講演会「学生の日本語運用能力をどうするか？」（平成22年8月18日）
- 旭川北高等学校 出張講義「社会・経済環境の変化と必要とされる人間力」（平成22年8月26日）：
- 国立情報学研究所主催平成22年度学術情報リテラシー教育担当者研修 講義「大学における初年次教育の動向」平成22年10月21日，11月18日。
- 県北地区福島県高等学校図書館研究会研修講演「学生の日本語運用能力向上を目指して」平成22年11月25日
- 東日本国際大学平成22年度FD研修会講演「初年次教育における課題と展望」平成22年12月8日

(3) 当該年度の研究・教育活動に関するコメント

平成22年度は基盤教育発足の初年度であることから導入科目や基幹科目という新しい科目の授業を担当し，基盤教育実施会議議長，導入科目部門長としての公務やアンケート調査，シンポジウム，各種報告書の作成にも忙殺された。また導入科目のテキスト『なせば成る！』が注目されたこともあり，取材への対応や講演依頼も相次いだ。そのため本来の専門分野（経済学）の研究に十分な時間を割くことができなかつたのは残念であった。

## 戸室 健作

### (1) 研究成果

#### [著書]

- ・戸室健作『ドキュメント請負労働 180 日』岩波書店, 2011 年 2 月 23 日, 208 頁。

#### [論文]

- ・戸室健作「製造業における請負労働の過去・現在・未来」『山形大学紀要(社会科学編)』41 巻 2 号, 2011 年 2 月 15 日, 1 - 19 頁。

### (2) 教育, 地域連携等の活動

#### [担当授業科目]

- ・基盤教育科目: 社会政策と共生
- ・専門教育科目: 社会政策論, 社会保障論, 社会政策論演習, 法経政策総合講座 I (オムニバス 1 回担当)
- ・大学院: 社会政策特別演習
- ・その他: 公務員対策セミナーの講義と論作文指導

#### [委員会活動等]

- ・学部国際交流委員会委員
- ・法経政策学科入試小委員会委員
- ・経済経営系共通雑誌・図書担当係

#### [地域連携等]

- ・日本科学者会議山形支部人文班常任幹事 (会計担当)
- ・山形大学人文学部公開講座「嵐の中の日本企業—再生への道標—」の 2 回目「いま求められる日本人の働き方・働かせ方」2010 年 10 月 19 日
- ・『若者リアル—支援者のための若者入門ブックガイド』(編集・発行ぷらっとほーむ, 2011 年 3 月 31 日発行) のヒアリング調査協力, 2010 年 11 月 12 日
- ・北海道苫小牧東高等学校への出張講義, 2010 年 12 月 9 日

### (3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

これまでの研究を単著にまとめることができた。教育活動では、ゼミ生が増えたことにより、合同ゼミや合宿を行うことができた。大学院の授業を初めて担当した。

学部国際交流委員会委員として 10 月 23 日～28 日にドイツに出張し、協定を結ぶためにデュイスブルクエッセン大学とオスナブルク応用科学大学を視察した。

## 中島 宏

### (1) 研究成果

#### [論文]

- ・「『共和国の拒否』—フランスにおけるブルカ着用禁止の試み—」一橋法学第 9 巻 3 号 803 ~ 819 頁 (2010 年 11 月)

[判例評釈]

- ・「公の場における宗教的着衣の規制—欧州人権裁判所 2010 年 2 月 23 日アフメト・アルスラン判決—」山形大学法政論叢 49 号 103 ~ 120 頁 (2010 年 10 月)

[書評]

- ・一橋大学大学院書評会「ルネ・レモン『政教分離を問い直す』」ディスカッサント (2010 年 7 月)
- ・井口秀作・大藤紀子・中島宏「2010 年学界回顧・憲法」法律時報 82 卷 13 号 6 ~ 23 頁 (2010 年 12 月)

(2) 教育, 地域連携等の活動

[教育]

- ・専門科目: 憲法Ⅱ, 憲法Ⅲ, 憲法演習Ⅰ
- ・教養科目: 日本国憲法, スタートアップセミナー

[地域連携]

- ・山形市個人情報保護制度運営審議会委員, 天童市情報公開・個人情報保護審査会委員
- ・出前講義: 山形西高校 (6 月), 新潟三条高校 (12 月)
- ・研究室訪問: 新庄北高校 (8 月)

(3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

研究面では, フランスのブルカ規制に関する論文等を公表しつつ, 書評会への参加や学界回顧を執筆する機会に恵まれた。教育面では, スタートアップセミナーの準備に四苦八苦しつつ, 二回目の担当となる憲法Ⅱ・Ⅲの講義に出来るだけ最新の知見を盛り込む努力をした。また, 学問の自由・大学の自治に関して考えさせられた年度であった。スタートアップセミナーを担当した学生が, 震災により亡くなったことが残念でならない。

行方 久生

(1) 研究成果

1) 著作

- ①共編著 『「地域主権」と国家・自治体の再編』(渡名喜庸安・行方久生・晴山一穂編, 2010 年 10 月, 日本評論社), 第 7 章「道州制と税財政の再編」を担当
- ②共著『脱日米同盟と自治体・住民—憲法・安保・基地・沖縄』(2010 年 10 月, 大月書店), 「日米同盟の争点化と戦略的ビジョン・オルタナティブ」「非核『神戸方式』と日米安保」執筆の他, 渡辺治, 孫崎享, 新原昭治, 稲嶺進氏との対談を担当
- ③共著『公共事業再生—分権時代の国土保全・建設産業政策』(永山利和編著, 2010 年 8 月, 自治体研究社), 第 3 章「地域・自治体の『自立』にむけた行財政改革と公共事業の財政問題」(P 133 ~ P172) を担当
- ④共著『山形県の社会経済・2010 年』(特集: 吉村県政 2 年の検証), 第 7 章「財政からみた山形県の姿と行財政運営の課題」(P138 ~ 153) を担当

## 2) 論文等

- ①「総選挙の結果と今後の地方自治の課題—どうなる民主党政権の地方分権改革」(『とちぎの地域と自治』2010年3・4月号, 2010年4月1日, とちぎ地域・自治研究所) 両号ともP3～P15所収
- ②シンポジウム報告「安保改定50年『日米同盟の変遷と基地・地方自治・住民生活』」(『自治と分権』2010年7月, P4～P40)
- ③新原昭治氏と対談:「『密約』と日米同盟の構造的本質」(『自治と分権』2010年7月号)
- ④「『地域主権』論と税財政改革をどうみるか」(『自治と分権』2010年10月) P50～P59
- ⑤「『地域主権』下の税制改革論と予算編成」(『自治と分権』2010年10月) P71～P81
- ⑥「一括交付金制度の『可能性』—民主党の税財政制度改革論の一断面」(『自治と分権』2011年1月) P100～P110

## 3) 書評等

- ①頼高英雄蔵市長: インタビュー (『自治と分権』2010年4月号) P4～17
- ②書評(インタビュー) 平山洋介『住宅政策のどこが問題か<持家政策>の次を展望する』光文社新書, 『自治と分権』2010年4月号, P82～96
- ③稲嶺進名護市長: インタビュー (『自治と分権』2010年7月号) P4～P18
- ④書評(インタビュー) 孫崎享『日米同盟の正体—迷走する安全保障』講談社現代新書, 『自治と分権』2010年7月号, P80～P94
- ⑤書評: 渡辺治・二宮厚美・岡田知弘・後藤道夫『新自由主義か新福祉国家か—民主党政権下の日本の行方』(『季論21』2010年夏号)
- ⑥書評(インタビュー) 吉田徹『二大政党制批判論』光文社新書, 『自治と分権』2010年10月, P82～P98
- ⑦書評(インタビュー) 屋良朝博『砂上の同盟—米軍再編が明かすウソ』(沖縄タイムス社), 『自治と分権』2011年1月, P89～P99

## 4) 学会・研究会報告等

- ①「地域主権論と大都市政策・道州制」2010年8月, 大都市制度研究会
- ②「大都市制度論の今日的位相—『都市州』にみる大都市」2010年9月, 大都市制度研究会
- ③「地域主権論と道州制を考える—国家・自治体再編論の『旋回』」, 2010年12月, 地方分権研究会
- ④「第3の構造改革としてのTPPへの参加」, 2011年2月, 山形県農協等とのシンポジウム

## (2) 教育, 地域連携等の活動

- ①「公務員制度論」(基盤教育院, 前・後期)
- ②「地方財政論」(学部, 前・後期)
- ③「自治体論」(学部, 後期)
- ④「地方財政論演習」(学部)  
を担当
- ①上山清掃工場をめぐる問題(山形テレビ)

- ②同上 (朝日新聞)
- ③仙山交流問題 (朝日新聞, 東北版)
- ④住民・市民団体の学習会やシンポジウム等での講演 (約 40 回)
- ⑤人文学部・社会連携促進部会の担当として, 学生ボランティア活動を支援。
- ⑥その他, 中国・韓国の労働団体, 市民団体と平和交流の取組みを行なった。

(3) 平成 22 年度研究・教育活動に関するコメント

本格的に山形県の財政問題について研究を始め, 大都市の財政問題と平行して研究を行なった。今後はこれらの成果をまとめると同時に, 財政規律の視点から予算・決算制度の分析を行なう予定である。教育問題では, 学生の就職や将来展望に関し様々なサポートを行なったが, それなりの成果をあげたと認識をしている。

**西岡 正樹**

(1) 研究成果

[判例評釈]

- 「正当防衛に当たる暴行及びこれと時間的, 場所的に連続して行われた暴行について, 両暴行を全体的に考察して一個の過剰防衛の成立を認めることはできないとされた事例 (最高裁平成 20 年 6 月 25 日第 1 小法廷決定・刑集 62 卷 6 号 1859 頁)」法学 74 卷 2 号 (2010 年) 143 頁以下。

(2) 教育・地域連携等の活動

[教育]

(1) 担当授業科目 教養教育: 刑法の基礎

専門教育: 刑事法基礎, 総合講座Ⅱ (法律), 刑法Ⅰ, 刑法演習Ⅱ

(2) 非常勤 放送大学非常勤講師「市民社会と刑事法」担当 (2010 年 10 月)

[地域連携等] 出張講義 青森県立八戸東高等学校 (2010 年 8 月)

取材協力 山形新聞 (2011 年 3 月)

(3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

平成 22 年度から山形大学人文学部に赴任し, 今年度は授業準備等に多大の時間を費やすこととなったが, 諸先生方の協力のもとで教育活動に従事することができた。研究活動としては, 今般取り組んでいる累犯加重規定に関する研究を継続して行った。

**西平 直史**

(1) 研究成果

西平: サプライチェーンに対して構成したサーボ系の解釈とその応用, 山形大学大学院社会文化システム研究科紀要, Vol. 7, pp. 105 - 109 (2010)

(2) 教育・地域連携等の活動

- 教育

学部 経営システム, 応用情報処理, 情報・システム論演習

基盤 情報処理

大学院 経営システム特論

• 地域連携

「山形仙台圏交流研究会」

蔵王温泉外国人宿泊統計の数表作成

公開講座 (学内, 東根市)

(3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

教育面では学部に加えて大学院生の研究指導を行った。

研究面では従来から進めているサプライチェーンをむだ時間システムとして解析する研究の新たな成果を公表した。

**野田 英雄**

(1) 研究成果

[査読つき論文]

1. Kyo, K. and H. Noda, "A New Method for Estimating Models of Seasonal Adjustment with AR Component," *Information: An International Interdisciplinary Journal*, 14 (1), January 2011 (in Japanese) .
2. 野田英雄・姜興起 "Bayesian Analysis of the Technical Change in Japan," 『経済政策ジャーナル』第7巻, 第2号, pp. 2 - 5, 2010年6月 .
3. Noda, H. and K. Kyo, "Statistical Analysis of the Dynamic Structure of China's Economic Sectors Based on Bayesian Modeling," *Information: An International Interdisciplinary Journal*, 13 (3B), pp.923 - 939, May 2010.

[ディスカッション・ペーパー]

1. Noda, H., "The Inhibitory Effect of Population Ageing on Technical Progress," Yamagata University FLSS Discussion Paper Series, No.2010 - E02, August 2010.

[国際会議における研究報告]

1. Kyo, K. and H. Noda, "A New Algorithm for Estimating the Parameters in Seasonal Adjustment Models with Cyclical Component," Fifth International Conference on Innovative Computing, Information and Control, December 2010, Xi'an Hotel, China.
2. Noda, H., "Duration of Patent Protection and Optimal R&D Intensity," 9th International Conference of the Japan Economic Policy Association, November 2010, Waseda University, Japan.
3. Noda, H. and K. Kyo, "Bayesian Analysis of the Technical Change Based on CES Production Functions," The 2nd European Asian Economics, Finance, Econometrics and Accounting Conference, September 2010, Park Plaza Science Beijing Hotel, China.

[国内学会における研究報告]

1. 姜興起・野田英雄 「AR 成分付き季節調整モデルのパラメータ推定について」 2010 年度統計

関連学会連合大会, 2010年9月, 早稲田大学.

2. 野田英雄・姜興起「経済時系列における循環変動の推定法の提案」日本応用経済学会 2010年度春季大会, 2010年6月, 西南学院大学.
3. 野田英雄“Product Development Performance in an Aging Society,”日本経済政策学会第67回(2010年度)全国大会, 2010年5月, 京都産業大学.

(2) 教育, 地域連携等の活動

[学内担当講義]

マクロ経済学, 応用マクロ経済学, マクロ経済学演習, 総合講座Ⅲ, 経済学の思考法入門, 景気と経済成長

[出張講義]

講義題目「経営の経済学入門」, 秋田県立本荘高等学校(2010年7月)

[地域連携活動]

山形県経済動向研究会メンバー, 山形・仙台圏交流研究会メンバー

(3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

研究活動については, 季節調整モデル推定の新規手法の開発, 動的経済構造のベイズ分析, 人口動態のマクロ動学分析等に取り組んだ。また, 共立出版からの依頼により, 著書『経済データ分析』を執筆中である。

教育活動については, 上記科目の講義・演習に従事した。

**藤田 稔**

(1) 研究成果

「通信カラオケ機器の事業者による取引妨害 —第一興商事件審判審決—」ジュリスト1398号(平成21年度重要判例解説)284-286頁(2010年4月)

「安売り業者の排除と取引拒絶」経済法判例・審決百選(別冊ジュリスト199号)110-111頁(2010年4月)

「2009 判例回顧と展望 経済法」法律時報第82巻6号(5月臨時増刊号)228-236頁(2010年5月)

「入札談合に課徴金納付を命じた審決が実質的証拠がないとして取り消された事例」速報判例解説第7号 277-280頁(2010年9月)

「モディファイヤー価格協定事件審判審決の検討」NBL 941号34-39頁(2010年11月)

(2) 教育, 地域連携等の活動

「経済法1」「経済法2」「経済法演習」「法的なものの考え方と知的財産権(法学)」「スタートアップセミナー」「社会科の教材研究B」と、「総合講座1(公共政策)」の1コマを担当。(その他, 東北学院大学で, 非常勤講師を務めた。)

山形労働局で個別労働紛争調整委員として, 労働紛争の解決のあっせんを行った。

独占禁止政策協力委員として、独占禁止政策のあり方について、公正取引委員会に対して、意見を述べた。

山形県弁護士会綱紀委員会委員として、弁護士倫理の維持に協力した。

日本経済法学会理事として、学会の運営に従事した。

東北経済法研究会で座長として研究を行った。

(3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

判例研究を通じて独占禁止法の法運用に関与した。教育面では「スタートアップセミナー」に関して、FDセミナーで報告を行った。

## 伏見 和史

(1) 研究成果

- ・著書（共著）『やさしい法律情報の調べ方・引用の仕方』 2010年 文眞堂
- ・国際商取引学会研究報告へのコメント「運送書類と運送品—新しい国際海上物品運送条約（ロッテルダム・ルールズ）の規律」国際商取引学会年報 2010年第12号

(2) 教育・地域連携等の活動

\* 下記の授業を受け持ち担当した

「企業活動と法律」（全学1年生対象）

「法的考え方入門」（全学1年生対象）

「スタートアップセミナー」（人文学部法経政策学科1年生対象）

「国際取引法」（人文学部法経政策学科3・4年生対象）

「国際取引法演習」（人文学部法経政策学科3・4年生対象）

「国際契約論」（工学部大学院理工学研究科MOT院生対象）

「国際取引法特論」（社会システム研究科院生対象）

「国際取引法特別演習」（社会システム研究科院生対象）

\* 地域連携のための活動は下記の通りである

1) NPO法人「プロネット」の会員として、弁護士、公認会計士、税理士、司法書士、土地家屋調査士等と共に山形県において経済活動に携わる人たちへの助言

2) 「ジェトロ山形」、「ジェトロ埼玉」、「ジェトロ岩手」の会員企業のために国際ビジネスに関する注意点に関してのセミナーや個別アドバイス

3) 山形県「入札監視委員会」委員として県の入札案件に関してのチェック機能

4) 山形県「知的財産権管理審査委員会」委員長として県の知的財産権の保有、維持、管理に関してのチェック機能

5) 山形地方法務局「評価委員会」委員として登記簿等の公開に係る事務への助言

\* 人文学部進路指導委員として学生のインターンシップ研修に当たっての助言・指導を行い、また就職支援活動の一環として民間企業を多数訪問して山形大学学生の特徴を紹介

(3) 平成 22 年度研究・教育活動に関するコメント

山形大生の進路傾向は地元志向が強いことである。一方、経済環境は益々グローバル化が進み、地方においては少子高齢化、産業の空洞化が加速されつつある。よって、学生へのアプローチでは、地域をしっかりと見据える「蟻の眼」と世界全体を見渡す「鳥の眼」とをもって勉強し、生活することの必要性・重要性を語っていきたい。

洪 慈乙

(1) 研究成果

- ・「新しい財務諸表の制度化から見る複式簿記システム」、  
『山形大学人文学部研究年報』第8号、平成23年3月、pp.161 - 177。

(2) 教育、地域連携等の活動

学部担当授業

- ・専門科目：会計学、財務会計、会計学演習、基礎演習
- ・基盤教育：現代社会と企業会計（経済学）

大学院授業

- ・比較会計学特論、比較会計学特別演習、企業経営特別研究

地域連携

- ・山形仙台圏交流研究会およびまちづくり研究会への参加

松本 邦彦

(1) (平成 22 年度の) 研究成果

- ・「安達峰一郎について：満州事変と国際連盟、そして常設国際司法裁判所」『山形学研究 8：山形の魅力再発見パート 8』（山形大学都市・地域学研究所、2011年3月）003-010 頁
- ・2009年10月の山辺町での公開講座の内容を『山形学：山形の魅力再発見』（山形大学出版会、2011年2月刊）に再録。

(2) 教育、地域連携等の活動

- ・山崎彰先生（人間文化学科）との共同研究プロジェクト「山形ドキュメンタリー映画祭ライブラリーの教育・研究利用のための調査」を続け、その成果の一部として、2010年11月か2011年1月にかけて山形新聞にて「日本の異邦人」を見る：山形国際ドキュメンタリー映画祭フィルムライブラリー」を計8回連載した。
- ・出張講義として、福島県立福島西高校「一日大学」に参加（6月16日（水））し、「日本近代の外交と国際法」を講義。
- ・公開講座として、10月16日に山辺町にて開催の「山形の魅力再発見」で講演。
- ・「安達峰一郎博士生家 & 記念対賢堂」ウェブサイトの「まめ知識 Part2」に、「安達峰一郎の似顔絵」を掲載（10月）。
- ・後期開講の授業「日本政治論」にて、山辺町の遠藤直幸町長に講演いただく（1月18日）。

(3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

ひきつづき日本の多文化政策と、戦間期日本外交の研究を進めています。前者については 2011 年秋開催の山形国際ドキュメンタリー映画祭にあわせて作品紹介冊子を刊行。後者については史料の収集・集積がまだまだ不足している段階です。

丸山 政己

(1) 研究成果

〔学術論文〕

- ・「国連安全保障理事会と自由権規約委員会の関係—狙い撃ち制裁に関わる Sayadi 事件を素材として— (1) 及び (2・完)」『山形大学法政論叢』第 48 号, 2010 年, 98 - 61 頁, 第 49 号, 2010 年, 100 - 60 頁

〔報告書〕

- ・『国際連合総会手続規則の事例調査』（外務省委託研究報告書, 平和・安全保障研究所）（「投票」と「選挙手続」について分担執筆）, 2011 年 3 月

〔口頭発表〕

- ・「国連安全保障理事会と立憲主義—近年の国際判例を主な素材として—」新潟国際法研究会, 2010 年 9 月（於・新潟大学）
- ・「国連安全保障理事会における立憲主義の可能性と課題—国際テロリズムに関する実行を中心に—」国際法学会 2010 年度秋季大会, 2010 年 10 月（於・神奈川大学）

(2) 教育, 地域連携等の活動

〔教育〕

- ・担当科目：国際法, 国際人権法, 国際法演習（専門教育）

スタートアップセミナー（基盤教育）

国際組織法特論, 国際組織法特別演習（大学院）

〔地域連携等〕

- ・新庄北高校：研究室訪問受入れ（「普天間基地問題」（2010 年 8 月）及び出張講義「国際連合とは何か」（2010 年 11 月）

(3) 平成 22 年度の研究・教育活動に関するコメント

本年度は、これまでの研究を国際法学会で報告することができた。また、外務省委託研究に参加し、国連総会手続規則の法的意義という新たな問題関心を養うこともできた。教育面においては、初のスタートアップセミナーが特に大変であったが、実施するなかで自ら学ぶ点が多くあった。

## 安田 均

### (1) 研究成果

#### A. 学会・研究会報告

- ・「生産的労働の意義と限界」SGCIME 研究合宿（八王子セミナーハウス，10.08.09）
- ・「生産的労働概念の途絶と再興」第36回仙台経済研究会（東北大学人文系総合研究棟，10.08.2）

#### B. 著書・論文

- ・「書評『現代経済の解説』」経済理論学会『季刊経済理論』第47巻第4号（2011. 1）

### (2) 教育，地域連携等の活動

#### A. 講義

経済原論（4単位），市場と組織（2単位），教養「教養セミナー（格差を考える）」（2単位），「市場経済」（2単位），学部共通科目「地域社会論」（2単位，非常勤講師の紹介，毎回のレポート及び単位評価担当）

公務員講座（春休み，講義1コマ，論作文1コマ）で1コマ担当。

宮城学院女子大学「経済社会特論」（2単位）

#### B. ゼミ

経済原論演習（4単位）

#### C. 合同ゼミへの参加

- ・東北学院大，宮城学院女子大との「三大学合同ゼミ」  
第18回「結婚格差」（山形大学，7月17日），第19回「ベーシックインカム」（宮城学院女子大学，11月27日）

#### D. 地域連携

- ・解説記事「経済指標と解説」（連合山形『春季生活闘争方針』，2011年2月）
- ・人文学部と山形県村山総合支庁との共同研究「山形・仙台圏交流研究会」に毎月参加。

### (3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

現在，すべての講義科目においてパワーポイントを用いて講述した後，その配付資料およびまとめプリントによって復習するというスタイルをとっている。学生からはわかりやすいとの評価を得ているので，今後も改良を重ねつつ続けたい。教養科目でも前期「教養セミナー」ではテキストを替えて以来，わかりやすいとの評価を得た。後期教養科目は前年度より入門的な内容に変えた。テーマとするタイトルを「賃金の経済学」から「市場経済」に変え，最初の3，4回のみ資本主義経済の基本的な仕組みを解説し，残りは市場競争の軋轢を修復するセーフティ・ネット（年金，医療保険，雇用保険）の仕組みと現状の紹介に当てることにした。その際，講述と新聞記事読み取りを交互に行ない，現在，セーフティネットから漏れている人々が増え，格差問題，貧困問題が浮上している点に注意を喚起した。専門科目，教養科目のすべてにおいてオンライン上の修学支援システム Blackboard を用いた。主な利用形態は講義資料のアップロード，オンラインテスト，成績の逐次通知（毎回のオンラインテスト得点，期末試験

の成績、単位評価)である。オンラインテストの利用に伴い、単位評価における配点を、講義テーマ毎の、択一式復習テスト5-6割と論述式の期末試験4-5割に変えた。つまり、専門知識を踏まえた論述式答案の作成に対して基本的な知識の習得の比重を上げ、日常の学習を重視するようにした。Blackboardによる成績の逐次通知は好評なので今後も続けたい。

年2回開催の合同ゼミは同じ経済学でも専攻や関心の異なる学生と交流する貴重な機会なので今後とも参加したい。特に主催校となった場合には、専攻の異なる学生が議論に参加しやすいようなテーマの解説や論点設定はどのようなものか、ゼミ生が自分たちの関心を検討し直す良い機会でもある。

学外団体から要請される経済指標等の解説記事の執筆、あるいは共同調査への参加は研究の間口を広げてくれるので、時間の許す限り引受けたい。

## 山口 昌樹

### (1) 研究成果

#### 著書

- ・中東欧諸国の銀行部門—外国銀行の進出と金融危機の波及」田中素香編著『世界経済・金融危機とヨーロッパ』勁草書房、第4章所収、2010年

#### 論文

- ・「中国銀行業の対外開放—現地法人形態での参入の評価」『中国经济研究』、中国经济学会、第7巻第1号、pp. 1 - 15、2010年

#### 資料紹介

- ・「アジアの銀行による金融 FDI—スーパーリージョナルバンクの形成—」『山形大学紀要』(社会科学編) 第41巻1号、2010年

#### 翻訳

- ・ポール・デ・グラウエ著、「共通通貨の費用」、『経済学論纂』、第51巻5・6合併号、pp.289 - 306、中央大学経済学研究会、2011年

#### 研究会報告

- ・「中東欧諸国はなぜ金融危機に陥らなかったか？」中央大学経済研究所、公開研究会、2011年3月7日、中央大学多摩キャンパス

#### 報告書

- ・「結城豊太郎と中小企業金融」『山形学研究8』山形大学都市・地域学研究所、pp.14 - 17

### (2) 教育、地域貢献等の活動

#### 教育

- ・担当授業：スタートアップセミナー、金融論、国際金融論、証券経済論、国際金融論演習、国際金融論特論I、国際経済法務特別研究I
- ・基盤教育ワークショップ／パネリスト (2010年8月)
- ・実践キャリア教育学／講師 (2010年8月)

#### 地域貢献

- 放送大学面接授業「国際金融の読み方」(2010年5月)
- 都市・地域学研究所公開講座／講師「結城豊太郎について」(2010年10月)

(3) 平成22年度の研究・教育活動に関するコメント

腰を据えて研究に打ち込むことができた。人文学部の教職員の方々に感謝したい。



## 「山形大学人文学部研究年報」投稿規程

### 1 投稿資格

「山形大学人文学部研究年報」に投稿の資格を有するのは、以下の者とする。

- (1) 山形大学人文学部の教員（教授、准教授、講師、助教、外国人教師）
- (2) 山形大学大学院社会文化システム研究科学生（指導教員の推薦ある者）

また、

- (3) 本学部教員以外の者との共同研究についても、応募を認めることがある。
- (4) 山形大学人文学部もしくは山形大学大学院社会文化システム研究科の主催で開催された講演会の原稿も掲載可とするが、原稿依頼および原稿のとりまとめについては当該の講演会を担当した本学教員の責任においておこなう。

### 2 原稿の種類

- (1) 原稿の種類は「論文」「研究ノート」「資料紹介」「翻訳」「判例評釈」「書評」「講演」その他学術研究に資すると判断されるものとする。
- (2) これら以外に、本学部教員の研究活動に関する報告等を掲載する。

### 3 原稿枚数

- (1) 原稿は、各号原則として一人一編までとするが、2 に定める分類項目を異にする場合には複数掲載を認める場合がある。
- (2) 「論文」「研究ノート」「資料紹介」「翻訳」「講演」は、原則として400 字詰め原稿用紙に換算して100 枚以内とする。
- (3) 「判例評釈」「書評」については、原則として400 字詰め原稿用紙に換算して30 枚以内とする。

### 4 書式

刷り上がりの版型はB5 版とする。なお、以下に記載のない書式の詳細については、山形大学紀要の書式に準ずるものとする。

- (1) 原稿は、縦書きもしくは横書きとする。縦書きの場合は二段組みとする。
- (2) 横書きの場合は裏表紙から始める。
- (3) 外国語論文原稿の投稿も認める。
- (4) 原稿は原則としてワープロで作成し、使用したワープロ・ソフト名を明記した電子ファイル（フロッピー・ディスクなど）とプリントアウトしたもの2 部（1 部は所属・氏名を記載しない）を提出する。
- (5) 日本語（外国語）の場合は外国語（日本語）のレジユメを付ける。その枚数も上記の原稿

枚数に含める。投稿者は、当該言語ネイティブまたは外国語教育担当教員によるチェックを受けたうえで、外国語レジュメを編集委員会に提出するものとする。ただし、当該言語ネイティブまたは外国語担当教員に依頼することが困難な場合には、英語によるレジュメに限り、編集委員会が仲介するものとする。

## 5 原稿掲載の可否の決定および査読

原稿掲載の可否は、当該分野の専門家の査読を経て、編集委員会が決定する。

## 6 校正

- (1) 校正は執筆者の責任でおこなう。
- (2) 校正時における大幅な訂正は認めない。

## 7 抜刷

- (1) 抜刷を必要とする者は、投稿申し込み時に申告する。
- (2) 抜刷の作成費用は、制限部数を超過した分について執筆者の負担とする。

## 8 図版等

図版、図表、グラフなど印刷に特別の費用を要するものについては、執筆者の負担とする場合もある。

## 9 原稿提出期日

原稿提出期限は11月末とする。

## 10 原稿提出先

原稿は、編集委員に提出する。

## 11 著作権利用の許諾

論文を投稿する者は、山形大学人文学部に対し、当該論文に関する著作権の利用につき許諾するものとする。

## 12 論文等の電子化及びコンピュータ・ネットワーク上での公開

- (1) 掲載された論文等は、原則として電子化し、人文学部ホームページ等を通じてコンピュータ・ネットワーク上に公開する。
- (2) ただし、執筆者が前項に規定する電子化・公開を希望しない特別の理由を有する場合は、当該論文の電子化・公開を拒否することができる。その場合は原稿提出時に申し出る。

**編集委員**

行方久生 (法経政策学科)

アーウィン・マーク (人間文化学科)

小笠原 奈 菜 (法経政策学科)

中 村 篤 志 (人間文化学科)

編 集 者 山形大学人文学部  
発 行 者 〒990-8560  
山形市小白川町一丁目4-12  
責 任 者 渡邊 洋一  
印 刷 所 田宮印刷株式会社  
発行年月日 平成24年3月14日

# Faculty of Literature & Social Sciences, Yamagata University Annual Research Report

Vol. 9

## CONTENTS

### Articles

Position of the line centers in the Nasca upland:A study by Monte Carlo simulation .....HONDA Kaoru, MONMA Tadasuke.....	1
画人传与“痴癖”——以明末清初画家陈洪绶的文学形象为主 .....西 上 胜.....	11
La Voix sans corps, le corps sans voix ou la représentation de l'appareil sonore dans la littérature française : de Villiers de l'Isle-Adam, à Cocteau. .... Koji ABE.....	31
An Analysis of the Supply Chain System using a Time-Delay System Representation — a Case when the subsystems are two ..... Naofumi NISHIHIRA.....	69
Socratic irony .....Gregory VLASTOS.....	75
The Development of the Eizon Order in Satsuma Province, Hyūga Province, and Ōsumi Province focusing on Taihei Temple, Hōman Temple and Shōkoku Temple in the Middle Ages ..... Kenji MATSUO.....	113
Medialität des Bildes und Phantasie —— In Bezug auf Husserls Vorlesung „Phantasie und Bildbewusstsein 1904/5 “ ..... Masahisa OGUMA.....	135
On the Semantic Interpretation of Unselected Objects in the Change Event: How They Interact With World Knowledge and Contextual Information ..... Toru SUZUKI.....	153
Festgehaltene Zuhörer, verheimlichte Vergangenheit ——Siegfried Lenz' Hörspiel „Das Labyrinth“ ..... WATANABE Masanao.....	171
2010 Activity Report on Education Research .....	185
Requirements for Contributors .....	247

FEBRUARY 2012

Faculty of Literature & Social Sciences  
Yamagata University